

日本語用論学会

The Pragmatics Society of Japan

第7回（2004年度）大会

予稿集

日時：2004年12月11日（土）

会場：甲南女子大学

日本語用論学会事務局

〒594-1198

大阪府和泉市まなび野 1-1

桃山学院大学・林宅男研究室内

TEL 0725-54-3131（代表）

thayashi@andrew.ac.jp

<http://wwwsoc.nii.ac.jp/psj4/index.html>

日本語用論学会

The Pragmatics Society of Japan

第7回（2004年度）大会

予稿集

日時：2004年12月11日（土）

会場：甲南女子大学

日本語用論学会事務局

〒594-1198

大阪府和泉市まなび野 1-1

桃山学院大学・林宅男研究室内

TEL 0725-54-3131（代表）

thayashi@andrew.ac.jp

<http://wwwsoc.nii.ac.jp/psj4/index.html>

目次

日本語用論学会第7回(2004年度)大会プログラム

ワークショップ (10:00~11:40)

1. 10:00~10:25 2. 10:25~10:50 3. 10:50~11:15 4. 11:15~11:40

ページ

A室[9号館1階912教室] 「否定の経験的基盤—カテゴリー認知と価値判断を中心に—」

司会 出口 雅也 (日本語センター)

1. “Negation”と“Negative evaluation” 出口 雅也 (日本語センター) 1
2. “Negation”とカテゴリー認知 崔 春浩 (京都大学(院)) 5
3. 否定の意味から行為へ : 有光 奈美 (獨協大学 (非)) 9
対象依存的否定性と価値的否定性
4. overに見られる否定的表現タイトル : 鬼頭 修 (京都大学(院)) 13
“Negation”と“Negative evaluation”

B室[9号館1階911教室] 「ことばと態度」 司会 東森 勲 (龍谷大学)

1. 『主客転倒』の再検討 : 片岡 宏仁 (関西外国語大学 (院)) 17
法助動詞 CAN の意味解釈について
2. 英語法助動詞の語用論的考察 : 長友俊一郎(関西外国語大学 (院)) 21
指令型の発話における can と may を中心として
3. 副詞的表現が表す話し手の態度について 金丸 敏幸 (京都大学(院)) 25
4. 反対意見表明における『ちょっと』の働き 薄井 良子 (神戸大学(院)) 29
—『ちょっと』は不快感を緩和するか—

C室[9号館4階942教室] 「形式と意味」 司会 杉本 孝司 (大阪外国語大学)

1. 日本語の受益構文における格表示について 澤田 淳 (早稲田大学(院)) 33
2. 視点について : 『名詞+不定詞』における 中村 ちさと (甲南女子大学(院)) 37
不定詞の態を中心に
3. 『動詞+名詞+形容詞』の形をとる 松本 知子 (同志社女子大学(非)) 40
慣用表現について
4. 『か』と“ma”の意味と機能について 程 遠巍 (関西外国語大学(非)) 44

D室[9号館4階944教室] 「ことばと文脈」 司会 西光 義弘 (神戸大学)

1. 女性指揮者のラポールマネジメント : 宮澤泰彦 (福島工業高等専門学校) 48
合唱リハーサルの談話分析 湯川 敬子 (福岡市立長尾中学校)
2. 接続副詞 however の文中における機能 太田 裕子 (東北大学(院)) 52
3. 言葉は行為の費用と利益を伝える : 野澤 元 (京都大学(院)) 56
『わざわざ』、『いちいち』の行動生態学的考察 山崎 章裕 (京都大学(院))

総会 (12:40~12:55) [9号館1階912教室] 司会 林 宅男 (桃山学院大学)

1. 会長挨拶 小泉 保 (関西外国語大学)
2. 事務局長報告 林 宅男 (桃山学院大学)
3. 編集委員会報告 澤田 治美 (関西外国語大学)
4. 会計報告 山本 英一 (関西大学)
5. その他

研究発表 (13:00~15:30)

1. 13:00~13:35 2. 13:35~14:10 3. 14:20~14:55 4. 14:55~15:30

ページ

A室[9号館1階912教室]

司会 東森 勲 (龍谷大学)

1. 総称文についての一考察 : 富永 英夫 (兵庫県立大学) 60
発話行為論・認知言語学の観点から 野澤 元 (京都大学(院))
2. Carston の意味的空仮説の持つ意義について 山崎英一 (四天王寺国際仏教大学) 67
(10分休憩)

司会 山梨 正明 (京都大学)

3. 因果関係と言語表現 海寶 康臣 (立命館大学 (非)・ 73
龍谷大学 (非))
4. メタ言語否定と否定の意味 吉村 あき子 (奈良女子大学) 81

B室[9号館1階911教室]

司会 西光 義弘 (神戸大学)

1. 「けど」の終助詞的用法について : 横森 大輔 (京都大学(院)) 89
聞き手に対する効果の観点から
2. 推意の固着と強さ 加藤 重広 (富山大学) 97
—日本語の慣用句と受動構文を中心に—
(10分休憩)

司会 久保 進 (松山大学)

3. 日本語の非状態動詞の状態指示用法について... 西田 光一 (東北大学) 105
4. 認識的モダリティとレトリック 蓮沼 昭子 (姫路獨協大学) 112
—論説型テキスト・談話における
「のではないか」と「だろう」—

C室[9号館4階942教室]

司会 高原 脩 (関西外国語大学)

1. 不同意の応答構成を投出する 林 礼子 (甲南女子大学) 120
ファーストペアパートの評価 小川 晋史 (神戸大学(院))
竹安大 (神戸大学(院))
儀利古 幹雄 (神戸大学(院))
吉成 祐子 (神戸大学(院))
2. 精神療法面接における 加藤 澄 (青森中央学院大学) 128
治療同盟検索基準としての結束性の捉え方
(10分休憩)

司会 松木 啓子 (同志社大学)

3. English Riddles: A Blending Perspective 安原 和也 (京都大学(院)) 136
4. おいしいとしか言いようがないはずなのに : ... 山口 治彦 (神戸市外国語大学) 144
味ことばの謎とフィクションの構造

D室[9号館4階944教室]

司会 澤田 治美 (関西外国語大学)

1. 英語の疑問文における対義語の選択とその解釈.. 有光 奈美 (獨協大学(非)) 152
2. 語用論的拡充を伴う man of + 名詞の解釈 秋山 孝信 (日本大学) 160
(10分休憩)

司会 内田 聖二 (奈良女子大学)

3. 現場密着型の出来事文について 岸 彩子 (京都大学 (院)) 168
—聞き手に『場』の共有を強いる名詞句文—
4. 反対意見表明に於ける 小林純子 (関西外国語大学) 176
コミュニケーション・ストラテジー

シンポジウム (15:45~18:10) [9号館1階912教室]

ジェンダーと語用論

—記号論・エスノメソドロジー・批判的談話分析からの提言—

司会 林 礼子 (甲南女子大学)

1. 近代フランスにおける『女らしさ』の表象と規範..... 182
講師 小倉 孝誠 (慶応義塾大学)
2. ジェンダーをつくることば..... 186
—言語イデオロギーとしての『女ことば』—
講師 中村 桃子 (関東学院大学)
3. 成員カテゴリー化装置としてのジェンダー..... 194
講師 山崎 敬一 (埼玉大学)
山崎 晶子 (公立はこだて未来大学)

ディスカッサント 佐竹 久仁子 (武庫川女子大学 (非))

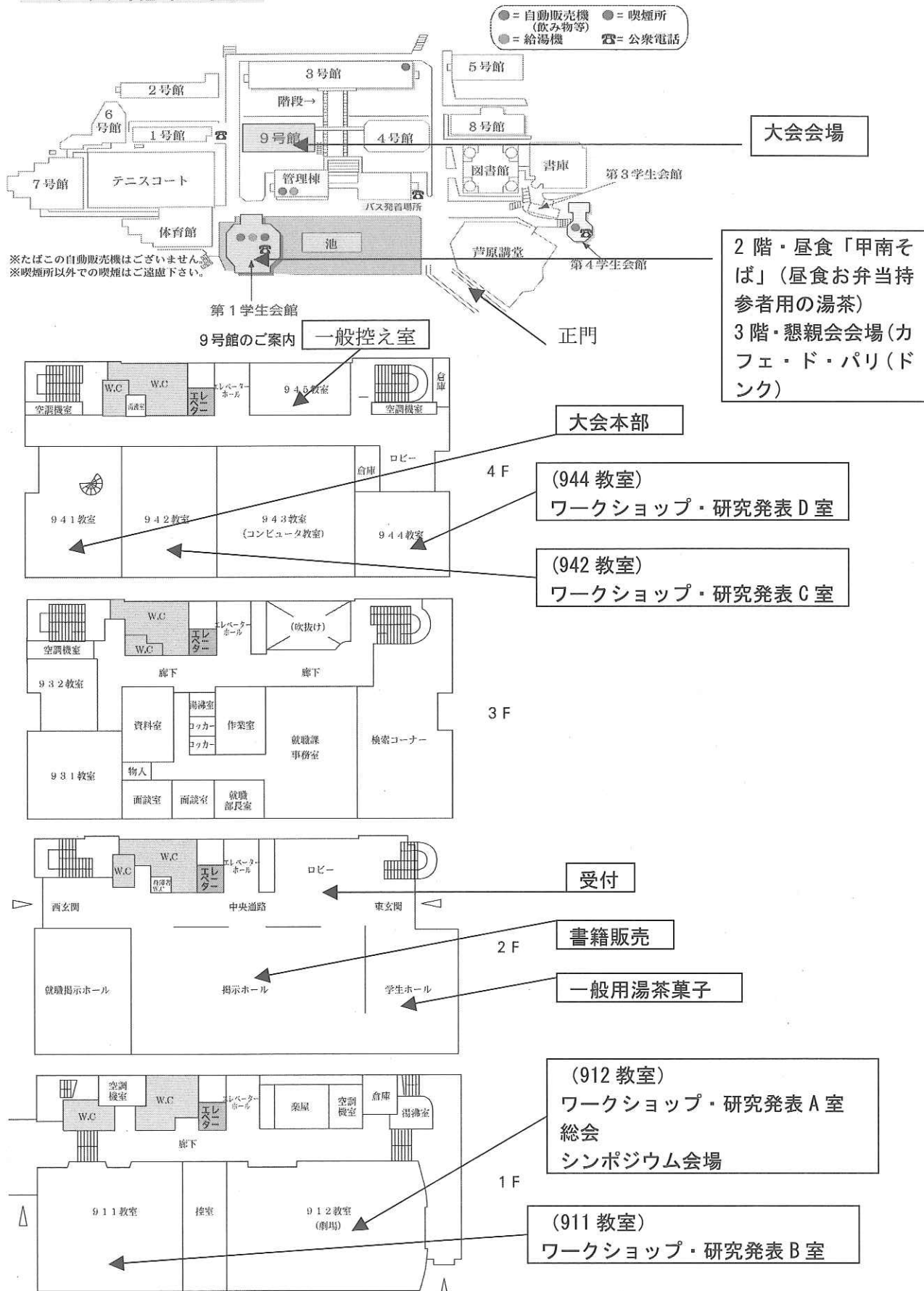
閉会の辞 小泉 保 (関西外国語大学)

懇親会 (18:30~) (会費 4,000 円) (会場: 第1学生会館3階・カフェ・ド・パリ(ドンク))

甲南女子大学へのアクセスとご案内

- ★新大阪→JR 大阪駅→JR 神戸線 (甲南山手下車) →徒歩 10 分
- ★新大阪→JR 大阪駅→阪急梅田→阪急神戸線 (岡本下車) →徒歩 20 分
- ★当日は土曜のため、スクールバスはありません。徒歩あるいは市バス (あまり本数がありません) になります (大学までは急な上り坂になります)。JR 甲南山手 (摂津本山)・阪急岡本からタクシーでワンメーターの距離です。
- ★昼食は大学内の第1学生会館・「甲南そば」で確保していますのでご利用下さい。あるいはお弁当をご持参下さい (お弁当用の湯茶は第1学生会館で用意しております)。学会ではお弁当は販売しません。大学の近くには飲食店がなく、甲南山手か摂津本山あるいは阪急岡本 (あるいは芦屋) まで降りていかなければなりません (帰ってくるのが大変です)。
- ★学会ではホテルはお世話しておりませんのでご了承下さい。

学内配置図



ワークショップ

“Negation” と “Negative evaluation”

出口雅也

日本語センター非常勤講師

1. はじめに

本発表は、ワークショップ「否定の経験的基盤：カテゴリー認知と価値判断を中心に」の冒頭発表として、いわゆる「否定」表現全般に関わる問題を取りあげる。

従来の「否定」表現の研究においては、異なった概念を一括して「否定」であるとする混同がしばしば見られた。本発表では、「否定」の研究に混在する問題の切り分けを提案し、またそれぞれの問題がどのようなアプローチによって分析されるべきかということについての概略を論ずる。なお、個別の問題についてのより詳細な議論、また関連する事例研究については、本ワークショップの以下に続く発表をそれぞれ参照されたい。

2. 「否定」の切り分け

従来の「否定」の研究では、例えば以下のような表現が研究の対象とされてきた。

- (1) a. 彼女は結局来なかった。
b. この家はさほど大きくない。
c. その問題は予想していたほど困難ではなかった。
- (2) a. 彼はこの事件とは無関係だ。
b. 未処理の案件が山積みになっている。
c. 「マイナスイオンが身体にいい」などというのは非科学的なたわ言だ。
- (3) その結果は満足からはほど遠いものであった。
- (4) a. 夜更かしは身体に悪い。
b. あの人度量が狭い。

(1) は「否定」を表す助動詞¹や形容詞を、(2) は漢語由来の接頭辞を、それぞれ明示的に用いることによって、「否定」の意味を生じさせている。(3) にはそれらの助動詞・形容詞・接頭辞など（便宜上これらを合わせて否定辞と呼ぶことにする）は明示的には用いられていないものの、例えばパラフレーズすることにより「その結果は全く満足出来ないものであった」という「否定」の意味が浮かび上がってくる²。(4a) 「悪い」は「良い／悪い」という対立する語の中で「否定」的な方の意味を担っている。(4b) 「狭い」は、それ自体は本来「否定」的な意味合いがない、または希薄であるが、「度量が狭い」という用法の中では「否定」的な意味が生じてくる（または強まってくる）。

このように、これらの表現は、全て「否定」というキーワードを用いて何らかの説明が可能

であり、また従来の研究においてもそのように扱われてきた。

ところで、これまで筆者は上記の例全てに対して、「否定」「否定の意味」といった用語を敢えて用いてきた。しかしながら、これら「否定」と称されてきた表現の中に2つの概念の区別を設け、それぞれを異なった用語で呼ぶことで、より問題の見通しが良くなるように思われる。すなわち、いわゆる「肯定文・否定文」における「否定」〔=(1), (2)〕と、ある対象への認知主体の価値判断としての「否定」〔=(4)〕である。本発表では前者を“negation”，後者を“negative evaluation”と呼ぶこととする。

これらは別のレベルの概念であるが、時にはある一つの表現の中に同時に見られることもある。例えば(2c)「非科学的な」は、「科学的な」に対する negation であり、また我々は一般的に、非科学的であることを良くないことであるとする価値判断(negative evaluation)を有する。これら2つの概念を共に「否定」と呼ぶと、無用の混乱が生ずるのは避けがたいが、両者を概念上も呼称の上でも区別すればそのような心配はない。

3. Negation

ところで、前節では説明の便宜上“negation”のことを「肯定文・否定文」における「否定」とあるとした。しかしながら、実際の分析において“negation”を肯定“affirmation”との2項対立で捉えようとする、問題の本質を見失ってしまう恐れがあるように思われる。例えば、

- (5) 彼女はわがままではない。これ以上ないくらいわがままだ。

のような(かなり特殊な)例では、否定辞は存在しているものの、直後の強調表現と矛盾なく共起している。

また、次のような例にも注意が必要である。

- (6) a. このコインの今見えている面は表ではない。〔=裏である〕
b. 今日は寒くない。〔=暑い〕

これらは共に2項対立をなすと考えられる語のうちの一方に対する negation となっているが、それによって得られる結果は全く異なっている。(6a)では negation によって対立する意味であることが含意されるが、(6b)では対立する意味であることは必ずしも含意されない。それは次の例における容認度の差を見ればより明らかである。

- (7) 今日は寒くない。〔?暑い／というより、むしろ暑い〕。

「寒くない」という文の後に「暑い」という表現を用いようとするなら、「というより、むしろ」のように直前の表現が必ずしも適切ではなかったことを示唆する表現と共起しなければかえって不自然ですらある。これらの例を見ると、肯定・否定の2項対立を前提とした意味の反転のような枠組みによって negation を捉えようとするのは必ずしも適切であるとは言えないことが分かる。

Negation によって本来の意味がどのような方向にどの程度変化するかというのは用例によってまちまちであり、全ての negation に共通して言えるのはせいぜい典型的な意味を示さなくなることくらいである。こう考えると「多少・幾分・少なからず・もっと」のような程度

に関係した表現と negation をことさらに区別する必然性は感じられなくなってくる。Negation は、affirmation との 2 項対立においてではなく、既定値以外を指示する一連の多様な《程度に関わる表現》の一環として捉え直されるべきなのではなかろうか。

4. Negative evaluation

従来の negative evaluation の研究では、ある語がその意味の中に否定性を内在しているかどうか問題とされることがあった。

- (8) a. 健康／病
b. 勝ち／負け
c. 良い／悪い
- (9) a. 大きい／小さい
b. 広い／狭い
c. 白い／黒い

(8) の例における後者は、いずれも語自体が否定的な意味を持つものとされ、一方 (9) の例に挙げられたような語は、それ自体は肯定的・否定的な意味を内在せず、特定の対象と結びつくことによって否定的な意味を生じるとされる。

しかしながら、否定的な意味を内在するとされている語でも、

- (10) 生き恥をさらすくらいなら死んだ方がましだ。

のように、文脈によっては価値の反転が見られることがある。またその一方で、対象に依存して初めて否定性が現れるとされる語も、対象と結びつかない時に果たして本当に価値において中立であるかどうかは疑わしい。Lakoff & Johnson (1980) では、

- (11) a. Things are looking *up*.
b. We hit a *peak* last year, but it's been *downhill* ever since.
c. Things are at an all-time *low*.
d. He does *high-quality* work.

に見られるように、例えばこの場合では「上」に関係する語と「下」に関係する語の間では「上」に関わる語の方が良い意味を、「下」に関わる語の方が悪い意味を、それぞれ一貫して担うような例が示されている。これらの表現の背後には、GOOD IS UP; BAD IS DOWN という構造のメタファが存在しており、それによって「上下」に関係した語がどのような価値と結びつくかに偏りが生じていると考えられる。

そもそも negative evaluation というのは認知主体が対象に対して下す否定的な価値判断に他ならず、その価値判断は認知主体が経験世界を通して獲得した知識に根差している。用法依存 [= usage-based] モデルや並列分散処理 [= parallel distributed processing: PDP] のモデルによれば、知識は、認知主体が経験する具体的な事象が適切な抽象化を受けることによって獲得される。例えば「大きい」という語が意味として持つ「価値」は、認知主体が現実世界において遭遇する様々な「大きい何か」が認知主体にとってそれぞれどのような価値を持つかに左右されつつ形成される。

したがって、「否定性」が言語内在的かまたはそうでないかという単純な 2 分法は額面通りには受け取ることが出来ない。文脈・状況にあまり影響されず、どちらかというとき一定の価値

を持つ傾向のある語と、文脈・状況の影響を大きく受ける傾向のある語の違いはあっても、両者の差は絶対的なものではなく相対的・連続的なものである。また、価値判断が文脈・状況の影響を全く受けない、もしくは完全に文脈依存であるというような語もあり得ない。

Negative evaluation の問題は、認知主体を取り巻く状況・対象といった語用論的な要因を常に考慮する必要がある。

5. まとめ

本発表では、「否定」表現全般について、従来混同されることの多かった negation と negative evaluation の区別を明確にし、negation に対しては程度に関わる表現との関係を、negative evaluation に対しては文脈・状況などの語用論的な要因をそれぞれ考慮することにより、従来の単純な 2 分法による分類を超えた観点が提供されることを示した。

References

- 有光奈美. (2003). 「日常言語における価値的否定性と対象依存的否定性」, 日本言語学会第 127 回大会予稿集, pp. 194-199.
- Horn, Laurence R. (1989). *A Natural History of Negation*. Chicago: The University of Chicago Press.
- 出口雅也. (2003). 「認知音韻・形態論とコネクションニズム」, 吉村公宏 (編) 『認知音韻・形態論』シリーズ認知言語学入門 2, pp. 155-193, 大修館書店.
- Lakoff, George, & Mark Johnson. (1980). *Metaphors We Live By*. Chicago: The University of Chicago Press.
- Langacker, Ronald W. (1987). *Foundations of Cognitive Grammar, Vol. 1: Theoretical Prerequisites*. Stanford, CA: Stanford University Press.
- . (1991). *Foundations of Cognitive Grammar, Vol. 2: Descriptive Application*. Stanford, CA: Stanford University Press.
- McClelland, James L., David E. Rumelhart, & the PDP Research Group. (1986). *Parallel Distributed Processing: Explorations in the Microstructure of Cognition, Vol. 2: Psychological and Biological Models*. Cambridge, Mass.: MIT Press.
- 太田朗. (1980). 『否定の意味』, 大修館書店.
- Rumelhart, David E., James L. McClelland, & the PDP Research Group. (1986). *Parallel Distributed Processing: Explorations in the Microstructure of Cognition, Vol. 1: Foundations*. Cambridge, Mass.: MIT Press.

¹ 筆者は「助動詞」という品詞の存在について非常に懐疑的である。しかし、本発表の趣旨と離れた議論を避けるため、(やむを得ず) 従来の分類を踏襲することとする。また、「動詞・形容詞・形容動詞」という名称の適切性についても大いに疑問を持っているが、これについても(まことに遺憾ながら) 一般的に通用している名称をそのまま用いることとする。

² これは従来見られた方策について述べただけで、ある表現の意味をパラフレーズによって分析することが有効または適切であると筆者が考えている訳では必ずしもない。パラフレーズはあくまで元の表現とは独立した別の表現である。

"Negation" とカテゴリー認知

崔 春浩 (チェ チュノ)

京都大学大学院

1. はじめに

本発表では「肯定・否定」という対立で否定文を捉えるのではなく、いかなるカテゴリーにおいて否定が用いられているのか、という視点から否定文を考察する方策で考察を行う。

現実世界のカテゴリーには、「裏表」、「真偽」のような2項対立的に捉えられるカテゴリーと、「高さ」「色」のように多次元空間¹が想定されたり、「果物」のような百科辞典的に列挙されたりする多項併存的なカテゴリーが存在する。否定文を「既定値以外の値を指示する表現」だとすると、2項対立的なカテゴリー内での否定文には、「表でない」＝「裏である」というような、肯定・否定の対立が生まれるが、多項併存的なカテゴリー内での否定文は、「既定値以外の値のどれか」という「ある範囲に存在する候補」の指示となり、2項対立的な関係は見いだされない。否定文における否定を、「カテゴリー内成員に対する範囲の指定」と捉えれば、空間領域に関する表現や“more”、“less”、“もっと”などの程度に関する表現との大きな枠組みの中で、「否定文の否定」を捉える妥当性が見いだせる。さらに、否定辞を用いた強調表現も、カテゴリー内で強調される側への範囲指定として捉え、一貫した分析ができことを示唆する。本発表では「否定辞」を用いた表現を、否定にまつわる表現の中で、特に“negation”と呼ぶことにし、本ワークショップ「否定の経験的基盤:カテゴリー認知と価値判断を中心に」の他の発表で扱われる“negative evaluation”とは区別して考察する。

2. negation とカテゴリー

Givón (1978: 109) は否定表現が用いられる談話的・語用論的要件について次のように述べる。

Negatives are consistently more marked in terms of discourse-pragmatic presuppositions, as compared to affirmatives. More specifically, negatives are uttered in a context where corresponding affirmatives have already been discussed, or else where the speaker assumes the hearer's belief in - and thus familiarity with - the corresponding affirmatives.

この引用が示すように、否定(= negation)と肯定(= affirmation)とは、一般的に対比をなしているように捉えられているが、現実には、生起する談話的・語用論的要件が異なっている。となれば、その背景に等質で対照的な認知プロセスがあるとも認めがたい。これから、negation にまつわる認知背景とプロセスがいかなるものかを想定しながら、考察を深める。

¹ 本論部分では、この2つをさらに区分して提示する。また表現の便宜上、この部分においては1次元を多次元に含めた。

2.1. カテゴリー論を基盤にした negation の整理

本研究では、否定辞による「否定表現」をカテゴリー論との関係において整理することを目的としている。ここでのカテゴリーとは、「古典的」なカテゴリーではなく、プロトタイプ理論に基づくカテゴリーのことを指す。

Lakof(1987)で概観されたように、カテゴリーには中心的な成員(=プロトタイプ)と非中心的な成員(=周辺事例)の差異が存在し、カテゴリーの階層関係の中層には、人間の認識に特権的に関わる「基本レベル」のカテゴリーが存在することが知られている。

このようなカテゴリーに関する知見がある一方、否定に関する研究においては、対照的集合(=“contrastive set”)と名付けられた概念体系の階層関係の同じレベルでの対照的關係が存在すると指摘されてきた。その例を挙げると、犬のプードルを指し示しながら以下に挙げる3種類の問いをしたときに、返ってくる答えは、以下のようになるはずである。

a) Is that a plant? - No, it's an animal.

b) Is that a cat? - No, it's a dog.

c) Is that a colie? - No, it's a poodle.

(Frake:1961 - Miller & Johnson-Laird :1976 p261 による)

以上を踏まえると、否定辞を用いた否定("negation")現象には、現実世界の事物が、カテゴリーの階層構造のどの階層に属するかという階層レベルに関する認知と、同じレベルに属する(つまり同じ「親カテゴリー」内に属する)他の要素との関係というカテゴリー内の構造の認知の双方が背景にあることが理解される。

2.2. カテゴリー内の分布の問題

Lakof(1987)における基本レベルカテゴリーに関する主張に戻ると、“the complements of basic level categories are not basic level. They do not have the kinds of properties that basic level categories have.”(Lakof 1987: 52)と述べられており、例として「椅子的なもの」と「非椅子的なもの」との対比をあげ、椅子的なものが明確なイメージを想起させるのに対し、非椅子的なものには明確なイメージが想起できないと説いている。このことは、カテゴリーの基本レベルにおいて「論理的な否定」が均等な意味での対比をなしえないことを示している。

しかしながら、negation に関して“contrastive set”に関する先行研究が示したように、ある命題に否定をし、さらに「正しい」命題を挙げる際には、カテゴリーレベルにおいて同レベルで、かつ異なる要素を取り出して応えることが顕著であると見いだされている。

このことは、あるカテゴリー内において「要素がどのような分布をしているか」を考察せずには negation は捉えられないことを示している。また、このカテゴリー内分布の問題は、

Lakof(1987)で引用されたところの、“It should be emphasized that we are talking about a perceived world not a metaphysical world without a knower”(Rosch 1978: p29)という認知主体による現実世界の認知の在り様に関係し、さらには、現実世界における対象がある特定の状

況でどのように認知されるかという語用論的な要因から発する問題にも密接な関係を持つ。

3. negation 理解のためのカテゴリー分類

ここでは、negation の基盤としてカテゴリーを内部の分布関係から4つに分類して考える。

- 1) 「表・裏」「真・偽」などを例とし、2項対立関係を構成する成員を持つカテゴリー
- 2) 「果物」「家具」などを例とするカテゴリーで、構成員の分布が百科事典的で、それぞれの成員を明確な基準で数量化・計量化することができないようなカテゴリー
- 3) 「色」を例とするカテゴリーで、現実世界における属性として連続的で数量化できる属性を持ち、人間の認知レベルにおいては、分節して捉えられるカテゴリー

- 4) 「高さ」を例とし、人間の認知レベルに置いても連続的に捉えられるカテゴリー²

1') 裏でない → 表である³

2') ミカンではない → それでは、何？

3') 赤ではない → それでは、何色？

4') 高くない → それでは、低いのか否か？

1)-4) までのカテゴリー分類に基づき、否定の例を挙げると上記のようになるが、肯定・否定に明確な対立が生じるのは、1)に属するカテゴリーのみであることが見てとれる⁴。となれば、negation は、肯定と対立して存在するものとして捉えるべきではない、という示唆が浮かび上がる。その代案として、negation を「(肯定が示す) 既定値以外の値を指示する表現」と規定し、既定値との関係に根ざした他の関連表現も取り上げ、その妥当性を考える。

4. カテゴリー内成員に対する範囲の指定

negation を「カテゴリー成員内の既定値以外の値を指示する表現」として規定すると、空間表現を用いた表現や程度を表す表現との関係が浮かび上がってくる。

- 5) その主張は事実ではない。
- 6) その主張は事実からほど遠い。
- 7) 事故が起きる確率はない。
- 8) 事故が起きる確率は問題外だ。
- 9) (吹雪になれば) 事故が起きる確率はもっと高い。

² 「～性」などの抽象化されたものが多いようである

³ 「裏表がない」などという慣用的な表現については、ひとまず今回の考察から除外した。

⁴ 肯定が「値を定めて」提示しているのに対し、否定には「値が何か」という提示がない、という点において対称な関係にない。

定文が意味する既定値以外の値を指定する役割を negation や「空間表現」が果たしている。同様に、確率という連続的な値を持つカテゴリーにおいても、7)-9) のように、negation、「空間表現」、「程度表現」のそれぞれで「既定値以外の範囲を指定する」表現が達成されている

10) これはイチゴではない。

また、10) のような否定文は、通常は「イチゴではない何か」を示すためには用いられず、物理的な対象としてはイチゴであるが、味や形、色などのイチゴらしいプロトタイプ性において劣るイチゴに対して用いられるであろうことは、日常の経験にして明らかである。このことから negation が指定する範囲がどこであるかに関して、語用論的側面を考慮に入れる必要があり、特に、現実世界での属性としてはある尺度や範囲上に並んでいない「百科辞典的なカテゴリー」に関しては、より重要な問題であることが示唆される。

5. おわりに

本研究では、negation には「適切なカテゴリーレベルの把握が必要であり、さらには、カテゴリー内で成員がいかなる形態で分布しているかについても把握されている必要がある」という negation に関する認知基盤を主張した。さらに、カテゴリーが「どのような成員によって構成されているか」という視点による整理を行い、「カテゴリー内成員に対する範囲を指定する表現」として、空間表現、程度表現などを含んだ大きな枠組みで negation が捉えられることを示唆した。

References

- 有光奈美. (2003). 「否定の意味と形式～関連概念による否定研究の再構成」, 国語学会2003年度秋季大会, 平成15年11月, 予稿集 pp.71-78.
- Frake, C. O. (1961). The diagnosis of disease among the Subanum of Mindanao. *American Anthropologist* 63: pp.113-132.
- Givón, Talmy. (1978). "Negation in Language: Pragmatics, function, Ontology." in Peter Cole (ed.) *Syntax and Semantics Vol 9 Pragmatics*, pp.69-112, London: Academic Press.
- Horn, Laurence R. (1989). *A Natural History of negation*. Chicago: The University of Chicago Press.
- Johnson, Mark. (1987). *The Body in the Mind : The Bodily Basis of Meaning, Imagination, and Reason*. Chicago : Univ. of Chicago Press.
- Lakoff, George. (1987). *Women, Fire, and Dangerous Things*. Chicago: The University of Chicago Press.
- Miller, George A., and Philip N. Johnson-Laird. (1976). *Language and Perception*. Cambridge, Mass: Harvard University Press.
- 太田朗. (1980). 『否定の意味』, 大修館書店.
- Rosch, Elenor. (1978). Principles of Categorization. In Rosch and Lloyd, pp. 27-48.
- Taylor, J.R. (1989). *Linguistic Categorization: Prototypes in Linguistic Theory*. Oxford: Clarendon Press.

否定の意味から行為へ：対象依存的否定性と価値的否定性

有光 奈美

naminette@msf.biglobe.ne.jp

獨協大学非常勤講師

1. 研究背景

否定とは何だろうか。発表者はこの疑問について、これまで様々なアプローチで研究を進めてきた。否定 (“negation, negative, negate”) といった用語は、日常生活の中で頻繁に用いられている。例えば、Yamada (2003) においては、否定を Negation as Denial, Negation as Contrast, Negation as Evaluation と大別している。こうした3つの分類の存在とともに、より多様なアプローチが可能であると考えられる。と、同時に、日常言語に存在している否定性はあまりにも多様であるために、その否定性の本質が異なるものである場合があるのにもかかわらず、様々な要素が混同されがちである。

(i) 代表的な否定辞「ない」を用いた否定文についての分析

- a. レイは女の子だ。レイは女の子ではない。
- b. レイは日本人だ。レイは日本人ではない。
- c. レイは図書館へ行った。レイは図書館へ行かなかった。レイは図書館に行ったのではない。
- d. レイは妊娠している。レイは妊娠していない。

(ii) その他の否定語の研究（否定辞「ない」の他、“not, no, nothing”、あるいは否定接頭辞「非、不、未、無」“un-, in-, non-, dis-”等）

(iii) 対比の概念に根ざした否定性

(iv) 否定極性項目(NPIs) の特性の分析（量・程度表現との関連、極めて少ない量・程度“全然、少しも、ちっとも、つゆさえ、一つも、any, a red cent, a damn thing, a bit, a single bit, bat an eyelash, budge, budge an inch, care a hoot, drink a drop, lift a finger”等、極めて多い量・程度“at all”等）

(v) 論理学の中に見られる否定（否定、裏、逆、真偽、真理値）

(vi) 否定的な行為に関する研究（行為としての“correction, prohibition, refusal”等）

(vii) 否定を用いたレトリック（皮肉、婉曲表現、誇張表現等）

(viii) 否定的なサイン（表情、手振り等）

本発表では、こうした多様な否定関連の現象に対し、「否定文における否定の役割」と「否定性、すなわち、経験世界の知識に照らし合らし認知主体が下す否定的な価値判断」には違いがあること

をふまえつつ、以下の側面を扱う。

1. 否定性を対象依存的否定性と価値的否定性に整理することは妥当か
2. 行為の視点から見た動詞の否定性にはどのような性質があるか

2. 対象依存的否定性と価値的否定性という分類から見た否定性

価値的否定性と対象依存的否定性という分類で、当ワークショップの冒頭で規定した「否定性」を考察する。本発表では「否定文における否定」とは別個の現象として、この「否定性」の問題を取り上げ、認知主体が経験世界の知識を参照して下す「否定的な価値判断」として、言語内在的ではない側面を強調する。

先行研究(有光 2003b)において、価値的否定性とは、健康・病、勝ち・負け、良い・悪い、の後者のように語自体が否定的意味を持つものとされ、一方、対象依存的否定性は、対象で否定性の有無が決まるものと定めた。

「良い・悪い」「生死」「広い・狭い」「大小」などの、対立を想定出来る表現は、どちらかの極に否定性を伴う表現が現れることがある。この場合、先行研究の文脈では「良い・悪い」「生死」は価値的否定性であり、「広い・狭い」「大小」は対象依存的否定性である。

しかし、「恥をさらして生きるのなら、死んだ方がましだ」などの特殊な文脈を考えると、価値的否定性とされた語の中に、否定性が存在する極の反転がみられることがわかる。となると、「語自体の否定的意味」を絶対的な規定とは扱えないこととなる。つまり、「生死」における後者「死」は、必ず価値的否定性を持つかというとはそうではなく、文脈によっては、ポジティブな意味を持ちうることをわかる。

- (1) あの俗っぽさがたまらない。(聖俗)
- (2) もう本当に馬鹿なんだから！(賢い・馬鹿な)¹

さらに、同様の極の反転が、「広い・狭い」よりも「大小」の方が生じやすいであろうことは、現実世界の経験を考えると明らかである。

- (3) 大きな庭・小さな庭

¹ a. 悪魔のトリル (神、天使・悪魔)

ヴァイオリン・ソナタ ト短調「悪魔のトリル」(タルティーニ)

b. 勉強の鬼、研究の鬼、鬼コーチ (仏・鬼)

英語においても、否定的な価値判断を有する語が、単なる極めて多い量を示していく傾向が存在している。(“bloody, deadly, killingly, terribly, awfully” 等、「恐ろしいほどすごい」「ものすごい」「すごい」)

(4) 広い庭・狭い庭

上の例は共に面積について言及していることになるが、それぞれのペアの後者、「小さい」と「狭い」の間には、判断の違いが存在している。

(5) 小さな携帯電話・小さくて便利なポケット辞書

「小さい」は面積以外の描写にも用いることができるという側面も「狭い」と大きく異なっているが、それ以上に、「小さい」がポジティブな意味を表しうるのに対して、「狭い」はポジティブな意味を表しにくい。

(6) ?a. 狭くてよくまとまったすてきな部屋

b. 小さくてよくまとまったすてきな部屋

「大きい・小さい」が客観的に事物の大きさを眺めているのに対して、「広い・狭い」では、純粹な広さを問うのと同時に、特に「狭い」において「広さが足りていない、充分でない、不便である」といった意味を含みがちである。

3. 行為の視点から見た動詞の否定性

否定的な行為として、いくつかの動詞を取り上げることが可能である。有光 (2003a) では、*correction, prohibition, refusal* として対人関係的要素に関する動詞を取り上げた。他に、動詞に見られる否定性を指摘している研究として、Heine and Kuteva (2002) では、*Lexical origin may code "implied absence"* として、*LACK* ('to lack', 'to lose') > *negation marker*, *LEAVE* ('to leave', 'to abandon') > *negation* などを指摘している。以下のような分類を試案として提示したい。

思考態度表明の動詞：否定する、反対する、拒否する、断る、禁じる、等：*negate, deny, oppose, object, reject, refuse, prohibit...*

→ 準じるもの：疑う、嘘をつく：*doubt, lie...*

物質非存在の動詞：失う、欠ける、不足する、捨てる、損する、忘れる、等：*lose, miss, lack, abandon, drop, fail, throw away, forget...*

→ 生命維持：病む、しおれる、腐る、壊れる、枯れる、死ぬ、等：*wither, spoil, ruin, destroy, break, die...*

→ 勝負優劣：負ける、劣る、等：*lose, (be inferior/ second/ behind)...*

感情表明の動詞：けなす、そしる、苦しめる、馬鹿にする、恨む、呪う、蔑む、侮る、等：*abuse, blame, torment, persecute, curse...*

こうした分類にも、価値的否定性と対象依存的否定性の概念を適用させることができるが、やはりその否定性の有無も、状況・対象に大きく影響を受け判断が左右されるものである。

4. まとめ

以上のような事実を踏まえ、価値的否定性と対象依存的否定性の元に二分されてきた「否定性」の議論を、認知主体が経験世界の知識に基づいて下す「否定的な価値判断」として捉え直し、行為の視点から見た動詞の否定性も含めて、それが「ある状況・対象で安定して判断される」もしくは「状況・対象に大きく影響を受け判断が左右される」という語用論的な要因に根ざしたものとして示した。

参考文献

- 有光奈美 2003a. 「否定の意味と形式—関連概念による否定研究の再構成」, 国語学会 2003 年度秋季大会予稿集, 平成 15 年 11 月, pp.71-78, 国語学第 55 巻 2 号(通巻 217 号) pp.124-125.
- 有光奈美 2003b. 「日常言語における価値的否定性と対象依存的否定性」, 日本言語学会第 127 回大会予稿集, 平成 15 年 11 月, pp.194-199.
- 有光奈美 2003c. 「禁止命令の意味を持つ発話行為の日英語の諸相」, 日本語用論学会第 6 回大会予稿集, 平成 15 年 12 月, pp.35-38.
- Austin, J. L. 1962. *How to Do Things with Words*. Oxford University Press. (坂本百大 (訳) 『言語と行為』、大修館書店、1978.)
- Cooper, W. and J. R. Ross 1975. "World Order," *Papers from the Parasession on Functionalism*, pp.63-111, Chicago: Chicago Linguistic Society.
- Heine, Bernd and Tania Kuteva 2002. *World Lexicon of Frammarticalization*, Cambridge University Press.
- Horn, Laurence R. 1989. *A Natural History of Negation*. Chicago: The University of Chicago Press.
- Leech, G. 1974. *Semantics: The Study of meaning*. London: Penguin books.
- Searle, J. 1969. *Speech Acts: An Essays in the Philosophy of Language*. Cambridge: Cambridge University Press. (坂本百大・土屋俊 (訳) 『言語行為』、劉草書房、1986.)
- Yamada, Masamichi 2003. *The Pragmatics of Negation -Its Functions in Narrative*. Tokyo: Hitsuji Publishers.
- 山梨正明 2000a. 「認知言語学原理」、くろしお出版.
- Yamanashi, Masa-aki 2001. "Speech-Act Constructions, Illocutionary Forces, and Conventionality." In D. Vanderveken et al. (eds.) *Essays in Speech Act Theory*. pp.225-238, Amsterdam: John Benjamins.

overに見られる否定的表現

鬼頭修

京都大学大学院人間・環境学研究科

1. はじめに

接頭辞 *over-*には、大きく分類して、「空間的意味」と「程度的意味」の二つの用法がある。そのうち、「程度的意味」の *over-*が接辞化した動詞は、「～しすぎる」といったような「過剰の意味」を表し、否定的な意味合いとして用いられることが多い。本発表では、このような「程度的意味」の *over-*に見られるような、「否定的表現」を、語本来の意味に還元するのではなく、言語使用者の「否定的価値判断 (negative evaluation)」という言語外的な要素に起因するものとして説明を試みる。

2. 接頭辞 *over-*に関する意味分類

山田(2001)では、接頭辞の *over-*に関して、「空間的意味」と「程度的意味」があるとして、前者が、プラスの意味をあらわすのに対して、後者はマイナスの意味を表すとしている。

(1) He overcame his fear of flying.

(2) He overestimates his daughter. (山田 2001 : 231)

(1)の *overcame* における *over* が「空間的意味」、(2)の *overestimate* における *over* が「程度的意味」をあらわしているが、前者の場合、「恐怖を克服した」というプラスの意味があり、後者の場合、「娘を過大評価する」という点でマイナスの意味を持つとしている。このプラス、マイナスの意味に関して、山田(2001)は、前者が、「文の参与者(主に主語)がなんらかの利益(benefit)を得る、もしくは優位な立場にあるなど、一般に良い(good)と価値判断されること」を示し、後者は、「なんらかの被害を被る、劣位な立場にあるなど、一般に悪い(bad)な価値判断をされること」としている。(ibid.) よって、ここでは「程度的意味」の *over-*によって接辞化された動詞は否定的な意味を示すということが観察されている。

3. 接頭辞 *over-*が持つ否定的意味

前節の山田(2001)でも指摘されている通り、「程度的意味」の *over-*に見られる否定的意味は、話者の主観的な価値判断を反映する結果であり、そのような意味で、否定的な接辞とは厳密に区別されねばならない。並木(1985)では、*over-*は、*super-*や *ultra-*とともに、「程度や大きさを表す接頭辞」として、*in-*や *un-*などの「否定を表す接頭辞」とは区別されて分類されていることから明白である。(並木 1985 : 26-35) よって、前節で挙げたマイナスの意味を、接頭辞 *over-*そのものに還元してしまうということは

間違いである。over-そのものは、単純に「程度」を表すにすぎないのであるから、その点では、上に挙げた *ultra*-や *super*-と意味的に果たす役割としては根本的に同じである。それでは、このような否定的意味はどこからやってくるのだろうか？本発表では、この点を、カテゴリ内における配置と、それにたいする価値判断という観点からの説明を試みる。

4. カテゴリの観点から

Johnson(1987)では、「否定」という概念を、我々の身体基盤に根ざした「容器のスキーマ」からの説明を試みている。彼によれば、我々は、経験を個別の基礎カテゴリに分割されたものとして理解しており、そのようなカテゴリが、ひとつの「容器」として理解され、そのような「容器（カテゴリ）」からの逸脱が、「否定」として理解されると説明している。(Johnson1987: 40) ここで Johnson が被説明項として選んでいるのは、あくまで、命題レベルの「否定」であり、また、カテゴリの「内」と「外」という二値的な区分は、いわゆるところの「古典的カテゴリ観」に基づくものである。本発表において、接頭辞 *over*-の分析において用いるのは、上記のような古典的なカテゴリ観ではなく、プロトタイプ的なカテゴリ観である。プロトタイプ的なカテゴリ観とは、カテゴリの成員が、「必要十分な素性の連言によって定義される」(Taylor1989:26) 古典的カテゴリ観とは異なり、プロトタイプからの距離により、その典型性が計られるカテゴリ観のことである。¹さて、*over*-の話に戻ると、程度的意味の接頭辞である *over*-は、主要部である語基動詞(e.g., *work in overwork*)の意味の範囲を指定する。これをカテゴリの観点から洗い直すと、*over*-が、後続する語基動詞に関するカテゴリにおいて、*over*-V がどの位置に配置されるのかということを指定する役割を果たすということである。

overwork を例にとって、考えてみよう。*overwork* というのは[WORK]というカテゴリの中の成員の一つであり、接頭辞の *over*-によって、それがカテゴリ内のどの位置に配置されるのかを指定するということである。この[WORK]というカテゴリには、『ある特定の基準における「仕事」に関するプロトタイプ』が存在し、当然 *overwork* は、その「量」という基準のプロトタイプからは離れた場所に配置されると予測される。さて、注意しなければならないのは、このような「プロトタイプ」から離れていることそのものが、*over*-V に否定的意味を与える訳ではないということである²。例えば、*hardworking* という単語を考えるならば、この場合も「量」という基準のプロトタイプから離れた成員の一つであると考えられるが、この場合は、「勤勉な」といったように積極的な意味を表していることから、「プロトタイプ」から離れていることそのものが価値判断に繋がる訳ではないことは明らかである。

それでは、*over*-V における否定的意味は何に起因するのだろうか？これには、「言語使用者の主観的な

¹ カテゴリ論に関しては、認知言語学においても詳しく論じられているが、ここでは詳しく立ち入ることはしない。詳しくは、Lakoff(1987), Taylor(1989)を参照のこと。

² この点の指摘は、大谷直輝氏とのパーソナルコミュニケーションによる。

価値判断」といった言語外的な要因が関係しているのではないと思われる。例えば、*overwork* であれば、「働きすぎる」ということが、健康に悪影響を及ぼし、いずれは死に至りうるという推論の結果、*overwork* に対して、否定的な価値判断が下されるということである。よって、*over-V* が否定的な意味を持つに至るプロセスは二段階あるということになる。まず、接頭辞 *over-*によって、カテゴリ内の配置が指定され、次にその配置に対して、言語使用者の否定的な価値判断がなされる。ここで、注目すべきなのは、プロトタイプからの距離と、価値判断の間にはある程度の相関関係が見られるということである。次の例を見ていただきたい。³

work so much

- (3) it was so impressive to me because he *works so much* and has been working for such a long time. (<http://www.edward-norton.org/articles/entnewsdaily.html>)
- (4) Because he *works so much* he has to squeeze his family, friend and myself into a short amount of time.

(<http://www.studentnow.com/life/la-8yearsyounger.html>)

work too much

- (5) Bill loves his wife, his dog, and his house, and he *works too much* when we're not touring. We all probably work too much when we're not touring. We're probably the most unlazy rock band. (<http://www.pastepunk.com/viewfeature.php?id=69>)
- (6) He *works too much*; he's too attached to his family; he doesn't take enough time for HIMSELF. (<http://parentcenter.bbs.babycenter.com/board/11312/thread/1499953>)

overwork

- (7) All, in India, must *overwork* to death to have one meal a day or die of starvation. (<http://www.sikhcoalition.org/Sikhism20.asp>)
- (8) If your boss applies for leave, it's because he's *overworked*. (<http://www.corporatedump.com/bosssdiff.html>)

上記の例文は、[WORK]というカテゴリに関して、「労働量」という基準から、*work so much*, *work too much*, *overwork* という三つの成員をプロトタイプからの距離の順に並べてみた。ここでいうプロトタイプとは、「労働量」ということに関して、話者が経験的に持つ「期待値」のことであり、「プロトタイプからの距離」とは、そのような期待値からのズレということになる。よって、この場合は、労働量という点

³ 上記の文例に関しては、検索エンジン google (<http://www.google.com/webhp?hl=ja>) による検索によって得られたものである。

から見れば、*so much* < *too much* $\approx$ *overwork* という順に、プロトタイプからの距離が遠くなるということになる。よってこのような観点から事例を観察すると、*so much* の場合は、(3) の例の場合、「長時間、大量の仕事をこなす様子が印象的であった」とあるように、話者は肯定的な価値判断を下しているのに対して、(4) の例を見てみると、「仕事の為に、家族や友人と話す時間を限定した」とあるので、話者は否定的な価値判断を下している。よって、*so much* という程度表現に関しては、話者の価値判断にはある程度の揺れがあることが確認される。そして、*too much* に関しても、確かに若干の揺れがあることは確かであるが、(5) のような肯定的な価値判断を下されているもの⁴は *so much* に比べると極わずかであり、*overwork* にいたっては、そのほとんどにおいて否定的価値判断が見られた。このことから、プロトタイプからの距離は、話者が下す価値判断とある程度の相関関係があるということがわかる。よって、接頭辞 *over-* が、常に否定的な価値判断をされるのは、*over-* によって指定される、カテゴリ内における *over-V* の位置という点において、*so much* などと比べると、プロトタイプから遠く離れた場所に配置されているということと無関係ではないということがわかる。

以上の分析から、*over-* には語彙的に否定性が内在するのではなく、*over-* が指定するのは、あくまでその語のカテゴリ内における配置であり、その配置に対してなされる話者の主観的な否定的価値判断によって否定的意味を示すということがわかった。

<参考文献>

- Johnson, Mark. 1987. *The Body in the Mind : The Bodily Basis of Meaning, Imagination, and Reason*. Chicago : Univ. of Chicago Pr.
- Lakoff, George. 1987. *Women, Fire and Dangerous Things: What Categories Reveals about Mind*. Chicago: Univ. of Chicago.
- Taylor, J.R. 1989. *Linguistic Categorization: Prototypes in Linguistic Theory*. Oxford: Clarendon Pr. 辻幸夫 訳『認知言語学のための14章』東京：紀伊国屋書店. 1996.
- 有光奈美 2000. 「肯定文における否定性—認知語用論の観点から」、京都大学人間・環境学研究科修士論文
- 山田祥一 2001. 「接頭辞 *over-* の空間的用法と程度的意味に関する一考察」、『意味と形のインターフェイス』(上)、231-239, 東京：くろしお出版
- 並木崇康 1985. 『新英文法選書2 語形成』、東京：大修館書店

⁴ 筆者が、この文において、'work too much' が肯定的な価値判断をされていると判断した理由は、'We're probably the most unlazy rock band.' という表現であり、つまり「過剰な労働」が「勤勉さ (unlaziness?)」の証拠として捉えられていると判断した為である。このような 'too much' の使用法は、誇張法に近いものと考えてよく、このような特定のコンテキスト以外では容認性は極めて低いと考えられる。

「主客転換の条件」再検討：法助動詞 CAN と事態の特定性について

片岡宏仁 [関西外国語大学；博士後期課程 1 年]

0. はじめに

本報告は、英語の法助動詞 CAN の意味にかんして澤田 (1997a, 1997b) の提起した一群の仮説 (以下「S仮説」と呼称) の再検討と精緻化を試みる。

1. S 仮説の要約

1.1. 前提となる事実認識

S 仮説は、CAN について、大きくわけて 2 つの事実認識を出発点として、これらに説明仮説を提案している。その事実認識とは、第一に可能性の CAN は肯定文で非特定の状況に言及し特定の状況に言及しないということであり (以下「事実認識 α 」と呼称)、第二に可能性の CAN は否定文・疑問文ではともに特定の状況に言及するという (以下「事実認識 β 」と呼称) だ。以下、それぞれをみておこう。

1.1.1 事実認識 α : 肯定文における可能性の CAN

S 仮説によれば、肯定文における可能性の CAN の文は、「非特定の状況」に言及する。3 つの点からこのことが論じられる。第一に、例えば以下の最小対立の例において、《a 文は非特定の・一般的な状況 (=W) について述べているが、b 文は現在または未来の特定の・現実的な状況 (=w) について述べている》(澤田 [1997a: 479])。ここでの用語法では、ある非特定の状況 (タイプ) が時間性を付与されて「現実化 actualization」(Ibid.) をへたものが、特定の状況 (トークン) だ。

(01) a. The Straits of Dover can be very rough. (澤田 [1997a: 479]⇒Thomson & Martinet [1986: 133])

b. The Straits of Dover may/might be very rough. (澤田 [Ibid.])

第二に、特定のことが時の副詞句などによってあきらかな場合、文が容認されない。

(02) *John can be there by now. (澤田 [1997b: 550])

第三に、いわゆる「存在用法」の CAN がある。この用法の CAN 文は、ある 1 つの=特定の状況を指示するのではなく、ある状況のトークンがいくつか (少なくとも 1 つ) 現に存在することをいう。これについては、下記がよく知られた例があげられる：

(03) Football players can be sex maniacs. (澤田 [1997a: 481]⇒Lakoff [1972: 232])

1.1.2. 事実認識 β ：否定文・疑問文における可能性の CAN

肯定文と対照的に、否定文・疑問文においては、可能性の CAN が言及する状況が特定のな場合が確認される、と S 仮説は主張する。たとえば、次の否定・疑問のペアは、《ドーバー海峡が今荒れているかどうかを問題にしている》(澤田 [1997b: 550]) という：

(04) a. The straits of Dover can't be rough.

b. Can the Straits of Dover be rough?

この観察から、肯定文では非特定のな状況に限定されていた可能性の CAN が、否定文・疑問文では特定のな状況に言及していると要約される。

1.2. 事実認識 α ・ β に S 仮説が与える説明

まず、事実認識 α に対して、S 仮説は次の条件を提示する。

「**散在性の条件**」：CAN (=「可能性」) が言及する状況は非特定の (=W) であり、その状況は散在的でなければならない。(澤田 [1997a: 480])

ところで、S 仮説によれば、一般に法助動詞には「推量の条件」が適用される。

「**推量の条件**」：推量の法助動詞が言及する状況は特定のでなければならない。(澤田 [1997a: 481])

この条件の対偶は、「非特定のな状況ならば、推量の助動詞ではない」だ。そして、先ほどみたように、可能性の CAN は肯定文で非特定のな状況をあらわす。したがって、そのような CAN は推量の助動詞ではない。しかるに、事実認識 β によれば、否定文・疑問文においては特定のな状況が言及されている。つまり、その場合に可能性の CAN は推量の助動詞としてはたらいっていることになる：いわく《否定・疑問の文脈においては、CAN (可能性) は推量の助動詞として振る舞うということである》(澤田 [1997b: 550])。そこで、S 仮説はさらなる原則を付け加える。

「**主客転換の原則**」：CAN (=「可能性」) は否定・疑問の文脈では主観的法助動詞に変化する。(澤田 [1997b: 550])

これにより、否定文・疑問文において特定のな状況に言及していること (=事実認識 β) が説明される。

2. S 仮説の問題点

以上のような構成をとる S 仮説は、それ自体において内的な整合性をそなえており、また、とくに事実認識 α に対する「散在性の条件」は重要な提案だと考えられる。しかし、大きく分けて2つの問題点がある。第一に、筆者の追試調査によれば、事実認識 β はかならずしも正確でない。第二に、事実認識 β は事例の解釈にかんして疑問の余地が

ある。

2.1. 容認度判定の追試調査

筆者は、英語のネイティブ・インフォーマント 10 人に対面での個別聞き取り調査を行った。すると、興味深い結果がみられた。まず、S 仮説において容認可能な文とされた “Can John be there by now?” は、10 人中 6 人が “O.K.” と回答するにとどまり、残る 4 人は “N.G.” と判定した。

(05) [6/10] Can John be there *by now*?

他方で、時の副詞を “now” に置き換えると、容認度が 10 人中 9 人が “O.K.” とするまでに高くなった。

(06) [9/10] Can John be there *now*?

したがって、疑問文において可能性の CAN が特定の状況を一律に容認するとはいえない。よって、S 仮説が出発点とした事実認識 β は一般的な妥当性をもたないことがわかる。

2.2. 散在的状况か非特定の状况か

疑問文・否定文においても、可能性の CAN が散在的な状況に言及すると考えられる。以下の例文とその容認度判定がこのことを裏付ける。

(07) a. [9/10] Dogs can be intelligent.

b. [10/10] Dogs can't be intelligent.

c. [9/10] Can dogs be intelligent? ^[1]

(08) a. [10/10] Electric locks can be picked.

b. [10/10] Electric locks can't be picked.

c. [10/10] Can electric locks be picked?

これらはすべて generic な主語をもつ一般的な言明だ。

たしかに、S 仮説によれば、肯定文で非特定の状況に言及する文を、疑問・否定に転換すると、例文 (04) のように特定の状況に言及しうるとされる。だが、この解釈は妥当だろうか。議論の補助線として、主語と話題 *topic* とを区別しよう。すると、発話現在におけるドーバー海峡の特定の状況を話題として、ドーバー海峡の一般的=非特定のなあり方を述べるのが有意義なことがあるといえる。ある事態タイプが成立する可能性がないならば、その事態のどの特定トークンも成立しない。肯定文において存在の言明がなされたことに応じて、否定文では存在の否定がなされるというのが無理のない説明だろう。否定の CAN が特定の状況を話題にできるのはこのことによる。疑問でも同様に一般

¹ “N.G.” と判定したインフォーマントは、*“Are dogs...?”* とたずねるほうが自然だとコメントした。

的タイプの可能性をたずねることで特定トークンの可能性について話題にしよう。よって、否定・疑問文で特定事態を話題にしようためには、かならずしも CAN が認識的=主観的である必要はない。

「主客転換の原則」によって疑問文・否定文の CAN が主観的に転換するのだとすれば、「推量の条件」の制約をうけて、すべてそうした文は特定の状況に言及するのでなければならぬ。しかし、先ほどのデータと議論が妥当であるならば疑問文・否定文の CAN が現に特定の状況に言及しているのだから、これに関して S 仮説はむしろ間違った予測を導いてしまう。

3. S 仮説への改訂案

以上の議論から、本報告は「主客転換の原則」を改定することを提案する。S 仮説を構成する主張のうち、とくにこれを修正するべきと考える根拠はこうだ：【イ】「散在性の条件」は肯定文における CAN（とりわけ存在用法）についてかなりの程度まで経験的に妥当な主張であり、【ロ】「推量の条件」は法助動詞についての一般的主張であってとくに CAN にのみ関わるのではない以上、【ハ】CAN についてアドホックに加えられた「主客転換の原則」こそが経験的事実との齟齬によって修正されるべきである。

それではどのような代替案を模索すべきだろうか。ここではつぎの点に着目したい。すなわち、by now / now の最小対立による示唆から、CAN の文が指示する状況は他の条件がひとしければ点的アスペクトを選好する傾向をもつ（詳細データはじっさいの発表時に提示）。容認度の分布はこれにしたがう。特定性以外の要因をも取り込んだ仮説を考えたい。

.....

【References】

- 荒木一雄・小野経男・中野弘三（1977）『[現代の英文法9] 助動詞』。研究社。
- 澤田治美（1997a）「状況の特定性と法助動詞の意味解釈（上）」、『英語青年』（vol.CXLIII: no.8）。
- 澤田治美（1997b）「状況の特定性と法助動詞の意味解釈（下）」、『英語青年』（vol.CXLIII: no.9）。
- Lakoff, Robin (1972) The Pragmatics of Modality, *CLS* 8.
- Leech, Geoffrey (1994=1987) *Meaning and English Verbs*. ひつじ書房。
- Swan, Michael (1995) *Practical English Usage*. Oxford UP.
- Thomson, A.J. & A.V. Martinet (1986) *A Practical English Grammar*. Oxford UP.

長友俊一郎
(関西外国語大学大学院)

1. はじめに

- (1) When he said, "Will that be all" (like a butler), I said , "Yes, you *can* go now," ... (J. Fowles, *The Collector*) [BNC](以下、斜字体/下線発表者)
- (2) "Thank you," said Captain Smollett. "Later on, I'll ask you to give us some help. You *may* go now." [BNC]
- (3) "You *can* tell us, please, what Miss Morgan's property was and how her will distributes it. ..." (J. Neel, *Death of a Partner*) [BNC]
- (4) "Under the rules of the NBA you *can* discount after a year, but a year's a hell of a long time to tie up dead stock." [BNC]

本発表では、(1)-(4)のような can/may を含む発話の特徴を、「視点」、「心的図式」、「動機づけ」、「メンタルスペース」といった概念を用いて考察し、それぞれのタイプの発話における、主体性の違い、状態性の違い、想起される状況の違いを明らかにしてみたい。

2. can/may を含む発話の視点

2.1. 力の源と力の標的

- (5) a may b = X PERMIT Y - Y CAUSE - ab (Tregidgo 1982: 90)
- (6) a. You *may* call further witness if you so desire. (X = 「私」 / 「法廷の手順」, Y = 「あなた」)
b. Visitors *may* park their cars in the field opposite. (X = 「組織者」 / 「地主」, Y = 「訪問者」) (*ibid.*)
- (7) You *can* have a piece of cake after you've eaten your vegetables! (COBUILD⁴)

2.2. can を含む発話の視点と can の力

- (8) "I'm sorry too," Kate said. "I'm not very good company today." "It doesn't matter." "You *can* come over tomorrow afternoon, if you want. Around teatime." (A. Taylor, *The Raven on the Water*) [BNC]
- (9) "Here's your constitution," we say, "now do what you like with it; you *can* because you are now independent." (E. Powell, *Reflection of a Statesman*) [BNC]
- (10) "You *can* say what you like, Constance, because I can't prevent you," said Fan ..." (H. Harford, *Fan*) [Gutenberg]
- (11) *You *could* come over yesterday afternoon.
- (12) MORE: You are here by the law that governs the action of all mobs—the law of Force. By that law, you *can* do what you like to this body of mine.
A VOICE: And we will, too.
MORE: I don't doubt it. But before that, I've a word to say.
...
MORE: You—Mob—are the most contemptible thing under the sun. (J. Galsworthy, *The Mob*) [Gutenberg]
- (13)(=4) "Under the rules of the NBA you *can* discount after a year, but a year's a hell of a long time to tie up dead stock." [BNC]
- (14) By that law, you *could* do what you like to this body of mine.
- (15) Under the rules of the NBA you *could* discount after a year.

- (16) can を含む発話では、視点が力の源に置かれる場合と、視点が力の標的に置かれる場合とがある。前者の場合、can は能動的/主体的な力を表出し、後者の場合、can は力の標的の状況を受動的/客体的に叙述する。

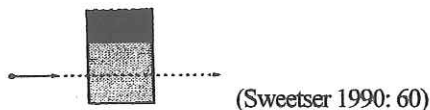
2.3. may を含む発話の視点と may の力

- (17) "And you've no place to go to, and no money?" "No." "I've got a room to myself up there," indicating the upper end of the street. "You *can* come and sleep along with me, if you like." (H. Harford, *Fan*) [Gutenberg]
- (18) You {*can/may*} come and sleep along with me, if you like.
- (19)=(4)) By that law, you *can* do what you like to this body of mine. (J. Galsworthy, *The Mob*) [Gutenberg]
- (20) The police *can* arrest whoever they like. (Declerck 1990: 369)
- (21) *By that law, you *may* do what you like to this body of mine.
- (22) *The police *may* arrest whoever they like. (Declerck 1990: 369)
- (23) You *may* park here. (Thomson and Martinet 1986⁴: 129)
- (24) A reader *may* borrow up to six books at any one time. (CALD)
- (25) A reader *may* borrow up to six books at any one time. (*It's none of my business.)
- (26) a. *The pupils *might* dance at yesterday's party.
b. *Yesterday, they *might* stay up late. (Declerck 1990: 370)

- (27) may を含む発話では、視点は力の源の側に置かれる。may は能動的/主体的な力を表出する。

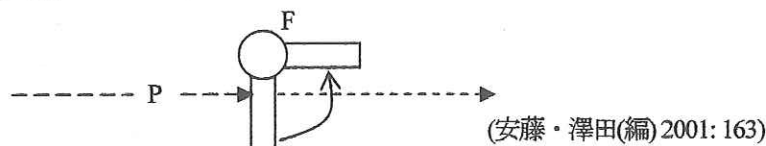
3. can と may の心的図式

(28)



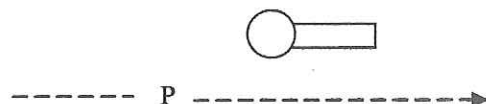
- (29) You *may* go out.

(30)



- (31) You *may* now open the window, if you like. (Johnson 1987: 52)
- (32) The gipsy was loudly demanding to be allowed in to see his sister. Tom escorted the gipsy up the stairs to the bedroom ... "You *can* come in to see her, young man ..." (E. V. Thompson, *Wychwood*) [BNC]

(33)



- (34)=(4)) By that law, you *can* do what you like to this body of mine. (J. Galsworthy, *The Mob*) [Gutenberg]

4. can を含む「許可」以外の指令型の発話について

4.1. can と言語行為

- (35) "We'll be back at daybreak. Stick it out." "No ! No ! I'll freeze to death here! Don't leave me!" "You *can* do it!" (D. M. Thomas, *Lying Together*) [BNC]
- (36) "Play something." "No." "Come on, you *can* do that. You're not working so hard..." [BNC]
- (37) "It's been quite a week. I've learned a lot." "Perhaps you *can* learn a little more," she whispered. (A. Dillon, *Another Time, Another Season*) [BNC]

4.2. can と動機づけ

- (38) "... you *can* ring them up and they'll tell you where to go."
- (39) "On your horse?" inquired Deborah, wide-eyed. "Oh, you needn't be afraid. You *can* sit in front of me, and I'll see you don't fall off. You'll be home almost as quick as by car." (R. Moss, *The Challenge Book of Brownie Stories*) [BNC]
- (40) "Well, for a start, we must try to make Biff understand that we're people." ... "You *can* forget that, for a start. He's not human, never mind caring whether we are or not." ... "He'll make your life hell." (P. Scobie, *A Twist of Fate*) [BNC]
- (41) "Mr. Keynes, sir? I bin expectin' you. D' you want I should show you round, sir?" Harry gave him a friendly smile. "There's no need for you to do that. I'm familiar with the house. We may be here for an hour or two so you *can* go on home if you wish. (C. Lorrimer, *The Spinning Wheel*) [BNC]
- (42) ... you *can* go on home if you wish. (And you will be happy/*Otherwise, you won't be happy.)
- (43) 「許可」の言語行為が遂行される際に用いられる *can* は、動機づけとして聞き手にとって好ましくない状況は伴わない。その他の指令型の発話の際に用いられる *can* は、動機づけとして聞き手にとって好ましい状況/好ましくない状況を伴う。

5. メンタルスペース構成

5.1. 力の源に視点の置かれる *can/may* を含む発話：「許可」の言語行為が遂行される場合

- (44)=(32)) The gipsy was loudly demanding to be allowed in to see his sister. Tom escorted the gipsy up the stairs to the bedroom ... "You *can* come in to see her, young man ..." (E. V. Thompson, *Wychwood*) [BNC]

(45)	現存スペース	動機づけスペース	力の行使スペース
	あなたは姉/妹に会いたいと思っている。	あなたは姉/妹に会うことができる。	私はあなたに部屋に入ることを許可する。

- (46) You *may* play the piano. {And you will be happy/* Otherwise, you won't be happy.}
- (47) "I'm bored," Anna said. "Can't we play a game?" "It's far too hot to run about," Ruth told her. "You *may* pick daisies and I'll show you how to make a daisy chain." (E. Rhodes, *Ruth Appleby*) [BNC]

(48)	現存スペース	動機づけスペース	力の行使スペース
	あなたは退屈している	私はあなたにヒナギクの花輪の作り方を教える	私はあなたにヒナギクの花を採ることを許可する。

(49)	現存スペース	動機づけスペース	力の行使スペース
	現状	聞き手にとって好ましい状況	力のダイナミクスの状況

5.2. 力の源に視点の置かれる *can* を含む発話：「許可」以外の言語行為が遂行される場合

- (50) "Give me what you owe me up until today." Mrs. Mantini glowered, her eyes roasting. "I certainly won't. You *can* come in on Saturday and I'll give it you then." "No," said Rachaela. "I'd like it now." (T. Lee, *Dark*)

Dance) [BNC]

- | | | | |
|------|-------------------|----------------------|----------------------|
| (51) | 現存スペース | 動機づけスペース | 力の行使スペース |
| | あなたは貸していた物の返却を望む。 | あなたに借りていた物を返すことができる。 | 私はあなたに日曜日に来ることを提案する。 |

- (52) "I thought you were supposed to be going out?" "No, I cancelled it earlier today." "What a mistake, but maybe you *can* put it right, otherwise you'll have to eat alone," she finished sweetly. (K. McCallum, *Driven By Love*) [BNC]

- | | | | |
|------|-----------------|------------------------|-----------------------|
| (53) | 現存スペース | 動機づけスペース | 力の行使スペース |
| | あなたは約束をキャンセルした。 | あなたは一人で食事をすることになってしまう。 | 私はあなたに考え直すことを提案/勧告する。 |

- | | | | |
|------|--------|------------------------|-------------|
| (54) | 現存スペース | 動機づけスペース | 力の行使スペース |
| | 現状 | 聞き手にとって好ましい状況/好ましくない状況 | 力のダイナミクスの状況 |

5.3. 力の標的に視点が置かれる *can* を含む発話

- (55)(=41) By that law, you *can* do what you like to this body of mine. (J. Galsworthy, *The Mob*) [Gutenberg]

- (56) 現存スペース
君達の法律によれば私をどのように扱ってもいいことになっている。

- (57) 現存スペース
現状力のダイナミクスの状況

6. 終わりに

参考文献

- 安藤貞雄・澤田治美編. 『英語学入門』. 開拓社
 Coates, J. 1983. *The Semantics of the Modal Auxiliaries*. Croom Helm.
 Declerck, R. 1991. *A Comprehensive Descriptive Grammar of English*. Kaitakusha.
 Fauconnier, G. 1994². *Mental Spaces: Aspects of Meaning Construction in Natural Languages*. CUP.
 柏野健次. 2002. 『英語法助動詞の語法』. 研究社
 Lakoff, R. 1972b. "The Pragmatics of Modality" *Chicago Linguistic Society*. 229-246.
 Langacker, R.W. 1991. *Foundation of Cognitive Grammar*. (Vol. II). *Descriptive Application*. Stanford Univ. Press.
 Langacker, R. W. 1998. "On Subjectification and Grammaticization." In Koenig, L.(ed.), *Discourse and Cognition*. CSLI Publications. 71-89.
 Leech, G. 1987². *Meaning and the English Verb*. Hituji Shobo.
 岡本芳和. 近刊. 『話法とモダリティ』.
 Palmer, R. F. 1990². *Modality and the English Modals*. Longman.
 澤田治美. 1993. 『視点と主観性』. ひつじ書房.
 澤田治美. 1999. 「語用論と心的態度の接点」. 『月刊言語』. 28-6, 58-63.
 Swan, M. 1995. *Practical English Usage*. OUP.
 Sweetser, E. 1990. *From Etymology to Pragmatics: Metaphorical and Cultural Aspects of Semantic Structure*. UCP.
 Talmy, L. 1988. "Force Dynamics in Language and Cognition." *Cognitive Science* 12: 49-100.
 Thomson, A. J. & Martinet, A. V. 1986⁴. *A Practical English Grammar*. OUP.
 Tregidgo, P. S. 1982. "MUST and MAY: Demand and Permission." *Lingua* 56: 75-92.

副詞的表現が表す話者の態度について

京都大学大学院

金丸 敏幸

kanamaru@hi.h.kyoto-u.ac.jp

1. はじめに

近年の副詞研究では、叙法副詞や陳述副詞を中心とした、主にモダリティの側面が分析の対象となってきた。一方で、命題に関わるとされる状態副詞の研究は、仁田(2002)の研究をはじめとして、最近になってようやく注目されるようになってきたばかりである。ただし、それらの研究も、修飾成分と命題との関わりに注目しており、これらの副詞がモダリティ、すなわち「話者の心的態度」を表すという側面にはあまり注目していない。

本発表では「頻度の副詞」に注目し、認知言語学の観点から、主体が事態の認識に積極的に関わることにより、本来は命題に関わるはずの状態副詞が「話者の心的態度」を表すことを示す。

2. 副詞的表現の分類

副詞的表現は、その形態上の特性もあり、その分類は長らく曖昧なままであった。状況としては現在でもあまり変わらないが、山田(1936)が提唱した三分類は現在の分析でも取り入れられており、本研究もこの分類を出発点とする。

山田は、語の副詞を陳述副詞、程度副詞、状態副詞の三つ分類した。それらの性質をまとめると以下ようになる。

- (1) 陳述副詞 否定、推量、仮定、など話者の心的態度を表す。
- (2) 程度副詞 形容詞、形容動詞を修飾する。
他の副詞、特に状態副詞や連体詞を修飾する。
広がりを持つ時や空間を表す名詞、数量を修飾する。
状態動詞や量に関係する動詞を修飾する。
- (3) 状態副詞 意志的態度的、時、状態を表すもの。

現在の副詞研究では、この中でも特にモダリティとの関わりが深い陳述副詞に関する研究が多い。例えば、代表的なものとして渡辺(1983)、中右(1994)などが挙げられる。一方で、命題に関わるとされる状態副詞の研究は仁田(2002)をはじめとして、近年ようやく注目されるようになってきた。

仁田は、文を構成する成分という観点から、まず命題内部に関わるものとそれ以外を区別し、次に命題内部に関わるものを、共演成分、状況成分、原因成分、命題内修飾成分の四つに分類した。この中で、仁田は特に命題内修飾成分に着目し、詳細な分析を行っている。

3. 頻度の副詞と話者の心的態度

ここでは、本発表で注目する副詞的表現の立場を明らかにする。

本発表で注目するのは、仁田のいう「命題内修飾成分」の中でも「頻度の副詞類」と呼ばれている副詞的表現である。「頻度の副詞類」は「頻度の副詞」と「度数の副詞」、「再発を表す副詞」、「繰り返し期間の副詞」の四つに下位分類されているが、ここで分析の対象とするのは、「頻度の副詞」である。これらの副詞的表現には、次のようなものがある。

- (4) a. 彼はしょっちゅう電話の方を気にしていた。
b. 子供の所業にいちいち注意をする。
- (5) a. 彼は電話の方を気にしていた。
b. 子供の所業に注意をする。

このように、頻度の副詞は同様の事態が複数回起こる場合に使用される。これは、(4)の表現から、頻度の副詞を取り除くと事態は一度きりになることから裏付けられる。以上の事などから、仁田(*ibid.*)は頻度の副詞を、「一定期間内に、ある間隔を置いて生起する事態の生起回数のあり方を多寡性をも含めて表す副詞(pp.276)」と規定している。

しかし、頻度の副詞は、単に事態の生起回数のあり方だけを規定するだけではなく、「不満」といった話者の心的態度を表すこともある。次の例は、企業の製品サポートページに寄せられたものからの引用であるが、これらの例と副詞表現を省いた例を比較すると、前者からは「いらだち」や「煩わしさ」といった「不満」が強調されていることが感じられる。

- (6) a. エラーになることがしょっちゅう起きるようになりました。
b. いちいち「ホーム」をクリックしなければならない。
- (7) a. エラーになることが起きるようになりました。
b. 「ホーム」をクリックしなければならない。

以下では、このような頻度の副詞が「話者の心的態度」を表すことについて見ていくが、その前に、事態の認識について認知言語学がどのような立場をとっているかについて、概観する。

4. 事態の認識と主体

認知言語学のアプローチでは、言語表現を認知主体が外部世界を解釈していく認知プロセスの反映として捉える。外部世界の対象や事態は、認知主体から独立して解釈されるのではなく、主体の投げかける視点との関係でさまざまな意味づけがなされる。その外部世界の解釈には、次の二つのレベルが関わっていると考えられている。一つは、外部世界そのものを規定するレベル、もう一つは外部世界の存在を主観的に判断するレベルである。

山梨(1995, 2000)は、前者を<状況的意味>、後者を<認知的意味>として区別している。この認知的意味のレベルでは、外部世界の真理条件が同じであっても、それを認識する主体の環境や視点が異なる場合には、それらは異なる言語表現として表されることになる。

例えば、半分までワインが入っているグラスに対し、次のような表現が考えられる。

- (8) a. まだワインが半分もある。
- b. もうワインが半分しかない。

これらの表現は、外部世界を表す真理条件の立場からするとどちらの表現も真であり、意味的にも等価であるとされる。そのため、この二つの文の間には言い換えが成立する。しかし、認知的意味の側面に注目し、これらの表現が主体の認識の異なりの現れとであると解釈するならば、前者の表現は、残っているワインに対して焦点が向けられ、後者はワインがなくなった状態に焦点が向けられているとされる。さらにこれらの表現を「話者の心的態度」の観点から捉えたと、前者からは「安心」、後者からは「不満」や「残念」といった態度を読み取ることが出来る。

このように、認知的意味という側面に着目して言語表現を捉え直すと、一見客観的な事実のみを述べているような表現であっても、話者の心的態度が表現されていることがわかる。

5. 頻度と主体

頻度の副詞は命題内修飾成分ではあるものの、他の命題内修飾成分とは異なり、修飾の対象が事態の内部ではない。これらの副詞は、事態を外部から捉え、事態成立のありようや成立条件に対して述べている。

認知言語学では、事態の外部から事態の成立を把握するやり方として、一括して行う見方<一括スキヤニング>と連続して行う見方<連続スキヤニング>の二通りの方法があることを明らかにしている。ここから、事態の外部からの事態の成立を把握する場合には、主体の積極的に解釈が関係していることが予測される。

従って、頻度という事態の繰り返しを認識するためには、事態の成立を主体が積極的に解釈していかなければならない。これが、事態の繰り返しに対する主体の態度が反映されやすい理由であると考えられる。一方、事態の成立を数えるという客観的な立場に立てば、このような主体の認識の関わりが相対的に低くなるため、以下の例のように「絶対数指示の度数の副詞」などでは、話者の心的態度といったものは反映されにくくなる。

- (9) a. 「ホーム」をクリックしなければならない。
- b. 三回「ホーム」をクリックしなければならない。
- c. いちいち「ホーム」をクリックしなければならない。

しかし、これだけで話者の心的態度が反映されるとは言えない。なぜなら、次の例のように他者の行動について述べた場合、必ずしも話者の心的態度が示されるわけではないからである。

- (10) a. 私はいちいち会社まで忘れ物を取りに戻った。
- b. 彼はいちいち会社まで忘れ物を取りに戻った。

この場合、行為の主体が「私」であっても「彼」であっても、客観的な事態の成立に変化はない。なぜならば、この事態を第三者が捉えれば、どちらも彼、もしくは彼女として表現され、真理条件的にはほぼ等価となるからである。しかし、実際には「私」の場合のみに「煩わしさ」などの「不満」が感じられる。

そこで、この二つの事態を主体的に捉えてみると、「私」である主体は、この事態内部において「忘れ物を取りに戻る」というコストを支払っていることがわかる。一方で「彼」は他者であるため、基本的に主体のコストとは無関係である。このように事態を主体的に捉えることで、事態内部で主体と他者とが区別され、二つの事態は区別されることになる。その上で、話者にコストがかかる「繰り返し」に対して「煩わしさ」といった話者の心的態度が反映されると考えられる。

6. まとめ

認知言語学の観点から、主体が事態の認識に積極的に関わることにより、本来は命題に関わるはずの「状態副詞」でも「話者の心的態度」を表すことを示した。このような、主体による外部世界の認識の側面は、頻度の副詞に限らず、他の状態副詞にも反映されていると思われるが、今回は、このような事態と主体の認識の観点から分析を行う必要があることの指摘に留める。

謝辞

本研究は、独立行政法人 情報通信研究機構の黒田航氏、京都大学大学院人間・環境学研究科の野澤元氏との議論がもとになっている。両氏からは本研究について、多くのアドバイスを頂いた。ここに記して感謝致します。なお、本論の誤りなどは全て筆者の責である。

また、本文中に引用したデータの一部は、(株)日本マイクロソフト社からの提供を受けたものである。ここに記して感謝致します。

参考文献

- Langacker, Ronald W. (1987) *Foundations of Cognitive Grammar*. Vol.1, Stanford University Press.
- 国立国語研究所 (1991) 『副詞の意味と用法』、大蔵省印刷局
- 森本順子 (1994) 『話し手の主観を表す副詞について』、くろしお出版
- 中右実 (1994) 『認知意味論の原理』、大修館書店
- 仁田義雄 (2002) 『副詞的表現の諸相』、くろしお出版
- 山田孝雄 (1936) 『日本文法学概論』、宝文館
- 山梨正明 (1995) 『認知文法論』、ひつじ書房
- 山梨正明 (2000) 『認知言語学原理』、くろしお出版
- 渡辺実(編) (1983) 『副用語の研究』、明治書院

反対意見表明における「ちょっと」の働き
—「ちょっと」は不快感を緩和するか—

薄井 良子 choro@f3.dion.ne.jp
神戸大学大学院

1. はじめに

日本語母語話者は、反対意見表明をする際、どのような点に配慮しているのだろうか。そしてその配慮の意識は、非母語話者の日本語での反対意見表明に対する印象評定にも影響を及ぼしているのだろうか。

この問題意識にアプローチする足がかりとして、本発表では反対意見表明における「ちょっと」の有無が、聞き手に与える不快の程度について考察し、「ちょっと」の働きについて言及する。

2. 質問紙調査

2-1 調査対象

日本語母語話者計 51 名で、回答者の属性は以下のとおりである。

大学院生 35 名(68.6%)・大学教員 16 名(31.4%)、女性 29 名(56.9%)・男性 22 名(43.1%)、年齢は、22~62 歳(平均年齢: 35.8 歳、25 歳以下 14 名・48 歳以上 13 名)。

2-2 調査方法

調査対象者に個別に質問紙を手渡し、後日回収した。

質問紙の内容は、A~D の 4 つに分かれており、まず A では、調査対象者が反対意見を述べる際の意識を調査する目的で、シナリオを与え、「不快感を与えないようにどのように反対意見を述べるか」を具体的にセリフの形で記述を依頼した。シナリオの内容は、所属する講座で従来開催されていた修士論文中間発表会を中止しようとする教員の提案があったというものである。反対意見は、調査協力者が現実には院生・教員であるにもかかわらず、「院生の立場から、提案者の教員に対して述べる」とした。

次に、B では、上述のシナリオ状況におい

て、反対をのべた学生の「反対である旨の主張の表現」すなわち、1. 先生のご意見には反対です、2. もう一度考え直していただけないでしょうか、3. 先生のご意見には賛成できませんの 3 つから受ける反対の強さの順の判定を依頼した。ここでは、通常のコミュニケーション上存在する、口調や表情は無視することとした。これは、続く C での評定の前に、調査対象者が内省により、この 3 つに対して順位付けをしておくことで、C の評定の複雑さという負担を軽減しておくというねらいも含まれる。

さらに C では、発話の構造 4 種類 (①「談話支持ストラテジー表現」→「理由節」→「提案節」・②「談話支持ストラテジー表現」→「提案節」・③「理由節」→「提案節」・④「提案節」のみ、以下①「談→理→提」・②「談→提」・③「理→提」・④「提」のみと略記する。) と反対である旨の主張の表現 (=「提案節」) 3 種類 (「反対です」「賛成できません」「考え直していただけないでしょうか」) の組み合わせにそれぞれ、「ちょっと」の有無の別を設定し、ランダムに配置した合計 24 の発話に対し、不快度 0 から 4 までの 5 段階評価で評定を依頼した。評定は、調査対象者が現実には院生・教員であるにかかわらず、中止を提案した「教員」の立場で評定することとし、発話者は、反対の立場の学生であるとした。また、ここでも、口調や表情は無視することとした。「談話支持ストラテジー表現」には「先生のご意見もごもっともだと思うのですが」、「理由節」には「学生にとって修士論文中間発表会は必要なので」を統一して提示した。なお、「提案節」にあたるものは、上述の「反対である旨の主張の表現」である、1. 先生のご意見には反対です・2. もう一

度考え直していただけないでしょうか・3. 先生のご意見には賛成できません、を提示した。具体例を示すと、発話構造①の「提案節」が1のパターンは、

先生のご意見もごもっともだと思うのですが（「談話支持ストラテジー表現」）、修士論文中間発表会は必要なので（「理由節」）、先生のご意見には反対です（「提案節」）。となる。

最後のDでは、性別・年齢・院生か教員の別など、調査対象者の属性についての回答を求めた。

3 分析結果

1) 「反対の旨である主張の表現」の強さの順

Bの回答を分析すると、①先生のご意見には反対です・②もう一度考え直していただけないでしょうか・③先生のご意見には賛成できません、を強い順に並べると、①→③→②とした人が36名（70.6%）、③→①→②とした人が12名（23.5%）、②→①→③とした人が2名（3.9%）、無回答が1名であった。

2) 質問項目別評定平均値

Cで評定された各項目ごとの評定平均値と標準偏差は表1のとおりである。

表1 項目別評定平均値と標準偏差

発話構造	主張の表現	①反対です	②考え直していただけないでしょうか	③賛成できません
	ちょっと			
談→理→提	なし	2.04 (1.199)	0.67 (1.013)	1.71 (1.119)
	あり	2.06 (1.008)	0.80 (0.872)	1.69 (1.175)
談→提	なし	2.37 (1.199)	1.10 (1.118)	2.10 (1.110)
	あり	2.25 (1.036)	1.12 (1.107)	2.00 (1.131)
理→提	なし	2.27 (1.234)	0.63 (0.774)	2.14 (1.200)
	あり	2.12 (0.973)	0.94 (0.925)	1.78 (1.064)
提のみ	なし	3.04 (1.296)	1.51 (1.084)	2.86 (1.296)
	あり	2.69 (1.029)	1.61 (1.218)	2.49 (1.155)

平均値の高い方が不快感が高いのだが、まず、いずれの発話構造においても、平均値をみると、①>③>②の順に評定平均値が高く、不快感は①→③→②の順に低くなることがわ

かる。

ウィルコクソンの符号付順位検定を行い、「ちょっと」がある場合とない場合での平均値の差を検定した。その結果が表2である。

表2 「ちょっと」あるなしで有意差がある項目

主張の表現	①反対です	②考え直していただけないでしょうか	③賛成できません
発話構造			
談→理→提			
談→提			
理→提		*	*
提のみ	**		**

* 5%水準 ** 1%水準

この結果を、質問紙に使った発話で示してみると、「ちょっと」がない場合がある場合に

比べて不快感が高いといえるのは、
・先生のご意見にはちょっと反対です。（「提

のみ：反対です」)

・先生のご意見にはちょっと賛成できません。

(「提のみ：賛成できません」)

・学生にとって修士論文中間発表会は必要なので、先生のご意見にはちょっと賛成できません。(「理→提：賛成できません」)

逆に「ちょっと」がある場合のほうがない場合よりも不快感が高いといえるのは、次の場合である。

・学生にとって修士論文中間発表会は必要なので、もう一度ちょっと考え直していただけないでしょうか。(「理→提：考え直して」)
ただし、これは評定平均値が1未満の範囲での差なので、評定平均値が2以上の前3者との違いに注意しなければならない。

なお、調査対象者の性別・年齢・院生か教員かという属性によって、平均値を比較し、ウィルコクソンの順位検定をおこなった。年齢は、25歳以下の14名と48歳以上の13名の平均値の差を比較した。

この結果を質問紙に使った発話で見ても。全24問中、評定平均値に男女差が現れたのは、1問だけであった。

・先生のご意見もごもっともだと思うのですが、もう一度考え直していただけないでしょうか。(「談→提：考え直して」の「ちょっと」なし)

男性の方が不快感が高いが、評定平均値は2.0未満である。

また、年齢差が現れたのも1問だけである。

・先生のご意見もごもっともだと思うのですが、もう一度ちょっと考え直していただけないでしょうか。(「談→提：考え直して」の「ちょっと」あり)

25歳以下のほうが不快感が高いが、評定平均値は2.0未満である。

いずれも、24問中1問であること、さらに、評定平均値が2.0未満であることから見て、本調査の結果に関して、男女差および年齢差は考慮の必要はないと判断する。

次に、教員と院生の評定平均値に差が現れたのは以下の4問で、いずれも教員に比べて院生の方が不快感が高いと評定している。

・先生のご意見もごもっともだと思うのです

が、先生のご意見にはちょっと反対です。

(「談→提：反対です」の「ちょっと」あり)

・先生のご意見もごもっともだと思うのですが、学生にとって修士論文中間発表会は必要なので、先生のご意見にはちょっと反対です。

(「談→理→提：反対です」の「ちょっと」あり)

・先生のご意見もごもっともだと思うのですが、もう一度ちょっと考え直していただけないでしょうか。(「談→提：考え直して」の「ちょっと」あり)

・学生にとって修士論文中間発表会は必要なので、もう一度ちょっと考え直していただけないでしょうか。(「理→提：考え直して」の「ちょっと」あり)

後の2問は院生の評定平均値が2.0未満である。前2問は、評定平均値が2.0を超えており、いずれも「ちょっと」がある場合である。前2問は同じ談話構造で「ちょっと」のない場合では、院生と教員の評定平均値に有意差がないこと、さらに、提案節がおなじ「反対です」の「理→提」や「提のみ」の「ちょっと」がある場合でも、有意差がないことから、「談話指示ストラテジー」に「ちょっと」が重なった冗長さに反応した不快感の現れの可能性がある。ただし、これは、「提案節」が「考え直して」・「賛成できません」の「ちょっと」がある場合、院生と教員の評定平均値に有意差がないことから、あくまでも可能性の域を出ない。

したがって、性別や年齢の場合と同じように院生と教員の別で考察する必要は認められないと判断し、以下の考察においては、調査対象者の属性別考察はおこなわず、全体の平均値をもとに考察を進めることにする。

4 考察

4-1 反対の強さの順と不快感の関係

3の1)「反対の旨である主張の表現」の強さの順において、約70%の調査対象者が主張の表現を①先生のご意見には反対です→③先生のご意見には賛成できません→②もう一度考え直していただけないでしょうか、の順に強いと感じていたが、評定平均値の結果、

①>③>②の順に不快度が高いことをあわせ考えると、反対の強さが受け手の不快度の高さと関連することが言える。従って、相手に不快感を与えず、反対である旨を主張するためには、反対の強さを緩和する方略が必要である。

そのためには2つの方向性が考えられる。1つは、ここで示したように、直接的な「反対」という言葉を使うのではなく、再考を促すような表現を使うことである。もうひとつの方向は、「反対」という言葉を使いながらも、それがもつ強さを緩和する方向である。後者の方向性について、次で取り上げてみる。

4-2 「ちょっと」の有効性

構造の複雑さの程度と「ちょっと」の有無では、どちらが反対の強さ、つまり不快度を緩和することに対し、有効なのであろうか。

表1の、「談→理→提」の「ちょっと」がない場合と「提」のみの「ちょっと」がある場合を比較し、差の検定をおこなったところ、「主張の表現」にかかわらず、不快度の評定平均値はいずれも1%水準で有意差があり、「ちょっと」があっても「提案節のみ」の発話は、「談話支持ストラテジー表現→理由節→提案節」で「ちょっと」がない場合に比べて、不快度が高いことがわかった。つまり、発話構造の複雑さのほうが、不快度を軽減することを示唆している。

また、すでに見たように、表1の平均値が示すとおり、「ちょっと」がある場合が、「発話構造」・「主張の表現」のいずれの場合にも、ない場合に比べてすべての場合において不快度が低くなるというオールマイティさは証明できなかった。

しかしながら、これらのことから、反対意見表明において、相手の不快感を軽減するための「ちょっと」の働きがすべからず、否定されるわけではない。すでに表2で示したように、反対の度合いが強い「主張の表現」でかつ、「発話構造」が「提案節のみ」の場合は、「ちょっと」があることが不快度の緩和に有効に作用する。つまり、これは、日本語非母語話者の反対意見表明を考えた場合に、複雑

な発話構造をまだ習得していない初学者にとっては、有用な緩和方略の1つになり、さらに、複雑な構造を習得した上級者であっても母語の反対意見表明の規範を遵守し、反対であることを冒頭で明確に表現にしたい非母語話者にとっては、日本人のうける不快度を軽減する方略の1つになるのである。

5 まとめ

今回の分析は、発話時の口調や表情は無視して、「発話構造」・「主張の表現」と「ちょっと」の有無が、反対意見における不快度の緩和する働きについておこなった。分析しきれていない点は、口調等によって、「ちょっと」の働きが180度反転する可能性があることを、質問紙法ではすくい上げられなかったことである。また、実際のコミュニケーション場面では、既存の人間関係の好悪が、不快度に影響を与えていることも事実であるが、この点も、今回は言及できなかった。これらの点は機会を改めて論じたい。しかしながら、このような限界性はあるものの、また、「ちょっと」の使用があらゆる場合に不快度を緩和するとは言えないにしても、単純な発話構造をベースに、反対意見を表明しようとする日本語初学者や、母語の規範に基づき、冒頭に反対であることを述べたい非母語話者には、「ちょっと」は不快度を低減する有効な働きをするのである。

参考文献

- 李吉鎔(2001)「日・韓両言語における反対意見表明行動の対照研究—談話構造とスキーマを中心として—」『阪大日本語研究』13, 19-32.
- 岡本佐智子・斎藤シゲミ(2004)「日本語副詞『ちょっと』における多義性と機能」『北海道文教大学論集』第5号.65-75.
- 周国龍(1994)「要求行為における『ちょっと〜』の機能に関する一考察」『名古屋大学人文科学研究』23号.167-178.
- 仁田義雄(2002)『副詞的表現の諸相』くろしお出版

日本語の受益構文における格表示について

澤田 淳 (早稲田大学大学院)

0. はじめに

はじめに、次の例を比較してみよう。

(1) 太郎は花子にハンカチを渡してやった／てくれた。

(2) 太郎は花子にハンカチを拾ってやった／てくれた。
一見すると、(1)と(2)は、「渡す」と「拾う」が異なるだけで完全に平行した文であるかのように感じられる。しかしながら、(1)、(2)から、補助動詞「～てやる」、「～てくれる」を取り除いてみると、(3)、(4)に示されるように適格性に違いが生じる。

(3) 太郎は花子にハンカチを渡した。

(4) *太郎は花子にハンカチを拾った。

(3)が適格であることから、(1)の与格名詞句「花子」は、動詞「渡す」の項として生起していることがわかる。一方、(4)が不適格であることから、(2)の与格名詞句「花子」は、動詞「拾う」の項として生起してはいないことがわかる。すなわち、「渡す」は「～が～に～を V」のパターンを取る「3項動詞」であり、「拾う」は「～が～を V」のパターンを取る「2項動詞」なのである。

本研究では、(1)のタイプの受益構文を「与格内在型受益構文」と、(2)のタイプの受益構文を「与格外在型受益構文」と呼んで、両者を区別することにする。本研究の目的は、「与格外在型受益構文」に焦点を当て、この構文において与格名詞句が生起するのはいかなる場合であるかを認知言語学的観点から明らかにすることである。

1. 先行研究とその問題点

1.1. 三宅 (1996)

三宅 (1996) は、「与格外在型受益構文」の適格性に関して、(5)の分析を提出した (さらに山田 2004 参照)。

(5) 受益構文において与格名詞句を許す動詞は、典型的には作成動詞である。(三宅 1996 : 3)

「作成動詞」とは、「何かを生産することを表す動詞」とされ、「対格名詞句がその生産物」である (三宅 1996 : 2)。三宅 (1996) は (6) と (7) を比較している。

(6) a. 花子は太郎に夕食を作ってやった。

b. 花子は太郎に絵を描いてやった。

(7) a. *花子は太郎にドアをたたいてやった。

b. *花子は太郎に部屋から出てやった。

(三宅 1996 : 1-2)

三宅 (1996) によれば、(6a)、(6b) は、「(夕食を) 作る」「(絵を) 描く」が「作成動詞」であるため、与格名詞句が生起可能となるのに対し、(7a)、(7b) は、「たたく」、「出る」が、それぞれ、「(物理的) 働きかけ動詞」、「移動

動詞」であるため、与格名詞句は生起不可能となるという。

三宅 (1996) は、「作成動詞」が与格名詞句の生起を可能にするメカニズムについて、図 1 の「語彙概念構造」を用いて説明している。

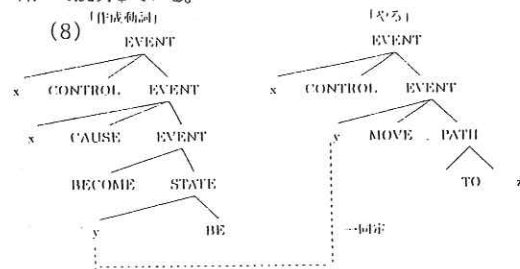


図 1

三宅 (1996 : 9) によれば、「作成動詞」では与格名詞句が生起し得るのに対し、「作成動詞」以外では生起し得ないのは、前者では項「y」(=「モノ」)の同定が可能であるのに対し、後者では不可能であるためであるという。

続いて、次の例を見てみよう。

(9) a. 花子は太郎にハーモニカをふいてやった。

b. 花子は太郎に布団を敷いてやった。

(三宅 1996 : 10)

三宅 (1996 : 10) は、「ふく」、「敷く」が「作成動詞」でないにもかかわらず、与格名詞句が生起可能であるのは、それぞれ、「音」、「寝床」が「生産物」と認められ、その「音」、「寝床」が移動するモノ「(y)」とみなされるからであるという。(9)のような例を説明するために、三宅 (1996) は「スキーマ」の概念を導入している。すなわち、図 1 の「語彙概念構造」が、「認知的なスキーマとしての機能を有すると仮定する (三宅 1996 : 11)」ことで、一見すると (5) の例外となる (9) にも、ある種の「生産物」が認められることから、スキーマとしての図 1 に合致するようになるという。三宅 (1996) は、「スキーマ」という認知的な視点を導入すると、語彙概念構造における特性が、特定の構文を成立させるスキーマとしての機能を持つことがある」とし、「生成文法的な考え方と認知言語学的な考え方の、部分的な融合を図ったものである」と主張している (三宅 1996 : 12)。

1.2. 三宅 (1996) の問題点

以下、三宅 (1996) の問題点を 3 つ指摘する。

第 1 の問題は、動詞が「作成動詞」でなくても、与格名詞句が生起する例がある事実を説明できない点である。

(10) 太郎は花子にハンカチを拾ってやった。

(11) 太郎は花子にカギを見つけてやった。

- (12) 太郎は花子にハサミを取ってやった。
 (13) 太郎は花子に魚を釣ってやった。
 (14) 太郎は花子にトンボを捕まえてやった。
 (15) 太郎は花子にスイカを切ってやった。
 (10) - (15) は、「～てやる」を取り除くと不適格となるため、「与格外在型受益構文」である。
 (16) *太郎は花子にハンカチを拾った。
 (17) *太郎は花子にカギを見つけた。
 (18) *太郎は花子にハサミを取った。
 (19) *太郎は花子に魚を釣った。
 (20) *太郎は花子にトンボを捕まえた。
 (21) *太郎は花子にスイカを切った。

三宅 (1996) の分析に従えば、動詞「拾う」、「見つめる」、「取る」、「釣る」、「捕まえる」、「切る」は、「作成動詞」ではないため、図1の「語彙概念構造」に合致せず、(10) - (15) は不適格とされてしまう。また (10) - (15) は、(9) のように「スキーマ」で処理して適格とさせることもできない。なぜなら、(10) - (15) のモノは、「生産物」ではなく、既存の事物であるからである。

第2の問題は、「作成動詞」であっても、与格名詞句が生起しにくい例がある事実を説明できない点である。(22) のa文とb文を比較されたい。

(22) (工場長の発話)

- a. 従業員が休日返上で工場部品を作ってくれた。
 b. ??従業員が休日返上で工場人々に部品を作ってくれた。

「作る」は「作成動詞」であるにもかかわらず、与格名詞句が生起した(22b)は不自然に感じられるが、三宅 (1996) の分析ではこの不自然さを説明することはできない。本研究の分析によれば、(22b) の不自然さは、「工場」という場において、「部品」が与格名詞句「人々」に移動することは考えにくく、百科事典的知識と衝突することにより生じると説明される(第2節を参照)。

第3の問題は、(9) に対しても、「語彙概念構造」が維持されている点である。(9) における「生産物」は、「音」、「寝床」であるため、「語彙概念構造」における「y」は、「音」、「寝床」ということになる。しかし、そのように分析した場合、対格名詞句「ハーモニカ」、「布団」は「語彙概念構造」に表示されなくなってしまう。

2. 本研究の分析

2.1. 「与格外在型受益構文」の概念構造

本研究では、「与格外在型受益構文」は、(23) の概念構造

を有していると想定する(iは同一指標を表す)。

(23) XiがYに[XiがZをV]てやる／てくれる

(23) に従えば、例えば(1)は、(24) のような構造をなしていることになる。

(24) 太郎が花子に「ハンカチを拾う」てやった／てくれた。(=1)

(24) の与格名詞句「花子」は、事象外の補助動詞「～てやる」、「～てくれる」の項として生起しているのである。

「与格外在型受益構文」が興味深いのは、三宅 (1996) も指摘しているように、事象内の本動詞ではなく、事象外の補助動詞「～てやる」、「～てくれる」が、与格名詞句を生起させているという点である(さらに大曾 1983、Shibatani 1994、加賀 1997、高見・加藤 2003 等参照)。この現象は、補助動詞を「付属語」とみなす(『国語学辞典』: 84) 従来の補助動詞の定義からは予測できない。しかしながら、補助動詞とは本動詞が文法化した結果成立した語であるという点を考慮に入れるならば、本動詞と補助動詞の文法範疇は、はっきりと二分されるものではなく、連続的なものであると捉えることが可能である。このように両範疇を連続的に捉えるならば、文法化の過程において「より本動詞に近い補助動詞」の段階が存在することは想像に難くない。「与格外在型受益構文」の中で用いられる補助動詞「～てやる」、「～てくれる」は、「やる」、「くれる」同様、与格名詞句を項として生起させるという事実を考慮に入れるならば、「より本動詞に近い補助動詞」の段階に位置づけることが可能である(澤田 2004: 249 参照)。

2.2. 「与格外在型受益構文の原則」とその論証

2.2.1. 「与格外在型受益構文の原則」

本研究では、次の原則を提出する。

(25) 「与格外在型受益構文の原則」: 主語名詞句(X)

の行為によって、「モノ」が主語名詞句(X)の所有領域内に出現し、その「モノ」が与格名詞句(Y)の所有領域に移動することが含意される場合に、「与格外在型受益構文」は成立する。

すなわち、「与格外在型受益構文」において与格名詞句が生起するのは、(25) の原則を満たしている場合ということになる。「与格外在型受益構文」は、図2のイメージスキーマで表すことができる(cf Langacker 2002²: 227)。

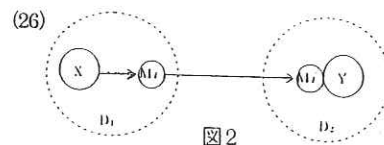


図2では、Xは主語名詞句(授与者)、Yは与格名詞句(受

領者)、Mはモノ (Mover)、iは同一表示、Dは所有領域 (Possessive Domain) を表している。二重矢印 ($\Rightarrow$) は主語名詞句 (X) の行為 (XがZをV) を表しており、その行為によりモノが出現する。一重矢印 ($\rightarrow$) は「～てやる」、「～てくれる」が表す「移動性」を表している。ここで重要なことは、Mは単なるモノではなく、与格名詞句にとって「益となるモノ」であるという点である。また「所有領域」(D) は、「空間的領域」のみならず、「心理的領域」も表し得る点に注意されたい ((37)、(38) 参照)。

図2に従えば、例えば (1) は、「ハンカチを拾う」という「太郎」(X) の行為によって、「ハンカチ」(M) が「太郎」(X) の所有領域内 (D₁) に出現し、その「ハンカチ」(M) が「花子」(Y) の所有領域内 (D₂) に移動することが含意されていることになる。

2.2.2. 「与格外在型受益構文の原則」の論証

第1に、(25) の原則から、(27) のような例の不適合性が説明される。

- (27) a. *太郎は花子に走ってやった。
b. *太郎は花子に仕事をやめてやった。

「走る」、「(仕事を) やめる」という主語名詞句「太郎」の行為は、モノを「出現させる」行為ではないため、(25) の原則に抵触し、不適合となる。

第2に、(25) の原則から、以下の例の a と b の適合性の違いが説明される。

- (28) a. 太郎は花子にハンバーグを焼いてやった。
b. ??太郎は花子にハンバーグを冷凍してやった。
(29) a. 太郎は花子にトンボを捕まえてやった。
b. ??太郎は花子にトンボを逃がしてやった。
(30) a. 太郎は花子にカギを見つけてやった。
b. *太郎は花子にカギを失くしてやった。

(28) の適合性の差は、三宅 (1996) の「作成する」という行為であるか否かという観点からでも説明可能である。しかしながら、1.2 節で論じたように、(29)、(30) の適合性の差は、「作成する」という行為であるか否かという観点からは説明不可能である。(25) の原則に従えば、

(28) - (30) における a と b の適合性の差は統一的に説明可能である。すなわち、(28a) - (30a) は、「(ハンバーグを) 焼く」、「(トンボを) 捕まえる」、「(カギを) 見つける」という主語名詞句「太郎」の行為によって、それぞれ、「ハンバーグ」、「トンボ」、「カギ」というモノが「太郎」の所有領域内に出現するため、適合であるのに対し、

(28b) - (30b) は、「(ハンバーグを) 冷凍する」、「(トンボを) 逃がす」、「(カギを) 失くす」という主語名詞句「太

郎」の行為によっては、モノが「太郎」の所有領域内に出現しないため、不適合となるのである⁽¹⁾。ただし、(28b) - (30b) は、「花子」が与格名詞句ではなく、「～のために」等の形式で表すことで「与格内在型受益構文」ではない文にすれば適合となる。例えば、次の例を見られたい。

- (31) 太郎は花子のためにハンバーグを冷凍してやった。

(31) が自然であるのは、「与格外在型受益構文」ではないため、「モノ」の移動が含意されなくなるためである (以下の第3、第4の論証を参照)。

第3に、(25) の原則から、(32) の不自然さが説明される (「指輪」は同一物とする)。

- (32) ??私は花子に買ってやった指輪を洋子にやった。

(32) が不自然であるのは、従属節では「指輪」が「花子」の所有領域に移動したことが表されているのに対し、主節ではその「指輪」が「洋子」の所有領域に移動したことが表されており、解釈に矛盾が生じるからである。

第4に、次の例を比較してみよう。

- (33) a. 後ろを歩いていた女性が私に財布を拾ってくれた。
b. 後ろを歩いていた女性が私の財布を拾ってくれた。

(33a) と (33b) は、一見すると、同一の状況を表し、意味も同一であるように思われるが、次の (34) のように適合性の違いが生じることから、意味は異なるといえる。

- (34) a. *後ろを歩いていた女性が私に財布を拾ってくれたそうだ。
b. 後ろを歩いていた女性が私の財布を拾ってくれたそうだ。

(34a) では、与格名詞句が現れているため、「財布」が「女性」から「私」に移動したという含意があるが、文末の伝聞形式「そうだ」により、「財布」が「女性」から「私」に直接的に移動しなかったことが表されている。従って、解釈に衝突が生じ、不適合となる。一方、(34b) では、「私」ではなく、「私の」が現れているため、「財布」が「女性」から「私」に移動したという含意はない。従って、文末の伝聞形式「そうだ」を用いても適合となる。(34b) は、例えば「女性」が警察に「財布」を届け、その情報が警察から「私」に提供されたというような状況が考えられよう。

第5に、以下の例を考えてみよう。

- (35) 太郎は花子にタクシーを呼んでやった。
(36) 太郎は花子にボディガードを雇ってやった。

(35)、(36) は、「～てやる」を取り除くと不適合となるため、「与格外在型受益構文」である。

(37) *太郎は花子にタクシーを呼んだ。

(38) *太郎は花子にボディガードを雇った。

(35)、(36)における「タクシー」、「ボディガード」は、主語名詞句「太郎」の「所有領域」から移動したモノとは考えにくい。また、(25)の原則に厳密には適合しない事例ということになる。しかしながら、(35)、(36)の「タクシー」、「ボディガード」は、それぞれ、「太郎」が呼んだり、雇ったりしたモノである以上、主語名詞句「太郎」の「支配領域」にあるモノと考えられる。従って、(35)、(36)は、(25)の原則で表される「中心的意味」からの拡張事例としてみなせよう。

(39) 所有領域 → 支配領域

すなわち、(35)、(36)は、「太郎」の「支配領域」から「花子」の「支配領域」に「タクシー」、「ボディガード」が移動したことが表されていることになる。

第6に、以下の例を考えてみよう。

(40) 太郎は娘にチケットを予約してやった。

(41) 刑事は犯人にカツ丼を注文してやった。

(40)、(41)は、「～てやる」を取り除くと不自然となるため、「与格外在型受益構文」である。

(42) ??太郎は息子にチケットを予約した。

(43) ??刑事は犯人にカツ丼を注文した。

(40)、(41)では、与格名詞句が「チケット」、「カツ丼」をまだ受け取っていないという解釈が自然であり、その点では(25)の原則に適合しない。しかしながら、与格名詞句は、未来のある時点において、そのモノを受け取ることが含意されているとみなすことができるので、(40)、(41)は、(25)の原則で表される「中心的意味」からの(時間的な)拡張として捉えることが可能である (Goldberg 1995 : 32 参照) ⁽²⁾。

(44) モノの移動の含意 → 未来時のモノの移動の含意

3. まとめと今後の課題

本研究では、「与格外在型受益構文」において与格名詞句が生起するのはいかなる場合であるかについて認知言語学的観点から考察を行い、「与格外在型受益構文の原則」を提出した。この原則によれば、(i) 主語名詞句 (X) の行為は、モノを「出現させる」行為であり、(ii) 主語名詞句 (X) の所有領域から与格名詞句 (Y) の所有領域にモノが移動することが含意される場合に、「与格外在型受益構文」が成立し、与格名詞句の生起が可能ということになる。また本研究では、「与格外在型受益構文の原則」に厳密には適合しない事例も、この原則の拡張事例として相対的に位置づけることが可能である点を指摘した。この点

で本研究のアプローチは、「用法依存モデル」 (usage-based model) を採用する認知言語学のアプローチ (Langacker 2002² : 261, 山梨 2000 : 178) を体现している。

本研究では、以下のような「与格外在型受益構文」の例について考察することができなかったが、これらの例は、山梨 (2000、2003) で提案されている「スキーマの背景化」の観点から首尾よく説明可能であると考えられる。すなわち、(45) から (47) に行くに従い、モノやそのモノの移動のあり方が希薄化しているのである。

(45) 太郎は花子に席を空けてやった。

(46) 太郎は花子に明かりをつけてやった。

(47) (?) 太郎は花子に頭を撫でてやった。

こうした問題については今後の課題としたい。

注

(1) この点で、(25) でいう「出現させる」行為は、三宅 (1996) でいう「作成する」行為を含む。

(2) (40)、(41) は、「チケット」、「カツ丼」は主語名詞句からは移動しないため、(39) の「所有領域」から「支配領域」への拡張も伴っていると言えよう。

参考文献

- Goldberg, A. (1995) *Constructions: A Construction Grammar Approach to Argument Structure*. Chicago: The University of Chicago Press.
- 加藤真広 (1997) 「日英語の受益構文と意味役割」 筑波大学現代言語学研究会 (編) 『ヴォイスに関する比較言語学的研究』三好士
- Langacker, R. (2002) *Concept, Image, and Symbol: The Cognitive Basis of Grammar*. Berlin: Mouton de Gruyter.
- 三宅和宏 (1996) 「日本語の受益構文について」『国語学』186.
- 大曾美恵子 (1983) 「受動詞文と二名詞句」『日本語教育』50.
- 澤田卓 (2004) 「日本語の受益構文と「主格化」：「～てくれる」構文と「～てやる」構文の比較」『日本認知言語学会第5回記念大会 CONFERENCE HANDBOOK』pp.248-251.
- 高見健一・加藤真三 (2003) 『動詞受益表現の展開4 「～てあげる」表現の意味』『言語』32 : 4.
- 山田敏弘 (2004) 『日本語のベネファクティブ「～てやる」「～てくれる」「～てもらう」の文法』明治書院
- 山梨正明 (2000) 『認知言語学原理』くろしお出版
- 山梨正明 (2003) 『認知言語学からみた日本語研究—複合ドメイン・モデルを中心に—』北原保雄 (監修・編) 『朝倉日本語講座5 文法I』朝倉書店
- Shibatani, M. (1994) "Benefactive Constructions: A Japanese-Korean Comparative Perspective." *Japanese/Korean Linguistics* 4 pp. 39-74.

視点について —「名詞＋不定詞」における不定詞の態—

中村ちさと
甲南女子大学大学院

1. はじめに

主として視点は注意を特定の仕方で振り向ける認知能力に基づくものである。状況に対して私達がどんな視点をとるかは色々な要因が関与はするが、主には何が私達の注意を引くかで決まる。たとえば、

- (1) David bought an old shirt from John for ten pounds.
- (2) John sold an old shirt to David for ten pounds.
- (3) John charged David ten pounds to John for an old shirt.
- (4) David paid ten pounds to John for an old shirt. について考えてみる。

この4つの文は客観的には同じ事実を伝えているが、buy を用いるのは聞き手の注意を「買い手」と「売られる物」に向けたい時で、sell を用いるのは注意の焦点が「売り手」と「売られる物」にある時である。すなわち、buy と pay は買い手の視点から商行為を捉えていて、sell と charge は同じ状況を売り手の視点から見ていることになる。(以上 F.ウングラー他著『認知言語学入門』)

本論では、「名詞＋「不定詞」において、話し手又は書き手の視点の変化に伴って不定詞の態がどのように変化するかを論じる。

2. 1つの試み—言い換え

Jespersen も他の文法家も①There is something to lose と②There is something to be lost は、不定詞の態は異なるが意味は同じであるとしているが、「視点」の観点からは疑問が残る。事実、Curme は *Syntax* の中で、その反証をあげている。抜粋、引用すると、Sometimes, active and passive form have a little different meaning: 'This is the man to send' (=that should be sent), but 'This is the man to be sent' (=that in accordance with our plan will be sent). また Curme は関係代名詞を用いた書き換えも行っている。例をあげると、'That's the way to do it' (=in which you should do it). 'He was the first man to come' (=who came). などがある。これに基づき、筆者なりに①を関係代名詞を用いて少し細かく言い換えてみると、There is something that you /I/ we can lose となり、for you/ me/ us などが念頭にあるものと考えられ、話し手の視点は不定詞の行為者にある。これに対し②では、不定詞の行為者はさほど重要

視されていない。言い換えると *There is something that can be lost* となり、視点は文の中に埋め込まれているかのように曖昧である。

3. 用例の検証

ここでは、*There is* ～構文を主な研究対象とする。話し手あるいは書き手の視点について考察する。2の①のタイプと②のタイプをそれぞれ2例ずつ検証する。

3. 1. ①型

As you say, one of the first thing to check with a new theory of dynamics is conservation of energy. (*Scientific American*. 2002. December)

言い換えると、As you say, one of the first thing that we should check with…となる。私達の注意を引くものとしての視点は *we* であるが、文脈上明らかなので、不定詞の態は能動態となる。

The time to check is fast approaching. There are details to work out. (*Scientific American*. 2002. December)

言い換えると The time we should check is fast approaching. There are details that we should work out.となる。話し手（或いは書き手）の視点は、表面上は現われていないが不定詞の行為者にある。

3. 2. ②型

This means that the framework for the activity is itself communicative i.e.that there is something to be communicated to someone for some purpose. (BNC)

私達の注意を引くものとしての視点は明らかではない。言い換えると、…there is something that can be communicated to someone for some purpose となる。不定詞の意味上の主語が明らかでない場合、即ち視点が明らかでない場合、不定詞の態は受動態となる。

There were many other views to be shown, and though the weather was hot, there were shady lanes wherever they wanted to go. (Austen, Jane, *Mansfield Park*)

不定詞の意味上の主語を書く必要がないので不定詞の態は受動態となる。不定詞の行為者に対する視点は重要視されていない。これは小説の中の一節であり、*to be shown* がなくても意味が通じる箇所である。

4. おわりに

①*There is something to lose* と②*There is something to be lost* について用例をあ

げながら、視点という観点から伝えたい意味を概観してきた。すなわち、①の文は表面上は不定詞の行為者（意味上の主語）は現われていない。それは something は不定詞の意味上の目的語であるが、コンテキストにより不定詞の意味上の主語が明白であるために、言う必要がないからである。一方②では、不定詞の行為者（意味上の主語）に対する視点は全く重要視されておらず、中立的で曖昧である。①と②を関係代名詞を用いて言い換えるのは、そのことを明らかにするための試みである。このように①と②において言葉で映し出されるものが異なるのは、①と②でとらえている視点が異なるからである。そのため、①と②が意味する事柄は変わってくる。

①と②がまるでペアーのように論じる文法家もいるが、実は全く性質が異なるものであることがわかる。

視点のない文はありえない。話し手あるいは書き手が文を発する際、あたかもカメラを使ったように、重要である語(語句)や状況に焦点をあてて文を述べる。カメラを通して見た文は、焦点のあてかたによって、意味が異なってくる。「名詞＋不定詞」において、態が異なれば意味が変わるのは、カメラを使って作られる視点こそが態により異なるからである。

資料

Austen, Jane. 1998. *Mansfield Park*. Oxford: Oxford University Press.

Scientific American. December 2002.

British National Corpus (BNC).

参考文献

F. ウンゲラー、H.J. シュミット. 1978. 池上嘉彦ほか訳『認知言語学入門』
東京：大修館書店.

Curme, George, O. 1931. *Syntax*. Tokyo: Maruzen.

Jespersen, Otto. 1961. *A Modern English Grammar on Historical Principles V*.
London: George Allen & Unwin.

Quirk, Randolph, et al. 2003. *A Comprehensive Grammar of English Language*.
London: Longman.

Swan, Michael. 1982. *Practical English Usage*. Oxford: Oxford University Press.

『動詞＋名詞＋形容詞』の形をとる慣用表現について

松本 知子

同志社女子大学非常勤講師

noriko-mtmt@pop02.odn.ne.jp

1. Introduction

This paper addresses the interrelated topic of idioms and constructions. Both idioms and constructions can be regarded as symbolic units, which associate a phonological representation with a semantic representation. Constructions usually are specified at a high level of schematicity and are able to sanction an open set of expressions, whereas idioms generally need to be specified at a lower level of schematicity. Constructions, in other words, display varying degree of idiomaticity. Thus, the difference between idioms and constructions turns out to be a gradient distinction, essentially having to do with the schematicity at which a unit is specified.

The constructional schema [NP_{Subject} V_{Transitive} NP_{DirectObject} ADJ] is somewhat less productive. In view of its productivity, the complex transitive schema tends to be accorded the status of being peripheral in syntax. Since they are, by definition, grammatical units larger than a word that are syntactically and/or semantically idiosyncratic in various ways, idioms themselves are relatively peripheral. It is obvious that both the V+NP+ADJ constructions and the idiomatic expressions that take the constructional schema [NP_{Subject} V_{Transitive} NP_{DirectObject} ADJ] are peripheral phenomena. Especially, by focusing more peripheral idiomatic expressions, this paper will explore the nature of idiomaticity in V+NP+ADJ constructions; consequently, it will also demonstrate that it is possible to argue that idioms are the core rather than being peripheral to the core of a language.

2. General properties of idioms and idioms as constructions

Fillmore et al. (1988) divide idioms into three categories, as in Table 1.

(cf. Makkai 1972, Nunberg et al. 1994, and so on.)

	lexically	syntactically	semantically
unfamiliar pieces unfamiliar arranged ex. <i>kith and kin</i>	irregular	irregular	irregular
familiar pieces unfamiliar arranged ex. <i>all of a sudden</i>	regular	irregular	irregular
familiar pieces familiar arranged ex. <i>kick the bucket</i>	regular	regular	irregular
regular syntactic expressions	regular	regular	regular

Table 1. Types of idioms compared to regular syntactic expressions

With respect to V+NP+ADJ constructions, the idiomatic character of an expression resides in its semantic value. As a consequence, the expressions are open to two kinds of interpretation, the literal interpretation and the idiomatic interpretation.

(1) Jaxx: Peter's got guinea pigs have that are immune to Ebola, a Supermonkey who's beat it. I'll bleed these animals dry and spin off some immuno plasma.
(from *Hot Zone*)

(2) Struckey: Goddamit!! Where is he getting the money to fight?
Edward: Someone's loaning it to him. Get on it right away.
Stuckey: Our contract guys are working on the Kross pensim funds. There's another forty million there. We can bleed'em dry. (from *Pretty Woman*)

Furthermore, there is no clear-cut distinction between the regular expression, as in (1), and the idiomatic expression, as in (2), because both of them convey resultative meanings. While metaphor might seem to be involved in this case, there is no general conceptual metaphor in English which sanctions the mapping from blood to life.

3. Idiomaticity in various types of V+NP+ADJ constructions

Syntactically, the V+NP+ADJ construction has only four slots. Semantically, only four semantic factors are foregrounded, and all of the other factors are backgrounded. The foreground factors represent the assembly's semantic primary value, because they usually incorporate the contents as the background. Every V+NP+ADJ construction is amenable to conceptualization as a single unit entity. A key function of the V+NP+ADJ construction is to consolidate several properties into a single unit. Moreover, it should be emphasized here that the idiomatic expressions with the constructional schema [NP_{Subject} V_{Transitive} NP_{DirectObject} ADJ] retain the same characteristics that the V+NP+ADJ constructions have.

- | | |
|--------------------------------|-----------------------------------|
| (3) a. He shot him dead. | f. We saw him angry. |
| b. He drank himself silly. | g. I consider him honest. |
| c. They ate the fish raw. | h. We find the defendants guilty. |
| d. He ate the meat naked. | i. She held her head high. |
| e. The tear gas made him sick. | |

Idiomatic expressions that take the constructional schema [NP_{Subject} V_{Transitive} NP_{DirectObject} ADJ] can occur only in the area of object-oriented resultative, subject-oriented resultative, object-oriented depictive, causative, and general meaning.

- (4) a. Waterman was the first independent operator to take on the big boys at the pop game and beat them hollow.
b. They'd send me here, there and everywhere and I'd run myself ragged and get no place.

- c. Sharon will skin me alive if I'm late.
- d. You don't get the chance to go ape crazy.
- e. I'd only been out of prison three months so I was trying to keep my nose clean.

With respect to the adjectives, as Table 2 shows, only one member of the complementary and antonym adjective tends to occur in the idiomatic expressions.

	dry,
	clean
	alive, red, sweet, wet
	cold, crazy, dark, dirty, full, hollow, loose, open, ragged, red-handed, rich, safe, shut, straight, unturned, white, wild

Table 2. The frequencies of the adjective (tentative)

However, only in the area of general meaning, both members of complementary adjective can occur. Their interpretations might seem to be related to metonymy.

(5) INDY: Stay here!

MARION: (grabbing him) Where are you going?

INDY: I'll be back in a minute. We're going through this wall. Just keep your eyes open and get ready to run. No matter what happens to me.

MARION: (panicked) What do you mean? (from *Raiders of the Lost Ark*)

(6) COLE: Loose talk is the one thing I worry about.

HEBBING: I can keep my mouth shut, Mister Fellowes. (From *Grifters*)

A notable feature of idioms with the constructional schema [NP_{Subject} V_{Transitive} NP_{DirectObject} ADJ] is their picturesque character; in other words, they often evoke a concrete and easily imaginable scene, which is taken as emblematic of the situation which it is used to refer to. (See Gibbs and O'Brien 1990, Taylor 2002, and so on.)

(7) "Don't you and the other sisters ever paint the town red?" "We sometimes go to the hotel and come back in a taxi. Just for a bit of fun."

(8) That doesn't mean you should go hog wild and double the recipe's sugar content. Just keep the word 'moderation' in mind.

(9) We will leave no stone unturned to keep our position as the world's number one football club.

(10) I'm sure some of my friends thought I had a screw loose during this period. It seemed to them that my life was all work and no play.

(11) All you have to do is keep your powder dry and await orders.

(12) The pilot decided that Christchurch was too far away, and played it safe and landed at Wellington.

- (13) a. You can't tell him that – he'll eat you alive!
b. "Can we go out?" "Outside? The mosquitoes will eat us alive."

This does not imply that the meanings of idioms should be predictable. The meanings of idioms can be motivated so that an idiom's figurative meaning makes sense.

A study of constructions reinforces many of the points concerning the absence of a clear-cut distinction between the idiomatic and the regular expressions. There is, therefore, a gradient phenomenon between idioms and constructions. It should be emphasized here again that the existence of idioms as constructions, namely symbolic units, should be accepted. It is not significant to argue the distinction between compositionality and non-compositionality as a defining idioms and the one between the non-idiomatic and the idiomatic.

4. Conclusion

Cognitive linguists take the position that they have strong grounds for asking why we can utter many phenomena that cannot be explained *a priori*, and pursue the questions to which such phenomena give rise. Through the investigation of the syntax, semantics, and pragmatics of V+NP+ADJ constructions, this paper explores the view that the realm of idiomaticity in a language is worthy of significant grammatical investigation. This paper shows that the study of the idiomatic does indeed lead to a deeper understanding of the nature of language. The grammar comes to be characterized, not in terms of more general rules and principles, but as a huge inventory of particular linguistic facts, interrelated by schemas of varying levels of schematicity. Far from being peripheral to the grammar, the idiomatic occupies the central place.

References

- Fillmore, Charles J., Paul Kay, and Catherine O'Connor. 1988. Regularity and idiomaticity in grammatical constructions: the case of *let alone*. *Language* 64:501-538.
Gibbs, Raymond W., Jr. and Jennifer E. O'Brien. 1990. Idioms and mental imagery: the metaphorical motivation for idiomatic meaning. *Cognition* 36:35-68.
Makkai, Adam. 1972. *Idiom Structure in English*. The Hague: Mouton.
Nunberg, Geoffrey, Ivan A. Sag, and Thomas Wasow. 1994. Idioms. *Language* 70:491-538.
Taylor, John R. 2002. *Cognitive grammar*. Oxford: Oxford University Press.

Corpora

- Cambridge Dictionaries Online. <http://dictionary.cambridge.org/>
Collins Cobuild Dictionary of Idioms, second edition. 2002.
Longman Dictionary of Contemporary English, fourth edition. 2003.
Quoted movie scripts are cited on <http://simplescripts.com>.

「か」と“ma”の意味と機能について

程 遠 巍

関西外国語大学非常勤講師

1. はじめに

日本語では、文末に「か」を付加することによって、疑問文が作られ、中国語では、文末に“ma”を付加することによって、疑問文が作られる。日本語の「か」は、命題の真偽を問題にするいわゆる真偽疑問文以外に、疑問語疑問文にも使われるが、中国語の“ma”は、真偽疑問文にしか使われない。このような言語現象の違いは、「か」と“ma”の文法化の過程が違うことに由来していると考えられる。

本稿では、「か」と“ma”について、次の二点を明らかにする。

- ア) 文末の「か」の文法化は、「や」の消滅によって進んできたものである。「か」は、古語においては疑問語と共起して基本的に疑いを表す意味であったが、問いかけを表す文末の「や」の衰退によって、問いかけを表すように移行してきた。また文中の「か」の意味も、疑いから不定に移行してきた。「か」の問いかけの機能は、「や」の問いかけの機能の消滅によって生起したものである。
- イ) 真偽疑問文を作る“ma”は、古語の文末表現における否定と問いかけを表す“无”から生起し、問いかけを表すものとされる。“ma”が付加する疑問文は、他の種類の真偽疑問文と共存しながら、会話の合理化(簡易化)の原理によって、現代では最も一般的に広く使われる真偽疑問文になった。つまり、“ma”の文法化過程は、本来の問いかけ機能を保持しながら、他の種類の真偽疑問文と共存するものである。

2. 「か」の意味と機能

現代語の「か」は、文末と文中に用いられる。文末の「か」は命題の真偽を問題にするいわゆる真偽疑問文以外に、疑問語疑問文にも使われる。真偽疑問文においては聞き手への問いかけを表し、疑問語疑問文においては疑いを表すものとする。文中に用いられる場合は、意味的に疑問から不確かさを表す意味に転じると指摘されている。

古語における「か」は、文中に用いられる場合も、文末に用いられる場合も基本的に命題に対する疑いを表す意味である。

「か」が文中に用いられ、疑問語を伴う例は次のようなものである。

①「いかなる所にか、この木はさぶらひけむ」(＝どんな所にこの木はございましたのでしょうか) (竹取・蓬莱の玉の枝)

また、「か」は文末にも用いられ、疑いの意味を表す例としては次のようなものである。

②「いと苦しく物思ふなるは、まことか」(＝大変ひどく物思いをしているというのは、ほんとうか) (竹取・かぐや姫の昇天)

③「こぞの夏なきふるしてしほととぎすそれかあらぬか」(＝去年の夏鳴きふるしたほととぎすであろうか、それともちがうほととぎすであろうか) こゑのかはらぬ」(古今・夏)

古語においては、「や」は文中にも文末にも用いられる。主に相手への問いかけを表すことが「か」との違いであると考えられている。

「や」が文中に用いられ、問いかけを表す例は次のようなものである。

④「吾が為は照りや給はぬ」(＝照ってくださらないのか) (万・五・八九二)

「や」が文末に用いられ、問いかけを表す例は次のようなものである。

⑤「父母はありや。家所はありや。」(宇津保・嵯峨院)

「か」は、「事柄に対する疑問の意を表すのが本来の機能であったことは確かであろう。事柄に対する疑問は、やがて詠嘆に転じ、それが進むと願望の心となる。また、疑問が強まると反語となる。文中で用いられる「か」は、奈良時代から「や」にその領域を侵されていたが、この時代以降は、「か」は文中ではほとんど用いられなくなった。これに対して、文末用法では、「や」の領域を侵して、現代に及んでいる。」(『日本文法大辞典』p.82)

現代語において文末に用いられる「か」は、聞き手に命題の真偽を問いかける真偽疑問文と疑問語疑問文の文末に用いられる。真偽疑問文においては、「か」と上昇イントネーションのどちらかが聞き手に命題に対する真偽の判断を求めるもので、「や」の消滅によって生起された「か」の問いかけの意味である。

また、疑問語疑問文においては、疑問語が聞き手に回答を求める働きをしていることから、疑問文における「か」は、聞き手めあてのものではなく、「か」の本来の命題に対する疑いを表す意味であると考ええる。

次の⑥、⑦は一つの命題を聞き手に提示し、その命題の真偽を求めるもの、⑧、⑨は二つ以上の選択肢を並列させて聞き手に命題の真偽を選択的に問いか

けるもの、⑩は疑問語疑問文である。

⑥もうお帰りですか？

⑦君も行くか？

⑧先にお風呂になさいます、それともお食事になさいます？

⑨お隣さんは学生ですか、社会人ですか？

⑩これは何ですか？

3. “ma”の意味と機能

現代語における真偽疑問文の文末の“ma”(“吗”)は、古語において“无”(wu)→“麼”(muo)→“吗”(ma)という過程を経て現在に至っている。

「“无”和“麼”都是唐五代时期产生和运用的疑问语气词(“麼”在宋代以前字形作“摩”“磨”),二者本来有区别,“无”是否定词而兼表疑问语气,“麼”(“摩”“磨”)不带否定义,是纯粹的语气词,但是表示疑问语气方面二者相通。尽管用“无”构成的是反复问句,用“麼”构成的是是非问句。在表义上的差异已微乎其微,难以察觉。相比之下,是非问比反复问更符合交际简约的原则。因此,在许多情况下,是非问可以取代反复问,由此导致用“无”构成的反复问句日趋减少,有“麼”构成的是非问句则日益增加,到金元时“麼”字句已占绝对优势,而“无”字句成句成为历史的遗迹了」

(“无”と“麼”は唐および五代の時期に生起した疑問語気詞である。(“麼”は宋の時代までは“摩”,“磨”と記す),両者には元々区別があつて,“无”は否定詞で,疑問を表し,“麼”は否定の意味を用いず,純粋な語気詞であるが,疑問を表す意味では共通している。両者によって作られた疑問文は意味の上では違いはあまりないが,“麼”による真偽疑問文は,“无”による正反疑問文よりも会話の簡略化の原理にふさわしいので,多くの場合,真偽疑問文は正反疑問文の代わりに用いることがある。したがって,“无”による正反疑問文はますます減少し,“麼”による真偽疑問文は次第に増え,金や元の時代になると,“麼”は絶大な優勢をとり,“无”は歴史の遺跡になった。)(『近代汉语语气词』p. 103)

この“麼”は現代語の“ma”(“吗”)の前身であると考えられている。“ma”は依然として聞き手への問いかけの機能を保持していながら,“无”の代わりに述語の肯定形と否定形を並べさせて,聞き手に命題の真偽を問いかける「正反疑問文」や,“还是”を接続要素に用い,選択肢を並べさせて,命題の真偽を選択的に問いかける「選択疑問文」も真偽疑問文として働いている。つまり,真偽疑問を表す“ma”の文法化過程は本来の問いかけ機能を保持しながら,他のタイプとの共存をたどってきたものとする。

次の⑪、⑫は“ma”を用いる真偽疑問文の例、⑬は正反疑問文の例、⑭は選択疑問文の例である。

⑪你听明白了吗？聞いて分かりましたか。

⑫你是学生吗？あなたは学生ですか？

⑬他今天来不来？彼は今日来ますか。

⑭他今天来还是明天来？彼は今日来るそれとも明日来る。

この三種類の真偽疑問文の成立条件や各形式がどのように使い分けられているのかなどの問題は次稿に期す。

4. おわりに

本稿では次のことを明らかにした。

I 疑問文の文末の「か」が、疑問語疑問文において命題に対する疑いを表す意味は「か」の本来の意味であり、真偽疑問文において聞き手への問いかけの意味は古語の「や」の消滅によって受け継いだものである。

II 真偽疑問文の“ma”は、本来の問いかけの意味を保持したまま、他のタイプの真偽疑問文と機能の面で使い分けて共存するものである。

文末に用いる日本語の「か」と中国語の“ma”の由来や歴史的な変遷による両者の用法の文法化過程を考察することは、両形式の疑問文における使用条件の違いを左右する要因とそれぞれの基本的な性格の一端について理解する上で必要であると考えられる。

参考文献

- 井上 優・黄麗華 (1996) 「日本語と中国語の真偽疑問文」『国語学』184, pp. 93-106
- 于 康 (1995) 「漢語“是非問句”与日語“肯否性問句”的比較」『世界漢語教学』2, pp. 43-49
- 大西智之 (1990) 「“吗”と「か」」『中国語学』137, 日本中国語学会, pp. 82-92
- 莊司育子 (1994) 「文末の助詞「か」の機能-質問文を中心に-」『日本語・日本文化』20, 大阪外国語大学留学生日本語教育センター, pp. 19-33
- 孙锡信 (1999) 『近代汉语语气词』语文出版社
- 益岡隆志 (1992) 「不定性のレベル」『日本語教育』77, pp. 14-25
- 松村明 編 (1971) 『日本文法大辞典』明治書院
- 吕叔湘 他編 (1980) 『现代汉语八百词』商务印书馆

女性指揮者のラポールマネジメント ——合唱リハーサルの談話分析——

宮澤 泰彦

福島工業高等専門学校

湯川 敬子

元 福岡市立長尾中学校

1. はじめに

フェミニスト的視点によれば、男女の言語行動における差異は、社会的因習・制度面での不平等の反映であるかのように説明されることが多い。クラシック音楽の分野では欧米でも未だに女性指揮者は少数で、この立場からの批判を招くことも多い。

「日本指揮者協会」会員 100 名中、女性 4 名。

(2004 年 5 月時点、同協会ホームページ)

「女性指揮者が少ないのはなぜでしょう?」「一つは体力的なことですね。あとは、年の若い女の指揮者が、雇われ社長みたいにして、現場に行ったとき、みんなに不安を感じさせずに制することができるだろうとか・・・そういう難しさがあると思いますね。」

西本智実 (トマトマガジン)

発表者たちは 2003 年にオーストラリアのシドニーに滞在中、大学と地域コミュニティー合同合唱団のメンバーとして、オペラハウスでのコンサートに向けて毎週リハーサルを行った。きわめて有能な女性指揮者のもと、効率的かつ効果的な指導が行われた。小論では、この女性指揮者の発話と、一度だけ臨時代行した男性指揮者の発話とを比較する。談話分析の基本手法に則って構造解析した後、ポライトネス理論に加えて社会語用論やエスノメソドロジーの視点からも考察する。

2. 「男と女のことばづかい」を捉える目：理論的 (思想的?) 変遷

2-1 「本質主義」から「構築主義」へ

1) フェミニスト的「女性語」観：本質主義 (essentialist view)

「女性は社会で抑圧されている、ゆえに女性は丁寧な言葉遣いをする」(R. Lakoff : 1975)

「女性は会話に相手との親和を求め、男性は支配的優位を求める。」(D. Tannen : 1983)

2) イデオロギー的ジェンダー観：構築主義 (social constructionist view)

「ジェンダーは主体に内在する本質ではなく主体が行う行為である。」(中村：2002)

「女も単に抑圧され沈黙を強いられた話し手ではなく戦略的に言葉を使う能動的な主体」(同)

2-2 ポライトネス理論の変化 / 進化?

「表現のていねい度」「規範」研究から「戦略的アイデンティティー操作」の研究へ

「フェイス」の再解釈：ラポールマネジメントのための対人ストラテジー

「資質のフェイス・立場のフェイス、公平の権利・交際の権利」

「ラポールの方向性：増進、保持、無視、挑戦」

「支配力の基盤：報酬、高圧、専門性、正当性、偶像」

「距離の要素：類似・相違、接触頻度、知遇期間、親密さ、共感度、感情」

(スペンサー・オーティアー：2000)

3. コミュニティー、コンテクスト、シチュエーション

3-1 文化のコンテクスト、状況のコンテクスト：ジャンル

合唱行為：指揮者の統率により複数で「ことば」を操作する協働作業 (独立 genre)

リハーサル：「指導」に基づく「練習」(更に特殊化した institutional discourse)

3-2 合唱リハーサルという「サブ・ジャンル」?

オーケストラ指揮者 vs. 楽団員 ≠? 合唱団指揮者 vs. 団員

オーケストラ指揮者：女性僅少 ⇔ 合唱指揮者：女性多数

ゲネプロ (示範不能) ≠? リハーサル (示範可能)

※「オラリティー」の有無：器楽演奏と合唱

3-3 合唱リハーサルにおける指揮者の「仕事」

1) 指揮者に要請されること：

団員の心 (注視) をとらえ、やる気 (声) を引き出し、理想とする performance
へ導くという目的を持つ strategic discourse

2) 指揮者の必須要件：

- 1) 作曲家の意図をつかみ音楽を生き返らせる。(音楽性、専門性)
- 2) 団員とのよい人間関係を築ける。(対人関係操作能力、人間性)
- 3) リハーサル・テクニクを持っている。(総合的技能、経験)

3) 媒介要因 (変数)：

指揮者と団員との相対的力関係、親疎、性差、パーソナリティー

4. 談話分析

4-1 選択された strategy と表現形式

(言語的特徴と印象)

女性指揮者：直截で簡潔、命令文、くだけた呼称、軽快なアップテンポ

男性指揮者：間接的で丁寧、間接発話（定型表現）、緩和語、過剰な褒め言葉、謝罪、感謝

(具体的使用例)

女性指揮者： ‘Watch the beat!’ / ‘Bar 49’ / ‘OK, straight in!’ / ‘From the top, OK?’ / ‘... much better’ / ‘Sops!’ (soprano の意) / ‘You should be back here.’ / ‘Go!’ / ‘Same spot 322 ...’ / ‘Watch, guys!’ / ‘Folks’

男性指揮者： ‘You really need to be watching because ...’ / ‘Can we get from 147?’ / ‘Can you stand please?’ / ‘Sorry, some people still doing da-da.’ / ‘Have a seat, please’ / ‘Tenors, thanks.’ / ‘Very very good.’ / ‘Well done!’ / ‘Excellent!’ / ‘Super!’ / ‘Well done.’ / ‘Cool! Well done!’ / ‘Ladies and gentlemen, ...’

4-2 考察

女性指揮者はすでに団員とのラポールを確立しており、リーダーシップ獲得に苦勞する必要はない。一見「男ことば」の特徴とも見える direct かつ straightforward な言い回しも、レトリカルな戦略として有効に用いられている。簡潔な表現が、たたみかけるようなテンポで歯切れよくリズムカルに発せられる。そのためか全く威圧感を感じられない。折に触れ差し挟まれる激励と承認の言葉により、「女性らしい暖かみ」というステレオタイプを巧みに利用しつつ団員とのラポールは維持・発展させられていく。

一方の男性指揮者も、本来指揮者としての leadership 確立を急ぎたいが、団員と初対面であるため、まずはラポール確立が優先される。そのため間接的要求、お世辞の褒め言葉、please などの緩和表現が多用される。字義通りには謝罪や感謝を表す ‘sorry’ や ‘thanks’ も、相手の心証を探る「ご機嫌伺い」のことばとして頻用される。「女ことば」の特徴とされるこれらの表現も、ラポールマネジメントの戦略として効果的に用いられていると言えよう。

5. 結語

合唱リハーサルにおける男女指揮者の言語使用を談話分析的に吟味することで、「性差」は必ずしも言語表現形式選択に際しての（先験的）主要因とはみなせないことが明らかとなった。フェミニストの本質主義による説明よりも構築主義的ジェンダー観に軍配を上げる結果である。

「男ことば」「女ことば」のステレオタイプは心理的規範として実在する。しかしもはや一般の言語使用に際し「わきまえるべき」拘束条件ではなく、場面に応じそれを逆手にとったより柔軟な使用オプションを提供するダイナミックな表現体系（リソース）の一部であると言えよう。

参考文献

- Bamberger, C., 1997. (福田達夫訳)『指揮者の領分』春秋社.
- Brown, P. and Levinson, S.C., 1987. *Politeness- Some Universals in Language Usage*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Christie, C., 2000. *Gender and Language-Towards a Feminist Pragmatics*. Edinburgh: Edinburgh University Press.
- 橋元良明, 2001. 「配慮と効率」『月刊言語』30-12, 44-51. 大修館.
- Hill, B., Ide, S., Ikuta, S., Kawasaki, A., and Ogino, T. 1986. "Universals of Linguistic Politeness: Quantitative Evidence from Japanese and American English." *Journal of Pragmatics*, 10, 347-371.
- Holmes, J., 1988. "Paying Compliments: A Sex-preferential Politeness Strategy." *Journal of Pragmatics*, 12, 445-465.
- _____, 1992. "Women's Talk in Public Contexts." *Discourse and Society*, 3, 131-150.
- Lorenzo-Dus, N., 2003. "Gender and Politeness: Spanish and British Undergraduates' Perceptions of Appropriate Requests." In Santaemilia, J. (ed.) *Genero, Lenguaje y Traducccion*, 187-199. Valencia: Universitat de Valencia/ Direccion General de la Mujer.
- Matheopoulos, H., 2004. (石原俊訳)『マエストロ』アルファベータ出版.
- Mills, S., 2002. "Rethinking Politeness, Impoliteness and Gender Identity." In: <http://www.linguisticpoliteness.eclipse.co.uk/Gender%20and%20Politeness.htm>.
- Munch, C., 1994. (福田達夫訳)『指揮者という仕事』春秋社.
- 中村桃子, 2002. 「言語とジェンダー研究」の理論『月刊言語』31-2, 24-31. 大修館.
- Okamoto, S., 1997. "Social Context, Linguistic Ideology, and Indexical Expressions in Japanese." *Journal of Pragmatics*, 28, 795-817.
- _____, 2002. "Ideology and Social Meanings: Rethinking the Relationship between Language, Politeness, and Gender." In Benor, S. et al. (eds.) *General Practices in Language*, 91-113. Stanford, CA: CSLI Publications.
- Spencer-Oatey, H.(ed.), 2000. *Culturally Speaking: Managing Rapport through Talk across Cultures*. Continuum.
- (浅羽亮一ほか訳)『異文化理解の語用論』研究社.
- Pizziconi, B., 2003. "Re-examining Politeness, Face and the Japanese Language." *Journal of Pragmatics*, 35, 1471-1506.
- 高橋良子, 1999. 「武器としての敬語」『月刊言語』28-11, 64-71. 大修館.
- 竹村和子, 2002. 「フェミニズムの今」『月刊言語』31-2, 78-83. 大修館.
- Weiler, K., 1995. (相澤啓一訳)『評伝チェリビダッケ』春秋社.
- 山崎敬一, 1994.『美貌の陥穽』ハーベスト社.
- 湯川純幸・斉藤正美, 2002. 「イデオロギーとしての「日本語とジェンダー」研究」『月刊言語』31-2, 32-37. 大修館.

接続副詞 however の文中における機能

太田裕子

東北大学大学院国際文化研究科 DC2

1. はじめに: however は文頭に現れるだけでなく、(1)のように文中に現れることも可能です。本発表では、however の生起位置により、そもそも機能が異なるのかについて考察します。

- (1) a. Jane, however, wasn't able to make the trip.
b. Jane wasn't able, however, to make the trip. (Garner 1998: 343)

2. 先行研究

2.1. Garner (1998), Copperud (1980): Garner (1998) や Copperud (1980) は (1) のように however が文中に生起する場合、強調すべき、重要な語句の後に置かれ、対比されると述べています。Garner (1998) は、(1a) では主語が強調され、「他の誰かと違って、ジェーンは」というニュアンスになり、(1b) は、述部の wasn't able が強調され、「ジェーンは行きたいと思っていたが、行けなかった」といニュアンスになると述べています。

では、時の副詞が対比されている次の例を見てみましょう。先行文脈は差し当たっての状況を述べており、however を含む後続部分はそれよりも前の状況について述べています。したがって、この例では however の前の部分である Earlier が強調され、For the moment と明示的に対比されていると言えます。つまり、however の前の earlier が強調され、「現在とは違って、以前は」となると考えられます。

- (2) For the moment, the invalidity of the DEA address causes the domains to be essentially non-working. Earlier however, the address of NS.PIPEDREAMS.DEA.GOV was listed as 208.255.166.218, a working IP address registered to the DEA.

(www.2600.com/news/view/article/1553)

差し当たっては、DEAアドレスの無効性はそのドメインが根本的に作動しない原因になっている。とはいっても、以前は NS.PIPEDREAMS.DEA.GOV のアドレスは DEA に登録された IP アドレス 208.255.166.218 としてリストに載せられていた。

2.2. 反例: しかし、(2)の例のように必ずしも however の前の部分が先行文脈の一部の語句と明示的に対比されるとは限りません。(3)の例では、先行文脈に We knew の部分と対比される語句がありません。また、(4)he は誰かと明示的に対比されてはいません。そして、(5)では虚辞の後に、(6)では接続詞の後に生起しています。

- (3) The fact that David had willed himself to do this, did not impress him (= my father). We knew, however, that this was yet another example of the power of the mind.

(www.unassistedchildbirth.com/milkmen.htm)

(4) He declared that all Iraqi opposition groups set an alliance in London. He, however, said that there is a little conflict among opposition groups but the issue would be overcome in the future.
(www.gvnews.net/html/Crisis/alert112.html)

(5) There are, however, a few positive side effects to Miike's frenetic approach that need to be considered.
(www.moviemartyr.com/2001/katakuris.htm)

(6) If, however, you can provide satisfactory evidence that the Day Trip ticket conditions have been complied with and you return within the same calendar day, the appropriate refund will be made to you immediately.
(www.directferries.co.uk/faq/b.htm)

3. 仮説

(3)-(6)の例から、文中に生起する however の機能は必ずしも、その前の部分と先行文脈の一部の語句とを明示的に対比させることではないとわかります。では、文中の however にはその前の部分を強調し、対比される主題(theme)が何かを示す働きがあると言えないでしょうか。そして、その対比される主題(theme)を手がかりに先行文脈から矛盾する想定を導くよう促す働きがあると言えないでしょうか。たとえば、(3)では「誰が知っていて、誰が知らないか」が対比の主題になっていることを示します。「私たちは知っている」は先行文脈から導かれる想定「著者の父親は知らない」と対比されます。(4)は「行為者」に関しての対比であることが示されます。先行文脈の「彼はすべてのイラク人の野党グループはロンドンで同盟を結ぶべきだと宣言した」から、「彼はイラク人の野党グループがロンドンで同盟を結ぶことをとても楽観視している」という想定が導かれ、「その想定からすると以外ことに、ほかの人ではなくて、その彼が野党の間には少し衝突があるが、将来解決されるだろう、と言った」となり、暗示的にほかの人と彼が対比されていると考えられます。[(5)・(6)については考察で取り上げます。]以上のことから、下記の仮説を提案します。

(7) 文中の however にはその前の部分を強調し、対比される主題(theme)が何かを示す機能がある。

4. 考察

生起する位置が異なっても however の機能は基本的に共通であることを、文頭の however に関する先行研究を元に検証します。先行研究としては、グローバルな視点からの分析を行った Lenk (1998) とローカルな視点からの分析を行った Blakemore (2002) を取り上げます。また、文中の however には、その前の部分を強調し、対比される主題(theme)が何かを示す機能が加わることを検証します。

4.1. 先行研究

4.1.1. 「本題復帰」の however: Lenk (1998)

Lenk (1998) によれば、文頭位置に Tone Unit の唯一の要素として現れる discourse marker としての機能は、会話の主要な話題とは密接に関らない部分 (digression、以下「余談」と呼ぶ) の終わりを示すことです。however は、余談の終わりを示し、本題に戻る機能を持つと述べています。ただし、余談とはいえ、however を含む部分と同じ位重要な部分だと付け加えています。X however Y の文脈において、Y の方が本題に密接に関係する部分であると考えています。

4.1.2. 「反意」の **however** :Blakemore (2002)

「反意」の **however** は先行文脈から派生される想定が矛盾と削除に終わる推論を作動させる認知効果を持ちます。そして、**however** は **but** と異なり、この認知効果が派生する文脈に制約があります。すなわち、話者が関連性を保証し、その認知効果が削除を含まないような文脈が必要です。

4.2. **however** の機能の定式化

Lenk (1998) と Blakemore (2002) の分析に基づき、**however** の基本的機能を(8)のように定式化します。

- (8) a. X **however** Y の形式をとり、かつ X と Y が認知効果を持つという文脈指定を持っている。
b. X と Y に対比があり、X から生じる想定に削除を要求する。(反意:本題復帰)
(9) 文中の **however** にはその前の部分を強調し、対比される主題(theme)が何かを示す機能が加わる。
(=7)

4.3. 検証 (10)~(13) 例文省略

4.3.1. 虚辞 **there** の場合:(10)の例は文頭に生起している **however** の例です。選挙に関する台湾政府内での対立とそれに対する北京の対応についての記事です。北京の動きが主要な話題になっているようです。「台湾の選挙の混乱に対して北京が何らかの動きを見せるだろう」ということが始めに述べられています。X **however** Y の X の部分「閣僚級の台湾事務弁公室はさらに、選挙は『不公平で不正に操作された』という野党の国民党と親民党による告発に対して十分に対応することを拒んでいると陳総統を非難した」から、当然、読者は「北京がさらなる政治的措置をとる」という想定を抱くでしょう。その想定は「しかしながら、北京が近くに、陳総統と彼の民進党の同僚に対する言葉上の一斉射撃に加えて、何か思いきったことをする気がある様子はない」によって削除されます。また、最新の情報を伝える記事の性格上、**however** の後続部分が本題に密接に関係する部分だといえるでしょう。

(11)の例は **there are** の後に **however** が生起している例です。三池監督の「カタクリ家の幸福」という映画についてのコメントです。主旨は三池監督の作品は面白いということです。「**There are, however**」に先行する段落では、三池監督の「カタクリ家の幸福」は見通しとして面白そうだったし、その期待に応えてくれるものだった」と述べています。「タイトルロールが流れ始めたとき、どうしてあんなに興奮したのだらうと思い始めるのだ」という部分はその主旨からすると、余談といえるでしょう。そして「**There are, however**」で始まる次の段落では、三池監督の作品は面白いという本題に帰っています。また、**there are** が強調され、「あるか、ないか」が対比の主題になっていることが示されます。それで、「全編に渡って展開が早く、観客の(気持ちの中はもちろん)頭の中に残るひまもなく、次々に突拍子もない奇妙で驚くようなシーンが投げ出され、夢中になってしまう。結果として、彼の映画はたいてい、見ている間は実にすばらしく、幻想的な気がするのだが、タイトルロールが流れ始めたとき、どうしてあんなに興奮したのだらうと思い始めるのだ」という部分から、「三池監督の映画にはよい副作用がない(There are not any positive side affects to Miike's frenetic approach...)」という想定が導かれますが、「**There are, however**」で始まる次の段落で、その想定は削除されます。

4.3.2. 接続詞 if の場合:(12)の例は however が文頭にある例です。名誉毀損についての記事です。2 段落目で名誉毀損にならない例を挙げた後、名誉毀損になる例を挙げています。名誉毀損はどのような場合に認められるかを説明している個所なので、最低限必要な情報は名誉毀損になる例だと考えられます。however の後続部分は先行部分との対比によってより理解しやすくなるように意図されているようです。このことから、however の先行部分はいわば余談で、however の後続部分が本題により密接に関る部分といえるでしょう。つまり「本題復帰」の機能を果たしています。また、先行文脈から「テレビの受信料を支払っていないということは名誉毀損にはならない」という想定が派生され、それが削除されるという認知効果があります。

(13)の例は however が文中にある例です。ここでは if が強調され、対比の主題が「場合」に関することを示しています。旅行代理店への問い合わせと回答です。問い合わせの内容は「日帰り旅行を予約して、帰りは利用しなかったら、どうなるのか?」というものです。1 段落目では Direct Ferries の基本方針が説明されています。2 段落目の however を含む部分は「もし、帰日も利用することにしたならば、どうなるか」についての説明です。ここでは、「帰りは利用しない場合」が問題になっているので、however の先行部分が問い合わせに対する一般的な情報で、2 段落目の however を含む部分は問い合わせのケースに密接にかかわる部分となっていると考えられます。また、「日帰り旅行の予約をして、帰りに利用しない場合はどうなるか」を含む先行文脈から「この人は利用しないという意思表示していると考えられるので、そのまましておいた場合は、料金を請求される」という想定が導かれ、それが削除されます。

5. まとめ

文頭の however と同様に、文中に生起する however もまた、グローバルな視点から見ると、本題に戻る機能を持ち、X however Y の文脈において、Y の方が本題に密接に関係する部分となっていることを示しました。また、ローカルな視点から見て、X however Y の文脈において、X と Y に対比があり、X から生じる想定に削除を要求することを示しました。さらに、文中の however にはその前の部分を強調し、対比される主題(theme)が何かを示す機能が加わることを示しました。

参考文献

- Blakemore, Diane. (2002) *Relevance and Linguistic Meaning: The semantic and pragmatics of discourse markers*. Cambridge University Press.
- Copperud Roy H. (1980) *American Usage and Style: the Consensus*. New York: Van Nostrand Reinhold.
- Garner, Bryan A. (1998) *A Dictionary of Modern American Usage*. New York: Oxford UP.
- Halliday, M.A.K. (1976) *Cohesion in English*. London: Longman. 安藤貞雄(他)[訳](1997)『テキストはどのように構成されるか』ひつじ書房
- Lenk, Uta. (1998). *Marking discourse coherence: Functions of discourse markers in spoken English* (Language in performance, Vol. 15). Tuebingen: Gunter Narr Verlag.
- 検索エンジン google

言葉は行為の費用と利益を伝える

「わざわざ」、「いちいち」の行動生態学的考察

野澤元・山崎章裕
京都大学大学院人間・環境学研究科

1. はじめに

本論は、「わざわざ」、「いちいち」という語の、日常的な使用法についての、行動生態学的観点からの考察である。特に、それらの語の使用が、どのような利害関係を表現し、調整する機能を果たしているのかに注目する。検討事例は、マイクロソフト社から提供された顧客の声のメールを使用する。それらのメールの中で、顧客が「わざわざ」、「いちいち」という語によって、どのような費用の発生を伝えようとしているのかについて検討する。

2. 行動生態学的アプローチ

人間は、社会的な動物である。人間が単独ではなく、社会の中で暮らすのは、そのことに様々な利益があるからであろう。例えば、仕事を共同で行えば、単独では不可能な規模の大きな仕事を行うことができるし、分業したり、交代制にすれば、有限な資源や労力を節約することができる。しかし、社会の中で暮らすためには、様々な努力も必要である。その一つが、利害関係の調整であろう。集団で暮らしていれば、利害が対立することもあるだろう。また、協力関係にある人々の間でも、互いの貸し借りを公平に調整しなければ、その協力関係を維持することはできない。なぜなら、誰も相手から一方的に搾取されることを望まないし、そのような関係は、通常は搾取される側から放棄されるからである。

このような利害関係の調整は、それほど容易なことではない。特に、人間のように、集団の規模が大きくなると、利害関係の調整は非常に困難な作業になる。実際、人々が家庭、職場、学校等における隣人との関係に悩まされるのは世の常である。実質的な利害関係が存在する集団の規模は、人間の場合およそ 150 人ぐらいだと推定されているが (Dunbar 1996)、これは哺乳類においては比較的大きな規模だと言えるだろう。このような規模の大きな集団をそれなりに維持することができるのは、恐らく、人間が言語を用いて利害関係の調整を行えるからだと考えられる。

言語を用いた利害関係の調整には、様々な方法が考えられる。例えば、言語によって明示的に遂行することができる一連の行為は、それぞれ異なる利害関係を反映している。感謝することは、相手における自発的な費用を認め、場合によっては、将来その費用を埋め合わせるお返しをすることである。逆に、謝罪することは、相手における受動的な費用を認め、場合によっては、将来その費用を埋め合わせる補償をすることである。また、これらの行為は、利益や費用の発生を伝えることによって遂行することができる。

- (1) 本当に、よく手伝っていただきました。
- (2) ご迷惑をおかけしました。

(1) では、相手の自発的な費用を表現することで、感謝を遂行しており、(2) では、逆に、相手の受動的な費用を表現することで、謝罪を遂行している。

行動生態学的アプローチでは、このように、言語が社会における個人間の利害関係をどのように支えているのかに注目する。確かに、言語は外界の状況をある程度客観的に表現することができるかもしれない。しかし、そのようなコミュニケーションには動機が必要である。コミュニケーションとは社会的な行為であり、人々が社会の中で常に利害関係の調整を必要としているのであれば、どのような言語使用にも、利害関係を調整し、社会の中での生活を維持しようとする言語使用者の意図が反映されているはずなのである。

3. 検討事例

本論で検討した事例は、マイクロソフト社から提供された顧客の声のメールである。これらのメールはマイクロソフト社のホームページの中にある Web フォームを通して、顧客からマイクロソフト社へ送られたもので、総数として約 7500 通あった。

予備的な作業として、部分的にそれらのメールの発話行為を調べたところ、不満や苦情の表明をしていると思われるメールの中に、「わざわざ」、「いちいち」という語がよく出現することがわかった。そこで、「わざわざ」と「いちいち」を含む事例を検索して、「いちいち」を含む 29 例と「わざわざ」を含む 13 例からなるコーパスを作成し、それらの語の使用文脈を調べた。

4. 分析

4.1. 費用の発生

既に述べたように、「わざわざ」、「いちいち」を含むメールのほとんどにおいて、顧客の不満や苦情が表明されている。具体的には、ソフトウェアの購入や顧客サポートにおいて発生する金銭的費用や、ソフトウェアに関する情報の収集やソフトウェアの仕様ために要求される作業によって発生する時間的費用についての言及が多く見られた。

- (3) 高い金出して、買ったのだから、何とかしてよ。お願い。このファミリーのプリインストールパソコンばかりになって、使いづらいソフトをわざわざ買ったのだから……。
- (4) サポートセンターはフリーダイヤルではないし、問い合わせにも ID ナンバーがとか何とか言って、札幌からわざわざかけたのに、結局 20 分もかかって何も教えてもらえず、すごく頭にきた !!!!!
- (5) なかなかエクセル・ワードが使えない。いったいどうしたらつかえるのか、いちいち電話したりしないと使えないなんて買った後も料金がかかりすぎる。
- (6) 入力／編集画面ではセル内に収まっているものが印刷プレビューでは入っていないかったりするため、画面をいちいち切り替えてでの作業に成るため使いづらい。

この事実、「わざわざ」、「いちいち」という語が、何らかの費用の発生を含意することを示唆している。事実、(8) と (10) が示すように、これらの語は費用が発生する状況でなければ、使用することが難しい。

- (7) 彼は、わざわざ損になることばかりする。
- (8) ?彼は、わざわざ得になることばかりする。
- (9) 彼は、いちいち損になることばかりする。
- (10) ?彼は、いちいち得になることばかりする。

一方、広辞苑の第四版では、「わざわざ」、「いちいち」を、以下のように定義している。

わざわざ： (1) その事だけのために、特に行うさま。特別に。とりたてて。(2) ことさらに。

故意に。わざと。

いちいち： (1) 一つ一つのこと。一つずつすべてに及ぶこと。(2) ひとりひとり。めいめいに。

これらの定義が不十分であるとまでは言えないだろうが、実際の使用文脈を見ると、「わざわざ」、「いちいち」には、辞書には記述されないような、費用の発生という意味が含まれると考えられる。

4.2. 費用の規模

「わざわざ」と「いちいち」は、費用の発生を含意している点では共通しているが、それがどのような費用であるかについては、いくつかの点で異なっているように思われる。例えば、「わざわざ」と「いちいち」の事例の各々において、どのような行為が費用の原因となっているのかを調べると、(11)と(12)に代表されるように、パソコン関連の商品の購入が原因であるのは「わざわざ」の事例だけに限られ、他方で、「いちいち」の事例の場合は、ソフトウェアの操作が原因であることが多かった。

(11) わざわざマイクロソフトの高いキーボード買ってんの。

(12) 更に HTML ファイルの書式情報で文章を貼り付けるのでいちいち書式を直すのが面倒。

この事実は、「わざわざ」が比較的規模の大きい費用の発生を、また、「いちいち」が比較的規模の小さい費用の発生を含意する事を示しているように思われる。実際、(13)と(16)が示すように、「わざわざ」が費用の小さな行為と共起したり、「いちいち」が費用の大きな行為と共起するのは難しい。

(13) ?わざわざホコリをはらった。

(14) いちいちホコリをはらった。

(15) わざわざ渡米した。

(16) ?いちいち渡米した。

4.3. 費用の頻度

費用の規模と関連する問題であり、辞書による定義からも推測できる事であるが、「わざわざ」と「いちいち」では、発生する費用の頻度が異なるように思われる。例えば、(11)と(12)に見られるように、「わざわざ」を含む事例で言及されるのは、発生頻度の比較的低いとパソコン関連商品の購入であるのに対して、「いちいち」を含む事例で言及されるのは、発生頻度の比較的高いソフトウェアの操作である。

さらに、(17)から(20)を見ると、「わざわざ」の用法には、費用の発生頻度に関する制約は特にないのに対して、「いちいち」は、費用が頻繁に発生する場合にしか用いる事ができないことがわかる。

(17) その度毎に、彼女はわざわざ手紙を送ってきた。

(18) 一度だけ、彼女はわざわざ手紙を送ってきた。

(19) その度毎に、彼女はいちいち手紙を送ってきた。

(20) ?一度だけ、彼女はいちいち手紙を送ってきた。

4.4. 費用の負担者

本論で検討した事例の多くは、顧客が負担した金銭的・時間的費用や、そのような費用を発生させた顧客の行為について述べており、そのことによって顧客の不満や苦情を表明している。

特に、「わざわざ」を含む事例では、(21)のような「ありがた迷惑」の行為を除けば、全ての事例が顧客の費用や行為を記述している。しかし、「いちいち」を含む事例では、(22)のように、マイクロソフト社の事情を考慮した、譲歩を表す事例を除いても、(23)や(24)のように、マイクロソフト社やソフトウェアの行為を記述する事例が見られる。

- (21) windows update で「重要な更新」が通知されてくるが、アップデートを進めていくと「インストールされませんでした」と終了される。・・・わざわざ通知してくるのに、どうなっているんですか？
- (22) 大勢のユーザーをいちいちサポートできないのは分かりますが、全く本気でサポートする気ななかないんじゃないかと思うほど、見づらいですね。
- (23) 情報番号の入手の仕方がわからない、いちいち細かい割には説明が抜けてるような感じである。
- (24) CDROM をいちいち要求するのは問題だと思う。

このような事実は、「わざわざ」が、統語的に関係づけられた表現の行為の費用を表すのに対して、「いちいち」は、言及されている状況内での受動的な費用を表している事を示唆している。つまり、「わざわざ」は同じ文中に表現された行為の費用を表し、「いちいち」は表現された状況において、迷惑を被っている人の費用を表しているのである。(25)から(28)は、このような「わざわざ」と「いちいち」の違いをより明確に示している。

- (25) 彼女は、わざわざ彼に電話した。(その結果、彼女は時間を浪費した。)
- (26) 彼女は、いちいち彼に電話した。(その結果、彼は時間を浪費した。)
- (27) 彼女は、不本意だったが、わざわざ彼に電話した。
- (28) ? 彼女は、不本意だったが、いちいち彼に電話した。

(25)では、「わざわざ」によって、電話をした主体である「彼女」の費用が表現されているのに対して、(26)では、「いちいち」によって、電話に対応しなければならなかった「彼」の受動的な費用が表現されている。また、(27)と(28)のように、「不本意だったが」という表現によって、「彼女」が受動的な費用を負担していることを強調した場合には、「いちいち」は共起できなくなるのである。

参考文献

Austin, John Langshaw

1962. How to Do Things with Words. 2nd ed. Oxford: Oxford University Press.

Dunbar, Robin

1996. Grooming, Gossip and the Evolution of Language. London: Faber and Faber.

仁田義雄

2002 『副詞的表現の諸相』くろしお出版

Trivers, Robert

1985. Social Evolution. Menlo Park, CA.: Benjamin/Cummings.

山梨正明

1986. 『発話行為』, 大修館書店.

2000. 『認知言語学原理』, くろしお出版.

研究発表

総称文についての一考察：発話行為論・認知言語学の観点から

富永英夫¹・野澤元²

1. 兵庫県立大学経済学部 2. 京都大学大学院人間・環境学研究科

1. はじめに

一般に、文には、あるものに関して、特定の時空における状況を記述する表現と時空を超えた、全般的な性質を記述する表現があることが知られている。

- (1) Two dogs are barking now.
- (2) Dogs bark.

(1) は、今現在目の前にいる二匹の犬が吠えている、という意味で、特定性 (particularity) を表現している、状況記述文と呼べる文であるのに対して、(2) は、そのような特定の状況を表すのではなく、一般に、その特性として、犬はほえるものだ、という意味で、全般的性 (generality) を表現しており、両者は、根本的に異なる言語行為である。言うまでもなく、後者のタイプの文が総称文であるが、これまでの研究の中で明らかになったように、総称文には、さらに大別して、次の二つの種類があると言われている。

- (3) Dogs are obedient.
- (4) John smokes after the meal.

(3) は、主語名詞句に関する総称性を表すもので、通常、種指示文 (kind referring sentences) と呼ばれ、(4) は、述部に関する総称性を表すもので、通常、特徴記述文 (characterizing sentences) と呼ばれている。

総称性については、これまで様々なアプローチが試みられてきた。伝統的な総称文研究では、主に (3) のような文が扱われ、総称的名詞句の問題として—英語の場合、冠詞の問題として—論じられてきた。古くは、Jespersen (1909-1949, 1924, 1933) が “generic number”、“generic use of article” あるいは “generic sense of article” という表現を用いて、記述と分析を行っているが、1970 年代に入って、この問題は、意味論・語用論的観点から再

びよく取り上げられるようになり、Nunberg and Pun (1975)、Burton-Roberts (1976, 1977)、Lawler (1972, 1973a, 1973b) 等の優れた研究が発表された。最近の総称文研究では、Carlson (1977) を出発点として、Carlson and Pelletier (1995) がそれまでの研究を整理し、名詞句と動詞句の並行性も考慮に入れながら、(4) のような文も射程に入れた、文全体の総称性の問題として捉えることによって、新たな展開を見せている。

本発表は、種指示的な総称文についての考察であり、主として、二つの問題を論じる。第一に、単数不定形、複数不定形、単数定形等の、総称文の主語名詞句の形式とその意味の関係であり、認知的観点から考察する。第二に、総称文における総称性と真理条件の関係についてであり、語用論、特に発話行為論の観点から考察する。

その主張は、以下の二点である。

- 1. 主語名詞句の形式のバリエーションは、総称性の性質の違いを表すのではなく、言及対象に対する話し手の認識を反映している。
- 2. 総称文の真理値の決定手続きが明示化できないのは、総称文が真偽の検証の義務を強くは負わない発話であるためである。

2. 検討事例

すでに述べたように、総称文についてのこれまでの研究は、主部の総称的名詞句に着目した種指示文や述部の動詞句に着目した特徴記述文など、異なる総称性を持ついくつかの種類の総称文があることを明らかにした。また、総称性は、文の構成要素である語彙や構文の性質に大きく左右されることがわかっている。これらの事実が示唆することは、総称性の現れ方を検討するためにいくつ

かの事例を比較する場合、その事例群があまりに多様な語彙や構文を含んでいると、総称性の要因を分析するのが困難だということである。そのため、本発表では、主として検討する事例の主語名詞句の語彙、および、それが用いられる構文を、a. 主語の核となる名詞が“horse(s)”であり、かつ、b. 主語名詞句 + be(助)動詞の構文に限定した。そのような条件を満たす事例を Web から採取して、小規模なコーパスを作製し、検討事例として使用した。具体的には、第三節では、総称文としてもっとも頻繁に用いられる、(5) から (7) のような、“horse” の単数・複数不定形と単数定形を取り上げた。

- (5) A horse is measured in hands.
- (6) Horses are herd animals.
- (7) The horse is a herbivore.

また、第四節では、(6) に示した複数不定形と比較するために、“horses” が “all” や “most” といった数量詞を伴った形を取り上げた。

3. 主語名詞句の形式とその意味

すでに指摘したように、種指示的総称文の主語は、主として、単数・複数不定形と単数定形が用いられる。これまでの研究では、単数不定形の総称文は、種の定義的性質を表し、複数不定形の総称文は、種の標準的性質を表し、単数定形の総称文は、典型的性質を表すと説明されることが多い。つまり、次の例文の場合、マドリガル曲が複数の声部からなることは、定義的な性質であり、従って、標準的な性質、そして、典型的な性質であるとも言える、ということである。

- (8) A madrigal is polyphonic.
- (9) Madrigals are polyphonic.
- (10) The madrigal is polyphonic.

一方、次に示すように、マドリガル曲が人気があることは、標準的、あるいは、典型的な性質であることは考えられるが、定義的な性質であることは決してないのである。つまり、(11) のように、単数不定形の主語名詞句は、必然性が感じられない “popular” のような述

部と結びついた場合、容認度が低くなる。

- (11) *A madrigal is popular.
- (12) Madrigals are popular.
- (13) The madrigal is popular.

このような主張は、妥当なもののように思われるが、説明というよりもむしろ事実についての記述であり、なぜ、それぞれの形態が異なる総称性を表すのかについて、ほとんど何にも説明していない。また、そもそも、主語名詞句の形式の違いが直接的に文の総称性に関与しているのかという、根本的な問いも残る。

本発表では、このような主語名詞句の形式は、総称性の違いを表すというよりは、むしろ、単に言及対象がどのような状況にあるのかという、話し手の認識、すなわち、言及対象との想定される関り方を反映するだけで、総称性そのものは、述部の性質によるものと考えられる。以下では、実例を挙げながら、その点を明らかにしていきたい。まず、次の (14) から (16) は、主語名詞句が単数不定形であるが、この場合は、言及対象の個別性が強調されていることが多い。

- (14) A horse is like a violin, first it must be tuned, and when tuned it must be accurately played.
[http://www.horses.co.uk/horses/quotes_71-80.html]
- (15) A horse is an animal not a machine and is only as good as its rider.
[http://www.horses.co.uk/horses/quotes_71-80.html]
- (16) Racehorses are destroyed when they don't win. But to my way of thinking, a horse is also a living being, and it's inexcusable to destroy it at the mere whim of humans.
[<http://thescotsman.scotsman.com/index.cfm?id=290122004>]

(14) は、馬というものは、ヴァイオリンを調弦してから演奏するように、まず調教した上

で、上手く乗りこなされなければならない、という意味であるが、通常、調教は一頭一頭の馬に対して行われるものであり、そもそも、馬に乗るという行為は、人間と馬の一対一の関係で成り立つものである。(15)も同様に、馬というものは、機械ではなく、生き物で、乗り手しだいである、という意味を表しているが、この場合も人間と馬の関係は一対一の関係である。(16)は、競走馬は、勝てなくなったときに潰される。しかし、私の考えでは、馬も生き物であり、人間の気まぐれで潰されるのは、許せないことである、という意味であるが、馬は一頭一頭生きているわけであり、その馬に対する愛情は、これもまた、一頭一頭に対して注ぐものなのである。先行する文では、競走馬が複数不定形になっていること注目したい。それは、恐らく、勝てなくなった競走馬は、まとめて屠殺されるからであろう。

次に、主語名詞句が複数不定形の事例であるが、この場合は、言及対象の集合性が強調されていることが多いように思われる。

(18) Horses are large, fast-running mammals that live in family groups on grasslands. [http://www.enchantedlearning.com/subjects/mammals/horse/Horsecoloring.shtml]

(19) Horses are herd animals, they are used to living as part of a group and they feel secure in the company of other equines and familiar surroundings. [http://www.giveusahome.co.uk/horses/faq.htm]

(20) Horses are very fascinating creatures which have a very interesting history and very important uses. [http://www.freewebs.com/camila4horses/]

(18)は、馬は、大きくて速く走る哺乳類で、草原に家族単位で生活する、という意味であ

るが、集団としての馬を想定していることがうかがえる。(19)は、馬は、群れを成す動物で、集団の一員として生活することに慣れており、他の馬や家族の中にいることで安心する、という意味で、文字通り、群れを成す状況が言及されている。(20)は、馬は、(人類と関係で)非常に興味深い歴史を持ち、有益である、とても素晴らしい生物である、という意味であるが、歴史を作るには何代にもわたる数多くの馬の活躍が必要なのである。

最後に、主語名詞句が単数定形の場合であるが、定冠詞が本来持つ、「対比」や「限定」という意味機能が解釈に関わっていると思われる。

(21) More than any other animal the horse is inextricably linked with human history. [http://www.equiworld.net/uk/horsecare/ILPH/index.htm]

(22) The horse is much more similar to humans in other respects than a frog, but the frog's limb is much more like ours. [http://www.answersingenesis.org/creation/v21/i3/horse.asp]

(23) The horse is naturally an animal of prey, and though domesticated, it relies very strongly on its instincts. [http://www.saunalahti.fi/penelope/e/Finnish_Horse.htm]

(21)は、他のどの動物よりも、馬は、人類の歴史と密接に関わってきた、という意味であるが、“More than any other animal”という表現からも明らかなように、他の動物種との対比で馬という種が限定され、その特徴が述べられている。(22)は、馬は、その他の点では、蛙よりも人間にずっと類似しているが、蛙の手足だけは、ずっと我々のものに近い、という意味であり、蛙という種との比較において、馬の種が限定されて、その性質が述べられている。(23)は、馬は、本来(他の動物の)餌食となる動物であるので、家畜になっても、

その本能に強く依存する、という意味であるが、基本的には(21)と(22)と同様に、明示的にではないが、他の動物種が念頭にある発言である。

この節の内容をまとめると次のようになる。総称文の主語名詞句が単数不定形の場合は、言及対象が各々の個体として認識されており、人間と言及対象の関係は対一が原則である。そして、そのことが単数不定形が持つとされる、定義的な性質に関わっていると思われる。つまり、一つ一つについて当てはまることは、例外なくすべてに当てはまると類推され、あたかも、それが言及対象の兼ね備えなければならない本質的特徴であると思なされるためではないかと思われる。一方、複数不定形の場合は、言及対象が集合として認識されており、人間と言及対象の関係は対多で、理論上は有限個であっても、実際にはとても扱え切れない数が対象になっていることが多い。従って、その主張は、あくまで、総じてそのようである、あるいは、標準的に言うてそうであるという弱めのものにならざるを得ない。その点で、この形式は、もっとも総称文らしいものとなっていると思われる。また、単数定形の場合は、定冠詞が本来持つ、「対比」や「限定」という意味機能が解釈に関わっていると思われる。つまり、この形式は、種としての馬が他の動物種と比較対照される文脈において使用されており、その意味では、他の二つの形式と比べて、一段階抽象度の上がった表現であると言える。そのため、種としての馬が他の種と区別されるべき特徴を述べていることが多く、典型的な性質が表されていると説明されることも容易に理解できる。

4. 総称性についての考察—総称性と真理条件

総称文の真理値をどのように決定するのかという手続きの問題は、これまで総称文の研究中で一つの大きな主題であった。例えば、(24)のように、主語名詞句に全称数量詞が付いている場合は、ビタミンCを含まないポテトが一つでも発見されると、その文の真理値

は偽となる。しかし、(25)から(27)のように、総称文であれば、ビタミンCを含まない例外が多少あったとしても、真理値を偽とするまでにはならないと言われている。

(24) Every potato contains vitamin C.

(25) A potato contains vitamin C.

(26) Potatoes contain vitamin C.

(27) The potato contains vitamin C.

このような総称文の真理条件について、Cohen (1999a, b) に代表される帰納的アプローチでは、総称文の主語名詞句は特定の集合を指示しており、その要素である個体がある一定以上の割合で述部の記述に当てはまれば、その文を真と見なす立場を取っている。また、演繹的アプローチとでも呼ぶことができる Carlson (1995) の研究では、総称文の記述に対応するような規則が外界に存在すれば、その文は真であるという考え方を提案している。しかし、総称文の真偽を決定する手続きとして、これらのアプローチのどちらが妥当であるのかについて、明確な結論は出ていない。

これらの先行研究では、帰納的アプローチであれ演繹的アプローチであれ、総称文の真理値を決定する手続きを明示的に規定することを目指している。しかし、総称文の真理条件を明示化することが困難なのが事実であれば、真理条件そのものについて考える前に、困難である理由について検討する必要があるのではないだろうか。本発表では、総称文はその意味的な性質から、そもそも厳密な意味での真理値を問わない文であり、それゆえに真理条件が定まらないのだと主張する。

私達の日常的な発話は、ほとんどの場合、「真性の主張」という行為を遂行していると考えられる。つまり、何らかの発話をする場合、話し手は基本的にその発話の意味内容が真であることを主張しており、同時に、それを保証しなければならないのである。これは一般的に、話し手は自らが述べたことに対して責任を取らなければならないという、社会的規範が存在していることから裏付けられる。このような規範は、Grice (1975) が提唱する

「会話の公理」の中の質についての公理である「あなたの(会話における)貢献を真であるように努めなさい」に対応するものである。

しかし、「真性の主張」という行為は、全ての発話において遂行されているわけではない。実際、お伽噺や冗談といった発話は、そもそも「真性の主張」を遂行していない。従って、そのような発話の真理値は問題にされないし、真理条件自体が存在しないことになる。総称文の場合、「真性の主張」という行為が全く遂行されていないわけではないが、そのような行為は比較的弱いものだと考えられる。

総称文における「真性の主張」がどの程度の強さであるのかは、主語名詞句に全称数量詞“all”が付いている文と比較するとよくわかる。

(28) Sulphur Horse Ranch - Breeders of the Spanish Sulphur Horse. *All horses are* registered with the American Sulphur Horse Association and DNA tested for proof of parentage on foals. Stallions at stud and horses for sale. [http://buyhorses.com/Links/SulphurHorse.htm]

(29) Types of horses on the trails: Anglo Arab, Thoroughbred, Cleveland Bay, Thoroughbred cross and bush ponies. *All horses are* very light mouthed, responsive, fit and in very good condition. There are different horses and ponies for novice, intermediate and experienced riders. Horses range from 12 hands high to 17 hands high in size. [http://www.safpar.com/victoria_falls_horse_trails.htm]

(30) The mortality rate for horses infected with tetanus has been reported as high as 50 percent. Half the animals die. *All horses are* susceptible regardless of age,

gender, or location. It is a horrible disease, painful to observe and expensive to treat. But tetanus can be prevented. Vaccinating your horses against this deadly disease is essential in preventing their loss. [http://www.animalforum.com/htetanus.htm]

(28) は、馬畜産牧場の紹介をする文であり、そこで飼育されている全ての馬が、馬畜産者の協会に登録され、DNA 検査を受けていることが述べられている。(29) は、騎乗による観光ツアーを紹介する文であり、ツアーで用いられる全ての馬が良い状態にあると述べている。また(30) は、馬の破傷風に関する記述であり、年齢、性別、場所に関わらず、あらゆる馬は感染の可能性があるため、ワクチンをするように促している。

これらの事例に共通する特徴は、文の書き手がその意味内容の真性を強く主張しており、かつ、その真性を保証すべき立場にあるということである。例えば、(28) の場合、協会に登録され、DNA 検査を受けていることは、馬の質の証明であり、買い手に安心して馬を買ってもらうためには、全ての馬がその条件を満たしていなければならない。また、(29) についても、全ての馬が良い状態にあることは、観光客が安心してツアーに参加できる条件である。さらに、(30) は、馬にワクチンをするべきだという助言が有効であるためには、破傷風の感染が全ての馬にありうる事態でなければならない。もし、これらの事例で言及された馬に一頭でも例外があるならば、馬畜産牧場と買い手、ツアー会社と観光客、そして医療アドバイザーと飼い主の間の信頼関係は壊れてしまうだろう。

このように、主語名詞句に全称数量詞“all”が付いている文では、真性の主張が強く、また、真性の保証も必要とされていることがわかる。むしろ、逆に、真性の主張が強くなければならないような文であるからこそ、主語名詞句に全称数量詞がついているのだと言ってよい

だろう。もし、これらの馬について総称文で記述するならば、書き手が本来期待していた効果は、読み手において生じないことはたやすく想像できる。

また、主語名詞句に限定的な数量詞 “most” がついている文では、指示対象を限定することで、逆に、明示的に真性の主張が強められていることがわかる。

- (31) *Horses are quite susceptible to many common diseases that require immediate attention from either the owner or a veterinarian. If minor aches and pains are ignored, not only will they lead to further complications to your horse, but they may easily infect other horses. Since most horses are social animals whether as a border at a local stable or among other horses in the pasture, disregarded communicable diseases can lead to disaster.* [http://vava.essortment.com/horseailments_riaa.htm]

第一文は総称文であり、馬の病気に対する弱さについて一般的な記述がされている。これに対し、第三文では、主語名詞句に限定的な数量詞 “most” がついており、意味内容を指示対象の点で限定する代わりに、真性の主張の強さを維持していることがわかる。実際に、単独で飼育されている馬も多く存在することを想定することで、真性の主張を強めることは、読み手に対する真性の保証する観点からは妥当な戦略だと言えるだろう。

このように、主語名詞句に全称数量詞 “all” や限定的な数量詞 “most” がついた文では、意味内容の真性の主張の強さが明示化されている。当然、意味内容の真性の主張の強さが示されている以上、それらの文の真偽性を問うことは意味のあることであり、真理値を決定する手続きについても明示化することができる。しかし、恐らく総称文では真性の主張は強くはされていない。それゆえ、真理条件

が定まらないというより、むしろ、真理値を厳密に問うこと自体が意味のないことなのである。

では、なぜ総称文における真性の主張は弱いのだろうか。これは、意味内容の特定性・全般性の程度と、真性の主張の強さの間に逆相関の関係があり、意味内容に応じて真性の主張の強さに社会的な期待値があるからだと考えられる。例えば、特定の個体において、特定の時間に生じた事態については、その真性を確かめることは、労力の点からみて比較的容易である。しかし、多くの個体において様々な時間に生じる事態については、その真性を保証することは難しい。このような現実的な制約から、一般的な期待値として、特定の意味内容については真性の主張は強くなり、全般的な意味内容については真性の主張は弱くなるのだと考えられる。そのため、総称文における真性の主張の強さも、通常期待される範囲としては弱く、これに対して、状況記述文のような特定の意味内容の真性の主張の強さは強くなるのである。この仮定は、状況記述文の真理条件が多くの場合に明示的であることをも説明する。

全称数量詞 “all” や限定的な数量詞 “most” は、全般的な意味内容に対する期待値としての弱い真性の主張を強める役割を担っているのだと思われる。対称的に、“probably” や “maybe” などの副詞は、特定の意味内容に対する期待値としての強い真性の主張を弱め、それによって真性の保証を減免する役割を持っているのだと考えられる。

5. おわりに

これまでの研究では、総称文の主語名詞句の形式の違いから生じる効果と総称性が現れる要因が混同されていたと思われる。本発表では、前者は、話し手の状況認識を表しているおり、後者には、発話行為的要因が関わっていると主張した。また、これまでの研究で論じられてきた、総称文の各々の形式の意味的特徴は、これらの要因が複合的に機能した結果であると考えられる。

参考文献

- Burton-Roberts, Noel (1976) "On the Generic Indefinite Article," *Language* 52, 427-448.
- Burton-Roberts, Noel (1977) "Generic Sentences and Analyticity," *Studies in Language* 1, 155-196.
- Carlson, Gregory N. (1977) *Reference to Kinds in English*, Garland, New York.
- Carlson, Gregory N. (1995) "Truth Conditions of Generic Sentences: Two Contrasting Views," Carlson and Pelletier (eds.) *The Generic Book*, The University of Chicago Press, Chicago.
- Carlson, Gregory N. and Francis J. Pelletier (eds.) (1995) *The Generic Book*, The University of Chicago Press, Chicago.
- Cohen, Ariel (1999a) *Think Generic!* CSLI Publications, Stanford.
- Cohen, Ariel (1999b) "Generics, Frequency Adverbs, and Probability," *Linguistics and Philosophy* 22, 221-253.
- Grice, Paul. 1975. "Logic and Conversation" , in Peter Cole and Jerry L. Morgan (eds.) *Syntax and semantics 3: Speech acts*. San Diego: Academic Press, pp.41-58.
- Jespersen, Otto (1909-1949) *A Modern English Grammar on Historical Principles*, George Allen and Unwin, London.
- Jespersen, Otto (1924) *The Philosophy of English Grammar*, George Allen and Unwin, London.
- Jespersen, Otto (1933) *Essentials of English Grammar*, George Allen and Unwin, London.
- Lawler, John M. (1972) "Generic to a Fault," *Papers from the Eighth Regional Meeting*, Chicago Linguistic Society, 247-258.
- Lawler, John M. (1973a) *Studies in English generics*, University of Michigan Papers in Linguistics 1, Ann Arbor.
- Lawler, John M. (1973b) "Tracking the Generic Toad," *Papers from the Ninth Regional Meeting*, Chicago Linguistic Society, 320-331.
- Leech, Geoffrey and Jan Svartvik (1975) *A Communicative Grammar of English*, Longman, London.
- Nunberg Geoffrey and Chiahua Pan (1975) "Inferring Quantification in Generic Sentences," *Papers from the Eleventh Regional Meeting*, Chicago Linguistic Society, 412-422.

Carston の意味的空仮説の意義について

山崎英一

四天王寺国際仏教大学

yamasaki@mail.shitennoji.ac.jp

2004 年 12 月 11 日 於日本語用論学会

0. 目的

Robyn Carston 博士が行ってきた貢献は関連性理論における発展に対してのみならず、語用論、言語学、言語哲学等々と広範囲に渡ると共に多大なものであったことは周知の通りである。本発表では、同博士の最近のアイデアである空仮説に関して、and 分析のこれまでの軌跡を概観した上でその正当性を考察する。更に、関連性理論においてこの仮説がもたらしうる今後の意義を他の仮説や展開とも絡めて検討する。

1. and 分析: 概観

- (1) The lone ranger jumped on the horse and rode into the sunset.
- (2) The capital of France is Paris and the capital of England is London.
- (3) #The lone ranger jumped on the horse and rode into the sunset.

以上、Levinson (1983)

a. 意味論:

意味論的に多義。

'&'はその内の一つにすぎない。

論理学とは全く異なる人間の言語・認知。

難点: 意味が無限に増える可能性。日本語等でも同様の多義性のあることが説明困難。

b. グライス派:

意味論的には単義。

'&'のみ。連言を中核に分析。

他の意味は '&' に基づき会話の諸原則の下で推意として生じる。

人間の思考・言語活動: 論理 + 会話の諸原則

難点: 条件文(言われたこと(what is said))等のスコープに入ることから、推意とは言いがたい(が、すると意味論的意義ということになってしまう)。

c. 従来の関連性理論:

意味論的には単義。

'&'のみ。連言を中核に分析。

他の意味は'&'を軸に認知的(語用論的)処理を受け言われたこと(厳密には表出命題)の一部として生じる。

認知機構とその駆動原理としての関連性の原理の想定。

(4) She did her BA in London and she did her A levels in Leeds.

Blakemore & Carston (1999)

2. Carston の空仮説

(5) and の意味論的意味の分析可能性

a. and の意味は概念的である。

b. and の意味は手続きのである。

c. and は概念的意味も手続きの意味も有さない。

Carston(1998, 2002), Blakemore & Carston (1999)

(6) You're a wonderful man and you're wrong. You've probably got tons of true convincing evidence, and you're wrong.

(7) 意味的空仮説 (semantically null hypothesis)

and は概念的意味も手続きの意味も有さない。つまり and には意味論的な情報はない。表面上の様々な「意味」(解釈)は、and の統語的な情報(接続詞として統語構造どうしを結合する特性)を基に、関連性の原理に沿う形で認知的情報処理が行われることから生じる。 (参 Carston (2002))

d. 関連性理論+: 空仮説の下での分析:

意味論的な意味での意味はない。

'統語的意味'(統語的情報と語用論的処理による意味)として'&'や他の意味('and then'等)が導出される。

認知機構とその駆動原理としての関連性の原理の想定。

(8) "p and q."の論理形式: $p _ q$

"p and q."の表出命題例: $p \& q$

(9) A: I'm not sure that I liked John's friend. All he could talk about was logic.

B: AND he'd never heard of relevance theory. Blakemore & Carston (1999)

(10) A: How was the party?

B (who is in love with Mary): Well, I finally succeeded in inviting Mary.

C (who is in love with Susan): And she came to the party with Susan.

A: Well, I must say it was a great success.

(11) A: How was the party?

B (who is in love with Mary): Well, I finally succeeded in inviting Mary.

C: And she came to the party with her new boyfriend.

A: Well, I must say it was a disaster.

(12) Her husband is in hospital and she is seeing other men.

3. 空仮説に未来はあるか

3.1. 各種の解釈を受けうる分詞構文の存在

(13) Putting on his coat, he left the house.

<http://www.edufind.com/english/grammar/ING2.cfm>

(14) Feeling hungry, he went into the kitchen and opened the fridge. 同上

(15) Knowing he was absent, I telephoned him.

3.2. "&"を想定困難な and 文-1: OM 文他

(16) Run after him at once, and you will catch up with him.

(17) One more can of beer and I'll leave.

(18) Not so fast. Get out, and maybe you can't come back. We'd starve.

Orphans of the Sky by Robert A. Heinlein

(19) "We're going to have to keep a continual watch for Thugg," Russell said. "Damn it. I wish there were other weapons available. That one gun, and he's got it."

A Maze of Death by Philip K. Dick

(20) Ten minutes' walk and he was on top of a hill, staring down into a hole in the round where granite slabs had been taken out.

The Day They Landed by Paul Chadwick

3.3. "&"を想定困難な and 文-2: Dutchman 条件文的解釈

(21) Mary will buy a computer, and John Φ a CD-player.

(22) *If Mary buys a computer, then John Φ a CD-player.

(23) George: Ivan is now going to peel an apple.

Ivan: And Jorge Φ an orange.

(24) A: Hi, I'm Mike Bilandic.

B: And I'm the Easter Bunny.

- (25) A: Reagan plans to join Amnesty International.
 B: And James Watt {plans to join / * Φ } the Sierra Club.
 (26) If you are Mike Bilandic, I'm the Easter Bunny.

- (27) A: Detroit is in Nebraska.
 B: And Boston Φ in Massachusetts.

以上、McCawley (1988)

3.4. 解釈において and の貢献度は高いのか

- (28) "This red cap--that's of course pentobarbital, for sleeping. And then this yellow one, it's norpramin, which counterbalances the C.N.S. depressive effect of the mellaril. Now, this square orange tab, it's new. It has five layers on it which time-release on the so-called 'trickle principle.' A very effective C.N.S. stimulant. hen a--"

A Maze of Death by Philip K. Dick

- (29) Wait till you've really lost yourself in nature, among the devilish woodlands and the cruel flowers. Then you'll know that there's no star like the red star of man that he lights on his hearthstone; no river like the red river of man, the good red wine, which you, Mr Rupert Grant, if I have any knowledge of you, will be drinking in two or three minutes in enormous quantities."

The Club of Queer Trades by G.K.Chesterton

- (30) You've passed the examination? Well, I'm a Dutchman! 富永 & 吉田(1994)

3.4. 日本語の"and"対応文

- (31) これから梅田に出、友達に会う。
 (32) これから梅田に出て、友達に会う。
 (33) 雨が降り、地が固まった。
 (34) 雨がやんで、太陽が顔をのぞかせた。

4. 理論展望:

(35) 確定度不十分性仮説(underdeterminacy thesis)

言語的意味は言われたことを確定するには不十分である。Carston (2002)

4.1. 第4の可能性及び「&未満」の可能性

(36) 意味的空仮説(再規定):

and の語彙的項目における意味論部門は(37c')のように表記でき、概念的表示の意味の項も手続き的意味の項も空である。and を含む発話の持つ、表面

上の様々な「意味」(解釈)は、and の統語的な情報(接続詞として統語構造どうしを結合する特性)を基に、関連性の原理に沿う形で認知的情報処理が行われることから生じる。

(37) and の意味論的意味の可能性<改>

a'. [概念的意味 < & >, 手続き的意味 < Φ >]

b'. [概念的意味 < Φ >, 手続き的意味 < α >]

α 例: 単一のユニットとして処理せよ。

c'. [概念的意味 < Φ >, 手続き的意味 < Φ >]

d'. [概念的意味 < & >, 手続き的意味 < α >]

α 例: 単一のユニットとして処理せよ。

4.2. but の"意味"の整合性

and の意味を統語的特性から来る「一つのユニットとして処理せよ」であるとするならば、同様に統語的に結合されている but にもこの"統語的意味"があると思われるが、これは but の处理的意味と非整合的ではないのか。

4.3. 「取り消し可能性」再考

(38) The capital of England is London and the capital of France is Paris.

(39) Joe taunted Ralph and Ralph hit him, but not necessarily in that order.

(40)(=(4)) She did her BA in London and she did her A levels in Leeds.

(41) It's never happened in the five years we've been on the job. It did happen now and again in the early days, but that was before our time.

Isaac Asimov, *FOUND!*

(42)(=(3)) #The lone ranger jumped on the horse and rode into the sunset.

(43) #John has two PhDs but I don't believe he has.

従来語用論における常識的想定とは異なり、実際には推意は取り消し可能であるとは限らない。又、その一方で、確定度不十分性仮説より、従来語義の一部、と考えられていた情報でも「取り消せる」可能性がある。

「取り消す」ではなく、「関連性の原理を満たすべく処理が進む際、処理が、どの程度迄原理を満たせるのか」ということであろう。

4.4. 関連性理論とグライス派

and の空仮説を認めるということは、"&"が直接言語化されない可能性を認めるということである。又、論理全体をモジュールとして独立化させて扱おうという動きも関連性理論内にはある。合わせて考えた場合、論理はもはや認知

の中心ではない。つまり、「論理＋会話の諸原則」という観点から、従来の関連性理論の段階を経て、もはや論理を中心とはしない「さまざまなモジュールからなる認知機構と機構の駆動を導く関連性の原理」へと移行しているといえるであろう。

5. 結び

* 本発表は、山崎(2004)に基づき大幅な加筆及び修正、再検討を加えたものである。

主要参考文献

- Blakemore, D. and Carston, R. 1999. "The pragmatics of and-conjunctions: the non-narrative cases." UCL Working Papers in Linguistics 11:1-20.
- Carston, R. 1998. *Pragmatics and the Explicit-implicit Distinction*. PhD thesis, University College London.
- Carston, R. 2002. *Thoughts and Utterances: The Pragmatics of Explicit Communication*. Oxford: Blackwell.
- Levinson, S. C. 1983. *Pragmatics*. Cambridge: Cambridge University Press.
- McCawley, J. D. 1988. *The Syntactic Phenomena of English* (2 vols.) Chicago: University of Chicago Press.
- Morgan, J.L. 1978. "Two types of convention in indirect speech acts" in Cole, ed., *Pragmatics. Syntax and Semantics* 9. New York, Academic. 261-80.
- 西山佑司 2003. 『日本語名詞句の意味論と語用論: 指示的名詞句と非指示的名詞句』 ひつじ書房.
- 富永英夫・吉田仁志 1994. 「英語における修辭的文に関する覚え書き」 神戸商科大学『人文論集』第29号, 2, 23-33.
- Recanati, F. 2004. *Literal Meaning*. Cambridge: Cambridge University Press.
- 山崎英一 1994. "Constraints and 'conventionality' in relevance theory." *Kansai Linguistic Society* 14, 72-81.
- 山崎英一 1996. 「理論派と記述派の接点: Dutchman 条件文分析への追記」 四天王寺国際仏教大学短期大学部『紀要』第36号, 14-36.
- 山崎英一 1998. 「認知意味論と認知語用論との接点: 条件文構文のネットワークを例に」 四天王寺国際仏教大学文学部・短期大学部『紀要』第38号.
- 山崎英一 2004. 「Carston の意味的空仮説についての覚え書き」 四天王寺国際仏教大学『紀要』人文社会学部第37号..
- Yamasaki, E. ms. "From the procedural/conceptual distinction to the duality hypothesis: Exploring some possibilities in relevance theory."

因果関係と言語表現

海竇康臣

龍谷大学非常勤講師・立命館大学非常勤講師

1. はじめに

本発表の目標

Kehler (2002: 15-23, 2004)の提案する一貫性関係 (coherence relation) の一つである Cause-Effect relation という関係に基づいて、以下の二つの問題を説明すること。

- (I) どのような場合に写像一貫性の原則に違反する文の生起順序が許容されるのか？
- (II) 主語名詞句からの外置が行われている文（以下、外置構文と呼ぶ）の主節と外置節の間には、どのような意味関係が認められなければならないのか？

2. Cause-Effect relation

KehlerのCause-Effect relation は、2つの命題間に前提が認められる場合に成立する関係であるが、Kehlerはこの関係を Result、Explanation、Violated expectation、Denial of preventer に下位分類している。

- (1) a. Result: Infer P from the assertion of S_1 and Q from the assertion of S_2 , where normally $P \rightarrow Q$.
- b. Explanation: Infer P from the assertion of S_1 and Q from the assertion of S_2 , where normally $Q \rightarrow P$.
- c. Violated expectation: Infer P from the assertion of S_1 and Q from the assertion of S_2 , where normally $P \rightarrow \neg Q$.
- d. Denial of preventer: Infer P from the assertion of S_1 and Q from the assertion of S_2 , where normally $Q \rightarrow \neg P$.

Kehlerは連続する2つの文の第1文の意味を P 、第2文の意味を Q と表記し、前提が $P \rightarrow Q$ という関係を成立させている場合をResultと、 $Q \rightarrow P$ という関係を成立させている場合をExplanationと呼んでいる。また、前提が $P \rightarrow \neg Q$ という関係を成立させている場合をViolated expectationと、 $Q \rightarrow \neg P$ という関係を成立させている場合をDenial of preventer と呼んでいる。Kehler (2002: 20-21)は、以下の(2a)-(2d)の第1文と第2文の間には、角括弧で示した関係が成立するとしている。

- (2) a. George is a politician, and therefore he's dishonest. [Result]
- b. George is dishonest because he's a politician. [Explanation]
- c. George is a politician, but he's honest. [Violated expectation]
- d. George is honest, even though he's a politician. [Denial of preventer]

3. 写像一貫性の原則と文の生起順序

(3) 写像一貫性の原則

われわれは外界における事象を時間的順序に従って認知する。この認知順序は語順にも投影される。(児玉 1998: 63)

写像一貫性の原則に従って、出来事が起こった順序通りに文が生起している(4)-(7)の a は適格であるが、同原則に違反している(4)-(7)の b の適格性は低い。

- (4) a. 太郎は眠りについた。空を飛んでいる夢をみた。
b. *太郎は空を飛んでいる夢をみた。眠りについた。(児玉 2002: 147)
- (5) a. おみくじを引いた。大吉だった。
b. *大吉だった。おみくじを引いた。
- (6) a. We went to an expensive restaurant. John ordered trout with almonds.
b. ?John ordered trout with almonds. We went to an expensive restaurant. (van Dijk 1985: 109)
- (7) a. Max entered the room. He poured a cup of coffee.
b. ?Max poured a cup of coffee. He had entered the room. (Lascares & Asher 1993)

(8) [写像一貫性の原則] は一般的な談話原則であり、場合によっては原則に違反した順序をとることもある。(児玉 2002: 148)

(9)-(11)の b は、出来事が起こった順序通りに文が生起しておらず、写像一貫性の原則に違反するにもかかわらず適格である。

- (9) a. 花子はおなかがすいていた。花子は食堂へ行った。
b. 花子は食堂へ行った。花子はおなかがすいていた。(邑元 1998: 188)
- (10) a. This morning I had a toothache. I went to the dentist.
b. I went to the dentist. This morning I had a toothache. (van Dijk 1985: 109)
- (11) a. John dropped the glass. It broke.
b. The glass broke. John dropped it. (東森 1998)

(4)-(7) および(9)-(11)の b はいずれも写像一貫性の原則に違反する文の配置順序であるが、(4)-(7)の b と(9)-(11)の b とで適格性が異なる。

⇒どのような場合に写像一貫性の原則に違反する文の生起順序が許容されるのか？

- (12) 写像一貫性の原則に違反する文の生起順序が許容されるのは、文間に Explanation relation が成立している場合に限られる。

(9)-(11)の b が適格なのは、各例の第1文と第2文の意味の間にそれぞれ、「おなかがすいた人は食堂に行く」、「歯が痛くなった人は歯医者に行く」、「ガラス製のコップを落とせば割れる」という前提が認められ、これらの前提が第1文と第2文の間に $Q \rightarrow P$ という関係を成立させているためである。他方、(4)-(7)の b の適格性が低いのは、各例の第1文と第2文の意味の間に $Q \rightarrow P$ という関係の成立を支える前提が認められないためである。

二文の間に Explanation relation が成立し得る場合、英語ではbecause を用いて二文を接続することが可能である。⇒(2b)を参照

- (13) I went to the dentist because this morning I had a toothache. cf.(10)
- (14) The glass broke because John dropped it. cf.(11)
- (15) ?John ordered trout with almonds because we went to an expensive restaurant. cf.(6)
- (16) ??Max poured a cup of coffee because he had entered the room. cf.(7)

二文間に Explanation relation が成立し得る場合、日本語では「ので」や「から」を用いて二文を接続することが可能である。

- (17) a. ジョージは政治家なので不正直である。cf.(2b)
b. ジョージは政治家だから不正直である。
- (18) a. 花子はおなかがすいていたので、(花子は) 食堂へ行った。cf.(9)
b. 花子はおなかがすいていたから、(花子は) 食堂へ行った。
- (19) a. ??太郎は眠りについたので、空を飛んでいる夢をみた。cf.(4)
b. ??太郎は眠りについたから、空を飛んでいる夢をみた。
- (20) a. *おみくじを引いたので大吉だった。cf.(5)
b. *おみくじを引いたから大吉だった。

因果関係と写像一貫性の原則が競合する場合

- (21) a. John cut his finger. The knife slipped.
⇒b. The knife slipped. John cut his finger.
- (22) a. The policeman came. The robber ran away.
≠b. The robber ran away. The policeman came.
- (23) [(21)]では2文の語順を変えてもほぼ同じ意味になる。しかし[(22)]では意味が異なる。ここでは隣接する2文の解釈において因果関係と(出来事が生じた順に表現する)写像一貫性の原則が競合している。(兎玉 2004a)

⇒ (22b)の順序で文が生起している場合には、第1文と第2文の間にExplanation relation が成立しているという解釈は不可能なのか?→可能

- (24) The robber ran away. The policeman came. The robber heard the police car siren.

4. 主語名詞句からの外置

- (25) a. A man who had hostility toward her hit Mary.
b. A man hit Mary who had hostility toward her. (中島 1995)
- (26) a. A man who was wearing a T-shirt hit Mary.
b. *A man hit Mary who was wearing a T-shirt. (中島 1995)

先行研究

①：主節の述部に着目している考察

Johnson (1985: 108-116)

主語からの外置が許されるのは述部が非対格動詞の場合のみである。

→Rochemont & Culicover (1990: 66)が以下の(27)の反例を提示

中島 (1995) もこの見解の不備を指摘

(27) A man just bought that restaurant who everyone says is an entrepreneur.

②：文中における外置要素の情報としての相対的な重要度に着目している考察

高見 (1995: 143)

(28) 名詞句からの外置に対する機能論的制約：名詞句からの外置は、外置要素が、文中の他の要素より情報の重要度が高いと解釈される場合にのみ、適格となる。

→(28)の制約に基づいて外置構文の適格性を説明することは困難

(29) Many patients died in the hospital who had been infected with malaria.

(高見 1995: 153)

(29)の適格性についての高見の説明

患者が病院で死ぬというのは容易に想像される事柄なので、話し手や聞き手の関心はどのような患者が死んだかに集中する。したがって(29)は情報の重要度の制約に合致して適格となる。

高見の説明に対する異論

(29)のコンテキスト情報が示されていない場合、主節と外置節のどちらの方が情報としての重要度が高いかを判断することは困難である。(29)の主節は、単に患者が死んだということではなく、「多くの」患者が死んだという異常な出来事を伝達しているので、この部分の方が外置節よりも情報としての重要度が高いと判断することも可能である。

③：主節と外置節の意味関係に着目している考察

中島 (1995)

外置構文の主節と外置要素とは意味的になめらかに結合していなければならない。主節の述部が存在もしくは出現の意味を表さない外置構文は、外置要素が主節に対して「説明」「含意」「強化」「理由」などの役割を演じている場合にのみ適格であるという仮説を提示。

→外置要素と主節との意味的なつながりが外置構文の適格性を左右するという見解は支持する。

→以下の問題点がある。

◆「説明」等の用語に関して、定義を一切示していない。

◆主節と外置要素との間に成立可能な意味関係をすべて提示していない。

◆主節と外置要素との間に成立可能な意味関係に共通する性質を示していない。

⇒外置構文の主節と外置節の間には、どのような意味関係が認められなければならないのか？

(30) 主節の述部が存在もしくは出現の意味を表さない外置構文は、主節と外置節の間に Cause-Effect relationが成立している場合にのみ適格である。

(30)の制約に基づく(25b)と(26b)の適格性の違いの説明

外置構文の主節の意味を P 、外置節の意味を Q とした場合、適格な(25b)では、 P と Q の間に $P \rightarrow Q$ もしくは $Q \rightarrow P$ という関係を成立させる前提が認められるので、主節と外置節の間にはCause-Effect relationが成立している。例えば、 P と Q の間には「ある人物が誰かに敵意を抱いたならば、その人物は敵意を抱いた相手を殴りたいと思うかもしれない」という前提が認められる。つまり、 P と Q の間には $Q \rightarrow P$ という関係を成立させる前提が認められ、Explanationが成立している。他方、不適格な(26b)では、 P と Q の間に $P \rightarrow Q$ 、 $Q \rightarrow P$ 、 $P \rightarrow \neg Q$ 、 $Q \rightarrow \neg P$ という関係のいずれかを成立させる前提を認めることは困難である。つまり、この外置構文の主節と外置節の間にはCause-Effect relationは成立していない。

(25b)の主節と外置節の間にExplanation relationが成立している根拠

→(26b)とは違い、主節と外置節をbecauseによって接続可能

(31) A man hit Mary because he had hostility toward her.

(32) *A man hit Mary because he was wearing a T-shirt.

(30)に基づく(33a)と(33b)、(34a)と(34b)の適格性の違いの説明

(33) a. Some guests drank milk who had never drunk it.

b. *Some guests drank milk who were visiting from Chicago.

(34) a. A man gave Mary a bunch of flowers who wanted to get married to her.

b. *A man gave Mary a bunch of flowers who was wearing a funny hat.

外置構文の主節の意味を P 、外置節の意味を Q とした場合、適格な(33a)では、 P と Q の間に $P \rightarrow \neg Q$ もしくは $Q \rightarrow \neg P$ という関係を成立させる前提が認められる。例えば、 P と Q の間には「今までに一度も飲んだことがない飲み物は、口にするのを躊躇するものだ」という前提が認められる。つまり、 P と Q の間には $Q \rightarrow \neg P$ という関係を成立させる前提が認められ、Denial of preventerが成立している。また、(34a)では、 P と Q の間に $Q \rightarrow P$ という関係を成立させる前提が認められ、Explanationが成立している。例えば、 P と Q の間には「結婚したいと思った相手には、相手が喜ぶようなものをプレゼントするものだ」という前提が認められる。他方、不適格な(33b)(34b)では、 P と Q の間に $P \rightarrow Q$ 、 $Q \rightarrow P$ 、 $P \rightarrow \neg Q$ 、 $Q \rightarrow \neg P$ という関係のいずれかを成立させる前提を認めることは困難である。

(33a)の主節と外置節の間にDenial of preventerが成立している根拠

→Denial of preventerが成立している場合には、(2d)が示すように、二つの節をeven thoughによって接続可能だが、(33b)とは違い、(33a)の主節と外置節はこの句を用い

て接続可能

(35) Some guests drank milk, even though they had never drunk it.

(36) *Some guests drank milk, even though they were visiting from Chicago.

(34a) の主節と外置節の間にExplanation relationが成立している根拠

→ (34b)とは違い、主節と外置節を becauseによって接続可能

(37) A man gave Mary a bunch of flowers because he wanted to get married to her.

(38) *A man gave Mary a bunch of flowers because he was wearing a funny hat.

(30)に基づく(27)と(29)の適格性の説明

(27)も(29)もともに、 P と Q の間に $Q \rightarrow P$ という関係を成立させる前提が認められ、Explanation が成立している。(27)において $Q \rightarrow P$ という関係を成立させる前提は「誰もが企業家だと言う人物であれば、飲食店の一軒や二軒買っても不思議ではない」というものである。また、(29)において $Q \rightarrow P$ という関係を成立させる前提は「マラリアに感染した人は、死亡する可能性がある」というものである。

(27)および(29)の主節と外置節の間にExplanation relationが成立している根拠

→主節と外置節を becauseによって接続可能

(39) A man just bought that restaurant because he, everyone says, is entrepreneur.

(40) Many patients died in the hospital because they had been infected with malaria.

(30)に基づく(41)と(42)の適格性の説明

(41) Students cannot graduate with honors who do not attend classes regularly. (Declerck 1988)

(42) A woman climbed a 10,000 foot mountain last year that was pregnant. (Wittenburg 1987)

(41)では P と Q の間に $Q \rightarrow P$ という関係を成立させる前提が認められ、Explanation が成立している。この関係の成立を支えている前提は「出席の悪い学生は良い成績で卒業できない」というものである。一方(42)では P と Q の間に $Q \rightarrow \neg P$ という関係を成立させる前提が認められ、Denial of preventer が成立している。この関係を成立させているのは「妊娠中は山登りをするのではない」という前提である。

主節の述部が存在もしくは出現の意味を表す外置構文

⇒主節の述部が存在もしくは出現の意味を表す外置構文では、主節と外置節との間にCause-Effect relation が成立している必要はないのか？

→ない。

(43) A man is here who is carrying a large package.

(Rochemont & Culicover 1990: 60)

- (44) A woman came into the room who wore a yellow hat. (高見 1995: 153)
- (45) a. *A man is here because he is carrying a large package.
b. *A man is here, even though he is carrying a large package.
- (46) a. *A woman came into the room because she wore a yellow hat.
b. *A woman came into the room, even though she wore a yellow hat.

⇒主節の述部が存在もしくは出現の意味を表す外置構文では、なぜ主節と外置節との間に Cause-Effect relation が成立している必要はないのか？

→主節の述部が存在もしくは出現の意味を表す外置構文は主節が提示文であり、提示文に後続する文に課せられる意味上の制約が極めてゆるいため。

提示文について

提示文とは、話題となるべき指示対象を談話に新しく導入する機能を果たす文のことをいい、その述部には存在もしくは出現の意味を表す動詞が生起する。提示文の直後には、新たに導入された指示物を話題とする、様々な出来事を表す文が生起可能である。以下の(47)(48)の第1文は提示文であるが、それぞれの第2文の主語の後にはほとんどどのような表現でも生起可能である。cf. 海寶 (2003)

- (47) Once there was a wizard. He _____.
- (48) In a little white house lived two rabbits. They/The rabbits _____.

- (49) Once there was a wizard. He was very wise, rich, and was married to a beautiful witch. (Lambrecht 1994: 177)
- (50) In a little white house lived two rabbits. They/The rabbits were named Flopsy and Mopsy, and they spent their days merrily invading neighborhood gardens. (高見 1995: 191)

5. 結論

- (I) 写像一貫性の原則に違反する文の生起順序が許容されるのは、文間に Explanation relation が成立している場合に限られる。
- (II) 主節の述部が存在もしくは出現の意味を表さない外置構文は、主節と外置節の間に Cause-Effect relation が成立していなければならない。

参考文献

- Declerck 1988. "Restrictive When-Clauses." *Linguistics and Philosophy* 11, 131-168.
- Gueron, J. 1980. "The Syntax and Semantics of PP Extraposition." *Linguistic Inquiry* 11, 637-678.

- 東森勲. 1998. 「談話と関連性」『神戸女学院大学論集』44:3, 41-67.
- Huck, G. J. and Y. Na. 1990. "Extraposition and Focus," *Language* 66, 51-77.
- Johnson, K. 1985. "A Case for Movement," Doctoral Dissertation, MIT.
- Kaiho, Y. 1998. "Extraposition from Subjects."『立命館大学英米文学』7, 32-46.
- 海賓康臣. 2003. 「一貫性に基づく理論の有効性」『六甲英語学研究』6, 69-82.
- Kehler, A. 2002. *Coherence, Reference, and the Theory of Grammar*. Stanford: CSLI Publications.
- Kehler, A. 2004. "Discourse Coherence." In Horn, L.R., and G. Ward eds. *The Handbook of Pragmatics*. Oxford: Blackwell.
- 児玉徳美. 1998. 『言語理論と言語論—ことばに埋め込まれているもの—』東京: くろしお出版.
- 児玉徳美. 2002. 『意味論の対象と方法』東京: くろしお出版.
- 児玉徳美. 2004a. 「意味分析の対象拡大により見えてくるもの: 言語分析から人文社会科学へ」『立命館文学』585, 14-29.
- 児玉徳美. 2004b. 『意味分析の新展開 —ことばのひろがりに応える—』東京: 開拓社.
- Lambrecht, K. 1994. *Information Structure and Sentence Form: Topic, Focus, and the Mental Representations of Discourse Referents*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Lascarides, A and N. Asher. 1993. "Temporal Interpretation, Discourse Relations and Commonsense Entailment." *Linguistics and Philosophy* 16, 437-493.
- 邑本俊亮. 1998. 『文章理解についての認知心理学的研究 —記憶と要約に関する実験と理解過程のモデル化—』東京: 風間書房.
- 中島平三. 1995. 「主語からの外置—統語論と語用論の棲み分け—」高見健一編. 『日英語の右方移動構文』東京: ひつじ書房
- Rochemont, M. and P. Culicover. 1990. *English Focus Constructions and the Theory of Grammar*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Sperber, D. and D. Wilson. 1995. *Relevance: Communication and Cognition: Communication and Cognition*. (2nd edition) Oxford: Blackwell.
- 高見健一. 1995. 『機能的構文論による日英語比較—受身文、後置文の分析—』東京: くろしお出版.
- 田窪行則・西山佑司・三藤博・亀山恵・片桐恭弘. 1999. 『談話と文脈』東京: 岩波書店.
- van Dijk, T.A. 1985. "Semantic Discourse Analysis." In T.A. van Dijk ed. *Handbook of Discourse Analysis* vol.2, 103-136. New York: Academic Press.
- Wittenburg, K. 1987. "Extraposition from NP as Anaphora." In G. Huck and A. Ojeda eds. *Syntax and Semantics 20: Discontinuous Constituency*, 428-445. New York: Academic Press.

メタ言語否定と否定の意味

奈良女子大学
吉村あき子
akikoy@cc.nara-wu.ac.jp

1. はじめに

論理学における否定は、Allwood et al.(1977)が述べているように、「その真理値が否定の作用する単文の真理値の反対であるような複合文を作るのに用いられる。」

(1) Negation is used in logic to form a compound sentence the truth value of which is the opposite of that of the simple sentence it operates on. (Allwood et al. 1977: 30)

(2) a. **p**: It's snowing. b. $\sim$ **p**: It's not snowing.

(3)

p	$\sim$ p
t	f
f	t

しかし自然言語・日常言語においては、(4)に示したように、それが作用する文の真理値ではないものを否定しているように思われる場合がある。Horn(1985, 1989)は、上記(2)のような真理値を否定するものを記述否定、(4)のような真理値以外のものを否定する否定を metalinguistic negation 「メタ言語否定」と呼んでいる。

(4) a. I didn't manage to trap two monGEESE -- I managed to trap two monGOOSEs.

b. The king of France isn't bald -- there ISN'T any king of France. (Horn 1985: 125)

このような、論理学で用いられる意味と自然言語で用いられる場合の意味が異なっているように思われる状況は、and や if など他の論理演算子にも当てはまる。

(5) “ his[Grice's] general position in the 1967 William James lectures on Logic and Conversation [is] that, semantically, natural language expressions 'not', 'and', 'or', 'if', 'all', 'some', and 'the' do not diverge from their logical operator counterparts, any other interpretations following from facts about language use and constituting conversational implicatures.” (Carston 2002: 281)

本発表では、(4)のよういわゆるメタ言語否定の現象に関して、Neo-Grice 派語用論の Horn(1985, 1989, 2000)と関連性理論の Carston(1996, 1998a, b, 2002)を吟味することによって、自然言語における否定の意味を再考する。

2. Horn (1985, 1989, 2000) vs. Carston(1996, 1998a, b, 2002)

2.1 Horn (1985, 1989, 2000)

否定のメタ言語的用法は、Horn(1985)によって注目されるようになった現象である。

- (6) "..., the marked, nondescriptive variety is not a truth-functional or semantic operator on propositions but rather an instance of the phenomenon of METALINGUISTIC NEGATION -- a device for objecting to a previous utterance on any grounds whatever, including the conventional or conversational implicata it potentially induces, its morphology, its style or register, or its phonetic realization". (Horn 1989, 363)
- (7) "... I shall advocate here, negation is effectively ambiguous.... But ...it is not semantically ambiguous. Rather, we are dealing with a pragmatic ambiguity, a built-in duality of use." (Horn 1989: 370)
- (8) a. The king of France is not bald -- (because) there is no king of France. (前提)
b. Some men aren't chauvinists -- all men are chauvinists. (「尺度含意」)
c. He didn't call the [pólis], he called the [polís]. (音声表示)
d. I didn't manage to trap two mongeese -- I managed to trap two mongooses. (屈折形態素)
e. Grandpa isn't feeling lousy, Johnny, he's a tad indisposed. (言語使用域/スタイル)
f. I'm not his daughter -- he's my father. (焦点/内包) (Horn 1989: 362-371)

Horn の記述否定とメタ言語否定の違いは、否定が作用する命題(多くの場合は先行発話の命題)の真理条件を否定するかどうかである。したがって、吉村(2004)で述べたように、Horn の Neo-Grice 的語用論と関連性理論とで、真理条件と見なすかどうかについて意見がことなる例、例えばいわゆる「一般的会話の含意」が否定されている例については、メタ言語否定と見なすかどうかの違いが生じる。

- (9) a. Some men aren't chauvinists -- all men are chauvinists. (=8b)
b. A: How many children does Max have?
B: He has three.
C: He doesn't have three children -- he has four.
- (10) a. If some of the children have already arrived the others will be here shortly.
b. If Max has three children, he will manage to take care of them while his wife is out of town, but if he has four, it will be impossible without anybody's help.
- (11) A: I heard that Jane had a baby and got married.
B: She didn't have a baby and get married: she got married and had a baby.
- (12) If she got married and had a baby, her mother will be happy, but if she had a baby and got married, the her mother will b e unhappy.

2.2 Carston(1996, 1998a, b, 2002)

Carston は、一連の研究において、一般にメタ言語否定の特徴として挙げられる6つの特徴、即ち(A)後に修正節を伴う、(B)先行発話への返答として機能する、(C)対照強勢を伴う矛盾のイントネーションを持つ、(D)字義通りの意味では論理的矛盾になる、(E)garden-path 発話で再

解釈がなされる、(F) 引用、mention, representational use の要素を含んでいる、という特徴のうち、最後のメタ表示の特徴だけが本質的特性であると主張し、metarepresentational negation 「メタ表示否定」という名称を用いる。Carston の主張点は(13)に示した2点である。

- (13) “The two main features of my account of these cases of metarepresentational negation are the following: (a) the essential property is that (some, at least) of the material falling within the scope of the negation operator is to be understood as ‘echoically used’, in the sense of Sperber and Wilson (1986a/95b), Wilson and Sperber (1988b, 1992); and (b) the negation operator itself acquires no special meaning/interpretation (‘I object to U’) in these cases, but is standard descriptive truth-functional negation.”

(Carston 2002: 297)

- (14) A representation is used echoically when it attributes some aspect of its form or content to some other than the speaker herself at that moment and expresses an attitude to that aspect.

(Carston 2002: 298)

Carston の分析に従うと、(15)の先行する A の発話に対しては異議を唱えていないような例もメタ表示否定(メタ概念否定)であると見なされる。

- (15) A: Their contributions were important.

B: Right, but YOUR contributions were not important, they were invaluable.

(Carston 2002: 297)

- (16) “This sort of metarepresentational negation is a more general phenomenon than is usually acknowledged. While there may be a substantial subset of cases pertaining to linguistic form and so properly called *metalinguistic* negation, a generalization is missed if the possibility of representing an attributed propositional content (whether of an utterance or a thought) is not recognized as involving the same general process; such cases might be called *metaconceptual* negation.”

(Carston 2002: 297)

- (17) a. He didn’t call the [pólis], he called the [polís].

(音声表示)

b. I didn’t manage to trap two mongeese -- I managed to trap two mongooses.

(屈折形態素)

- (18) a. The king of France is not bald -- (because) there is no king of France. (前提)

b. Some men aren’t chauvinists -- all men are chauvinists.

(「尺度含意」)

c. Grandpa isn’t feeling lousy, Johnny, he’s a tad indisposed.

(言語使用域/スタイル)?

d. I’m not his daughter -- he’s my father.

(焦点/内包) (Horn 1989: 362-371)

2.3 Horn の「メタ言語否定」と Carston の「メタ表示否定」の関係

(19) Horn の主張

1. 否定には、真理条件を否定する記述否定(否定の記述的用法)と、それ以外のものを否定するメタ言語否定(否定のメタ言語的用法)の2つの用法がある。
2. 否定は語用論的に多義である。

(20) Carston の主張

1. これまで「メタ言語否定」と呼ばれてきた現象の本質は、否定演算子の作用域にあるも

のがメタ表示であることで、「メタ表示否定」と呼ぶ。

2. 否定演算子は、メタ表示否定においても、例外なく真理関数演算子である。

☆Carston のメタ表示否定は、メタ表示が関わってる限りにおいては、命題内容即ち真理条件を否定している(21)のような例をも含む。

(21) A: Mary seems happy these day.

B: She isn't HAPPY; she just put on a brave face. (Carston 1996: 324)

(22)a. We didn't see the hippopotamuses – we saw the rhinoceroses.(記述否定)

b. We didn't see the hippopotamuses – we saw the hippopotami.(メタ言語否定)

(Carston 1996:310, 表記方法一部修正)

(23) A: Did you see the hippopotamuses in the zoo?

B1: We didn't see the hippopotamuses – we saw the rhinoceroses. (メタ表示否定)

B2: We didn't see the hippopotamuses – we saw the hippopotami. (メタ表示否定)

Carston のメタ表示否定の適用範囲がここまでに及ぶ。→ 次のような疑問が生じる。

(24)① メタ表示否定でない否定は存在するのか。あるいは、メタ表示否定でない否定は具体的にどのようなものか。

② 否定はどのような場合においても真理関数演算子であるという主張は、(1)に示した論理学の否定の定義と抵触しないのか。

(24)①の疑問に関して、否定の古典的研究である Givón(1978)を引用するのは意味があるように思われる。この趣旨は、その思考の持ち主が聴者に限らない場合にも拡大すると、まさに、Carston のメタ表示否定と重なるように思われる。ならば全ての否定文は、或いは少なくともほとんどの否定文がメタ表示否定であることになるのではないか。

(25) [N]egatives are uttered in a context where corresponding affirmatives have already been discussed, or else where the speaker assumes the hearer's belief in -- and thus familiarity with -- the corresponding affirmative. (Givón 1978: 109)

(24)②の「否定はどのような場合においても真理関数演算子であるという主張は、(1)に示した論理学の否定の定義と抵触しないのか」について考えよう。

論理学における否定の定義が、否定は「その真理値が否定の作用する単文の真理値の反対であるような複合文を作るのに用いられる」ものである。しかし自然言語の否定には、既に見たように真理条件ではないものを否定しているように思われる例がたくさんあった。つまり一見自然言語の否定は多義であるように見えるのである。この事実直面し、(5)に示した Grice の精神に従った結果、Horn は、否定は語用論的に多義である、という結論に行き着かざるを得なかったと思われる。語用論的に多義であると主張する背景には、意味論的には単義である、と考えていることを示唆する。Grice の精神に従うのであれば、それは論理学の否定と同じ、つまり真理関数演算子である、ということになるが、この立場を取る Carston を厳しく非難しているので、Horn の考える自然言語の否定の意味論的意味は何であるのかは不明である。

一方 Carston は、否定の意味論的意味について、全ての場合において例外なく、真理関数演算子であると強く主張する。Horn のいう記述否定においてもメタ言語否定においても、否定

辞そのものは同じであって、異なるのは、その否定辞の作用域にあるものの性格なのだと思う。実際、この点については、Horn も異議を唱えていないし、経済性の視点から見ても、否定の意味が多義ではなく単義であるほうが望ましい。問題は、その単一の否定の意味というのが何か、という点である。

Horn(1989)は、(26)のように Carston を厳しく非難している。

- (26) "We are now back to the ultimately incoherent view that negation is invariably a truth function -- even when it takes as an argument the 'echoic use of language'. If there is no category mistake here, there is at the very least a good deal of explaining to do, since Carston is forced by her neomonogism to propositionalize every target of metalinguistic negation, from grammatical usage to phonology, from register to musical technique. Occam's razor cuts more ways than one; when we bear in mind what a truth function must be a function of, we recognize the implausibility in the view that negation is invariably truth-functional." (Horn 1989: 434)

そもそも、発音や形態などは本来的に命題形式の構成要素になれないわけではない。

- (27) The British pronunciation of 'tomato' is not tom[eiDou]; it's tom[a:tou]

- (28) The correct plural of 'mongoose' is not 'mongeese' but 'mongooses'.

Carston は(29)のような発話の命題形式を(30)のようなものだと反論している。

- (29) I don't eat tom[eiDouz]; I eat tom[a:touz].

- (30) not (I eat what is properly called 'tom[eiDouz]'); I eat what is properly called 'tom[a:touz]' (Carston 2002: 301)

しかし、次のような内包・焦点に関わる例や、音楽のテクニックに関わる例になると、途方にくれてしまう。

- (31) I'm not his daughter – he is my father. (=8f)

- (32) It's not [あるやり方でピアノを弾く]; it's [別のひき方をする]

Carston の「否定は例外なく真理条件的である」という主張に決定的に欠けていると思われる点は、その否定辞が否定しているのが何の真理条件か、という視点である。not がつく前の形の発話や思考の真理条件を考えなければならない。否定辞が否定するのは、当該の否定文の元になる(多くの場合)肯定文の真理条件であり、関連性理論の用語で言えば、attributed utterances or thoughts の真理条件である。

(27)(ここでは(23B)として繰り返す)のような娘と父親の例が適切に現われるのは(33)のような文脈だろう。例えば、A は大学の若手教官で、新入生の中に高校時代の恩師の先生に似た学生 B を見つけ、「君は、私が高校時代に英語を教わった吉岡先生にとってもよく似ている。きっと君は彼のお嬢さんでしょう」と言ったところ、B はちょっと生意気で「私は彼の娘なのではありません。彼が私の父なんです」と反応したような状況である。

- (33) A: You look a lot like Mr. Yoshioka, who taught me English at high school.

You must be his daughter.

- B: I'm not his daughter -- he's my father. (=8f)

このとき、(33B)の *I'm not his daughter* という否定文は、(33B)の後半の発話を否定している。別の言い方をすると、(33B)の *attributed utterance* は(33B)の後半の発話 *You must be his daughter* である。この「君は彼のお嬢さんである」という命題の真偽は、B と吉岡先生が父と子に関係にあるかどうかによって決まり、A はそれを意図して発話している。しかし B の *I'm not his daughter* はその外界における B と吉岡先生の客観的関係を否定しているものではない。つまり、先行発話の真理条件を否定してはいないのである。(34)に挙げたような他の例についても同様のことが言える。

(34) A: So, you [mi'æn i j d] to solve the problem.

B: No, I didn't [mi'æn i j] to solve the problem – I [mæn i j d] to solve the problem.

(35) Johnny: Grandpa is feeling lousy.

Mother: Grandpa isn't feeling lousy, Johnny, he's just a tad indisposed.

(36) A: Now, we're halfway there.

B: We're not halfway there; we've got halfway to go.

(37) A: I heard that you eat tom[eiDouz] around here everyday this season, since this is a center for the production of them.

B: We don't eat tom[eiDouz] around here everyday; we eat tom[a:touz] everyday.

Carston は、否定の作用域にあるものがメタ表示であるかどうか(エコーイックであるかどうか)がメタ表示否定かどうかの第 1 の判断基準であり、次の下位区分メタ言語否定かメタ概念否定かの分類基準は否定されているものが形式か概念かである。従って、先行発話或いは *attributed utterances or thoughts* の真理条件が否定されるかされないかという点は、彼女の分類基準には存在しない。そう言う意味で、論理学の真理値を逆転させるものであるという否定の定義と Carston の「否定の意味は例外なく真理関数的である」という主張に、幾分かのずれがあるように感じられる。この点について、今までのところ、私の知る限りでは Carston は何も述べていない。

Horn も Carston も Grice の精神、即ち否定に関して言うと「自然言語の否定は論理学の否定と同じである」という前提に苦しんでいるように思われる。それを疑ってかかる余地はないのだろうか。次節では、自然言語の否定の意味の可能性について考えてみよう。

3. 自然言語における否定の意味の可能性

3.1 概念的 vs. 手続き的

否定は命題内容に貢献することができ、その意味は概念的である。

(38) A: It began to rain.

B: No, it's not raining; the sound is caused by the strong wind.

3.1 アドホック概念による分析の可能性

関連性理論では、発話の論理形式を命題形式に発展させる際に、アドホック概念形成が関わると考える。

(39) [O.J.Simpson 事件の裁判で]

Kato: He was upset but he wasn't upset.

(表出命題: Simpson was [upset*] but he wasn't [upset**])

(40) [部屋を出ていった女性に言及して] The *wilting violet* has finally left.

Carston の「否定は例外なく真理関数的である」という主張を維持する一つの方法

→ Horn のメタ言語否定: その真理値に作用という定義特性がなくなったアドホック概念。

(41) I'm not his daughter – he is my father.

(=33B)

(表出命題: not*(B is Mr. Yoshioka's daughter) -- Mr. Yoshioka is B's father.)

だが、この分析は、メタ言語否定の概念はコード化されている概念とは異なるものになっているということを意味し、Carston の(42)の記述否定でもメタ言語否定でも否定辞の性格はまったく同じであるという主張と結局矛盾することになる。

(42) "...what distinguishes metalinguistic (or echoic) from descriptive negation is not the way in which the operator itself functions or is understood, but is rather the presence of metarepresented forms or contents in its scope." (Carston 2002: 301)

3.1 真理値を越えた一般的意味を持つ可能性

4. 結語

参考文献

Allwood, Jens, Lars-Gunnar Anderson and Osten Dahl (1977) *Logic in Linguistics*. Cambridge: Cambridge UP.

Burton-Roberts, Noel (1989) "On Horn's Dilemma: Presupposition and Negation," *Journal of Linguistics* 25, 95-125

Carston, Robyn (1996) "Metalinguistic Negation and Echoic Use," *Journal of Pragmatics* 25, 309-330.

Carston, Robyn (1998a) "Negation, 'Presupposition' and the Semantics/Pragmatics Distinction," *Journal of Linguistics* 34, 309-350.

Carston, Robyn (1998b) *Pragmatics and the Explicit-Implicit Distinction*. Ph.D dissertation, University of London.

Carston, Robyn (2002) *Thoughts and Utterances – The Pragmatics of Explicit Communication*. Oxford: Blackwell.

Chapman, Siobhan (1996) "Some Observations on Metalinguistic Negation," *Journal of Linguistics* 32, 387-402.

Foolen, Ad (1990) "Metalinguistic Negation and Pragmatic Ambiguity: Some Comments on

- a Proposal by Laurence Horn," *Pragmatics* 1, 217-237.
- Geurts, Bart (1998) "The Mechanism of Denial," *Language* 74, 274-307.
- 東森勲・吉村あき子 (2003) 『関連性理論の新展開 - 認知とコミュニケーション-』 東京：研究社
- Horn, Laurence (1985) "Metalinguistic Negation and Pragmatic Ambiguity," *Language* 61, 121-174.
- Horn, Laurence (1989, 2000²) *A Natural History of Negation*, Chicago: Chicago Press.
- Horn, Laurence (1992) "The Said and the Unsaid," *SALT* II, 163-192.
- Sperber, Dan and Deirdre Wilson (1986, 1995²) *Relevance: Communication and Cognition*, Oxford: Blackwell.
- Wilson, Deirdre (1999) "Metarepresentation and Linguistic Communication," *UCL Working Papers* 11, 126-161.
- 吉村あき子 (1999a) 『否定極性現象』, 東京：英宝社.
- 吉村あき子 (1999b) 「メタ言語的否定をめぐる論争」, 『英語青年』, 第 145 巻 第 1 号, 41, 研究社.
- 吉村あき子 (1999c) 「関連性理論の動向」, 『英語青年』, 第 145 巻 第 4 号, 231, 研究社.
- Yoshimura, Akiko (2000a) "The Target of Metalinguistic Use of Negation —A Unified Characterization from the Cognitive Processing Point of View—," 『学習院大学文学言語共同研究書紀要』 第 24 号, 109-118, 学習院大学.
- 吉村あき子 (2000b) 「メタ言語否定と関連性理論」『英語青年』, 第 146 号 第 7 号, 438-439. 東京：研究社.
- 吉村あき子 (2000c) 「日本語の否定環境」, 『藤井治彦先生退官記念論文集』, 961-972, 東京：英宝社.
- 吉村あき子 (2001a) 「メタ言語否定の否定対象に関する考察 —認知処理プロセスにおける統一的規定の可能性—」, 『研究年報』, 第 44 号, 51-66, 奈良女子大学文学部.
- Yoshimura, Akiko (2002) "A Cognitive-Pragmatic Approach to Metalinguistic Negation," *Proceedings of the Sophia Symposium on Negation*, ed. by Yasuhiko Kato, pp. 113-132, Sophia University, Tokyo.
- 吉村あき子 (2004) 「一般的会話の含意とメタ言語否定」『言葉のからくり -- 河上誓作退官記念論文集--』 pp. 617-630, 東京：英宝社.

〒630-8506 奈良市北魚屋西町
 奈良女子大学文学部言語情報学講座
 吉村あき子
akikoy@cc.nara-wu.ac.jp

「けど」の終助詞的用法について：聞き手に対する効果の観点から

横森大輔

京都大学大学院人間・環境学研究科

yokomori_daisuke@yahoo.co.jp

1. はじめに

日本語の接続助詞「けど」が終助詞的に使用される現象について考察する¹。(以下、引用元を示していない例文は発表者の作例である。)

(1)a.君が婚約したって聞いたけど。

b.君が婚約したって聞いた。

(2)a.山田さんに電話だけど。

b.山田さんに電話だ。

(3)a.腹が立つんだけど。

b.腹が立つんだ。

本来「けど」は接続助詞であり、上記における a.の発話は命題内容の点では不完全、文法的に破格な発話であるが、特に話し言葉において、頻繁に使用されている。上記 a.と b.とは異なる語用論的效果を持つ、といえる²。以下に、本発表の論旨を簡単に述べる。

- ・発話は命題を伝達する機能の他にも複数の機能が総体を成しているおり、それらの機能はより前景化するものと、そうでないものに分化している。
- ・「けど」には、接続助詞用法と終助詞用法のいずれにおいても2つの機能（接続機能と評価機能）が共通に存在しており、用いられる環境に応じて、それらの内でどちらの機能がどの程度前景化するかが変化しており、多様な用法はその結果としてあらわれたものである。
- ・そして、後件が発話されないという環境になり、「Pけど」という形式になった場合、〈Pに関して、自分の想定と聞き手の想定は異なるものである〉と表明する効果を持つ。
- ・接続助詞的用法においては命題に関わる指示的機能が前景化し、終助詞的用法においては情動的機能・

¹ 今回「けど」を分析の対象としているが、「けれども」、「けれど」などに対して、「けど」に特別の重要性があるというわけではない。より話し言葉的であるためにより多様な使用が観察できるであろう、という直感に基づく。

² 倒置や省略といった命題に還元した説明では、その効果の違いを説明できない。以下の a.と b.は命題のみに注目すれば等価な発話だが、談話における振る舞いは異なる。

a.ついやってしまった。悪いとはわかっていたけど。

b.悪いとはわかっていたけど、ついやってしまった。

働きかけの機能が前景化する。

2. 先行研究とその問題点

森田(1980)、水谷(2001)といった従来の研究では、「けど」を文末に用いた発話の意味特性の分類・記述を試み、「婉曲さ・丁寧さ・謙虚さを表す」、「疑問・不安・自信の無さ・不本意さ・不満足さを表す」、「未定の事実に期待したり、事実とは逆の事態を希望する気持ちを表す」、「相手の発言を期待・相手の反論を予期する」、などと指摘している(森田(1980):136、水谷(2001:113-119))。

実際これらの指摘は、(1)～(3)a.の効果に関する直感に合う。しかし、論理的に逆の命題をつなぐといういわゆる逆接用法と話し手の心的態度に関わる用法がどう関係しているのか、また接続助詞用法と終助詞的用法では何が効果の違いを生じているのか、といった点において理論的一般化が必要である³。

中心的用法と派生的用法のそれぞれを独立したものとして扱い、「けど」という語彙にいくつもの別々の意味を認めるアプローチには限界があるといえる。

「けど」には、接続助詞用法と終助詞用法のいずれにおいても共通する機能があり、という「けど」の用いられる環境(例えば後件が発話されるか、されないか、など)に応じて、その機能が異なった表れ方をすると考えることで、「けど」という表現の多様性に対してより一貫した説明が可能になるはずである。

3. 本発表の理論的枠組み：発話機能の前景化・背景化

「けど」の終助詞的用法に語用論的な効果があるということは、話し手や聞き手といった要因に注目する必要があるといえる。今回、Jakobson(1960)の論に基づき、話し手や聞き手を含めたコミュニケーション行動全体の中で、言語表現と機能の関係について考察する。

Jakobson は、言語的コミュニケーションには6つの構成要因があり、それぞれに貢献するような機能が存在する、と考えた。それは指示的機能(referential/denotive/cognitive function)、情動的機能(expressive/emotive function)、働きかけ機能(conative function)、交感的機能(phatic function)、詩的機能(poetic function)、メタ言語機能(metalinguistic function)である。

これに関して Jakobson の主張で注目すべきは、唯一つの機能しか果たさないような言語メッセージは無く、言語表現の多様性は、「諸機能の相互の階層的順位の異なり」によるものである、と唱えている点である。ただし、多くの発話において、主要であるのは指示的機能である、とも述べている(Jakobson (1960: 邦訳 185-194))。

多くのメッセージで主要であるのは指示的機能である、と Jakobson が主張するように、発話の諸機能は同等の重要性を持つわけではない。

³ Itani(1992)、Ohori(1995)、Ohori(1997)、大堀(2004)、尾谷(2003)などは今回扱う現象に対する理論的アプローチである。これらに対する本発表の位置づけについては、今後の課題としたい。

一般に事態認知の際、対象はより際立つ部分と相対的に背景化する部分に分化する。同様に発話の処理においても、相対的に際立つ機能は前景化し、その背景には必ず他の機能が存在している。

例えば、真理値が付与できる陳述文のような発話は、指示的機能が前景化している発話である。また、命令形を持つ発話は働きかけ機能が強く前景化しており、それに比較した場合において、間接的な依頼の発話は働きかけ機能の際立ちが相対的に低いといえる。

(4)彼は走っている。(指示的機能)

(5)へえ！(情動的機能)

(6)走れ！(働きかけ機能)

(7)いま走れますか？(指示的機能・働きかけ機能)

(8)僕は走りたい！(情動的機能・指示的機能)

(9)君に走って欲しい！(情動的機能・働きかけ機能・指示的機能)

4. 「けど」の機能について：逆接表現の認知的考察

本節では、以上のような観点から「けど」の機能を考察する。「けど」という語は、複数の機能が関わっているとすると、より妥当な分析のできる例である。

以下に詳しくみるように、「けど」は水準の異なる2つの機能を持つと考えられる。第一は、二つの事態が共起するものとして結ぶ、「接続機能」である。第二は、その二つの事態を通常は共起しないものとして評価付ける、「評価機能」である。この第二の機能は、話し手の二つの事態の関係に対する心的態度の表明ともいえる。

4. 1 接続機能：二つの事態が共起しているものとして関係づける機能

第一は、その前後に示された二つの事態を結びつける機能である。Jakobson の言う指示的機能に含まれる。

この機能は連言 (conjunction) の接続表現一般 (英語でいえば、and や but) が共有している。形式論理的知見が、有益な示唆を与える⁴。つまり、and と but は真理条件的に同値であり、これは客観世界においては「P and Q」も「P but Q」も、等しく「P と Q が共存している」ことを示している。接続助詞としての「けど」は「P けど Q」の形式で用いられて、P および Q が共起しているものとして接続関係を結ぶ機能を持つ。

4. 2 評価機能 二つの事態を二項対立的に評価づける機能

第二は、二つの事態の関係を評価し、接続のタイプを指定する機能である。Jakobson の言う情動的機能に含まれる。

⁴ 山梨(1985)、甲田(2001)などに指摘されるように、形式論理学を自然言語の意味の分析にあてはめるのは誤りであるが、形式論理学そのものが誤った分析をしているわけではない。むしろ、接続表現のある一つの側面を明らかにする。

この水準において、他の接続表現に対して、「けど」固有の意味があらわれる。「けど」はどのように P と Q の関係を評価し、どのような接続タイプに指定するだろうか。

(9)事態の共存に対する話し手の心的態度のあり方としては、二つの方向性が考えられる。一つは、事態がいつも共存するというものであり、もう一つは、通常は共存しないことへの意外性や驚きである。逆接の関係は通常は共存しないことへの話し手の意外性や想定はずれを含むものであり、話し手の心的態度を含むものである。(甲田(2001: 68))

一般に、逆接の表現は話し手の心的態度が関わっている⁵、といえる。「けど」の接続関係は、二つの事態が通常は共起しないものという話し手の心的態度を表すものとして一般化できる。以上が、「けど」の第二の機能である評価機能である。

これらの接続機能と評価機能は、「けど」が文末に用いられた場合も同様にはたらいっているはずである。

4. 3 接続助詞用法の事例分析

このような観点から接続助詞用法の事例の分析を試みることで、議論の妥当性を検証する。(10)~(15)の例は、先行研究 (Lakoff(1971)、森田(1980)、渡部(1995a,1995b)、水谷(2001)) においてあげられている逆接のタイプを発表者がまとめたものである。これらは「けど」の持つ別々の用法ではなく、共通の機能(接続機能と評価機能)が、「けど」の前後の発話内容に応じて多様な表れ方をしたものとして統一的に説明できる、⁶といえる。

(10)オサムの髪はすごく長いけど、ナオキはすごく短い。(意味的な逆接:否定辞・反意語の使用)

(11)オサムの髪は金色だけど、彼はまじめな社員だ。(推論的な逆接:前件の含意の、後件での否定)

(12)オサムの髪は金色だけど、ナオキは真っ黒だ。(対比)

(13)オサムも横浜出身だけど、ナオキもそうだ。(並列・累加)

(14)ナオキのことなんだけど、彼は結婚してるのかな。(話題展開)

(15)オサムから聞いたんだけど、ナオキは結婚してるんだって。(情報源提示)

「P ケド Q」という発話は、他の多くの言語表現と同じく、指示的機能が前景化している発話である。しかし、逆接表現には話し手の心的態度が反映されているという点で、情動的機能も比較的強い。二つの命題を連続して発話した(16)と、二つの命題の間を「けど」で接続した(11)とを比べると、後者の方が情動的機能が強いことがわかる。

(16)オサムの髪は金色だ。彼はまじめな社員だ。

5. 「P ケド」における語用論的効果

⁵ 同様の指摘が Sweetser(1990 :100-104)、Traugott (1982: 254-255,269)にみられる。

「けど」という表現には、接続機能と評価機能という二つの機能が存在する、ということをこれまでにみた。終助詞の用法、すなわち後件を述べずに発話ターンを終了するという形式（「Pケド」）になったとき、以上で検討した二つの機能を基盤として、固有の語用論的效果が表れると考えられる。

第一に、接続機能に基づき、Pに示される事態が、他の何らかの事態と共起していることを示す。この場合、話し手は発話ターンを終えているので、接続関係を結ばれるのは「その発話の後に続くはずの聞き手の反応」である。終止形で言い終えるようないわば規範的な文の発話に比べて、聞き手に対する働きかけの機能が強くなる。

第二に、評価機能に基づき、Pに示される事態と、（後に続くと予想される）聞き手の反応とが、通常は共起しないものとして評価付けられる。ただし、発話の時点で実際の聞き手の反応は現れていないので、この場合の「聞き手の反応」とは、話し手がそれまでの談話の流れから予測したものである。つまり、「発話時点において聞き手がどのような想定を持っているのか」について言及している、といえる。

総合すると、「Pケド」という発話形式は、〈PまたはPの含意に対して、経験的に予想される聞き手の反応は、対立するだろう〉、〈Pに関して、私の想定とあなたの想定は異なっている〉と表明する機能を持つ、といえる。

評価機能 → 情動的機能が強い

接続機能 → （後件を発話しない結果） → 働きかけの機能が強い

全体として対人関係的な機能が前景化し、命題的な機能が背景化している。

以下に具体的に事例を分析する。【 】に表されるのが、「Pケド」の発話による語用論的效果である。

(17)婉曲的な提供

彼女は何も言わずに黙々と食べていた。私は酒をすすめてみたが、彼女は要らないと言った。

「その厚あげ、ちょっとくれる？」と彼女は言った。私は半分残った厚あげを彼女の方に押しやって、ウィスキーだけを飲んだ。

「もしよかったら御飯と梅干しがあるし、みそ汁もすぐに作れるけど」と私は念のためにたずねてみた。

「そういうの最高だわ」と彼女は言った。（村上春樹『世界の終わり』とハードボイルド・ワンダーランド』）

→【あなたは望まないかもしれないが、私は食事を提供する意思がある】

(18)婉曲的な意見の表明

「だって君だって、大学へは行くだろ。行かない勇気はないだろ」

青山さんは切り込んで来た。

「ねえ、キザな返事していいかな」

太郎は言った。

「どんなふうにもキザなんだ」

「ぶん殴られそうにキザなんだよ」

「言ってみろよ。ぶん殴らないから」

「僕ね、この頃、学問、本当に好きになって来ちゃったんだ。だから……つまり勉強するのが、何だか好きになっちゃったから、オレ、大学へ行っても、いいんじゃないか、って、思う、んだ、けど」

(曾野綾子『太郎物語』)

→【あなたは賛成しないかもしれないが、自分が大学に行く積極的な理由がある、と私は思う】

(19)不安感の表明

「——疲れちゃった、私」

と、伸子は言った。

「何だい、いつになく弱気じゃないか」

と、昌也が微笑む。

二人は、昌也の、安くて量があるという主張の下に、中華料理店へ入っていた。「私なりに精一杯やったつもりなんだけど……」

「そうさ。よくやってるじゃないか」

(赤川次郎『女社長に乾杯！』)

→【あなたは賛成しないかもしれないが、私は自分が精一杯やったと信じている】

(20)疑問

自分の盗作をたなにあげ、東作くんは、復讐の鬼になった。そのとき、ドアをトカトントンとノックするものがある。

ドアをあけると、速達の配達人だった。なにごとならん？ と復讐の鬼は差出人をみた。そこには「クサキサンスケ警察長官」とあった。

「はてなあ」

復讐の鬼はすこし不安になって呟いた。

「おれ、あのあとべつに盗作やってないし、警察によばれるおぼえないんだけど」(井上ひさし『ブンとフン』)

→【(仮想的な)聞き手は賛成しないかもしれないが、私は警察によばれるおぼえはない】

(21)自分の先行発話の補足

「結婚してるの？」と娘が訊ねた。

「結婚していない」と私は言った。「昔はしてたけど、今はしていない」

「計算士になったせいで離婚したの？ みんなよく計算士には家庭は持てないって言うけど」

(村上春樹『世界の終わりとハードボイルド・ワンダーランド』)

→【質問をしたのは、私にそういう思い込みがあるからだともあなたは思うかもしれないが、私には依拠した情報源がある】

以上のように、「Pケド」という形式の発話は、それまでの談話の文脈とPの内容に応じて、提供、意見表明、態度表明など、様々な効果を持つ発話となることがわかる。自分の望んでいること（P）が、聞き手に反対されるかもしれない、といわば予防線をはることで、逆に円滑に会話を進行させる効果を持っている。

6. まとめ

型 機能	「PケドQ」型 (接続助詞用法)	「Pケド」型 (終助詞用法)
〈接続機能〉 (→指示的機能)	前景	背景
〈評価機能〉 (→対人関係に関わる機能)	背景	前景

接続助詞である「けど」が終助詞的に使用された場合、話し手の心的態度の表明、および聞き手への何らかの反応の期待といった語用論的效果が生じる。

このような用法は、中心的用法（＝逆接）から独立した派生的用法として捉えるべきではない。「けど」には、接続助詞用法と終助詞用法のいずれにおいても共通する機能があり、〈後件が発話されるか、されないか〉という「けど」の用いられる環境に応じて、その機能が違った表れ方をする。

一般に特定の言語表現が多様な働きをするのは、独立した複数の用法を持っているからとは限らない。どのような言語表現も、幾つかの機能を複合的に持っており、そのうちのどの機能が前景化するかによって、その発話の表面的な特徴的機能が決定される。

「けど」の場合、水準の異なる2つの機能を持つ。第一は、二つの事態を共起するものとして結ぶ、「接続機能」である。第二は、その二つの事態を通常は共起しないものとして評価付ける、「評価機能」である。この第二の機能は、話し手の二つの事態の関係に対する心的態度の表明ともいえる。

そして、後件を述べずに発話ターンを終了するという形式（「Pケド」）をとったとき、この二つの機能を基盤として固有の語用論的效果が表れる。まず、接続機能に基づき、Pに示される事態が、その発話後に続くはずの聞き手の反と接続関係を結ばれる。また、評価機能に基づき、Pに示される事態と聞き手の反応とが、通常は共起しないものとして評価付けられる。

「Pケド」の語用論的效果とは、〈PまたはPの含意に対して、経験的に予想される聞き手の反応は、対立するだろう〉、〈Pに関して、私の想定とあなたの想定は異なっている〉と表明し、聞き手の反応を何うというものの、つまり情動的機能と働きかけの機能の前景化として特徴付けられる、といえる。

参考文献：

- 大堀壽夫(2004).「文法化の広がりと問題点」,『言語』,vol.33,no.4,pp.26-33.
- 尾谷昌則(2003).「主体化に関する一考察：接続詞「けど」の場合」,『日本認知言語学会論文集』,vol.3,pp.85-94.
- 甲田直美(2001).『談話・テキストの展開のメカニズムー接続表現と談話標識の認知的考察』,風間書房.
- 本多啓(2001).「文構築の相互行為性と文法化ー接続表現から終助詞への転化をめぐるー」,山梨正明他(編),『認知言語学論考 No.1』,pp.143-183,ひつじ書房.
- 水谷信子(2001).『続日英比較 話しことばの文法』,くろしお出版.
- 森田良行(1980).『基礎日本語 2』,角川書店.
- 山梨正明(1985).「自然論理と推論プロセス」,坂原茂『日常言語の推論』,pp.169-186.東京大学出版会.
- 渡部学(1995a).「ケド類とノニ逆接の接続助詞」,宮島達夫・仁田義雄(編),『日本語類義表現の文法(下) 複文・連文編』,pp.557-564,くろしお出版.
- 渡部学(1995b).「ケレドモ類とシカシ類ー逆接の接続助詞と接続詞ー」,宮島達夫・仁田義雄(編),『日本語類義表現の文法(下) 複文・連文編』,pp.593-599,くろしお出版.
- Itani, Reiko(1992). "Japanese conjunction *kedo* ('but') in utterance final use: a relevance-based analysis", *English Linguistics* 9, pp.265-283.
- Jakobson, Roman(1960). "Closing Statement: Linguistics and Poetics", T.A.Sebeok(ed.), *Style in Language*, Cambridge: Cambridge Univ. Press. (中野直子(訳)(1973).「言語学と詩学」,川本茂雄(監修)『一般言語学』,みすず書房.)
- Lakoff, Robin(1971). "If's, and's and but's about conjunction", Charles J. Fillmore and D. Terence Langendoen (eds.), *Studies in Linguistic Semantics*. pp.115-149. New York: Holt, Rinehart and Winston.
- Otori, Toshio(1995). "Remarks on suspended clauses: a contribution to Japanese phraseology", in Shibatani and Thompson (eds.) *Essays on Semantics and Pragmatics*. pp.201-218, Amsterdam: John Benjamins.
- Otori, Toshio(1997). "Framing effect in Japanese non-final clauses: toward an optimal grammar-pragmatics interface", *BLS* 23. pp.471-480.
- Sweetser, Eve E.(1990) *From Etymology to Pragmatics: Metaphorical and Cultural Aspects of Semantic Structure*. Cambridge: Cambridge Univ. Press. (澤田治美(訳)(2000).『認知意味論の展開 語源学から語用論まで』,研究社.)
- Traugott, Elizabeth Closs(1982). "From propositional to textual and expressive meanings: some semantic-pragmatic aspects of grammaticalization". Winfred P. Lehmann and Yakov Malkiel(eds.), *Perspectives on Historical Linguistics*. pp.245-271. Amsterdam: John Benjamins.

推意の固着と強さ

—日本語の慣用句と受動構文を例に—

加藤 重広*

本発表は、主に日本語を例にこれまで語の固有の意味、あるいは、構文の固有の意味と見なされることの多かったものについて、予想される解釈の取り消しが可能であるという状況を踏まえて、「推意」としての意味を想定して説明することを提案するものである。

1. 「推意」の扱い

「推意」は、ここでは *implicature* の訳語として用いる。「推意」の概念は、研究の枠組みや立場での違いが相当に大きいことに加えて、個々の研究者での違いもある。ここでは、Levinson(2000:15)の挙げる会話の推意(*conversational implicature*)の特質を参考したい。(なお、田中廣明(2002)も参考にした。)

- ・ 取り消し可能性(*cancellability*)…前提の付加により推論を無効にできる。
- ・ 非分離可能性(*nondetachability*)…コード化された内容が同じ表現であれば同じ推意を伝えることになる。
- ・ 計算可能性(*calculability*)…合理性のある会話がなされることに伴う諸前提からの推論にはそれなりの透明性がある。
- ・ 非慣習性(*nonconventionality*)…推論にはコード化されていないところがあるが、コード化された内容には依存する。

ここでは特に「取り消し可能性」に着目して推意を捉えることにする。すなわち、ごく単純に「推意は取り消し可能である」という原則を出発点にする。しかしながら、「取り消し可能」という特性を細かに見てみると、それほど単純なものではないと考えられることから、取り消し可能性の段階性について、慣用句⁽¹⁾についてその推意を考察するところから始めたい。

* 富山大学人文学部言語学コース (助教授)。e-mail: kato@hmt.toyama-u.ac.jp

⁽¹⁾ 「常套句」(*cliché*)という言い方のほうがより正確かもしれないが、以下では「慣用句」と「常套句」を区別しないで用いる。

2. 取り消し可能性と慣用句

推意の特質は、文脈から一般的に引き出される推論であって、論理的な含意(entailment)とは異なり、取り消し可能である点である。

- 1) 姉は来月花嫁衣装を着ることになっている。
- 2) 姉は来月結婚することになっている。

一般に(1)は(2)の意味に理解される。慣用句あるいは常套句の成立には、推意と見てよい推論のしくみが関わっていると考えられる。(1)の下線部は、metonymical あるいは synecdochical な比喻でもあるが、語用論的に見れば「花嫁衣装を着る」ことが即ち「結婚する」ことと同義でないことから、(2)は(1)の推意として得られると考えることができよう。また、(2)は(1)が成立する場合でも(3)に見るように取り消しが可能である。

- 3) 姉は来月花嫁衣装を着ることになっている。モデルという職業も大変だ。ブライダルフェアでずっと打ち掛けやウェディングドレスを着なくちゃならないんだから。

常套句・慣用句のなかには(1)のように、推意の取り消しが容易なものがある一方で、そうでないものもある。

- 4) その映画を見終えた和子は、真っ赤な目をしていた。
- 5) 和子はその映画を見て感動して泣いた。
- 6) その映画を見終えた和子は、真っ赤な目をしていた。彼女は、目が乾燥しやすく、長時間スクリーンを見ていると目が充血してしまうのだ。

(4)は(5)の推意が得られるが、これは(6)に見るようにキャンセルは容易である。しかし、(7)は(8)の推意を得ることになるが、取り消す解釈は行いにくい。(9)は(8)を取り消す例であるが、自然に成立するとは言えないだろう。

- 7) 【高校野球の結果を伝えるニュース】K高校は、1点差に涙しました。
- 8) K高校は1点差で負けた。
- 9) K高校は、1点差に涙しました。乱打戦でしたが、この試合に勝ったK高校は、決勝戦に進むことになります。K高のナインは、1点差で競り勝ち、みんなうれし涙を流しています。

- 10) 大規模な爆発事故があった。事故に巻き込まれた○山△吉さんは、昨夜遅く無言の帰宅をした。
- 11) 被害者は死亡した。
- 12) 大規模な爆発事故があった。事故に巻き込まれた○山△吉さんは、昨夜遅く無言の帰宅をした。奇跡的に救出された○山さんは、軽傷で済んだものの、事件のショックが大きく、当時の状況を全く語ろうとはしなかった。
- 13) 来年の春には、うちの息子も京大の学生証を手に入れていることだろう。
- 14) うちの息子は来春京大に合格する。
- 15) 来年の春には、うちの息子も京大の学生証を手に入れていることだろう。従兄弟がいなくなった昔の学生証をくれるというのだ。

(10)で「無言の帰宅」が常套句として「遺体が自宅に戻る」の意であるならば、(11)は前提的に成立していなければならないことになる。(12)のようにすれば、生きて帰宅しており、その際に何も語らなかったことを「無言」と表現していることになるが、これを「無言の帰宅」とすることはあまり自然とは言えないだろう。(13)は(14)を推意とすることが考えられる。(15)は成立しないことはなからうが、かなり滑稽で、意表を突く印象を与える。

慣用句・常套句の中には、「x点差に涙する」「無言の帰宅をする」のように推意が取り消しにくいものもあり、「花嫁衣装を着る」「○×大学の学生証を手にする」のように取り消しには相応の負担を要するものの、取り消し不可能ではないものもあり、「真っ赤な目をする」のようにそれほどの負担なく取り消しできる、取り消し容易なものなどが見られる。

推意が取り消しできない状況であれば、それはそもそも推意の条件を満たさないことになる。しかし、推意の取り消しは、可能か不可能かといった離散的な特性と見なすべきではなく、推意の取り消しにくさ、推意キャンセルにかかる負担という連続的な軸を想定すべきであることは、以上から確認できる。

推意が取り消しできない状況を加藤重広(2004)では「推意の固着」と呼んでいるが、もしも取り消し不可能なのであれば、それは推意ではなく、その句に固有の意味ということになる。Levinson(2000)は、GCIをデフォルトの解釈としているが、これは加藤重広(2003)でいう「無標の解釈」に近い。加藤(2003)では、その解釈を得るのに文脈をあつらえるなどの負担がない(か、最も負担が少ない)ものを「無標の解釈」とし、無標の解釈以外の(有標の)解釈を引き出すために行う文脈のあつらえや情報の追加などを「解釈のコスト」と呼んでいる。無標の解釈は、推論計算の負荷が最も小さいものであり、この負荷が0になれば言語記号における signifiant と signifié の関係が確立すると考えられる。推意を引き出すための推論計算が反復されることで固定し、ついに固着すれば、解釈の取り消しはできなくなり、計算は不要になる。これは、推論計算のルーティン化が進んで、個別の計算処理

を行わなくなるプロセスとも考えられ、慣用など経験基盤的な意味の成立という点で認知言語学的な言語観に通底するものがあると思われる。

3. 推意と他動詞の達成性

本節では、他動詞の達成性の解釈の取り消し可能性について検証し、これを推意と見なす考え方を検討する。

- 16) 僕はおぼれたが、助けてもらった。
- 17) *I was drowned, but they rescued me.
- 18) 彼を入会するよう説得したが、彼は入会しなかった。
- 19) *I persuaded him to join our club, but he didn't join us.

(16)(17)の違いは、死ぬことを必ずしも含まない日本語の「溺れる」と死ぬことを意味に含む英語の *drown* の語彙的意味の違いとして説明すべきであろう。(18)(19)も同様だと思われる。しかし、(20)と(21)では事情が違うと思われる。

- 20) 試験に合格できました。
- 21) I could pass the exam.
- 22) 試験（を受けて、その結果、その試験）に合格した。

通例、(20)は(22)を推意とすると考えられる。これは、(23)(24)のようにすれば取り消し可能であることから、前節で言う「推意の固着」によって推意としてのステータスを喪失するところまでは行っていないと見ていいだろう。

- 23) いつも実力が出せれば、難なく試験に合格できましたよ。でも、どういうわけか、いつもの調子が出なかったんです。不合格は予想外のことでした。
- 24) あの大学なら、試験に合格できました。でも、合格しても行かないだろうと考えて、受けないことにしたんです。

本節で主に検討したいのは、有対の他動詞の達成性である。

- 25) 電気を消す。
- 26) 電気が消える。

「消す」のような他動詞では、達成性を読み取るのが普通である。これは(25)の推意として(26)が得られるということであり、「消す」の無標の解釈として働きかけの対象物が「消える」という変化を経験するということでもあろう。しかし、(26)は(27)のようにすれば、取り消すことが可能である。

- 27) 僕は電気を消したんだ。でも、スイッチがこわれていたらしくて、電気は点いたままだった。

キャンセルが容易な例もあるが、一方で、キャンセルしにくい例もある。

- 28) *僕はガラスを割ったんだ。でも、ガラスは強化ガラスだったので全く割れなかった。(cf. …割ろうとした)
29) カバーを外したんですが、ねじの固いところが一カ所あって、結局外れませんでした。

達成性が強い推意として存在する場合は、「…したが、そうはならなかった」という表現にはしにくい。推意の固着の度合いが進んでいけば、その分取り消しの負荷が増すことになるので、あらかじめ少ないコストで取り消しできるように、「…してみた」「…しようとした」「…しようとしてみた」「…することを試みた」のように言っておかないと、少ないコストで推意の取り消しが難しくなる。

関連して、意図性も推意であることが考えられるが、達成性と違い、一般的に言って、多くの場合に意図性は少ないコストでキャンセルできる。

- 30) テレビをつけた。
31) そのつもりはなかったのに間違ってテレビをつけた。
32) 木から下りた。
33) 木から落ちた。
34) 木からわざと落ちた。

もちろん、「落ちる」のように意図性がないことがデフォルトの解釈である動詞もある。

4. 間接受動構文と「迷惑性」

この節で考えたいのは、間接受動文の迷惑・被害の意味が推意としての特質を持っているのかということである。

ここでは、能動文(35)が受動化した間接受動文(36)のタイプを主に扱う。これは、[NP+VP]というVPそのものに受身マーカ(れる・られる)がついたものだと思われ、その点では自動詞に受身マーカが後接するケースと共通する特性を持っていることも考えられる(構造に関することは本発表では扱わないでおく)。

- 35) XがYを(Zに)…する
36) Zが(Xに)Yを…される

例えば、能動文(37)に対する受動文(38)がこれにあたる。(39)に対する(40)も同じように考えることにする。

- 37) 娘が佐藤さんにネクタイを贈る。
38) 佐藤さんが娘にネクタイを贈られる。
39) 先生が太郎君の絵をほめる。(Z=「山下さん」、「太郎君」は「山下さん」の身内とする)⁽²⁾
40) 山下さんが、先生に太郎君の絵をほめられる。

(38)(40)でわかるように、間接受動でも迷惑・被害の意味が皆無または希薄な例がある。しかし、典型的な間接受動文の(41)(42)などでわかるように(36)のタイプの受動文では、たいていの場合、迷惑・被害の意味が含まれる。

- 41) そのタレントが、スクープ・カメラマンに写真を撮られた。
←スクープ・カメラマンが、写真を撮った。(Z=「そのタレント」)

⁽²⁾ (36)タイプの「Zが(Xに)Yを…される」の受動文に対応する能動文で、Zが「Zに」の形では表層に現れないことを考慮して、(35)のタイプではなく、「XがZのYを…する」という能動文を想定することも可能である。これは、「満員電車で、花子がおじさんに足を踏まれた」←「満員電車で、おじさんが花子の足を踏んだ」などの派生を考えれば、わかりやすく妥当に思われる。しかし、これは「足」など所有者や帰属者が明示されることが必要な名詞句の場合に成立するものであって、固有名詞など意味上特定されている名詞句(西山佑司(2003)など言う飽和名詞句)であれば、能動文が成立しないか、不自然となる。例えば、(40)について「先生が、山下さんの太郎君の絵をほめる」は不適格であり、「三越が、高島屋に先に冬物バーゲンをやられた」も「高島屋が、先に三越の冬物バーゲンをやった」にするわけにはいかない。(35)タイプの能動文も「…してあげる」「…してやる」という形式のベネファクティブ構文にすれば成立することから、動作に《受け手》の解釈が想定されれば、「Zに」が表層に存在できることがわかる。これに対して、通常の動詞のみの文(ヤル・アゲルの複合動詞によらないもの)では、《受け手》の解釈を明示的に想定することに制約がかかると考えられる。間接受動文で、「Xに」という《受け手》表示が可能になるのは、ベネファクティブ構文の場合と並行する現象で、いずれもある事態の生起に方向性が読み取れることで受け手が表示可能になるのだと発表者はいまのところ考えている。ただし、恩恵授与的なベネファクティブ構文に対して、好ましくない事態をもたらすという違いがあるので、対比を明示するために暫定的にマルファクティブ(malfactive)構文といった名称を発表者は与えているが、ここで取り上げる間接受動文がマルファクティブ構文に包摂されるものなのかどうかについては、まだ十分に考察できていないため、別の機会を捉えて論じることによって頂きたい。

- 42) 桂子が、妹にお気に入りの服を着られた。
←妹が、お気に入りの服を着た。(Z=「桂子」)

(41)(42)では、受動文のガ格名詞句が迷惑の受け手として解釈できる。迷惑や被害の意味合いが、間接受動構文に固有のものではないことから、被害・迷惑の意味を推意あるいはそれに準ずるものと見なすことが考えられる。しかしながら、(41)(42)では被害・迷惑の意味をキャンセルすることはできない。「ありがたいことに」などと付加しても皮肉の解釈になることから、これらは被害・迷惑の意味合いを取り消せない。この点を取ってみれば、推意の条件を満たさないことになる。

- 43) ?そのアイドルが、カメラマンにカレンダー用の写真を撮られた。
←カメラマンが、写真を撮った。(Z=「そのアイドル」)
44) ?我が家では日経を講読している。今朝、私は、弟に朝刊を読まれた。
私が弟に朝刊を読まれる。←弟が朝刊を読む。(Z=「私」)

(42)は、アイドルが撮影されることが仕事の一部であることを理解し、了解していて、撮影される場合には、不適切である。(42)が不自然さなく成立するためには、「無断で」のように、動作の受け手であるガ格名詞句(=「そのアイドル」)が好ましくない事態によって迷惑を受けるという解釈にしなければならない。(44)も「朝刊」ではなく「日記」のように読まれることがそもそも好ましくないものにするか、「弟に先に朝刊を読まれた」のように好ましくない事態が明確でなければ、不自然さが残る。

このことから、被害・迷惑の意味が必須であると考えれば、間接受動文における被害・迷惑の意味は推意ではなく、構文の意味に対する制約であると考えべきであることになる。しかし、このことは、(38)や(40)のように、被害・迷惑の意味が希薄ないし皆無である場合の説明と一貫しない。

(43)が「そのアイドル」が「写真を撮られる」ことを了解していて許可・許容している場合には使えないこと、(44)も同じく、「私」が弟に「朝刊を読む」ことを許可している、あるいは事前に了承している場合には、不適切であることに着目すると、むしろ、この種の間接受動の本質は(45)にあるのではないかと、ここでは考えたい。

- 45) 間接受動構文は、受け手と解釈されるガ格名詞句の意思(意向や意志)が介在しない形で、動作が行われることを示す形式である。

この(45)のデフォルトの推意は(46)であるが、これはキャンセルできる。

- 46) 間接受動構文の受け手と解釈されるものにとって、自らの意志が介在しないことによって動作が行われることは好ましくないことであり、望まないことである。

自分の意志や意向が無視される形で生じるできごとが望ましくないということは、一般化しやすい、よくあることであろう。しかし、自分の意志が介在しなくても、贈り物を贈られたり、ほめられたりすることは、望ましいことと受け止めうる。その場合には(46)の推意はキャンセルされる。

(46)の推意が取り消されなければ(推意が有効であれば)、その構文特性を維持するために受け手を明示する必要から、「好ましくない事態」という解釈を支えるものがなければならなくなる。これが不十分であれば(43)(44)のような不自然さにつながる。

5. まとめ

本発表では、常套句・慣用句に見る推意の固着が、「取り消し可能性」が段階的な特性であることを示すものであると考え、他動詞の達成性や意図性、また間接受動構文における被害・迷惑の意味合いが本来的に推意であり、それが統語のシステムに取り込まれている可能性を検討した。

固着化した推意はその厳密な規定によれば推意ではない。そこでは、推論計算の自動化によって、別の推論計算を行うことがブロックされ、ラングにおける形式と意味の関係になっていると見ることができる。一般に GCI は、取り消す余地を残しながらも、その推論計算がある程度自動化され、ルーティンとして固定している可能性が考えられる。とすれば、推意には連続的に幾段階かのものが考えられることになるが、この点は論考を改めた。

参考文献

- 加藤重広(2003) 『日本語修飾構造の語用論的研究』 ひつじ書房
——(2004) 『日本語語用論のしくみ』 研究社
田中廣明(2002) 「書評論文 Stephen C. Levinson, *Presumptive Meanings: The Theory of Generalized Conversational Implicature*」『語用論研究』 第4号 pp.103-118
西山佑司(2003) 『日本語名詞句の意味論と語用論 一指示的名詞句と非指示的名詞句一』 ひつじ書房
Levinson, Stephen C.,(2000) *Presumptive Meanings: The Theory of Generalized Conversational Implicature*, Cambridge, Mass.:The MIT Press

日本語の非状態動詞の状態指示用法について

西田光一

東北大学大学院情報科学研究科

1. はじめに

金田一(1950)の相の分類では、日本語の動詞には状態を表す場合に必ず「テイル」を伴うとされるものがある。金田一は、この種の動詞を「第四種」と呼んで他と区別し、さらに金田一(1955)では形容詞に近いものとする。

(1) 県境に山がそびえている／親子で声が似ている

金田一(1950:49)

「この種の動詞は、いつも「一ている」の形で状態を表わすのに用い、ただ「聳える」だけの単独の形で動作・作用を表わすために用いることがないのを特色とする。「聳える」の意義は、「(一つの山が他の山に対して)高い状態を帯びる」の意であるが、「帯びる」と言ってしまうとは、以前低かったものが新たに高く成るようであらう。他の山より高い状態にある、それを「いる」という概念と、もう一つXという概念とに分析して表わした、そのXが「聳える」である。」

金田一(1950:62)

「第四種の動詞は、「ある状態を帯びる」ことを表わす動詞である。、、、第四類動詞＝状態の発端を表わす動詞」

仁田義雄(1997:235-236)

「<動き>といったカテゴリーカルな語義を持つ動詞がアスペクトを分化させている。(ル形・テイル形がアスペクト的対立でもって存在している。)、、、、<状態(-動き)>といったカテゴリーカルな語義を持つ動詞は、アスペクトを分化させていない。、、、アスペクトを持たない動詞には、、、いくつかのタイプがある。

[A]テイル形を持たないもの 有る、居る、大きすぎる [B]ル形・テイル形がアスペクト的対立をなさないもの (あの服は彼に似合う/似合っている)、違ふ、存在する [C] ル形を持たないもの すぐれている、尖っている、似ている、、、」

第四種の動詞は、それ自体では「状態の発端」を表すが、表される状態の方は変化せずに成立しており、発端の時点が問題とされないため、これらの動詞を使う時は「テイル」をつけて状態の不変化を表すことになる。とされる。

事典、美術書、旅行ガイド等の見出し付解説文の文脈では、状態の発端ではなく状態の不変化を指示するのに、この種の動詞を終止形（ル形）で使う。

- (2) 駒ヶ岳<雫石町> 火口内には女岳の中央火口岳と爆発跡がみられる。火口壁の外側、男岳北方には阿弥陀池を挟んで寄生火山女目岳がそびえる。
- (3) 千手観音坐像(京都・峰定寺) 久寿元年(1154)創建の峰定寺の本尊。、、、丸顔が円勢風をよく継いで、円信作の可能性のある西大寺十一面観音像に似る。
- (4) スリランカの南西約 700km に浮かぶモルディブ共和国。南北に約 750km、東西約 120km のエリアに 26 の環礁が浮かぶ。島は約 1200 もあり、世界屈指の美しいホワイトサンドビーチと極上の海に囲まれている。
- (5) 青山～表参道を歩く ハチの墓は青山墓地にある。ここは、地名の由来でもある青山家屋敷の跡地。岡本綺堂、尾崎紅葉、国木田独步、斉藤茂吉、、、吉田茂といった日本近代史に名を連ねる人々の墓が並ぶ。
- (6) 小樽市庁舎本館：市庁舎外観は、小樽公園の緩やかな斜面を背に、正面を東に向け左右対称である。中央には車寄せと玄関を配し、正面壁面に 6 本の角柱を建て、コリント様式を模したキャピタル（柱頭）を飾る。
- (7) 菊地序光（生没年不詳）江戸時代後期の装剣金工。菊地序克にまなび、のちに養子となって菊地家 2 代目をつぐ。柳川派の手彫りにすぐれる。

これらの文脈では、話し手が当該状態について全ての知識を持ち、聞き手は話し手の発話に接して初めてその状態を知ることになる。(4)のように、この文脈でもテイル形が使われるが、ル形はこの文脈に特徴的に使われる。文脈の種類を選ばない点でテイル形は無標、文脈の種類を選ぶ点でル形は有標である。この有標のル形を非状態動詞の状態指示用法と呼ぶ。本論では次の仮説を使って、このル形の用法を分析する。

- (8) 非状態動詞の状態指示用法では、動詞が表す発端の基準が、話し手が見た状況における状態の発端から聞き手の知識における状態の発端に移る。

2. 不変化状態を表す相と英語の唯一物指示の名詞

Leech (1987)、Mourelatos(1981)：状況の特徴を名詞の文法数の特徴に置き換え、習慣を表す相は同種の状況が反復するため複数形的であり、行為を表す相は均質な状況が続くため質量名詞的であるというように分析する。Mourelatos は“state”の相では John hates liars. のような例をあげ、これを hate のような動詞派生の不可算質量名詞に置き換える。この種の“state”は Huddleston and Pullum(2002:170)が言う Verbs of cognition, emotion, and attitude に当たる。

本論では不変化状態を表す相と英語の唯一物指示の名詞の共通性を3点指摘し、非状態動詞の状態指示用法の特徴を明らかにする。

(9-i) 両者は常に1つの特徴が成り立つものを指す。the moonのような唯一物指示の定名詞句を使うと、話し手と聞き手が別の場所にいても同じものを指示できる。不変化状態も全期間で1つであり、同種の状況が他になく、いわば「複数形」がないため、話し手と聞き手が別の時間帯にいても同じ状況を指示できる。

(9-ii) 両者は前方照応すべき不定名詞句やル形に対応するものが指示対象の世界にはない、またはその存在が問題とされない。the moon は話し手が最初に言及する時点で既に聞き手に同定可能であり、不定名詞句 a moon を受けて the moon に移った段階が問題とされない点で前方照応的用法の定名詞句とは違う。不変化状態でも、話し手が「AとBが似ている」と発話する時点で「似ている」状態が聞き手に分かり、話し手の発話以前に「似る」発端から当該状態に至った段階がない。

cf. 前方照応的用法の定名詞句 I saw a cat in the tree this morning, but when I looked this afternoon the cat was gone.

(9-iii) a half moon や a crescent moon のように唯一物指示名詞を修飾語付きの不定名詞句で使うと、当該唯一物の見え方の1つを表す。半月のように見え方が変わっても、月自体は変化せず、この見え方の時に the moon と言っても、同じものを指す。この用法の不定名詞句は全体の顕著な一部（一側面）を表す。非状態動詞を状態指示で使うと、不変化状態の全体における一部（一時点）が表される。この一時点が状態指示の発話の受理時における聞き手の「瞬間的現在」である(cf. 中右(1994: ch. 3))。

3. 「Hearer-New」の情報構造を担うル形

中右(1994: 49-51): 話し手の発話時の瞬間的現在を指すル形の思考動詞

(10) a. トムはスパイだと思う。 b. トムはスパイだと思っている。

(10b)は文脈次第で、思考主体が、トム、話し手、それ以外の人のいずれにもなるが、(10a)は思考主体が話し手の読みしかない。日本語の「(テ)イ(ル)」は状態化関数で、瞬間的現在を指すことがない。ル形を使うと、発話時の瞬間的現在を指し、「発話時点と瞬間同時に発現する心的態度のうちで、話し手にとって接触可能な情報となりうるのは話し手自身の心的態度だけである(p. 51)」という「接触可能性の原理」に合致するため、(10a)の思考主体が話し手に限られる。

中右の用語を聞き手の側に応用すると、非状態動詞の状態指示用法では、ル形は聞き手の受理時における「瞬間的現在」に向いているといえる。ル形を使う上での基準が、話し手が見た指示対象の世界での発端から聞き手の知識における発端に移る点で、この用法は、Lyons(1977:578-579)が言う *deictic projection* の一例である。

Lyons(1977:578) : 時空の基準を聞き手に合わせた発話

Problems of spatiotemporal reference arise when the participants are separated in space and time. We have only to think of the difficulties we encounter in this respect when we make a long-distance call (e. g., from Great Britain to the United States). The speaker can either adopt the spatiotemporal coordinates of his own location (greeting the addressee, let us say, with *Good afternoon!*) or he can project himself into the spatiotemporal location of the addressee (saying *Good morning!*).

不変化状態を指示する発話は3層構成をなす。

- 1 : 地形などの指示対象としての状態
- 2 : その指示対象について発話する話し手の知識としての状態
- 3 : その発話に接し、その状態を知るようになる聞き手の知識としての状態

本論の主張

- (11) 話し手が自分と指示対象の関係にのみ基づいて状態指示する場合はテイル形を使う。一方、自分の発話に接する聞き手の知識に配慮して状態指示する場合は、聞き手の受理時を相で区切り、ル形を使う。日本語では状態の発端を表す動詞を転用し、不変化状態について「Hearer-New」という談話上の情報構造を形態的に表現できる(cf. Prince(1992)、Ward and Birner(1995))。聞き手には問題の発話の受理時が不変化状態に関する知識の発端となる。

Hearer-New : there 構文の焦点位置の名詞句が担う情報構造
Ward and Birner(1995:728)

... the postverbal NP of a *there*-sentence represents an entity that is not presumed by the speaker to constitute shared knowledge. ... the speaker treats the postverbal NP in *there*-sentences as representing a HEARER-NEW entity (Prince 1992), where a hearer-new entity is one that the speaker does not assume to exist within the hearer's knowledge store.

談話内での新情報とは違い、聞き手にとっての新情報を導入するには専用の形式があり、その形式を使うと、発話の中で聞き手が新しく知る部分が示される。

4. アスペクト形式の上に重なる非アスペクト的意味

情報提供的発語内行為(informative illocutionary act)

Clark and Carlson(1982:333)

... the speaker jointly informs all the participants fully of the illocutionary act that he is simultaneously performing toward the addressee or addressees.

話し手が特定の聞き手に発語内行為を遂行するときは、自分の発話に接する人全員に等しく当該発話行為について情報提供し、全員共通の知識を作る。

(12) *Schwartz, to history students: Any of you who needs a syllabus, raise your hand.*

情報提供の発話行為は Schwartz の発話に接する人全員に向けられ、挙手を求める発話行為はその中の一部の聞き手に向けられる。

一般に、事実確認的発話(constatives)とは違い、行為遂行的発話(performatives)は、その真偽が問題とならず、それが適切か否かが問題となる(Austin(1975)、Levinson(1987:228-229))。テイル形を伴う状態指示の発話では文末に「ヨ・ネ」などの終助詞をつけ、その発話が当該状態に照らして真であることを話し手は聞き手に発話の現場で確認することができる。しかし、ル形を使った状態指示の発話はこの種の終助詞と共にせず、事実確認的に使うことができない。

(13) 駒ヶ岳が(そびえている/*そびえる)ヨ・ネ

非状態動詞の状態指示用法が適切な文脈では、当該状態が成立する状況の現場に聞き手が必ず不在であり、話し手の役割は現場に不在の、従って不特定多数の、聞き手に対する情報提供である。話し手はこの種のル形を使い、情報提供的発語内行為を遂行する。見出し付解説文はこの発話行為に特化した文脈であり、このル形の用法は聞き手に配慮した言語行動の一例である。

5. 先行研究との比較

寺村(1984:69-74)「時間とは無関係な確言的陳述」

テンスとは関係がない基本形の述語の文を(i)-(v)に分類

cf. 益岡・田窪(1992:109)「動詞の基本形の、時間を超越した事態を表す用法、動作を発話時に関連づけずに一般化した表現」

(i) 物事の道理、本質、法則 (ii) きまり、法則、規則

(iii) 仕方、処方、手順の指示 (iv) 例示

(v) 物語の筋（書き）

- (14) 山崎屋の若旦那が、吉原の遊女と恋仲になったので、番頭や町内の頭が心配して、若旦那と遊女をいっしょにさせようとする。番頭が店の金をごまかして、遊女を身うけして、頭のところへあずける。そこへ山崎屋の旦那をつれて行って、頭の姪で、お屋敷奉公をしていた娘だと紹介する。旦那はすっかり気に入って、息子の嫁にしてほしいといいだして計略にかかる。めでたく息子は遊女と結婚する。(寺村(1984:73))

発話時と関係づけずにル形を並べ、その並べた順に状況が起きることが伝えられる。この点で年表におけるル形も同じ。

(15) ロイ・リキテンスタイン

一九二三年 一〇月二九日、ニューヨークに生まれる。

一九三六年 13 歳 ニューヨーク、八九丁目にあったフランクリン・スクールに学ぶ。

一九五一年 28 歳 四月、最初の個展がニューヨークのカールバック画廊で開かれる。

「物語の筋書き」用法と非状態動詞の状態指示用法の相違点と共通点

- ① 話し手が見た指示対象の世界における状況の発端（狭義のアスペクト）
- ② 聞き手の知識の世界における状況の発端（情報提供に関わる発話行為）

相違点：物語の筋書き用法は①と②の両方を表す。非状態動詞の状態指示用法は①を表さず、②だけを表す。

共通点：物語の筋書き用法は①を表すが、表現上、①の基準が話し手の発話時ではなく②の聞き手の受理時に合わせてある。この点で非状態動詞の状態指示用法と同じ。聞き手志向という点で共通するので、物語の筋書きのル形と状態指示のル形は同種の文脈を作ることができる。(7)では前者の用法の「つぐ」に後者の用法の「すぐれる」が続く。

6. おわりに

非状態動詞の状態指示用法は、指示対象の世界における状況内の動きを表さず、テイル形との区別も状況の時間的特徴の違いを反映しないので、狭義の相の表現ではない。この種の動詞では、状態の発端を表す相の形式を転用して、聞き手の知識の世界における状態の発端を表すことができる。ル形での用法が後者の表現に限られるため、この用法が生じる文脈では話し手の発語内行為が聞き手への情報提供に特化する。

参考文献

- 金田一春彦. 1950. 「国語動詞の一分類」『言語研究 15』, 48-63.
- 金田一春彦. 1955. 「日本語動詞のテンスとアスペクト」『名古屋大学文学部研究論集 X 文学 4』, 63-90.
- 寺村秀夫. 1984. 『日本語のシンタクスと意味 第 II 巻』東京: くろしお.
- 中右実. 1994. 『認知意味論の原理』東京: 大修館.
- 仁田義雄. 1997. 『日本語文法研究序説: 日本語の記述文法を目指して』東京: くろしお出版.
- 益岡隆志・田窪行則. 1992. 『基礎日本語文法 改訂版』東京: くろしお.
- Austin, J. L. 1975. *How to Do Things with Words*. 2nd ed. Cambridge, Mass.: Harvard University Press.
- Clark, H. H. and T. B. Carlson. 1982. "Hearers and Speech Acts." *Language* 58. 332-373.
- Huddleston, R. D. and Pullum, G. K. 2002. *The Cambridge Grammar of the English Language*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Leech, G. N. 1987. *Meaning and the English Verb*. 2nd ed. London: Longman.
- Levinson, S. C. 1987. *Pragmatics*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Lyons, J. 1977. *Semantics 2*. Cambridge University Press.
- Mourelatos, A. P. D. 1981. "Events, Processes, and States." *Syntax and Semantics* 14. 191-212.
- Prince, E. F. 1992. "The ZPG Letter: Subjects, Definiteness, and Information-status." In W. C. Mann and S. A. Thompson eds., *Discourse Description: Diverse Linguistic Analyses of a Fund-raising Text*, 295-325. Amsterdam: John Benjamins.
- Ward, G. and B. Birner. 1995. "Definiteness and the English Existential." *Language* 71. 722-742.

例文の出典

- (2) 『角川日本地名大辞典 3 岩手県』角川書店, 1985 年, pp. 353-354.
- (3) 『日本の美術 458』至文堂, 2004 年 7 月 15 日, p. 9.
- (4) 『週刊現代』講談社, 2004 年 7 月 3 日, p. 11.
- (5) 『東京の戦前 昔恋しい散歩地図』草思社, アイランズ編, 2004 年, p. 92.
- (6) 『小樽の建築探訪』北海道新聞社, 小樽再生フォーラム編, 1995 年, p. 87.
- (7) 『日本人名大辞典』講談社, 2001 年, p. 594.
- (15) 『現代美術 10 リキテンスライン』講談社, 1992 年, pp. 101-102.

電子メールアドレス nishida@ling.human.is.tohoku.ac.jp

認識的モダリティとレトリック

——論説型テキスト・談話における「のではないか」と「だろう」——

蓮沼 昭子

姫路獨協大学外国語学部

hasunuma@himeji-du.ac.jp

1. はじめに

「のではないか」「だろう」は、事態に対する話し手の認識的な捉え方を表す「認識的モダリティ」に分類される形式である。これらの形式の基本用法は、事態の真偽に対する話し手の推量判断を表すことだが、これとは異なる用法もある。すなわち、思考をめぐらし検討した結果の意見・見解や主張の表明といった、話し手（書き手）における判断形成過程や伝達態度を表示する用法である。これは、学術論文、論説文、専門家の対談など、「客観的真實追究型」（森山 2000 b）のテキスト・談話において観察される用法であり、認識的モダリティのレトリカルな使用と捉えることが可能なものである。本発表では、こうした用法における「のではないか」の特性を、類義的な「だろう」と比較することによって明らかにしたい。

- (1) 日本人は、はっきりしすぎた言い方、断定的な言い方を避けようとする傾向が非常に強い。たぶん、「ほかにも可能性があることを無視して自分の意見を読者におしつけるのは図々しい」という遠慮ぶかい考え方のためだろう。

(中略)

日本人が使いたがる「デアロウ」「ト言ッテヨイノデハナイカト思ワレル」「ト見テモヨイ」等々の句を英語に翻訳することはまず見込みがない。もし日本語で文章をつくってから英語に翻訳することが必要なら、翻訳にかかるまえに最初の句は「デアル」と書きかえ、第2、第3の句はすっかり削ってしまうべきである。

(A. J. Leggett のエッセイの紹介 木下是雄 1981『理科系の作文技術』中央公論社 pp. 90-91)

- (2) a. Given this diversity, the possibility of a theory of human communication might seem remote. Even if we confine ourselves, as we shall in this book, to the study of verbal communication, the task of encapsulating its nature and goals within a single principle or set of principles would seem to have very little chance of success.
b. こういった多岐にわたる特徴を考えると人間同士の伝達の理論はどんなものか見当がつかないと思える。この本ではことばによる伝達に限るが、それにしても、その性質やゴールを一つの、あるいは一組の原則の中に入れこもうとすることに成功するとは到底思われないであろう。

(Blakemore, D. 1992. *Understanding Utterance: Introduction to Pragmatics*. Blackwell. p. 3 武内道子・山崎英一（訳）1994『ひとは発話をどう理解するか』ひつじ書房 p. 19)

- (3) [「てくれ」について分析をするという文脈]

- a. 以上から、「てくれ」という命令形態は、話し手にとって基本である、利益があるという形式を使っているのもっとも一般的な依頼表現である。（中国／上級レベル）
b. もっとも一般的な依頼表現であると言える。（森山 2000 b :55）

客観的妥当性を承認する標識：と言える／と考えられる／と言っていい／ということになる

- (4) 医療機関は移植を受ける患者同様、ドナーの健康管理にももっと積極的になるべき {ではないか／ダロウ}。

(「生体肝移植 調査を提供者保護に生かそう」『毎日新聞』社説 2004年10月18日)

- (5) [景気の回復に伴い、ゼロ金利をいつ、どのように解除するかが金融政策の焦点として浮上している折、インフレ・ターゲット論者の声がパッタリと途絶えた] こうした時こそ、副作用覚悟の量的拡大を図ってきた政策をどう転換するかが真剣に問われるべきである。知らぬ顔の半兵衛を決め込むのは無責任すぎる {のではないか／ダロウ}。

(「無責任な沈黙」『毎日新聞』経済観測 2004年6月2日)

- (6) 「『観光立国』を目指しながらも、中国から日本への観光客が少ないのはビザの取得が至難の業だからだ」ということを述べ、外務省、法務省の閉鎖体質を批判している文章]

日中双方に理由はあろうが、観光ビザの本旨をはき違えている {のではないか／??ダロウ}。

(「外国人客を阻む閉鎖体質」『毎日新聞』社説 2004年2月27日)

- (7) 確かに技術的には難しい {ダロウ／カモシレナイ／??デハナイカ}。しかし、全く不可能なわけではない。(作例)

1. 1 考えたいこと

- 1) 論説型テキスト・談話の意見表明に用いられる「のではないか」「だろう」を、話し手(書き手)の不確かな判断、主張緩和・断定回避を表す「ぼかし表現」「婉曲表現」と捉えるのは適切か。
- 2) 1) のような表現において、「のではないか」は「だろう」よりも、いつそう強い話し手の主張や訴えのニュアンスをもつことがあるが、それはなぜか。
- 3) 主観的な評価を表す文に「のではないか」は自然に使用できるのに対し、「だろう」の使用は不自然になる場合が多いが、それはなぜか。
- 4) 3) とは対照的に、譲歩の談話における「命題受容」の発言では、「だろう」の使用は自然であるのに対し、「のではないか」は用いられない。それはなぜか。

1. 2 考察の対象となる形式と用法

【形式のバリエーション】

A. 述語の無標形に付加する場合：

のではないか：んじゃないか／んじゃないの／んじゃない

のではないですか／ではありませんか／んじゃないですか／んじゃありませんか
等

だろう：でしょう／であらう／(よ)う [例：言えよう、あろう]

B. のではないか+だろうか／かしら／かな

のではないだろうか／ではなからうか／ではあるまいか

のではないかしら／ではないかな／んじゃないかしら／んじゃないかな

C. A、Bに思考動詞が付加したもの：

のではないかと思う／思われる／考えられる

だろうと思う／思われる／考えられる

のではないだろうかと思われる／考えられる

【用法】

1) 「のではないか」の用法 (cf. 宮崎 2001・2002)

- (8) もしかして、この人は嘘をついているんじゃないかと思った。(疑い)

- (9) A: 佐藤も来ると思う?
B: ああ、たぶん来るんじゃないか。〈疑い=不確実情報提供〉
- (10) A: たぶん、明日は雨が降る {んじゃないか?/*ダロウ?} 〈意見要求〉
B: そうだね。この分じゃ、降るかもしれないね。
- (11) A: 君は嘘をついている {んじゃないか?/ダロウ} 〈確認要求〉
B: いや、嘘なんてついてないよ。

2) 「だろう」の用法 (cf. 日本語記述文法研究会編 2003)

- (12) 鈴木氏が委員長になれば、会議は早く終わるだろう。 〈推量〉
- (13) 君はもっと努力すべきだろう。 〈断定回避〉
- (14) 今回の作戦は失敗だったと言えるだろう 〈断定回避〉。
- (15) 君、昨夜徹夜しただろう。 〈確認要求〉
- (16) 君もコンパに行くだろう。 〈確認要求〉
- (17) ほら、あそこに信号があるだろう。 〈確認要求〉

2. 「のではないか」をめぐる先行研究

2. 1 「のではないか」とは

<表1>

田野村(1988・1990)	安達(1999)
第一類 ではないか ₁	デハナイカ
第二類 ではないか ₂	ノデハナイカ
第三類 ではないか ₃	命題否定疑問文

- (18) a. (女の子だと思っていたら) なんだ、男の子じゃないか。(デハナイカ)
b. あの茶髪の子、どうも男の子じゃないか。(ノデハナイカ)
c. そうか、男の子じゃないか。/本当に、男の子じゃないか? (命題否定疑問文)
- (19) a. これ、なかなかおいしいじゃないか。(デハナイカ)
b. こっちのほうが、おいしいんじゃないか。(ノデハナイカ)
c. そうか、おいしくないか。/本当においしくないか。(命題否定疑問文)
- (20) a. (いい天気かと思ったら) 雨が降っているじゃないか。(デハナイカ)
b. 雨が降っているんじゃないか (ノデハナイカ)
c. そうか、雨は降っていないか。/本当に雨が降っていないか? (命題否定疑問文)

2. 2 先行研究における「のではないか」の位置づけ

1) 否定疑問文の中に位置づける立場

田野村 (1988)、井上 (1994)、井上・黄 (1996)、森山 (2000 a・2002) など

- (21) 寒くないか? (否定疑問文)
(22) 寒いんじゃないか? (「のではないか」)

2) 独立した形式として扱う立場

安達 (1999) 宮崎 (2001・2002)

2. 3 安達太郎 (1999・2002)

- 1) 否定疑問文のもつ「傾き」を文法化させた形式で、この「傾き」により事態成立への見込みを含意することによって、情報要求にとどまらず、情報提供機能をも発達させた形式と捉える。
- 2) 「確信度」は指定しない（「ひょっとして」「たぶん」「おそらく」と共起）。
- 3) 判断が未成立でありながら話し手が何らかの見込みをもっているところから、話し手のある種の主張を伝える表現として幅広く使われる。
- 4) 話し手の不確かな意見や当てずっぽうの考えを伝えるという基本的意味をもち、それを聞き手に対して持ちかけ、訴えかけるという意味合いを強く持つ。
- 5) 使用制限（容認可能性の判断は安達による）

- ① 話し手の意志によってコントロール可能な未実現の行為には使えない（cf. 「かもしれない」なら可能）。

例：和仁：君も行くの？

進一：うん、暇があれば行く {??んじゃないか／かもしれない}。

- ② 相手の意見、主張を受け入れるという状況において、それに対する話し手の態度を表す形式としては使えない（cf. 「だろう」「かもしれない」なら可能）。

例：たしかにあなたの言うとおりに {だろう／かもしれません／??んじゃないですか}。

（「だろう」の追加は連沼）

- ③ 聞き手に比べて話し手が情報的に優位にある場面では、そのままのかたちでは使えない。文末に疑いの文の形式（「かな」「かしら」「だろうか」）や「と思う」のような形式をつけ、文末を調整することが必要になる。

例：啓子：もうぼつぼつ来る {んじゃないかな／??んじゃない／??んじゃないですか}。

鷹男：だあれ？

啓子：お宅の洋子さん。

2. 4 宮崎和人 (2001・2002)

- 1) 〈疑い〉を「命題成立（命題が真であること）について思考を巡らす態度」と規定し、認識的モデルティの中に位置づけ、「のではないか」と「だろうか」をそこに属する形式とする。
- 2) 「だろうか」「のではないか」は、聞き手に情報を要求するというより、話し手自身の推量判断の未成立状態を表すことにその本質がある疑問形式である。
- 3) 推量判断の形成過程段階から見た場合、「のではないか」は、「だろうか」と「だろう」の中間に位置するものとする。

だろうか： 考えうる可能性の中からいずれを選択すべきか思考をめぐらせている段階

のではないか： 考えうる可能性の中から一つに絞り込んだ段階

だろう： 推量判断が一つの帰結に達した段階

<表2>

	だろうか	のではないか	だろう
補充疑問・選択疑問	○	×	×
真偽疑問（自問的）	○	○	×
もしかすると等	○	○	×
きっと、たぶん等	×	○	○
確認要求	×	○	○

3. 先行研究の問題点

3. 1 安達の分析の問題点

- 1) 「のではないか」の基本的な意味を「不確かさ」という意味特徴で捉え、すべての現象をこの性質によって説明しようとしている。
- 2) 「命題受容」の「たしかに」と「のではないか」の共起制限に対する説明
「のではないか」は、言及される事態が不確かであることを表しはするものの、話し手がどのような判断を表明するのかを表すことができない。その結果、自分とは関係のないことを言っているような、無責任な印象を与えてしまい、不適切になる

3. 2 宮崎の分析の問題点

- 1) 真偽判断の対象となる事態に「のではないか」がついた場合の意味・機能を中心にすえて考察しているが、話し手の主観的な評価、意見・見解を表す表現に使用される場合の「のではないか」「だろう」は、推量を表すとは言えず、区別して考察する必要がある。
- 2) 後者のタイプの表現で使用される場合、「のではないか」「だろう」の間には、ニュアンスや、容認可能性に相違が認められるが、その理由は判断形成段階の相違という観点だけでは説明できない。

4. 本発表の主張

「のではないか」の特性

- 1) 判断の根拠、およびそこから結論を導く様式を狭く限定せず、手持ちのデータから導き出した帰結を、話し手の個人的意見・見込みとして述べる形式である。確信度は指定しない。(4. 1)
- 2) 話し手がまとめ上げた自らの考えを表す。(4. 2)
- 3) 話し手の主観的な評価を表す表現に付加し、「大いにそのようなことが言える」「そのように判断せざるを得ない」といった妥当性、不可避性を有した判断を主張する態度を表す。この場合、「だろう」は認識を間接化してしまうため、日常的な談話では使われにくい。(4. 3)
- 4) 「～と言える／見てよい／考えるべきだ」などの「客観的妥当性」を表す表現に付き、「いろいろ検討した結果の妥当な結論である」といった意味を添える。この場合、「のではないか」「だろう」の意味は接近するが、「のではないか」には自らの個人的意見を提起し、聞き手に賛同や共感を呼びかけるといった「だろう」にはないニュアンスがある。(4. 4)
- 5) 認識のギャップがある文脈においては、相手の誤認や認識不足に対する話し手の異議申し立ての意図を表す。この場合「だろう」の使用は不適切になる。(4. 5)

4. 1 副詞との共起関係の意味すること

(23) {たぶん／ひょっとして／どうも} 彼は嘘をついているのではないか。

(24) たしかここに置いたんじゃないか。

<表3>

		形式	共起する副詞的表現
推量		だろう まい	きっと たぶん おそらく まさか さぞ
蓋然性	可能性	かもしれない	もしかすると ひょっとして あるいは
	必然性	にちがいない	きっと さぞかし
		はずだ	当然 きっと たぶん どうりで まさか
証拠性		ようだ みたいだ らしい (し) そうだ	どうやら どうも

4. 2 「たしかに」と譲歩の談話構造

- (25) 譲歩の基本構造 (cf. Couper-Kuhlen & Thompson 2000)

A : X

B : X'

Y

X、Y : 対比的な関係を有するものとして会話参加者に解釈されるような発話

- (26) 中村 (政) : 放射性廃棄物の処理は確かに技術的には難しい、おカネのかかる問題かもしれない
せんけれども、地域的には限定された問題ではないでしょうか。

(座談会「グローバルな視点から見る原子力」KS1634)

- (27) 高階 : それはたしかにアイコンを作らない理由でしょうね。しかし、サイン的なものは通用するんじゃないでしょうか。(対談「絵の言葉」小松左京・高階秀爾 KS0624)

- (28) 巽 : (中略) だから、確かにいろいろ煮詰まらないところもあるような気はするんですが、読み直して新しい発見をさせることのできる作家というのはそう多くはないのではないかという気がします。その点、小松、筒井というのは大きいですね。

(座談会「SFへの遺言」KS0157)

- (29) 苦悩? — たしかに、苦悩は超越的なものになりうるかも知れない。だが、その超越自体が、人間的なものをまねがれ得ないのではないか。より正確な「世界」と「人類」の表象に達するためには…… (「復活の日」KS1470)

- (30) 私思わず溜息をついた。——このフランスで、“白鳥の湖”とは、たしかに不朽の名作にはちがいない。しかし、今ではボリショイかレニングラードの公演ぐらいしか、客を呼べないのではないか。それとも“新”古典主義という以上、そこに何か画期的な新演出があるのか?

(「鷺娘」KS0717)

- (26)' ?? 放射性廃棄物の処理は確かに技術的には難しい、おカネのかかる問題 (なん) じゃないですか。けれども、地域的には限定された問題かもしれない。

- (27)' ?? それはたしかにアイコンを作らない理由 (なん) じゃないですか。しかし、サイン的なものは通用するでしょうね。

- (29)' ?? 苦悩? — たしかに、苦悩は超越的なものになりうるのではないか。だが、その超越自体が、人間的なものをまねがれ得ないかも知れない。より正確な「世界」と「人類」の表象に達するためには……

- (30)' ?? 私思わず溜息をついた。——このフランスで、“白鳥の湖”とは、たしかに不朽の名作なのではないか。しかし、今ではボリショイかレニングラードの公演ぐらいしか、客を呼べないにちがいない。それとも“新”古典主義という以上、そこに何か画期的な新演出があるのか?

4. 3 主観的な評価を表す文との共起

- (31) ちょっとのどが痛い { *んじゃないか / *だろう / ??と思う }。(身体感覚)

- (32) A : これ、味見してみて?

B : ちょっと甘い { んじゃないか / ??だろう / と思う }。(主観的な評価)

- (33) 彼のやり方はひどすぎる { んじゃないか / ??だろう / と思う }。(主観的な評価)

- (34) 院生 : これを完成稿として提出してよろしいでしょうか。

教授 : いい { んじゃないですか / でしょう / と思います } (主観的な評価)

- (35) 妥当な結論と言ってよい { のではないか / だろう / と思う }。(客観的妥当性の判断)

4. 4 客観的妥当性を表す形式との共起

【客観的妥当性を表す形式】

- ～と {言う／考える／見る} べきだ
- ～と {言って／考えて／見て} (も) よい
- ～と言える／考えられる／思われる

- (36) そして、上田秋成がまた芭蕉嫌いでした。芭蕉のような深刻ぶり、もったいぶり、哲理趣味といったところが大嫌いです。まだ芭蕉自身はいいけれども、その芭蕉をかつぎ回っている深刻面の芭蕉俳諧が嫌いで、これに対する憎しみはたいへんなものです。そういう点も上田秋成の一面であります。同時に大阪的な特色と言えるのではないかと思います。

(シンポジウム報告「大阪学を作った人々」矢沢永一 KS1604)

- (37) ふつうの住居空間と同じ床のところに台所を持つてくることを最初に提案したのは、例の『アンクル・トムズ・ケビン』を書いたストウ夫人のお姉さんです。このことはよく知られていることですが、それと同じように、日本でも、約七、八十年を隔てて変化が起きたと考えていいのではないかと思います。

(パネルディスカッション「地球時代の食の文化」加藤秀俊 KS1294)

- (38) 鈴木：そうですね。ですから違った人が来たという証拠があれば、例えば骨から、これは異人種ということがわかれば、これは問題でしょうが、それが見あたらないとすれば、一応、日本の本土の中だけで起こった現象と考えるべきではないかと思うんです。

(対談「日本人のルーツをたどってみると」小松左京・鈴木尚 KS1422)

- (38)' 一応、日本の本土の中だけで起こった現象と考えるべき {ではないか／だろう}。

4. 5 認識のギャップのある文脈

- (39) 日中双方に理由はあろうが、観光ビザの本旨をはき違えている {のではないか／??ダロウ}。

(= (6))

5. まとめ

論説型テキスト・談話の意見表明における2形式の機能

のではないか：いろいろ検討した結果、「大いにそうであり得る」「そう考えざるを得ない」といった気持ちで、個人的な意見・見解を表明する際に用いられる。呼びかけ、訴えのニュアンスがあり、認識のギャップがある文脈では異議申し立ての意図を表す。

だろう：思考をめぐらし検討した結果、妥当性、一般性のある判断として自らの意見を提出する場合に使用される。いろいろ慎重に検討した結果の判断を、主張を抑制し冷静な態度で述べるといったニュアンスをもつ（しかつめらしさ、勿体ぶったニュアンス）。主観的な評価を表す述語は、本来、話し手の直接的認識を表すため、認識を間接化する「だろう」の使用は、慎重な物言いを必要としない日常的な談話では不自然になることが多い。

参考文献

- 安達太郎 (1997) 「副詞が文末形式に与える影響」『広島女子大学国際文化学部紀要』3 pp. 1-11
- (1999) 『日本語疑問表現における判断の諸相』(Frontier Series 日本語研究叢書 11) くろしお出版
- (2002) 「第5章 質問と疑い」宮崎ほか (2002) pp. 174-202

- 井上 優 (1994) 「いわゆる非分析的な否定疑問文をめぐって」 国立国語研究所報告 107 『研究報告集』 15 pp. 207-249
- 井上 優・黄麗華 (1996) 「日本語と中国語の真偽判断文」 『国語学』 184 左 pp. 15-28
- 工藤 浩 (1982) 「叙法副詞の意味と機能——その記述方法を求めて——」 国立国語研究所研究報告 71 『研究報告集』 3 pp. 45-92 秀英出版
- 田野村忠温 (1988) 「否定疑問文小考」 『国語学』 152 左 pp. 16-30
- (1990) 「補説C 否定疑問文の類型」 『現代日本語の文法 I』 和泉書院
- 日本語記述文法研究会 (編) (2003) 『現代日本語文法 4 第 8 部モダリティ』 くろしお出版
- 蓮沼昭子 (1995) 「対話における確認行為——『だろう』『じゃないか』『よね』の確認用法」 仁田義雄 (編) 『複文の研究 (下)』 pp. 389-419 くろしお出版
- (2004) 「認識的モダリティとレトリック——『のではないか』再考——」 『日本語教育連絡会議論文集』 Vol. 16 pp. 10-22
- 宮崎和人 (2001) 「認識的モダリティとしての〈疑い〉——『ダロウカ』と『ノデハナイカ』——」 『国語学』 52-3 pp. 15-29
- (2002) 「序章 モダリティの概念」「第 4 章 認識のモダリティ」「第 6 章 確認要求」 宮崎ほか (2002) pp. 1-15、pp. 121-171、pp. 203-227
- (2003) 「〈意志〉と〈推量〉と疑問形式」 『岡大國文論稿』 31 pp. 123-135
- (2004) 「否定疑問文の類型について」 『岡山大学言語学論叢』 11 pp. 1-15
- 宮崎和人・安達太郎・野田春美・高梨信乃 (2002) 『新日本語文法選書 4 モダリティ』 くろしお出版
- 森山卓郎 (1992) 「文末思考動詞『思う』をめぐって——文の意味としての主観性・客観性——」 『日本語学』 11-9 pp. 105-116
- (2000 a) 「1 基本叙法と選択関係としてのモダリティ」 森山ほか (2000) pp. 3-78
- (2000 b) 「『と言える』をめぐって——テキストにおける客観的妥当性の承認——」 『言語研究』 118 pp. 55-79
- (2002) 〈もっと知りたい! 日本語〉『表現を味わうための日本語文法』 岩波書店
- 森山卓郎・仁田義雄・工藤浩 (2000) 『モダリティ』 [日本語の文法 3] 岩波書店
- Couper-Kuhlen, Elizabeth and Sandra A. Thompson (2000) Concessive patterns in conversation, Couper-Kuhlen, E and B. Kortmann (eds.) *Cause, condition, concession, contrast: cognitive and discourse perspectives*. pp. 381-410, Mouton de Gruyter.
- Inoue, Masaru (1996) "Negative questions in Japanese." 『国立国語研究所研究報告集』 17 pp. 273-291

コーパスデータ出典

Sakyo Komatsu Corpus <http://castelj.soken.ac.jp/groups/komatsu/>

(2003 年より <http://aci.soken.jp> にホームページが移動したが、現在サーバー停止中)

小松左京作品 日本語教育支援システム委員会 CASTEL/J 2000 CD-ROM V1.3

[付記]

本発表は、2003 年 8 月 2 日にスロヴェニアで行った学会口頭発表をまとめた論文である、蓮沼 (2004) を発展させたものである。この論文に対しては、宮崎和人氏 (岡山大学) から懇切丁寧なコメントをいただいた。今回の発表でいくらかでも改善が見られるとしたら、それは宮崎氏に負うところが大きい。この場を借りて謝意を表したい。

不同意の応答構成を引き出すファーストペアパートの投出性

林礼子
甲南女子大学

hayashir@konan-wu.ac.jp

小川晋史
神戸大学大学院

ogawa@lit.kobe-u.ac.jp

竹安 大
神戸大学大学院

thonsei@yahoo.co.jp

儀利古幹雄
神戸大学大学院

tell-all-slant@kcc.zaq.ne.jp

吉成祐子
神戸大学大学院

yoshinari@lit.kobe-u.ac.jp

1. はじめに

会話において話し手が聞き手に自分の感情や考えを示す場合、話し手と聞き手は次の二つの行為をしている。(1) 話し手は聞き手から二番目のターンを引き出す。(2) 聞き手はターンを取り、そのターンで話し手が示したことについて同意、不同意、あるいはそのどちらでもない中間的態度を表明する。これらの行為は、ターンテイキングのシステムによるものであることが会話の組織構成の研究(Sacks, Schegloff, & Jefferson 1974)によって明らかになった。すなわち、一番目のターンには二番目のターンでなされる行為を予期する(expect) 投出性(projectability)があり、一番目のターンは二番目のターンを引き出す装置として機能するというものである。さらに(2)については、Pomerantz (1978, 1984) が、評価(assessment)をするという言語行為と優先選好(preference)のシステムという社会的認知(Pomerantzの見解は社会行為である。)の観点から、社会的行為としてのそのメカニズムを明らかにした。本研究は、(1)に関与する(2)の社会的制約を観察することにより、評価を付けて態度が表明された一番目のターンの投出性について論考するものである。

評価が顕著に表出される会話のシークエンスの一つに、賛辞(compliment)と応答(response)の隣接ペアがある。本研究では、特に、聞き手に向けられた賛辞に対して聞き手が取ったターンとそれに続くターンの構成を観察することにより、賛辞というものを人はどのように認識しているのか、またその認識を社会的行為としてどのように表出するのかに論点を絞り、投出性とこの隣接ペアについて論及する。

2. ターンの投出性

Sacks, Schegloff, and Jefferson (1974) はターンの投出性について次のような説明をしている。

There are various unit-types with which a speaker may set out to construct a turn.

Unit-types for English include sentential, clausal, phrasal, and lexical constructions. Instances of the unit-types so usable allow a projection of the unit-type under way, and what, roughly, it will take for an instance of that unit-type to be completed. Unit-types that lack the feature of projectability may not be usable in the same way.

(Sacks, Schegloff, and Jefferson 1974: 702)

3. ファーストペアパートにおける賛辞のタイプ

3.1. 直接的誉め：誉めの対象は聞き手であり、聞き手を直接誉める。

- (1) H: Gee, Hon, you look nice in that dress
W: Do you really think so? It's just a rag my sister gave me.
(Pomerantz 1978)

3.2. 間接的誉め：誉めの対象は聞き手であるが、聞き手に関連したものを誉めることにより聞き手を間接的に誉める。

- (2) A: Oh it was just *beautiful*.
B: Well *thank you* + *Uh* I thought it was quite nice,
(Pomerantz 1978)

4. セカンドペアパートにおける賛辞に対する応答のタイプ

4.1. 賛辞を受け入れる。

- (3) A: Oh it was just *beautiful*.
B: Well *thank you* + *Uh* I thought it was quite nice...
(Pomerantz 1978))

(3)では、Aの誉めに対してBは*thank you*という表現によって受諾を表明し、それにつづく*I thought it was quite nice*によりAに同意している。

4.2. 賛辞を受け入れない。

- (4) H: Gee, Hon, you look nice in that dress
W: Do you really think so? It's just a rag my sister gave me.
(Pomerantz 1978)

(4)では、Hの誉めに対してBは*It's just a rag my sister gave me.* と言うことにより不同意を表明している。

5. 賛辞・応答構成に働くプレファレンス（優先選好）のシステム

5.1. 一般に、自分や自分の行為を自ら誉めることは好まれない社会的行為と認識される。

- (5) A: Just think of how many people would miss you. You would

know who cared.

B: Sure. I have a *lot* of friends who would come to the funeral and say what an intelligent, bright, witty, interesting person I was.

A: They *wouldn't* say that you were *humble*

B: No. Humble, I'm not.

(Pomerantz 1978)

- (6) G: Ken gave that internship to Peter?! I'm much better than he is! *Well maybe I shouldn't say that.*

(Pomerantz 1978)

- (7) M: もうにほんじんのね、ああいるいいなまえをね えっなんかこうなくしてしまうのはちょっともったいないようなきがしましたね。

T: ねええ きくのちゃんなんて きくっていうじにのぎたいしょうのですか。

M: ええ そうです まあかんたんはかんたんなんですけど

T: きくのちゃん かわいい したは

M: こはるちゃんでございますよ。

T: ん だから ま た ねええ ちょっと こはるちゃんってすいななまえじゃございません。

M: そうなんでございますよ。

T: ええええええ でも あの き きくのちゃんとかはるちゃんはあの あたま ぼうしかぶちゃってさああ (笑い)

5.2. 応答構成にみられる自讃回避の制約

一般に、ファーストペアにおける誉めを受け入れる行為は、(5)～(7)にみられるように、好まれない社会的行為と認識される。好まれない社会行為であるということを認識した応答構成の例は以下にみられる。

5.2.1. 不同意を表明する。

—> 賛辞を受け入れない。

- (8) Y: でもすごい上手に敬語を使うよ。(Sに向かって)

S: いや そんなことないですよ。

5.2.2. 同意の表明をする。

--> 賛辞を受け入れる。

- (9) (自己修復)

Y: えらいね ちゃんと洗い物までして帰ったんだ

S: いやあ あのお ええ あのお いいやつあぴ: : るで

- (10) (評価の縮小)

L: You brou: ght, -like a *ton* of things.

E: *Just* a few little (thi::ngs,) (Pomerantz 1978)

- (11) (誉めの対象のシフト)

R: You're a good rower, Honey.

J: These are very easy to row. Very light. (Pomerantz 1978)

- (12) (誉めの返却)

E: Yer lookin good,

G: Great. So'r you. (Pomerantz 1978)

5.2.3. 中間的態度をとる。

--> 賛辞を受け入れない。

- (13) T: AH:: you saved *me* some!

L: I(hh)t's not mu(hh)chi- ((sniff))=

T: =Oh yer so nice=

L: =-tuh sa(hh)ve((sniff))

T: Yer so nice. (Pomerantz 1978)

5.2.4. 中間的態度をとる。

--> 賛辞を受け入れる。

- (14) F: ... What ayou making?

K: It's a blanket

F: Did you weave that yourself

K: I wove this myself

D: She wove all of this herself

F: Ya kidding

.
. .
. .

F: That is beautiful

K: 'N that nice

R: Yah. It really is

K: It wove itself. Once it was set up=

(Pomerantz 1978)

6. 投出力 (projectability)

一般にターンテイキングのシステムでは、応答は、プレファレンスのシステムに志向されることにより、同意を表明し誉めを受け入れることが好まれる。しかし、これまで見てきたように、誉めに対する応答の場合のプレファレンスは不同意を表明し誉めを受け入れないことが好まれる行為とされる。つまり、賛辞に同意しそれを受け入れると、自己賛辞となり、社会的に好まれない行為をすることになる。その一方で、不同意を表明し誉めを受け入れなければ、自己賛辞は回避できるが、ターンテイキングにおけるプレファレンスのシステムに志向していないことになる。現実のやりとりでは、会話者はそれぞれのシステムに志向していること、そして、これら二者の制約は両立しないことを認識しているということ、相手に表明する行為をしている。その行為は、聞き手が応答のターンにおいて上記の5.2.1. から 5.2.4. の制約のうち複数を出すというターン構成を生み出していることからわかる。例えば、(7) のSの応答は、5.2.3. 5.2.2.の応答構成を創出している。

(15) (みんなで話しているところで論文を読んで勉強しはじめるSに対して)

Y: なにげに勉強してる (笑い)

(一同笑い)

A: はあ

Y: この姿勢だよ

A: こうあらなきゃ

S: () どのどの?

Y: どんなときでも片時も 学ぶ姿勢をくずさない

A: そう

S: Tくんのほうがもっと・・・

ここで、2. で示した投出性について再考する。投出性の概念は、一番目のターンと二番目のターンは特定の機能を持つ「装置 (unit)」として構成されており、その構成タイプは多様である、しかし、その装置は一構成として完結され、投出力を欠くターンは (一番目と二番目のターンからなる) 構成を完結し

ないかもしれない、というものである (Unit-types that lack the feature of projectability may not be usable in the same way.)。

投出力が強いターンは、隣接ペアを生み、特に、ターンテイキングのプレファレンスのシステムに志向される会話は、二番目のターンで同意と受諾を投出する。例えば6.1.のような構成がその例である。

6.1. ファーストペアパートに投出力がある。

→ 同意、受諾

- (16) A: D' yuh li:ke it?
D: hhh Yes I do like it=
D: =although I rreally : : = (Pomerantz 1984)

- (17) C: ... you've really both basically honestly
gone your own ways.
D: Essentially, except we've hadda good
relationship et home
C: hhh Ye : s, but I mean it's a relationship
where ...

Sacks 等によると、誉めと応答の構成は隣接ペアとみなされ、誉めを表明するターンは投出力がある。したがって、不同意と拒否を表明する応答においても、応答は必ず投出される。例えば6.2.のような構成にそれが観察される。

6.2. ファーストペアパートに投出力がある。

→ 不同意、拒否

- (18) Y: でも すごい上手に敬語を使うよ (Sに向かって)
S: いや そんなことないですよ
- (19) T: AH:: you saved me some!
L: I(hh)t's not mu(hh)chi- ((sniff))=
T: =Oh yer so nice=
L: =-tuh sa(hh)ve((sniff))
T: Yer so nice. (Pomerantz 1978)

しかし、次の6.3. と6.4 の例に見られるような応答の構成は、自己賛辞を回避するプレファレンスがターンテイキングにおけるプレファレンスより優先されており、賛辞・応答の隣接ペアにおいても、同意・受諾を予期するファース

トペアパートの投出力が弱いことが観察される。

6.3. ファーストペアパートに投出力が弱い。

→ 誉めの対象のシフト、修復構成に変更などの行為

(20) (みんなで話しているところで論文を読んで勉強しはじめるSに対して)

Y: なにげに勉強してる (笑い)

(一同笑い)

A: はあ

Y: この姿勢だよ

A: こうあらなきゃ

S: () どのどの?

Y: どんなときでも片時も 学ぶ姿勢をくずさない

A: そう

S: Tくんのほうがもっと・・・

(21) O: ほんと家庭教師みたいですよ

S: ほんとっすか?

O: おフランスから来た家庭教師みたいな

S: いや、そんなに品よくないんで

(22) (パンチングマシンの前にて)

K: まっ、187って まじでー

S: はんばねえな ほぼ190やん

K: おお やんなあ すげ ほんまもうちょいやん

H: いてえ まあまあやろ 恥ずかしくはないやんなあ お前やで

6.4. ファーストペアパートに投出力が弱い。

→ 誉めに対する応答を投出しない。→ 拒否

(23) R: You should see this paper she wrote. -Eighty pages.

(1.0)

R: I have to brag about you Dotty.

(1.5)

R: Quite a masterpiece

D: Thank you.

(24) (SがAに勉強を教えている)

M: すごい勉強教えてるんだあ 先生や

A: 先生です

T: 家庭教師だ

S: (笑い) (= (8))

7. 終わりに

誉めるという行為は社会的に好まれる行為とみなされているが、自分が誉められるということについては、人々はどのように認識し対処しているのであろうか。誉められるということは聞き手に好まれる行為のはずであるが、本研究で観察したように、聞き手はその友好的な評価に対して戸惑いや不同意、拒否を表明するターンの取り方をしている。それは、自分に向けられた友好的な評価については不同意や拒否を表明するという社会のシステムが応答構成に関与するからで、人は他者から誉められることを受容する社会行為をしないからである。それゆえに、誉められると困惑したり、不同意や拒否を表明する行為をするのである。誉めるということは、挨拶をすることとは本質的に異なる社会行為であり、前者のファーストペアの投出性は後者のそれに較べて多様な応答構成を創出する。よく隣接ペアの例として誉め・応答や挨拶・挨拶のターンテイキングの構成が挙げられるが、このことは、誉め・応答の隣接ペアと挨拶・挨拶のような隣接ペアは同質のものとして扱えないことを示している。誉めへの応答に関与する社会の制約は挨拶に対する応答に関与する社会の制約とは異なるものである。

引用文献

- Pomerantz, A. (1978) Compliment responses: notes on the cooperation of multiple constraints. In J. Schenkein (ed.), *Studies in the Organization of Conversational Interaction*. New York: Academic Press. 79-112.
- Pomerantz, A. (1984) Agreeing and disagreeing with assessment: some features of preferred-dispreferred turn shapes. In J. Heritage and J. M. Atkinson (eds.), *Structure of Social Action*. Cambridge: Cambridge University Press. pp. 57-101.
- Sacks, H., Schegloff, E. A., and Jefferson, G. (1974) A simplest systematics for the organization of turn-taking for conversation. *Language*, 50, 696-735.

精神療法面接における治療同盟検索基準としての結束性の捉え方

加藤 澄

青森中央学院大学

sumisapphire@ar.wakwak.com

1. 目的

精神療法における治療同盟(therapeutic alliance)は、治療という共通した目的に向かって、治療者と患者とが手を組んでいる部分を示す構成概念で、それは患者の内界における転移を免れている部分と、治療者のそれとの間に結ばれる「リアルな関係」に基づくもので、そこでは治療に不可欠である基本的な信頼関係が成り立ち、また互いに自己観察と自己分析を進めていくことが可能となる状態のことを一般的にはさす。しかし治療同盟そのものを断定、特定して抽出することは難しく、そのあり方、性質について厳密に定義することは困難である。(栗原、1992)

その中で治療同盟が成立しているかどうかを検索する先行研究がいくつか存在するが、治療者と患者間の言語的相互作用の側面から調べた研究は少なく、その中で Mergenthaler, Lepper(2004)、Mergenthaler, Lepper, Kato(2004)がある。これら二つの先行研究では、トピックの結束性と TCM (注1) との相関関係の観察結果より、治療同盟との相関関係が導かれ、治療同盟はトピックの結束性によって特徴づけられ、同盟の破綻はトピックの破綻によって生じるという仮説証明がなされている。これら先行研究の中で、Lepper が結束性の観察に用いた手法は、グラウンディッド・セオリー(grounded theory)(注2)の手法に従って、テキストよりトピックを抜き出し、分類項目を作って分けて、150 語ずつセグメント化されたワード・ブロックごとに、分類されたトピック項目の割合比を計算することで、トピックの密度を数値化するというものである。本研究は出発点として治療同盟の臨床観察基準となりうる手法の探索を目的とするが、ここでは Lepper の用いる手法の有効性に疑問を提示、なぜ有効とはいえないのかについて議論する。

2. 資料と方法

2.1 資料

サンプル A :正常者とのブリーフ・セラピー、シェフィールド・ケース(Sheffield Case)からセッション 4(Session 4)より、ワードブロック No.35。患者は反応性鬱病女性患者。

サンプル B:ミセス・ダグラスのケース(The Case of Mrs. Douglas)。統合失調症患者との面接よりワードブロック 25

2.2 方法

面接逐一トランスクリプション(transcription)を 150 語のワード・ブロックに分け、さらに各ブロックを move(意味的見地に基づいて区切る会話相互作用の基本単位)に分け、同一連鎖(reference chains)と類似連鎖(lexical strings)の作図を行い、さらにそれを基に、結束的連鎖の相互作用の作図を行い、各ブロックごとに結束性の程度割合比を出す。

Mergenthaler (1985)によれば、コンピューターによるテキスト分析では、セッション

内の変数を観察するのに観察記録単位(scoring units)として、テキストのセグメント化のための最低ワード数が必要であるとする。テキストを同一のワード数でセグメント化することにより、各セグメントにおける変数の測定が独立して行われ、それら各変数の流れを連続性の中で観察することが可能になるとしている。テキストから言語的諸現象を抽出するのに、話し言葉では150語が統計的に適切な値であるとする(Mergenthaler, 1985, 1996)。

これに基づき、本研究ではTCMとの整合性を持たせるために(Mergenthaler, Lepper, Kato, 2004)、150語を1ブロックとしてテキストをセグメント化する。こうした任意のセグメント化においては、必然的に、テーマ、意味上の流れは考慮されない。なお分析では、患者と治療者の区別を行わない。相互作用のディスコースでは、それぞれの話し手の言葉は、先行する話し手が発する言葉によって選択されていくのであり、会話は話し手同志の共同作業によって成り立つものであるため、両者のスピーチが一つのテキストとして捉えられなければならないからである。

3. 選択体系機能理論における結束性の捉え方

選択体系機能理論の中で結束性は、テキスト性という概念の中で捉えられている。HallidayとHasan(Halliday, Hasan, 1976)は、テキスト概念を統一性のあるディスコースとして捉え、テキストにテキスト性を与える要素の一つが結束性であると捉え、テキストがどのように結束性を持つようになるのかという理解を求めてアプローチをはかった。そこで結束作用をもたらす手段として、1)指示(reference)、2)代用(substitution)と省略(ellipsis)、3)接続(conjunction)、4)語彙的(lexical)という四つの結束作用をあげている。さらにこの仕組みを基に、Hasan(Halliday, Hasan, 1985)はテキストには文法的結束性と語彙的結束性とがあり、この二者が互いに支持し合って機能するわけだが、それぞれが「同一指示」(上述、1)の指示に相当)、「同一分類」(2)の代用と省略、4)の語彙的に相当)、「同一外延」(4)の語彙的に相当)という意味関係によって他と関連づけられた一組の項目によって、結束的連鎖(cohesive chain)を形成するとする。連鎖には二つの下位分類、「同一連鎖」と「類似連鎖」があるとする。先述の先行研究においてLepperが用いた手法は、この段階における「同一連鎖」と「類似連鎖」の割り出しに相当すると考えられる。

しかしHasanは連鎖はあくまで構成素のみを材料とするもので、テキストとしてディスコースを考える場合には、メッセージ自体が問題とされなければならないと考える。つまり語彙一文法的単位がコンテキストとして生きるのは、文節以上の位階においてであり、言語単位が完全なメッセージをコード化できるのはこの位階においてである。従って連鎖は結束性を作るのに組するが、それだけでは不十分で、メッセージの構成素間の関係を考えなければならないとする。具体的に言えば、同一連鎖と類似連鎖が互いにどのように相互作用するかまで調べなければ結束性の捉え方として不十分であるとする。これが結束調和(cohesive harmony)である。結束調和分析は、Hasanによって開発された同一連鎖と類似連鎖の相互作用を調べるテクニックである。

Hasanによれば、結束調和が成り立つのに必要最低限の条件は、最低二つの連鎖のメンバーが別の連鎖の最低二つのメンバーと同じ関係に立つことである。根拠は二つあって、一つはもし関係が一つで十分だとすると、連鎖に入る項目はそれ自体で他のメンバーと相

相互作用を行うことになる。つまり連鎖のグループに入るというだけで相互作用の尺度になることになってしまう。従ってその場合は、連鎖の形成と連鎖の相互作用とを区別する必要がなくなる。しかしでたらめな文節や群(group)リストに必ずしも結束性が見出されないことからこれはあてはまらない。連鎖自体が結束性を伴うことはないのである。二つ目の理由は、二つの連鎖メンバーが同じ関係に立つということは、二つの方向性を示しているということで、一つはメンバーが同じ連鎖のメンバーであることを示す意味的類似性を示すものであり、もう一つの方向性は、二つの連鎖のうちペアをなすメンバーを結びつける意味的類似性を表す。この現象を具体的に言うと、結束性のあるテキストでは、話し手は同じこと、似たようなことが含蓄される似たような状態がどんなに似ているかを示せるだけ、同じ似たようなことを言い続けるということである。

4. 分析

本研究では、Martin(1992)によって修正を加えられた結束調和分析の作図方法に従ってセッション4の全42ワード・ブロックとThe Case of Mrs. Douglasのいくつかのワード・ブロックについて結束調和分析の作図を行ない、そこから同一連鎖と類似連鎖の交差の割合を出した。Fig. 1に、ワード・ブロックNo.35(セッション4)、Fig. 2にワード・ブロック10(The Case of Mrs. Douglas)の作図を作図例としてあげる。

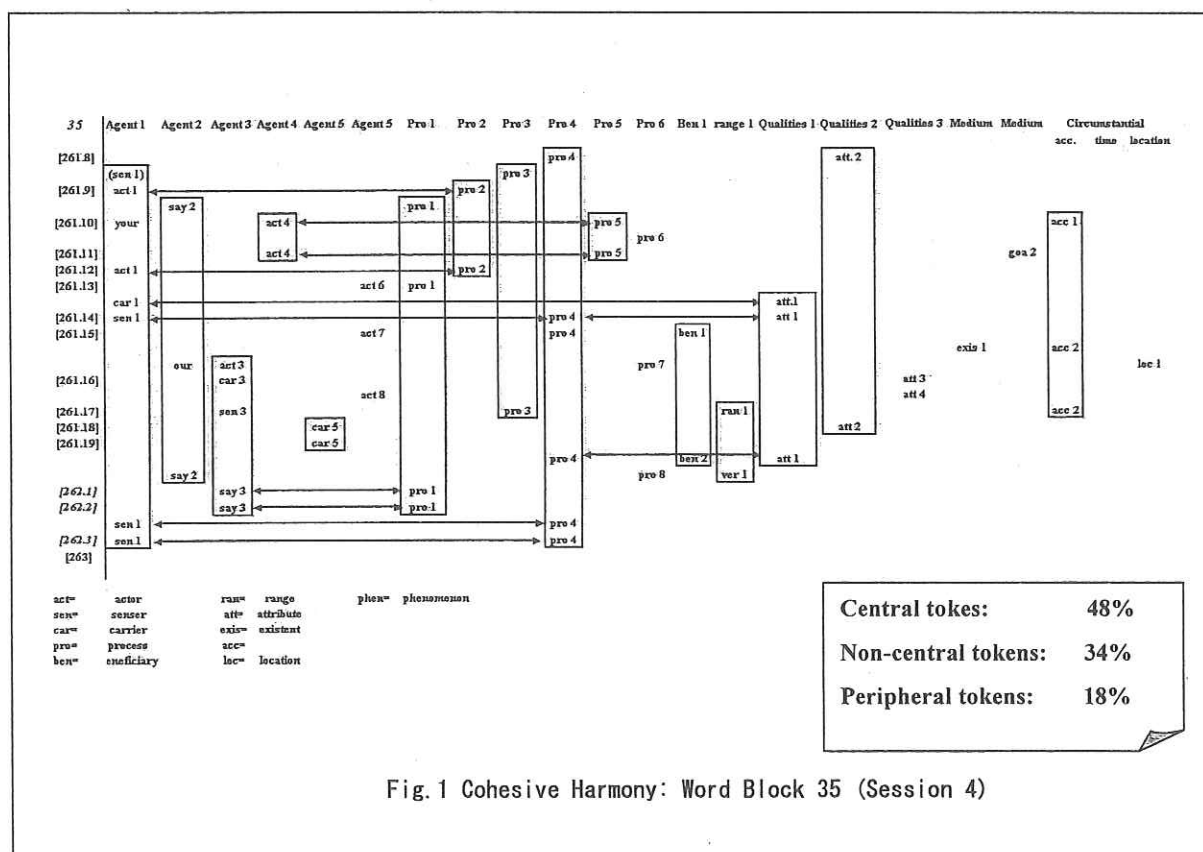


Fig. 1 Cohesive Harmony: Word Block 35 (Session 4)

(注) 1) 左端コラムのナンバーは move No.

2) 斜体字は治療者。

Fig. 2 Cohesive Harmony: Word Block 10 (The Case of Mrs. Douglas)

2) 斜体字は患者。

Hasan によれば、テキストの語彙項目は、1.関連項目(: 中心項目と非中心項目とに別れる)と 2.周辺項目とに分けられる。Fig.1 よりボックスで囲まれているのが同一連鎖と類似連鎖で、これら二つを合わせた連鎖グループに入る項目が関連項目である。またこれらの連鎖グループのメンバーで横の矢印で結ばれている連鎖項目が中心項目で(同一連鎖と類似連鎖を形成し、さらに結束調和を成しているもの)結ばれていない連鎖項目が非中心項目(同一連鎖と類似連鎖のみの形成。Lepper が結束的であるとする段階)、そして act 6 のようなどの連鎖にも入らずに単独で存在する項目が周辺項目である。

作図の解釈基準として、Hasan は 1) 関連項目に対する周辺項目の割合が低ければ低いほど、テキストの結束性は高くなる、2) 非中心項目に対する中心項目の割合が高ければ高いほど、テキストの結束性は高くなる、3) 相互作用の図で断絶が少ないほど、テキストの結束性は増す、をあげている。この解釈基準に従って、サンプル A とサンプル B の結束性の割合比を出すと、次のような数値が得られた。

サンプル A

関連項目に対する中心項目	48%
非中心項目	34%
周辺項目	18%

サンプル B

関連項目に対する中心項目	30%
非中心項目	53%
周辺項目	17%

この二つの数値を比較すると、結束的連鎖の段階では、統合失調症患者の方が正常者より高い結束性の割合比を示したが、連鎖の相互作用の段階では、正常者の方が高い割合比を示している。他のワード・ブロックに関しても、細かい数値には多少の差はあるが、この三つの解釈基準間の割合比はほぼこれと類似した割合比を示している。

5. 考察

3 で出された数値結果より次のことが言える。

1. 発話に際し、統合失調症患者は会話上、または論理的意味よりむしろ語彙的意味に従って話す傾向が強い。このことは臨床観察より従来言われてきていることである。例えば次のような例である。

Since they've attacked Pearl Harbor, now they will attack Diamond Harbor or Gold Harbor.

(Arieti, 1974)

'harbor' が 2 回繰り返され、また 'pearl,' 'diamond,' 'gold' などはずべて宝石、輝石の

類で、語彙的結束性は強い。しかし会話上の意味を考えた場合、筋が通っているとは考えにくい。こうした現象については、1) 統合失調症患者が音声的な諸特徴、押韻、語呂合わせ、同義語の拡大使用に基づいて語彙を選ぶ (Arieti 1974)、2) コンテキストを考慮して語彙選択をするのではなく、強い意味、または患者が好む意味から語彙選択をし (Chapman & Chapman, 1973)、3) ディスコース上、時間的に離れた時点よりも近い時点で発話されて語彙に影響を受ける (Salzinger, Prtnoy, Pisoni, & Feldman, 1970)、といったような諸特徴が、臨床観察より指摘されている。本研究で用いられた手法は、これら統合失調症患者の言語使用特徴を、言語学的に証明する手立ての一つとなるものである。

2. その高い語彙的結束性にもかかわらず、統合失調症者のスピーチを意味面から理解することが困難であることから、治療同盟が成り立っているとは考えにくい。治療同盟は治療者、患者間に理解関係が成り立っていなければ成立しえないからである。従って類似連鎖の段階で治療同盟の存在の有無を断定するのは妥当とはいえない。
2. 統合失調症者のスピーチが理解困難なのは、使用される語彙のコンテキスト関係が考慮されていないからである。結束性を考える際は、メッセージ自体を問題としなければならないのであって、その場合は構成素間の関係が考慮されることになり、構成素間の関係を考慮することは、コンテキストの適切性の確認となる。

選択体系機能理論では、すべての言語における意味の基本的な領域は「観念構成的 ideational」(「経験構成的 experiential」)、「論理構成的 logical」という二つの下位分類がある)、「対人的 interpersonal」)、「テキスト形成的 textual」という三つの機能領域であるとしている。その中で経験構成的機能では節を、経験のパターンを提示する方法としての様相においてみる。経験を解釈構築するための基本的仕組み、つまり現実というものが諸過程から成り立っているという仕組みを具現しているとする。これを成立させるための文法の体系が「過程構成 transitivity」で、それぞれ「物質過程 material process」、「心理過程 mental process」、「関係過程 relational process」の3つを主要過程としている(その他に中間的な過程として、「行動過程 behavioral process」、「発言過程 verbal process」、「存在過程 existential process」とがある)。過程は、1)「過程中核部 process」(動詞群)、2)過程への「参与要素 participant」(名詞群)、3)過程の関わる「状況要素 circumstance」(副詞群か前置詞句)という三つの構成要素からなる。これら三つの要素が、生じている事象を解釈構築するための準拠枠を与えるとする (Halliday, 1994)。結束調和分析では、これらの各構成素を語彙的意味に基づいて分類し、それらが互いに相互作用をしているかどうかをみるのだが、この過程がコンテキストの適切性確認となるのである。従って、結束調和分析において各構成素のグループ間の相互作用をみることは、コンテキストの適切性確認の手法となるものである。

以上の考察より、コンテキストの適性確認を欠いた手法は、つまり類似連鎖の段階で結

束性検索方法として適用するのは不適切であると考えられる。

なお、作図より観察される相互作用の特徴として、次のことがあげられる。

図 2 より、Move No.61.2 と 62 が結束調和を示しているが、実際は次のような会話内容となっている。

- [61.1] S: Which one?—
[61.2] the one in my right eye?
[62] D: Left eye.

上記の例において、結束的調和は患者自身の発話内で起こっているのではなく、患者の発話を受けて、治療者がそれを鸚鵡返しに繰り返すか、または確認、明確化を求めるための発話になっている。[69]と[70]に対しても同様で、[73.2]と[73.3]では、治療者の発話内での結束調和であるのに対して、サンプルAでは患者の発話内において結束調和が成立している。しかも調和は隣接する move で生じるだけではなく、move を隔てたところで生じているという特徴がある。

このことから言えることは、統合失調症患者との面接では、1)患者の move 数が少なく、turn 数が多いこと、2) 正常者との面接では、患者自身の発話内での結束調和の成立が可能であるのに対して、統合失調症患者との面接では、治療者の発話コントロールによって結束調和が成立しているという点である。従って、統合失調症者の面接では結束調和が隣接する turn 同志の間で成立することが多い。

会話ディスコースはあるトピックからあるトピックへと何の脈絡もなしに移っていくものではなく、会話の目的にもよるが、ある程度の一貫性と発展の予測性を持って筋道の通った流れ方をするものである。結束性はそうした流れに付随して起こるもので、基本的には話者の選択によって実現されていくものである。従って結束性を緊密にするために結束性を形成しようとする選択には、無意識、意識的にであれ、話者の意図がはたらくのである。そしてそれは取りも直さず面接現場に臨む患者と治療者の心的姿勢なのであり、それが共通のトピックを維持しようとする話し手同志の協力関係を生むという意味で、結束性は基本的に、治療同盟の形成に加担する重要な要素とみなすことができるという立脚点に立てると考える。そしてこの結束性と治療同盟との相関関係の存在が仮定できるとすれば、治療同盟は面接における相互作用によって形成されるテキスト性の度合いに左右されるといえる。Halliday、Hasan(1976)によれば、どんな言語の断片であれ、操作的なもの、換言すれば、ある場面の脈絡において統一体として機能しているものはテキストを構成する。そしてテキストにテキスト性を与える前提が結束性である。そして Halliday がテキスト性はオール・オア・ナッシング、つまり結束的なつながりの密度の高い束があるか、それとも全然ないかの問題ではなく程度問題であるとするように、治療同盟もまた程度問題であるという見方ができよう。

6. 今後の課題

本研究では、TCMとLepperによる結束性の割り出しとの間に整合性を持たせるために、150ワードを一つのワード・ブロックの区切りとしたが、結束性を考える際に、150ワードという単位が適切かどうかについて今後検討を加えなければならない。

またHasanは、本研究で用いた結束調和分析を子供の昔話の語りを基に発展させたものであるため、本研究においてこの手法を会話に適用するには幾つかの修正を必要とした。会話への適用に際しては、手法にさらなる洗練を加えていく必要がある。

注

1. TCM(The Therapeutic Cycles Model)

Mergenthalerによって開発されたコンピューターによる statistical content analysis で、精神療法の相互作用における言語行動の正常と逸脱パターンを記述する手法。

3. グラウンディド・セオリー (Grounded Theory)

Glaser, Barney & Strauss, Anselm L.によって提唱された社会学における理論構築プロセスと姿勢を基に生み出された理論。

参考文献

- Ariety, S. (1974) "Interpretation of Schizophrenia". New York: Basic Books
- Eggins, S. Slade, D. 1997. Analysing Casual Conversation. London and Washington: Cassell
- Halliday, M. A. K., Hasan, R. 1976. Cohesion in English. London: Longman Group Limited.
- Halliday, M.A.K., Hasan, R. 1985. Language, context, and text: Aspects of Language in a social-semiotic perspective. Deakin University.
- Halliday, M.A.K. 1994. An Introduction to Functional Grammar: Edward Arnold (Publishers) Limited. (機能文法概説. 2001. 山口登 寛寿雄 訳 東京: くろしお出版)
- 栗原和彦. 1992. 「治療同盟」『心理臨床大事典』氏原寛、他編、210-213. 東京: 培風館.
- Martin, J. R. 1992. English Text. Philadelphia/ Amsterdam: John Benjamins Publishing Co.
- Martin, J. R. (1979) "Crazy Talk" N. Y.:Plenum Press
- Mergenthaler, E. 1985. Textbank Systems. Computer science applied in the field of psychoanalysis. Heidelberg New York: Springer.
- Mergenthaler, E. 1996. "Emotion-Abstraction Patterns in Verbatim Protocols: A New Way of Describing Psychotherapeutic Processes." In Journal of Consulting and Clinical Psychology
- Mergenthaler, E., Lepper, G. 2004. Exploring Group Process
- Mergenthaler, E., Lepper, G., Kato, S. 2004. "Topic Coherence in the Therapeutic Alliance: An Analysis of the Microstructure of the Therapeutic Interaction in One Session of a Brief Psychodynamic Psychotherapy." In Book of Abstracts. Panel paper presented to the Society for Psychotherapy Research, 35th Annual International Meeting, Rome, Italy
- Salzinger, K., Portnoy, S., Pisoni, D.B., Feldman, R.S. 1970. "Communicability deficit in schizophrenics resulting from a more General Deficit. Language and of Abnormal Psychology, 76

English Riddles: A Blending Perspective

Kazuya Yasuhara

Kyoto University, Graduate School

1. Introduction

While it can be an interesting research topic, the study of riddles has hardly received attention in the literature of linguistics. In actual fact, such shadowy relationship between them can be also understood from the following Crystal's (1998) observation: "Ludic language has traditionally been a badly neglected subject of linguistic enquiry — at best treated as a topic of marginal interest, at worst never mentioned at all. (Crystal 1998: 1)." However, counter to such tradition, this paper will provide an opportunity in which we can see how linguistics and the study of riddles are closely related to each other.

The purpose of this paper is to elucidate the construction of meaning observed in English riddles from the perspective of **Riddle-Oriented Network Model** (cf. Yasuhara 2002, 2003, 2004), which has so far been proposed for analyzing the understanding process of Japanese riddles. Put differently, the most important question here is: How does a riddler-riddlee connect a riddle with its answer to understand the riddle?

2. Riddle-Oriented Network Model

Riddle-Oriented Network Model can be emerged by slotting Langacker's (1987, 1990) symbolic view of grammar and Langacker's (1993, 1997, 1999) reference-point model into Fauconnier and Turner's (1994, 1998, 2002) conceptual blending model. Hence two cognitive instruments, mental spaces and connectors, play a crucial role in this model. This section will focus particularly upon mental spaces to summarize the overall framework of this model.

The model has two kinds of mental spaces at the abstract level: Leading Spaces, which work independently in the course of meaning construction, and Subordinate Spaces, which serve dependently on leading spaces. The former includes Input Spaces (InS) and Blended Spaces (BS), and the latter Generic Spaces (GS) and Intermediary Spaces (IS). Definitions of each space are as follows: (i) **Input Spaces**: the pairing of Form¹ and Meaning² (i.e. Symbolic Space³: SS), (ii) **Generic Spaces**: some common structure and organization shared between Input Spaces, (iii) **Intermediary Spaces**^{4, 5}: some information that has a contiguous relationship with Input Spaces (more specifically, Form-IS is based on the formal level, while Meaning-IS the semantic level). (iv) **Blended Spaces**: emergent structure made by selectively projecting from Input Spaces and Intermediary Spaces. Additionally, this model also has the following space functions: (i) **Answer Space** (AS) that contains the riddle answer, and (ii) **Question Space** (QS) that includes the conceptual original of the riddle question.

3. English Riddles: A Cognitive Study

This section will analyze six types of English riddles from the perspective of Riddle-Oriented Network Model: Metaphorical Riddles, Metonymic Riddles, Meta-Linguistic Metonymic Riddles and Blending Metonymic

3.1 Metaphorical Riddles

- (1) a. [Q] House with one leg. [A] Umbrella. (Shibata *et al.* 1984: 640)
 b. [Q] What is that with one leg and one eye? [A] Needle. (*ibid.*: 644)
 c. [Q] A crowd of little men livin' in a flattop house. [A] Matches in a box. (*ibid.*: 650)
 d. [Q] Four brothers under one hat. [A] Table. (*ibid.*: 908)
 e. [Q] What stands on one leg with its heart in its head? [A] Cabbage. (*ibid.*: 907)

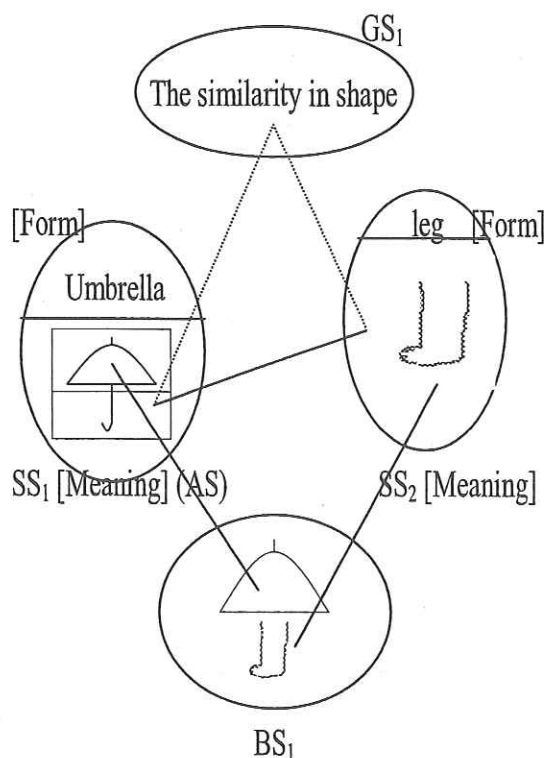


Figure 1: (1a)

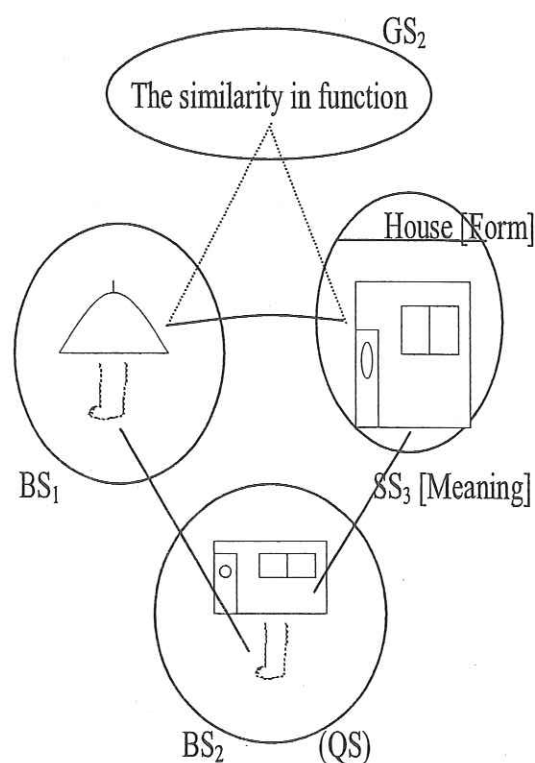


Figure 2: (1a)

- [Figure 1] 1. SS₁ is constructed as Answer Space. 2. The similarity in shape is recognized, as described in GS₁. 3. The conceptual blending of SS₁[Meaning] and SS₂[Meaning] makes BS₁.
 [Figure 2] 1. BS₁ in Figure 1 is the same as BS₁ in Figure 2. 2. The similarity in function (e.g. blocking the rain) is captured, as stored in GS₂. 3. The conceptual blending of BS₁ and SS₃[Meaning] produces BS₂, which functions as Question Space.

3.2 Metonymic Riddles

- (2) a. [Q] Riddle me, riddle me, what is that? Over the head and under the hat?
 [A] Hair. (Shibata *et al.* 1984: 639)
 b. [Q] Green head, yellow toes, If you don't tell me this riddle, I'll ring your nose.
 [A] Duck. (*ibid.*: 640)
 c. [Q] A riddle! A riddle! A hole in the middle! [A] Doughnut. (*ibid.*: 639)
 d. [Q] What goes up an' never goes down? [A] Smoke. (*ibid.*: 645)
 e. [Q] Come up and let us go; Go down and here we stay. [A] Anchor. (*ibid.*: 651)

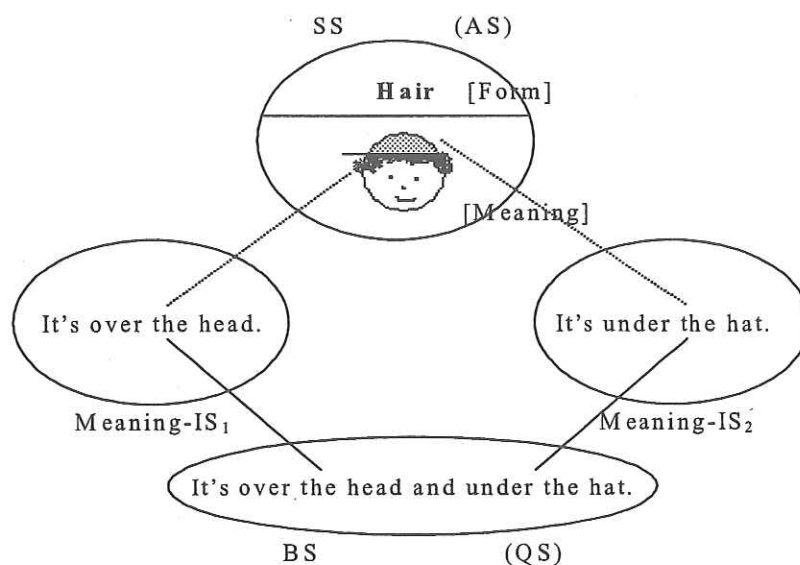


Figure 3: (2a)

[Figure 3] 1. SS is built up as Answer Space. 2. Based on SS[Meaning], Meaning-IS₁ and Meaning-IS₂ are constructed. 3. The conceptual blending of Meaning-IS₁ and Meaning-IS₂ makes BS, which has the function of Question Space.

3.3 Meta-Linguistic Metonymic Riddles

- (3) a. [Q] From what number can you take half and leave nothing?
 [A] The number is 8. (Rosenbloom 1976: 126)
- b. [Q] What increases its value by half when turned upside down?
 [A] 6. (Green and Pepicello 1980: 31)
- c. [Q] What is the end of everything? [A] The letter G (Rosenbloom 1976: 221)
- d. [Q] What word allows you to take away two letters and get one? [A] Alone. (*ibid.*: 146)

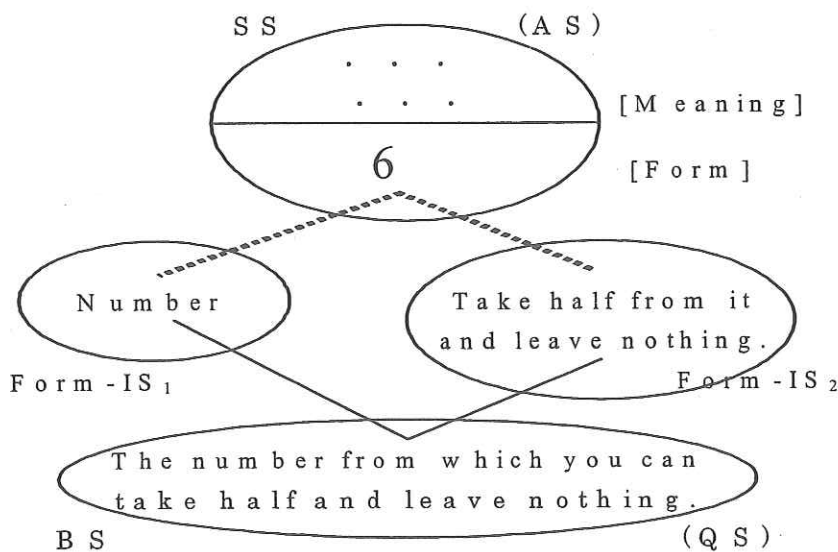


Figure 4: (3a)

[Figure 4] 1. SS is set up as Answer Space. 2. Based on SS[Form], Form-IS₁ and Form-IS₂ are constructed. 3. The conceptual blending of Form-IS₁ and Form-IS₂ shapes BS. The function of Question Space is assigned to this BS.

3.4 Blending Metonymic Riddles

- (4) a. [Q] What code message is the same from left to right, right to left, upside down and right side up?
 [A] SOS. (Rosenbloom 1976: 114)
- b. [Q] What time is the same spelled backward or forward? [A] Noon. (*ibid.*: 12)
- c. [Q] What ten letter word starts with g-a-s? [A] Automobile. (*ibid.*: 12)
- d. [Q] What three letters in the alphabet frighten criminals? [A] F.B.I. (*ibid.*: 170)

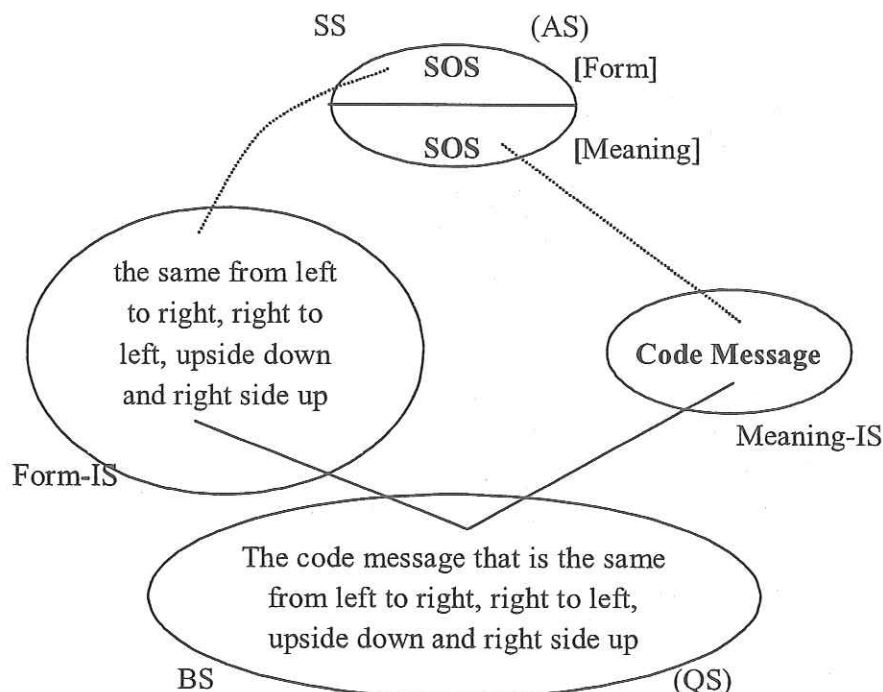


Figure 5: (4a)

[Figure 5] 1. As Answer Space, SS is built up. 2. Meaning-IS is constructed on the basis of SS[Meaning]. Form-IS is also constructed from SS[Form]. 3. The conceptual blending of Form-IS and Meaning-IS makes BS, which serves as Question Space.

3.5 Meta-Linguistic Riddles

- (5) a. [Q] My first is a circle, My second a cross; If you meet with my whole, Look out for a toss!
 [A] Ox. (Shibata *et al.* 1984: 910)
- b. [Q] Add ten to nothing and what animal does it make? [A] OX. (Green and Pepicello 1980:30)
- c. [Q] Fifty is my first, nothing is my second, Five just makes my third, my fourth's a vowel reckoned;
 Now, to fill my whole, put all my parts together; I does if I get cold, but never fear cold weather.
 [A] L-O-V-E. (Abrahams and Dundes 1972: 135)
- d. [Q] Three-fourths of a cross, and a circle complete, A rectangle where two semi-circles meet,
 Two semi-circles and a circle complete. [A] Tobacco. (Abrahams and Dundes 1972: 135)

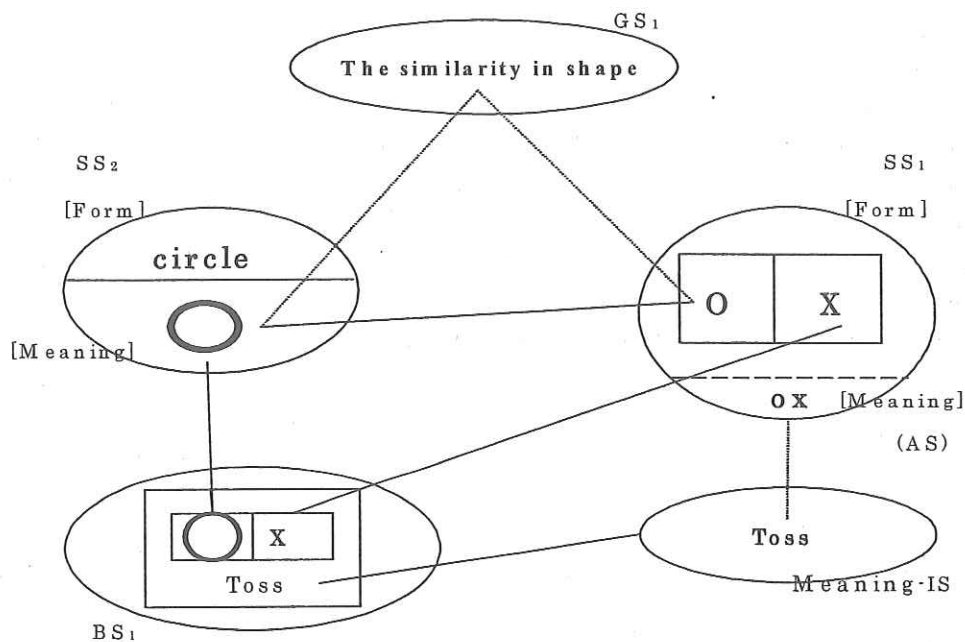


Figure 6: (5a)

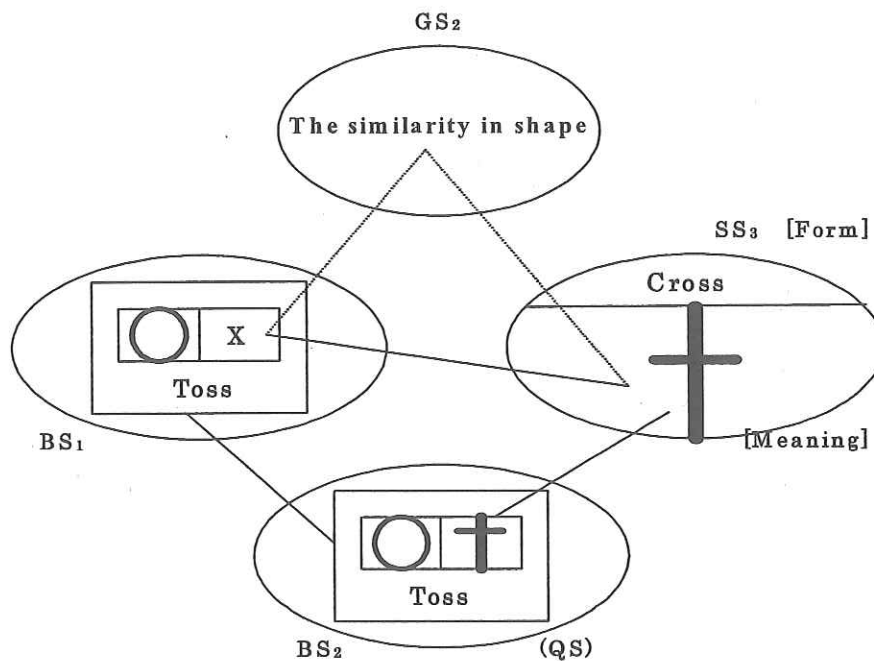


Figure 7: (5a)

- [Figure 6] 1. As Answer Space, SS_1 is constructed. 2. The similarity in shape is recognized, as captured in GS_1 . 3. Based on SS_1 [Meaning], Meaning-IS is set up. 4. The conceptual blending of SS_1 [Form], SS_2 [Meaning] and Meaning-IS emerges BS_1 .
- [Figure 7] 1. BS_1 in Figure 6 is the same as BS_1 in Figure 7. 2. The similarity in shape is found, as described in GS_2 . 3. The conceptual blending of BS_1 and SS_3 [Meaning] produces BS_2 , which receives the function of Question Space.

3.6 Conundrums

(6) Conundrums [TYPE-1]

- a. [Q] What girl's name is like a letter? [A] Kay (K). (Rosenbloom 1976: 40)
 b. [Q] What is the hottest day of the week? [A] Friday (Fry day). (*ibid.*: 90)
 c. [Q] What does a comedian eat for breakfast? [A] Pancakes (Pun-cakes). (Gallant 1996: 20)

(7) Conundrums [TYPE-2]

- a. [Q] What "bus" crossed the ocean? [A] Columbus. (Rosenbloom 1976: 113)
 b. [Q] What tune makes everybody glad? [A] Fortune. (Shibata *et al.* 1984: 643)
 c. [Q] Which of your kin is nearest you at the table? [A] Your napkin. (*ibid.*: 643)

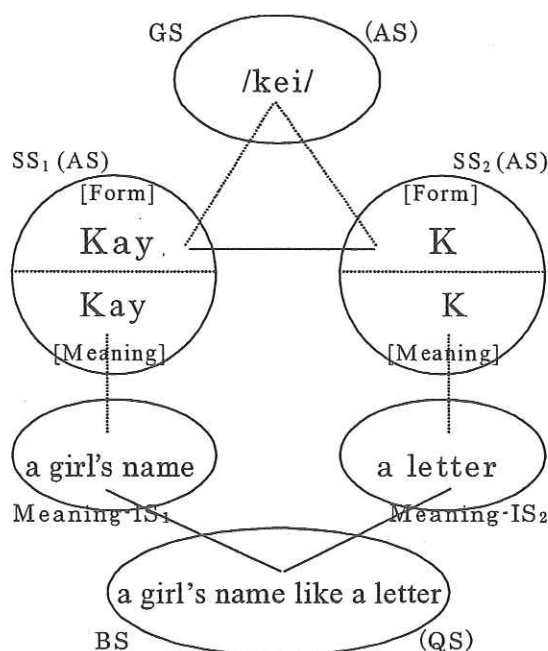


Figure 8: (6a)

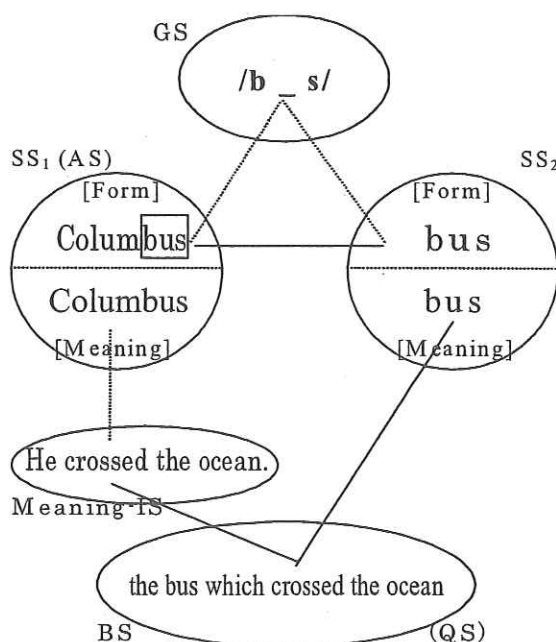


Figure 9: (7a)

[Figure 8] 1. The phonetic similarity /kei/ is recognized, as stored in GS. Note that the function of Answer Space is assigned to all three spaces (i.e. SS₁, SS₂, and GS). 2. SS₁[Meaning] and SS₂[Meaning] construct Meaning-IS₁ and Meaning-IS₂ respectively. 3. The conceptual blending of Meaning-IS₁ and Meaning-IS₂ forms BS, which functions as Question Space.

[Figure 9] 1. The phonetic similarity /b_s/ is abstracted, as described in GS. Notice that the function of Answer Space is only assigned to SS₁. 2. SS₁[Meaning] constructs Meaning-IS. 3. The conceptual blending of Meaning-IS and SS₂[Meaning] shapes BS, to which the function of Question Space is assigned.

4. Conclusion

The discussion thus far has shown that the framework of Riddle-Oriented Network Model can have the descriptive and explanatory power for the six types of English riddles at least. It would be therefore reasonable to think that this implies that Riddle-Oriented Network Model can be universal, though of course in part. With its focus on Cross-Space Mapping (i.e. the mapping between Input Spaces) and IS-construction (i.e. Meaning-IS or Form-IS), each type of English riddles above can be summarized as in Table 1:

	Cross-Space Mapping (Between Input Spaces)	IS-construction (Meaning-IS or Form-IS)
Metaphorical Riddles	Meaning — Meaning	Meaning [Optional]
Metonymic Riddles		Meaning
Meta-Linguistic Metonymic Riddles		Form
Blending Metonymic Riddles		Meaning + Form
Meta-Linguistic Riddles	Form — Meaning or Form	Meaning [Optional]
Conundrums	Form — Form	Meaning

Table 1

From the blending perspective, it also turns out that various types of blending can be employed in the meaning construction of riddles, as shown in (8):

(8) Blending Types

A. Input-Space Blending: Blending between the two input spaces.

a. Homogeneous Blending: Blending at the same level [Meaning + Meaning] (e.g. Figures 1, 2, and 7)

b. Heterogeneous Blending: Blending at the different level [Form + Meaning] (e.g. Figures 6)

B. Intermediary-Space Blending (IS-Blending): Blending between the two intermediary spaces.

a. Homogeneous IS-Blending: IS-Blending at the same level.

i. Meaning-IS-Blending: IS-Blending at the semantic level [Meaning + Meaning] (e.g. Figures 3 and 8)

ii. Form-IS-Blending: IS-Blending at the formal level [Form + Form] (e.g. Figure 4)

b. Heterogeneous IS-Blending: IS-Blending at the different level [Form + Meaning] (e.g. Figure 5)

C. Input-Intermediary Blending: Blending between the input space and the intermediary space (e.g. Figure 9)

It can therefore be concluded that blending operations play a central role in the language play of riddles, and they make it possible to provide a foundation for the creative aspect observed in the language of riddles. Otherwise phrased, blending operations can be at the core of understanding riddles.

However, at the present research, it might be slightly difficult to say that the validity of this model can be sufficiently supported, because there is no guarantee that the model is applicable to all English riddles. It also remains unclear whether or not this framework can provide the similar analyses for riddles in languages other than Japanese and English. In future research, it should be therefore expected to make further case studies in order to explore more strictly the plausibility of Riddle-Oriented Network Model, which in turn reveal the universality of this model.

Notes

¹ [Form] in Input Spaces includes phonetic information, orthographic information, meta-linguistic information, etc.

² [Meaning] in Input Spaces contains semantic (or conceptual) information, hierarchical-categorical information, frame/script information (cf. Minsky 1980, Fillmore 1975, 1982, and Schank and Abelson 1977), etc.

³ In general, the pairing (or bipolar) structure of Input Spaces originates in 'the symbolic view of grammar' discussed in Langacker (1987, 1990).

⁴ From a general perspective, it is possible to say that the construction of Intermediary Spaces is conducted with the help of 'reference-point model' as discussed in Langacker (1993, 1997, 1999).

⁵ Note incidentally that Intermediary Spaces and Generic Spaces are extremely similar in nature, specifically in the sense that both spaces ultimately specify the contiguous information induced from Input Spaces. In fact, the only

difference between the two spaces is whether or not the space in question has the information common to the two input spaces.

References

- Abrahams, Roger D., and Alan Dundes. (1972) "Riddles." In: Richard Dorson (ed.), *Folklore and Folklife: An Introduction*, pp. 129-43. Chicago: The University of Chicago Press.
- Crystal, David. (1998) *Language Play*. Chicago: The University of Chicago Press.
- Fauconnier, Gilles, and Mark Turner. (1994) "Conceptual Projection and Middle Spaces." Technical Report no.9401, Department of Cognitive Science, University of California, San Diego.
- Fauconnier, Gilles, and Mark Turner. (1998) "Conceptual Integration Networks." *Cognitive Science* 22 (2): 133-187.
- Fauconnier, Gilles, and Mark Turner. (2002) *The Way We Think: Conceptual Blending and The Mind's Hidden Complexities*. New York: Basic Books.
- Fillmore, Charles J. (1975) "An Alternative to Checklist Theories of Meaning." *BLS* 1: 123-131.
- Fillmore, Charles J. (1982) "Frame Semantics." In: The Linguistic Society of Korea (ed.), *Linguistics in the Morning Calm*, pp. 111-137. Seoul: Hanshin Publishing Co.
- Gallant, Morrie. (1996) *Funniest Riddle Book in the World*. New York: Sterling Publishing.
- Green, Thomas A., and William J. Pepicello. (1980) "Sight and Spelling Riddles." *Journal of American Folklore* 93: 23-34.
- Langacker, Ronald W. (1987) *Foundations of Cognitive Grammar, Vol.1: Theoretical Prerequisites*. Stanford: Stanford University Press.
- Langacker, Ronald W. (1990) *Concept, Image, and Symbol: The Cognitive Basis of Grammar (CLR 1)*. Berlin/ New York: Mouton de Gruyter.
- Langacker, Ronald W. (1993) "Reference-Point Constructions." *Cognitive Linguistics* 4 (1): 1-38.
- Langacker, Ronald W. (1997) "A Dynamic Account of Grammatical Function." In: Joan Bybee, John Haiman, and Sandra A. Thompson (eds.), *Essays on Language Function and Language Type*, pp. 249-273. Amsterdam: John Benjamins.
- Langacker, Ronald W. (1999) "Double-Subject Constructions." In: The Linguistic Society of Korea (ed.), *Linguistics in the Morning Calm* 4, pp. 83-104. Seoul: Hanshin Publishing Company.
- Minsky, Marvin. (1980) "A Framework for Representing Knowledge." In: Dieter Metzger (ed.), *Frame Conceptions and Text Understanding*, pp. 1-25. Berlin/New York: Walter de Gruyter.
- Rosenbloom, Joseph. (1976) *Biggest Riddle Book in the World*. New York: Sterling Publishing.
- Schank, Roger C., and Robert P. Abelson (1977) *Scripts, Plans, Goals, and Understanding: An Inquiry into Human Understanding*. Hillsdale, N.J.: Lawrence Erlbaum.
- Shibata, Takeshi, Shuntaro Tanikawa, and Sumiko Yagawa. [eds.] (1984) *Sekai Nazonazo Daijiten (World Encyclopedia of Riddles)*. Tokyo: Taishukan.
- Yasuhara, Kazuya. (2002) "Ninchi-Gengogaku to Nazonazo-Kenkyu: Riddler no Ninchi-Purosesu o Saguru [Cognitive Linguistics and Riddle Studies: Investigating Riddler's Cognitive Processes]." *Goyoron Kenkyu [Studies in Pragmatics]* 4: 1-16.
- Yasuhara, Kazuya. (2003) "Contemporary Japanese Riddles: A Cognitive Linguistics Perspective." *Proceedings of the 2nd International Conference on Speech, Writing, and Context (ICSWC2)*, pp. 204-209.
- Yasuhara, Kazuya. (2004) *Nazonazo no Ninchi-Gengogaku: Gendai-Nihongo no 'Nidan-Nazo' Sakusei no Nazo ni Semaru [Riddles in Cognitive Linguistics: Exploring the Making of 'Nidan-Nazo' in Contemporary Japanese]*. M.A. Thesis, Kyoto University.

「おいしい」としか言いようがないはずなのに
——味ことばの謎とフィクションの構造——

山口治彦
神戸市外国語大学

1. 味覚に関するふたつの謎

- (1) 私は、おいしいものはおいしいのであって、おいしいとしか表現できないのではないかと悟っている。
(山本隆『美味の構造——なぜ「おいしい」のか』)
- (2) 味ことばは豊かである。味そのものより豊かである。
(瀬戸賢一(編著)『ことばは味を超える——美味しい表現の探求』)
- (3) 軽快で滑らかな味わいの中にしっかりとした飲み応え。その後から甘酸っぱい香りが波のようにゆらゆらと口に広がる。
(金関亜紀『「日本全国うまい焼酎」虎の巻』)
- (4) 口に入れてしばらく味わっていると、その奥深い濃い味の中にトロツとするようなコク味がある。そして、誠に上品な甘味が濃い。[中略]
ひとつひとつのきめの細かい上品な味が淡味となって集合し、それが幾つも集まって濃味を築いているものだから、濃いうま味なのだがむしろ淡く感じて切れ味がよい。
(小泉武夫『食あれば楽あり』)
- (5) いい酒だ。よく成熟している。肌理がこまかく、すべすべしていて、くちびるや舌に羽毛のように乗ってくれる。ころがしても、漉しても、砕いても、崩れるところがない。さいごに咽喉へごくりとやるときにも、滴が崖をころがりおちる瞬間に見せるものをすかさず眺めようとするが、のびのびしていて、まったく乱れない。若くて、どこもかしこも張りきって、滲刺としているのに、艶やかな豊満がある。円熟しているのに清淡で爽やかである。つつましやかに微笑しつつ、ときどきそれと気づかずに奔放さを閃かすようでもある。咽喉へ送って消えてしまったあとでふとそれと気がつくような展開もある。
- (6) 味覚表現の謎
 - a. おいしいものはおいしいとしか言いようがないはずなのに、その一方で美味の表現が豊かに展開しているのはなぜか
 - b. 本来なら不自然なはずの味覚表現がフィクションでは受け入れられるのはなぜか

2. からだの束縛から離れて——遠隔化の効用

(7) 「おいしい」としか言いようがない生理的理由

養老——においという感覚がとらえにくいのは、脳の構造と関係があると私は思っています。嗅球から伸びた神経は、二つに分かれて、一方は大腦の新皮質に入るのですが、もう一方は辺縁系に入る。つまり嗅覚の情報の半分は、いわゆる「古い脳」のほうへ行ってしまい、言語機能をもつ新皮質には届かないんです。視覚の場合は、情報がすべて新皮質に入りますから、目で見たものは言葉で表現しやすいのですが、半分しか届かない嗅覚ではそうはいかない。だから、においの表現は何々のにおいというように勝手に決めてしまう感じになる。

味覚も同じで、情報は半分しか新皮質に入らない。だから料理番組では「おいしい」としか言えないんですよ。意識にのぼってくる部分だけしか表現できないから、そうなっちゃうんです。視覚がわりあい内省的に理解でき、言葉にしやすいのに比べて、嗅覚や味覚が言葉にしにくいのは、そういうところに理由があると思います。

(日経サイエンス (編)『養老孟司 ガクモンの壁』)

- (8) 食物咀嚼時、飲料水摂取時の感覚情報は大腦皮質の各感覚野(味覚、嗅覚、触・圧感覚、温冷覚、痛覚など)で処理され、量的・質的な分析結果が出る。これは言語表現として表出ができるものであろう。これらの情報処理結果は、次に発生学的に古い脳に属する情動や摂食の中枢に送られる。喜怒哀楽の感情や自律神経の活動は誘発するが本質的には新皮質の言語野活動を必要としない。大腦新皮質がかかわる認知過程で言語表現は多彩でも、古い脳がかかわる感情になると言葉を失う。(山本, 2003:)

- (9) A: これ食べてみて! まじ、うまい。

B: うんうん、ありがとう。

- (10) A: あー、おいしいわ。隣で誰か死んでてもわからへんわ。

B: ほんと。おいしいですよ。冬はこれが一番ですね。

- (11) immediacy (近接性) / displacement (遠隔化)

(Chafe, 1992, 1994)

- (12) こうして旅をしていると、世の中にはたしかにいろいろおいしい食べものがあると思う。

「これは死ぬほどうまい!」と世界中に叫びたくなるほどのものは、しかし、そうはない。

その、めったにないことに、今回ついにめぐりあえた。ほっぺたが落ちる、あごが落ちるどころではない。おいしさに体が震えた。舌が踊り、胃袋が歌いだした。生きてあり、もの食うことの幸せをしみじみ確かめた。

それは、一杯の熱いスープだった。

(辺見庸『もの食う人びと』)

3. グルメ漫画の不自然さ——読者への伝達もたらすもの

(13)



(雁屋哲・花咲アキラ『美味しんぼ』57集)

(14)



(雁屋哲・花咲アキラ『美味しんぼ』15巻)

(15)



(雁屋哲・花咲アキラ『美味しんぼ』66巻)

(16) グルメ漫画対照表

『美味しんぼ』: 単行本 89 巻／延べ発行部数 1 億冊以上
味の求道者を描く／「究極のメニュー」
劇的で饒舌な味覚表現

『クッキングパパ』: 単行本 77 巻
ふつうのサラリーマンが日々の料理に工夫を凝らす
「おいしい」と「うまい」のみ

(17)



(うえやま とち『クッキングパパ』 37 巻)

(18)



(うえやま とち『クッキングパパ』 37 巻)

(19)



『クッキングパパ』2巻



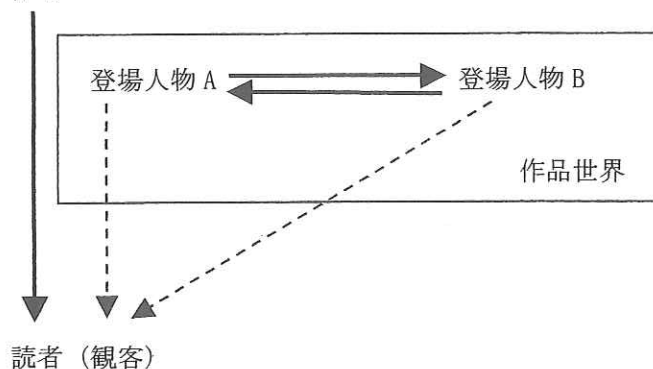
『クッキングパパ』9巻

- (20) 弁護士、医者、技術者など専門分野をもつ人たちが同じ専門家を相手に専門領域について話す時、会話中にはおそらく恐ろしいほどの専門用語が飛び交うことでしょう。ところが映画では飛び交いません。観客が理解できないからです。そこで専門用語を専門的な匂いが残る程度に制限し、後はすべて観客がわかるレベルに落とします。映画が扱う範囲は政治経済、科学技術、宗教哲学、歴史、芸術、スポーツ、SFとあらゆる分野にわたります。しかし、どの分野の映画を作ったとしても、会話に登場する単語は一般大衆レベルに落ちつきます。観客層のターゲットを子供にまで広げた場合、単語レベルはもっと下がります。もし、どうしても観客の知らない用語を使わなければならない必要が生じた場合は、その用語を知らない人に専門家が解説するシーンを作るなどして用語の意味を観客に説明します。しかしこれを度々繰り返すとストーリーが間延びしてしまいますから、この手を使ったとしても一、二度でしょう。

(新田, 1994)

- (21) 言語作品におけるふたつのコミュニケーション (山口, 1998)

作者



横方向の矢印

微視的コミュニケーション

登場人物間

縦方向の矢印

巨視的コミュニケーション

作者から読者へ

(22)



(寺沢大介『将太の寿司』9巻)

4. 心理描写と饒舌——虚構としての味覚表現

- (23) 「問題のロマネ・コンティだけれどね。これもすみずみまで見てきた。聞きしにまさるものだよ。」[中略]

重役はそっとグラスを口にはこんで、一口、二口含むと、静かに噛みしめてからグラスをテーブルにもどし、手帳もメモも見ないで話しはじめた。まだ記憶がういういしくて、誇りたかったり、話を作りたかったりはちょっとあるものの、ふりかえるよりは眼前にあるものを注視することに熱中しているまなざしである。小説家は耳を澄ませながら深紅に輝く、若い酒の暗部に見とれたり、一口、二口すすって噛んだりした。いい酒だ。よく成熟している。肌理がこまかく、すべすべしていて、くちびるや舌に羽毛のように乗ってくれる。ころがしても、漉しても、砕いても、崩れるところがない。さいごに咽喉へごくりとやるときにも、滴が崖をころがりおちる瞬間に見せるものをすかさず眺めようとするが、のびのびして、まったく乱れない。若くて、どこもかしこも張りきって、潑刺としているのに、艶やかな豊満がある。円熟しているのに清淡で爽やかである。つつましく微笑しつつ、ときどきそれと気づかずに奔放さを閃かすようでもある。咽喉へ送って消えてしまったあとでふとそれと気がつくような展開もある。

(開高健「ロマネ・コンティ・一九三五年」)

- (24) 仲間を集めて黄昏になるのを待ってから栓をこじあげ、グラスについでみると、無色透明な蒸留酒のはずなのにリキュールのような艶と肌理の液がトクトクとでてきた。一滴、二滴、おそるおそる舌にのせてみると杜松の気高い爽涼の香りが口いっぱいひろがって鼻へぬける。しずくは磨きぬかれてこまやかでまろいが、水そっくりの温厚さをたたえている。咽喉へ送ってみると、羽毛で撫でたほどの痕も感じさせずにひっそり消えていく。いつも茶碗で引っ掛けるジンは咽喉、食道、胃、腸とヤキヤキした熱をどこまでもつたえていき、小さな火が走るようなのだが、この滴とくらべてみると、薬用アルコールでのばした松脂^{まつやに}と聞いたかった。その滴は訴えたり、叫びたてたり、足踏みしたりに夢中なのだが、この滴は自身であることに花のように満足して静謐^{せいひつ}であった。透明の中に深奥があり、しかも優しいのである。

「……………」

「……？」

「……！」

(開高健「黄昏の力」)

- (25) アンディーヴの截片はお絹の口の中で慎重に噛み砕かれた。青酸^{あおずっぱ}い滋味^{しょうえき}が漿液となり嚥下^{のみくだ}される刹那に、あなやと心をうつろにするうまさがお絹の胸をときめかした。物憎いことには、あとの口腔に淡い苦味が二日月の影のようにほのかにとどまったことだ。この淡い苦味は、またさっき喰^たべた昼食の肉の味のしつこい記憶を軽く拭き消して、親しみ返せる思い出にした。アンディーヴの截片はこの効果を起すと共に、それ自身、食べた負担を感じしめないほど軟く口の中で尽きた。滓というほどのものも残らない。

「口惜しいけれど、おいしいわよ」

お絹は唾液がにじんだ唇^{くちびる}の角を手の甲でちよつと押えてこういった。

(岡本かの子「食魔」)

(26) 味覚表現とコンテキストの特殊化

	食卓の会話	エッセイ・日記	漫画	小説
ディスコースの形態	対話	独話	語り	語り
使用言語	話しことば	書きことば	話しことば	書きことば、 話しことば
近接・遠隔	近接的	遠隔化	遠隔化	遠隔化
参与者	話し手、聞き手	書き手、読み手	書き手、読み手、 登場人物	書き手、読み手、 登場人物、語り手
伝えられることばの 性格	せりふ	記述(、せりふ、思考)	せりふ(、思考)、絵	せりふ、思考、ナレー ション
伝達経路	1方向	1方向	2方向(微視的／巨視 的)	2方向(微視的／巨視 的)

参考文献

- Chafe, W. 1992. Immediacy and displacement in consciousness and language. In F. Coulmas and J. L. Mey eds. *Cooperating with Written Texts: The Pragmatics and Comprehension of Written Texts*, 231-255. Berlin: Mouton de Gruyter.
- , 1994. *Discourse, Consciousness, and Time: The Flow and Displacement of Conscious Experience in Speaking and Writing*. Chicago: The University of Chicago Press.
- Fludernik, M. 1993. *The Fictions of Language and the Languages of Fiction: The Linguistic Representation of Speech and Consciousness*. London: Routledge.
- 金水敏. 2003. 『ヴァーチャル日本語：役割語の謎』東京：岩波書店.
- 日経サイエンス（編）. 2003. 『養老孟司 ガクモンの壁』東京：日本経済新聞社.
- 新田晴彦. 1994. 『スクリーンプレイ上達法』名古屋：スクリーンプレイ出版.
- 瀬戸賢一（編著）. 2003. 『ことばは味を超える：美味しい表現の探求』東京：海鳴社.
- Tannen, D. 1986. Introducing constructed dialogue in Greek and American conversational and literary narrative. In F. Coulmas ed. *Direct and Indirect Speech*, 311-32. Berlin: Mouton de Gruyter.
- 山口治彦 (Yamaguchi, H). 1989. On "unspeakable sentences": A pragmatic review. *Journal of Pragmatics* 13, 577-596.
- , 1998. 『語りのレトリック』東京：海鳴社.
- , 2000. 「話法とコンテキスト：自由直接話法をめぐる」 *JELS 17*（日本英語学会第十七回大会研究発表論文集）261-270.
- , 2003. 「共感覚表現と内省テスト：一方向性の仮説にまつわるコンテキストの問題」『日本語文法』3: 2, 23-43.
- , 印刷中. 「語りで味わう：味ことばの謎とフィクションの構造」瀬戸賢一（編）『味ことばの世界：ことばは味を超える2（仮題）』東京：海鳴社.
- 山本隆. 2001. 『美味の構造：なぜ「おいしい」のか』東京：講談社.
- , 2003. 「おいしさの科学とおいしさの表出」『日本言語学会第127回大会予稿集』15-23. 日本言語学会.
- , 2004. 『「おいしい」となぜ食べすぎるのか：味と体のふしぎな関係』東京：PHP研究所.

英語の疑問文における対義語の選択とその解釈

有光 奈美

naminette@msf.biglobe.ne.jp

獨協大学非常勤講師

1. はじめに

本発表は、英語の疑問文における対義語の選択に見られる3つのタイプの方向性を論じる。英語の対義語については、Jespersen (1924), Cooper and Ross(1975), Lakoff and Johnson (1980) 鍋島(2004) 等の先行研究における指摘を挙げることができる。

Cooper and Ross は、例えば「up and down とは言うが、down and up とは言わない。good and bad とは言うが、bad and good とは言わない。また、high and low とは言うが、low and high とは言わない」ということを取り上げ、対比を表現する日常言語において positive-negative という順になりがちな語の選択の順番が存在していることを指摘している。

本発表は、こうした対比に見られる有標性 (markedness) と無標性 (unmarkedness) が、ある方向性(directionality)を持っている場合があることを指摘する。

それらの言語表現には①生物の身体性に根ざした方向性や、②物理的な量を表すために用いられる対比の方向性、③話し手と聞き手の相互関係によって定まる方向性が潜んでいることを明らかにする。

そして、①、②には積極的な選択の方向性が存在しているが、話し手に特別な意図があれば、語用論的な要因によって、①、②以外の選択も発話可能となってくることを指摘する。こうした③の要素は話し手と聞き手の相互関係によって、双方の作り出す話題の中で、発話者がどのような意図を持っているか、あるいは、お互いがどのような共有知識を持っているかによって、どちらの対義語が積極的に選択されるかが決まってくることを論じる。

2. 先行研究の紹介

Jespersen (1924) :junction and nexus

Cooper and Ross(1975) :word order and world order

Lakoff and Johnson (1980) :ICM

3. 対義語の選択

本発表では、How Adj./Adv. V S? という英語の疑問文の形における対義語の選択に注目する。すると、その選択において、少なくとも3つの傾向があることがわかる。

3.1 生物の身体性に根ざした対比の方向性

(1) a. How old are you?

b. ?How young are you?

(2) a. How tall are you?

b. ?How short are you?

人間は生まれた後、若くなる方向性は存在せず、生物として歳を重ね、老いる方向性が存在している。また、人間の背は、通常徐々に大きくなるという生物学的な方向性が存在している。

そのため、上のような例においては、逆へ向かう対比を示す言語表現は、不自然であり、一般的には使用されない。こうしたとき、対義語のペアは、どちらか一方が積極的に選択されていることとなる。

3.2 量を表すために用いられる対比の方向性

(3) a. How deep to you love him?

*b. How shallow do you love him?

(4) a. How tall/high is that tower?

*b. How low is that tower.

(5) a. How far does this bird fly?

*b. How near does this bird fly?

(6) a. How long did you practice the violin?

*b. How short did you practice the violin?

(7) a. How deep can she dive?

*b. How shallow can she dive?

(8) a. How high can you jump?

*b. How low can you jump?

(9) a. How fast do you run?

*b. How slow do you run?

(10) a. How much does it cost?

*b. How little does it take?

このように、量 (amount) を示すには、多さ・深さ・長さ・高さなどの表現が必要となり、その場合に、少なさ・浅さ・短さ・低さが指標となることはない。

3.3 話し手と聞き手の相互関係が影響する対比の方向性

量 (amount) を示すにあたって、少なさ・浅さ・短さ・低さが指標となりうるのは、言語使用の場において話し手と聞き手の両方において共有知識となっている方向性が存在している場合においてのみである。

言語使用の場において話し手と聞き手の両方において共有知識となっている方向性は、その場面に応じて、変化している。発話者がどのような意図を持っているか、お互いがどのような共有知識を持っているかといったことによって、どちらの対義語が積極的に選択される。

(11) a. How early do you get up?

b. How late do you get up?

起きる時間の早さが話題になっているのであれば early が選択されるのが自然であるし、遅さが話題になっているのであれば、late が選択されることとなる。

(12) a. How late do you go to bed?

b. How early do you go to bed?

(13) a. How heavy is your luggage?

b. How light is your luggage?

当然重さがあることが前提とされている対象 luggage については、heavy を用いるのが unmarked であるが、それでもなお、軽さを話題にしているときであれば、How light is your luggage? と尋ねる場面も起こりうる。

(14) a. How far is it from here to the station?

b. How near is it from here to the station?

同様に、距離を問うのであれば、遠さを問うのが通常であるから、通常は、*far* で距離の有無を問うのが自然であるが、住宅物件を探しており、売り手と買い手の双方が駅からの近さばかりを気にしているような場合において、近さを取り立てて話題にしているのであれば、*How near is it from here to the station?* を使用する場面も出てくることとなる。

(15) a. *How deep is the pond?*

b. *How shallow is this pond?*

(16) a. *How big is this room?*

b. *How small is this room?*

(17) a. *How long is her hair?*

b. *How short is her hair?*

(18) a. *How small is that cell?*

b. *How big is that cell?*

(19) a. *How dangerous is US now?*

b. *How safe is US now.*

Iraq, Switzerland, Japan...

(20) a. *How dark is it at 8 pm in Paris?*

b. *How bright is it at 8 pm in Paris?*

こうした例においては、お互いが何を取り立てて話題にしているのかということが明らかにさえなっていれば、どちらの対義語を選択する場合も想定が可能となってくる。

3.4 その他の慣用的用法

さらに、以下のような言語現象の存在も視野に入れる必要がある。

(21) **How good are you?* /**How bad are you?*

(22) *How are you?*

(21) のような表現の代わりに、一般的には(22)という中立的な表現が用いられている。これは、普通、相手の顔を見ただけであるとか、手紙の書き出しであるといった場合には、相手が元気であるか、元気ではないのか、どうしているのかわからない、だからこそ、どうしているのかを尋ねたい、という意図で発話されることが多い疑問文であるために、何もわからない始めから、どれくらい元気なのか、どれくらい具合が悪いのか、と尋ねるのは奇妙なこととなってくる。

しかし、病気が悪化してきている病人について、容態はどうだ？という問いをするのであれば、(21) のような発話をすることは充分ありえる。

(23) A: How bad is she?

B: Bad? She's already dead!

(アガサ・クリスティ「ミス・マーブル
鏡は横にひび割れて」 1992 年イギリス)

(23)は、年配の女性の方がアルコールを飲んだところ気分が悪くなって倒れ、皆が心配して休憩のできる部屋に運び、医者連れてきて、具合を見てもらっているという場面である。アルコールのせいでぐったりしているのかと思いきや、実は、毒が盛られていたという展開である。

こうした例に関連して、How Adj./Adv. V S? という形式ではないが、関連する現象として、以下のような例を挙げることができる。

(24) a. What's up?

*b. What's down?

同じように、相手に対して「調子はどう？」と尋ねたい場合において、How are you? 以外にも、口語的に What's up? とは言うことが可能である。一方で、*What's down? と言わないことから、対義語の選択が見られる。ここには、これは物事が起こる、浮上する、明らかになるという UP の意味を利用していると考えられ、down では「調子はどう？」の意味は生まれてこない。

(25) a. What's wrong?

*b. What's right?

また、What's wrong? とは言うのに、*What's right?とは言わない。right な状態であれば特にどうしたのかと尋ねる理由もなく、right ではないからこそ発話している。What's~?は、上で見た①、②、③における How~?とは文の形から異なり、重ねて分析することは難しいが、英語の疑問文における対義語の選択という視点からは、非常に慣用度の高い事例である。

さらに関連の事項として、感嘆文の形式を取り上げると、以下のような現象がある。

- (26) a. How funny/ sad this story is!
b. How sad this tragedy/ disaster is!
c. How funny this comedy/ joke is!
?d. How sad this comedy/ joke is!
?e. How funny this tragedy/ disaster is! (→oxymoron)

ここでは、story という中立的な名詞に対して、tragedy/ disaster は一般的に悲しいものであり、comedy/ joke は一般的におもしろいものである、という共有知識が働く。これらの名詞は、Lakoff の言うところの ICM の中にあってプロトタイプ的に tragedy/ disaster、comedy/ joke とはこのようなものであるという概念が、形容詞の対義語の選択を導くことにつながっている。

- (27) a. How heavy is that Sumo wrestler?
?b. How light is that Sumo wrestler?

- (28) a. How heavy is that ballet dancer?
?b. How light is that ballet dancer?

- (29) A: All gases are very light.
B: How light is the hydrogen?
A: Hydrogen is the lightest gas on the earth.

また、上のような例にあって、Sumo wrestler とは一般的に大きくて体重の重いものだという概念があり、ballet dancer は体重が軽いことが求められる職業であるという対比が存在していたとしても、やはり、体重（量）を測るのには「重さ」という尺度を用いるのが自然であり、特別に減量を話題にしているであるとか、Sumo wrestler と ballet dancer の体重の軽さを取り上げている

のでなければ、light の使用に対する容認は難しい。(29) のように軽いということ、何らかの軽さが話題に上がっている中では、軽さの尺度を用いることが可能になってくる。

4. まとめ

本発表は、対義語に見られる有標性 (markedness) と無標性 (unmarkedness) が方向性 (directionality) を持つ場合について論じた。How Adj./Adv. VS? という英語の疑問文の形における対義語の選択のされ方を分析することによって、その方向性の3タイプを分析した。①身体性に根ざした方向性や、②量を表すために用いられる対比の方向性、③言語使用の場において話し手と聞き手の両方において共有知識となる方向性が潜んでいることを指摘した。

参考文献

- Arimitsu, Nami. 2003a. "Negation, Opposition and Metonymic Principle," Kansai Linguistic Society, 平成 15 年 10 月, 23, pp.34-43.
- 有光奈美 2003b. 「日常言語における価値的否定性と対象依存的否定性」, 日本言語学会第 127 回大会予稿集, 平成 15 年 11 月, pp.194-199.
- Cooper, W. and J. R. Ross. (1975) "World Order," in Papers from the Parasession on Functionalism, pp.63-111, Chicago: Chicago Linguistic Society.
- Givón, Talmy. (1979) *On Understanding Grammar*. New York: Academic Press.
- Horn, Laurence R. (1989) *A Natural History of Negation*. Chicago: The University of Chicago Press.
- Johnson, Mark. (1987) *The body in the Mind*. Chicago: The University of Chicago Press.
- Jespersen, Otto. (1924) *The Philosophy of Grammar*, Chicago: The University of Chicago Press.
- 國廣哲哉 (1982) 「意味論の方法」, 大修館書店.
- 久島茂 (2002) 「<<物>>と<<場所>>の意味論」, くろしお出版.

- Lakoff, George and Mark Johnson. 1980. *Metaphors We Live By*. Chicago: The University of Chicago Press.
- Leech, Geoffrey. (1974) *Semantics: The study of meaning*. London: Penguin Books.
- 鍋島弘治朗 (2004)「線条的類似性 (Linear Iconicity)---自然界の秩序と語順のマッピングに関する日英対照研究---」, pp.340-350, 日本認知言語学会論文集第4巻.
- 野内良三 (2003)「実践ロジカル・シンキング入門」, 大修館書店.
- 太田 朗 (1980)『否定の意味』, 大修館書店.
- 瀬戸賢一 (1997)「認識のレトリック」, 海鳴社.
- 山梨正明 (1988)「比喩と理解」, 東京大学出版会.
- 山梨正明 (1995)「認知文法論」, ひつじ書房.
- 山梨正明 (2000)「認知言語学原理」, くろしお出版.

語用論的拡充を伴う man of + 名詞の解釈

秋山孝信

(日本大学)

1. はじめに

1.1. man of + 名詞の解釈と拡充

- (1) a. Wordsworth was *a man of feeling*, for an Englishman, but well compared to Oor Rabbie quite frankly he was nothing to write home about.
(BNC: B38 112)
b. = Wordsworth was *a man of strong/deep feeling*,
- (2) a. Besides, Carl had told him that it was a terrible job for *a man of taste*.
(BNC: AC3 221)
b. = Besides, Carl had told him that it was a terrible job for *a man of good taste*.
- (3) a. The first Kenyan African novelist was *a man of anger*, developing the Marxist position that would eventually bring him detention without trial for a year, followed by exile.
(BNC: A6C 1422)
b. ≠ The first Kenyan African novelist was *a man of great anger*,....
- (4) a. Arthur Thompson, he said, should be remembered as *a man of dignity* who was loved by many.
(BNC: K5M 5392)
b. ≠ Arthur Thompson, ... as *a man of great dignity* who was loved by many.

*man of + 名詞の解釈は、程度・評価形容詞的意味の拡充(enrichment)を伴う場合とそうでない場合がある。

- (5) enrichment: pragmatic inferential processes of completing or expanding the linguistically decoded logical form of an utterance in order to recover the proposition expressed and the explicatures of the utterance.

(Carston and Uchida 1997: 296)

研究目的：人物の特性を述べる表現である man of + 名詞を研究対象とする。コーパスから得られた当該表現の実例を観察し、その解釈に拡充が生じるメカニズムについて考察する。

2. 先行研究 : Fåhræus (1984) の分析

2.1. man of + 名詞の分類

- ① possession in a left-to-right relationship (e.g. *man of taste*)
- ② possession in a right-to-left relationship (e.g. *the right-hand man of Ever Pasha*)
- ③ the N characterizes the man's activity, occupation etc. (e.g. *a man of letters, business*)
- ④ the N characterizes a group, or place of origin etc. (e.g. *the old man of the Wailbi tribe*) (Fåhræus 1984: 123)

2.2. ①の分類

(a) physical properties

e.g. *man of muscle*; *man of looks*, etc.

... Charles Mantle, the New York Yankees' *man of muscle* ... (Fåhræus 1984: 124)¹

(b) psychological properties

e.g. *man of taste*; *man of sense*; *man of vision*; *man of character*, etc.

Her flat was pretty much what he had expected; the apartment of *a rich woman of taste*... (ibid. 127)

(c) worldly possessions

e.g. *man of means*; *man of property*, etc.

"... I took out accident insurance for the whole season... I may not be able to walk, but I am *a man of means* now." (ibid. 131)

(d) social properties, such as status and reputation.

e.g. *man of position*; *man of standing*.

"... a rubber of bridge with *gentlemen of standing* naturally did not seem dangerous." (ibid. 132)

- (6) ... the phrase *man of*+ unqualN becomes a kind of truism when the noun denotes inherent or inalienable properties of human beings and is neutral as to quality/value in its basic sense. The truism is saved from being meaningless by the addition of a semantic feature, entailing a fixed position in the positive part or at the positive end of antonymous scales, to the noun in a truism of this kind. (Fåhræus 1984: 134)

¹ Fåhræus は、この例文を Brown Corpus (BC: A39 0020) から引用している。

2.3. Fåhræus (1984)における分析の問題点：

- ・ man of + 名詞における拡充解釈の可能性を、程度の問題としてではなく、二項対立的に捉えている。
- ・ man of + 名詞が拡充解釈を引き起こす原因を truism のみに帰している。

3. 事例分析

3.1. 収集例の内訳

表 1. man/woman/person of + 名詞の種類数と頻度^{2,3}

colligation	types	freq.	colligation	types	freq.
man of + N	218	543	men of + N	228	416
woman of + N	63	81	women of + N	84	142
person + N	76	128	people of + N	582	1393

表 2. man of + 名詞における出現頻度の上位 15 例

phrase	freq.	category	phrase	freq.	category
man of letters	34	③	man of science	14	③
man of Europe	33	④	man of substance	11	①
man of action	31	③	man of integrity	10	①
man of God	26	③	man of power	8	①
man of business	19	③	man of property	7	①
man of honour	18	①	man of principle	7	①
man of law	16	③	man of reason	7	①
man of peace	14	③			

① = 身体的・心理的特性、社会的地位など；③ = 職業、社会活動；④ = 出身地、所属組織⁴

(上述 section 2.1-2.2 を参照)

(7) a. men of action: 「活動家 (学究的・坐業的な人に対し政治家・軍人・探検家など)」

(リーダーズ英和辞典)

b. man of action: a man whose life is characterized by physical activity or deeds rather than by words or intellectual matters. (Oxford Dictionary of English)

c. He was always fine as a soldier or a *man of action*. (BNC: CL2 1549)

² 本研究における事例収集は、The British National Corpus (BNC)を使用する。

³ ここでの事例収集は、当該構文における拡充解釈の可能性を吟味することを目的としている。そのため、収集の対象は、man/woman/person of と名詞が隣接しているものに限る。man/woman/person of と名詞の間に形容詞等が介在するものは、収集していない。(e.g. a man of *good taste*)。

⁴ ③ = 職業、社会活動や、④ = 出身地、所属組織を表す man of + 名詞は、特に、近接性の連想に基づいて、解釈されていると思われる。

3.2. man of + 名詞における拡充解釈の可能性

表 3. ①の範疇に入る man of + 名詞(上位 45 種)における拡充解釈の可能性と頻度^{5,6}

likelihood of enrichment	phrase	freq.	likelihood of enrichment	phrase	freq.
? *	man of honor	18	? *	man of passion	3
✓	man of substance	11	✓	man of standing	3
? *	man of integrity	10	✓	man of energy	2
✓	man of power	8	✓	man of experience	2
✓	man of property	7	✓	man of principles	2
? *	man of principle	7	✓	man of quality	2
?✓	man of reason	7	?✓	man of ability	1
?✓	man of influence	7	? *	man of ambition	1
✓	man of means	7	? *	man of anger	1
?*	man of distinction	6	? *	man of caution	1
?✓	man of wealth	6	?	man of excitement	1
✓	man of vision	5	*	man of flesh	1
? *	man of courage	4	?	man of fidelity	1
?	man of culture	4	?	man of goodwill	1
? *	man of genius	4	?✓	man of humour	1
✓	man of knowledge	4	✓	man of ideas	1
✓	man of sense	4	?✓	man of individuality	1
✓	man of taste	4	?	man of passions	1
*	man of blood	3	?✓	man of spirit	1
✓	man of character	3	? *	man of self-discipline	1
? *	man of dignity	3	?✓	man of strength	1
✓	man of feeling	3			
?✓	man of learning	3			

✓ = a case of enrichment ?✓ = likely case of enrichment ? = uncertain
 ? * = unlikely to be a case of enrichment * = not a case of enrichment

3.2.1. (Clear) cases of Enrichment

(A) 心理的・知的特性 : man of vision, knowledge, sense, taste, character, feeling, energy, principles, and quality

(8) Above the River Eden we finally stop. Unlike the rain. Andy is a *man of vision*, of prescience, of common sense. Andy has a pair of Wellington boots. I do not.

(BNC: ECG 1036-1040)

⁵ BNC から収集された①の範疇に入る man of + 名詞の実例は、118 種であった。表 3 では、紙幅の関係上、上位 45 種を掲載している。頻度が 1 となっている種は、計 72 種であったが、その内、データの始めに出てきた 17 種を挙げている。

⁶ 表 3 における拡充解釈の可能性の判断は、Lancaster 大学 Geoffrey Leech 教授による (個人的談話) が、他のネイティブスピーカーによる判断と異なる部分もある。

- (9) In Euripidean drama, we see the results of "aesthetic Socratism", the outlook that makes intelligibility a prerequisite of beauty -- a counterpart to Socrates' notion that only *the man of knowledge* can be virtuous. (BNC: H0N 1207)
- (10) In 1944 -- 46 de Gaulle confronted the hard reality that *a man of character* could lead the nation single-handedly in a moment of supreme crisis but not in normal times. He failed to make the necessary adjustments to his style of leadership -- most obviously, to create some kind of transmission belt between himself and the nation. (BNC: HXU 580-581)

(B) 資産 : *man of substance, property, means*

- (11) Now Mr Baker is *a man of substance*, who, as a backbencher in the year Mrs Thatcher came to power, said in the House that a backbencher trod a fine line between sycophancy and rebellion. (BNC: A4U 180)
- (12) a. Now I was *a man of property*, the joint owner of a large house in North Oxford, with investments so extensive I had no detailed idea of their scope and access to current and deposit accounts totalling well into six figures. (BNC: BMR 1987)
- b. property: a thing or things that are owned by somebody; a possession or possessions. (OALD)

(C) 社会的地位 : *man of power, standing, quality*

- (13) a. The remoteness of *the man of power* is something people who encountered Karajan often claimed to have found. (BNC: ADP 24)
- b. Pope Gregory the Great had spoken of taming the wild unicorn, symbol of *the man of power*. (BNC: HPT 616)
- (14) a. He had been *a man of standing* in his community, a sage, a pillar of his society, a learned man. (BNC: BN3 513)
- b. standing: the position or reputation of somebody /something within a group of people or in an organization. (OALD)

*以上の *man of + 名詞*は、その論理形式(logical form)の段階では、人物の特性を叙述するだけの情報価値をもたない。言い換えれば、拡充解釈の過程を経ずに、多くの認知環境(cognitive environment)の改善はもたらされない。

3.2.2. Likely cases of enrichment

(A) 心理的・知的特性 : *man of reason, leaning, ability, humour, individuality, spirit, strength*

(15) To *the man of reason*, that as a physically and mentally distinct person he should look after his own interests seems self-evident like a geometrical axiom, that he should care for others seems to require proof like a theorem. (BNC: CB1 491)

(16) Hubert described him as a man of very great genius and originality; a *man of learning* but also of much modesty and simplicity of character. (BNC: GTG 174)

(17) I'm a *man of individuality* where garden embellishment is concerned. (BNC: ACX 184)

(B) 資産 : *man of wealth*

(18) a. Roxborough had been a *man of wealth* and insight. (BNC: CRE 1447)
b. a large amount of money, property, etc. that a person or country owns.⁷ (OALD)

(C) 社会的地位 : *man of influence*

(19) He was a *man of influence* in the literary world. (BNC: AC3 1487)

* 以上 3.2.2. の事例における *man of* + 名詞は、拡充解釈を伴いそうではあるが、その論理形式 (logical form) の解釈に truism は、必ずしも当てはまらない (c.f. *man of influence*)。

* *man of influence, learning, individuality, humour* などの論理形式が表す意味は、その「程度」が vague 「曖昧である」と言える。⇒ 拡充解釈の必要性

(20) Two Principles of Relevance:

- a) Human cognition tends to be geared to the maximization of relevance.
- b) Every act of ostensive communication communicates a presumption of its own optimal relevance. (Sperber and Wilson 1995: 260)

3.2.3. Uncertain

(A) 心理的・知的特性 : *man of culture, contradictions, excitement, fidelity*

(21) "A *man of culture* -- he is a teacher in one of Bradford's schools -- he has a ready command of language," and by his work, said the Yorkshire Evening Post, had raised the status of the professional player. (BNC: B0L 253)

⁷ インフォーマントの中には、wealth のこの語義を意識し、*man of wealth* に拡充解釈を認めないものもいる。

3.2.4. Unlikely to be a case of enrichment:

- (A) 心理的・知的特性 : *man of honour, integrity, principle, courage, genius, dignity, passion, ambition, anger, caution, goodwill, self-discipline*

⇒人物を特徴付けるのに、その論理形式自体に十分な情報価値がある。拡充解釈を伴うことなく、(多くの)認知環境の改善をもたらす。

- (22) Tom Clarke is a *man of honour and integrity*. His knowledge of Scottish politics is unrivalled on any side of the political spectrum. The attacks on him are born from jealousy and political snobbery. (BNC: K5A 1812-1814)

- * *man of passion, anger, goodwill* は、以下のように、(評価)形容詞的意味が、その論理形式に既に備わっている。

passion: a very strong feeling of love, hatred, anger, enthusiasm, etc.

anger: the strong feeling that you have when something has happened that you think is bad and unfair

goodwill: friendly or helpful feelings towards other people or countries.⁸

- * (?*) *man of principle* と(✓)*man of principles* は、拡充解釈の可能性が異なる。

- (23) a. The French politician had arrived. We used to refer to him as the *man of principle*. You see we had heard quite a bit about him -- the locals boggle at the way in which he doesn't dodge his taxes. (BNC: FQR 1254-1256)

- b. If you would like to nominate yourself, or another, as a "*Man of Principles*" then you could receive a £20 voucher -- you might even win a complete Principles Menswear Wardrobe worth £1,000, as well as a £1,000 donation to a cause of your choice. (BNC: FBM 4239)

- c. *principle*: moral rule or a strong belief that influences your actions

3.2.5. Not a case of enrichment

- (24) George Bishop fought with the parliamentary army during the civil war, and evidently was the politically radical "Captain Bishop" who in the army debates at Putney in 1647 attributed the kingdom's difficulties to Charles I, "that *man of blood*". (BNC: GTB 587)

⁸ *man of anger* に関しては、同様の説明が、Fähræus (1984: 126)にもある。

- (25) Clothes were irrelevant ... only flesh mattered to her where Damian was concerned, because she did not just want the hard, ambitious chairman of the board, but the *man of flesh and blood* whom she loved more powerfully than she could put into words, and only the silent communication of their bodies allowed her to express that love ... (BNC: JYD 3472)

4. 結語

1. man of + 名詞が拡充解釈を伴うのは、身体的・心理的・知的特徴、資産、社会的地位を表す場合である。出身地(a man of Europe)や職業(a man of letters)を表すものでは、拡充が生じない。
2. man of + 名詞が拡充を伴う可能性は、二項対立的ではなく、程度の問題である。
3. Fåhræus (1984)が提案する truism は、当該表現の拡充の説明には、必ずしも有効ではない。
4. man of + 名詞の拡充解釈の可能性は、関連性の原則に従う。つまり、その論理形式の解釈段階で多くの認知環境の改善が得られない場合、程度・評価形容詞的意味を伴う拡充解釈が生じる。

参考文献

- Blakemore, D. (1992) *Understanding Utterances: an introduction to pragmatics*. Oxford: Blackwell.
- Carston, R. (1988) 'Implicature, explicature, and truth-theoretic semantics,' in R. Kempson (ed.), *Mental Representations: The interface between language and reality*. Cambridge: Cambridge University Press. 155-82
- Carston, R. and S. Uchida. (eds.) (1997) *Relevance Theory: Applications and Implications*. John Benjamins.
- Clark, H. H. and E. V. Clark (1977) *Psychology and Language: an introduction to psycholinguistics*. New York: Harcourt Brace Jovanovich
- Fåhræus, A. (1984) *Two Kinds of Syntactic-Semantic Value-Loading in English*. Stockholm: Almqvist & Wiksell International.
- Sperber, D. and D. Wilson (1995) *Relevance: Communication and Cognition*, Oxford: Blackwell Publishers.

辞書

Oxford Advanced Learner's Dictionary of Current English. 6th edition. (2000) Oxford University Press. [OALD]

現場密着型の出来事文について
—聞き手に「場」の共有を強いる名詞句文—
岸彩子 京都大学大学院 博士後期過程

0. はじめに

1) フランス語の文には、以下の例 1a・c のように、形態としては名詞句でありながら、文的内容を伝達しているもの（以下では名詞句文）が見られる。

- 例1 a. Le vase qui tombe! [The vase which is dropping] 「花瓶が落ちる!」
b. Et les enfants de rire. [And the children to laugh] 「そして子供達が笑った」
c. Le feu!¹ [The fire] 「火事!」

名詞句文はどのようなメカニズムで文的内容を伝達することが可能になるのか。

2) 名詞句文の主語相当名詞句は定名詞句 le N [the N] が好まれる。

定名詞句 le N: 聞き手の談話世界に存在する対象を指す。

不定名詞句 un N: 聞き手の談話世界にまだない新たな対象を指す。

例 1a で、N の対象（花瓶）は聞き手の談話世界にまだないものである。

- ・ 先行文脈無しで発せられることが可能
- ・ N の対象が共有知識にない

(cf. le président [the president], le soleil [the sun])

にもかかわらず、これらの文では、不定名詞句では無く、定名詞句が使われている。名詞句文では、なぜ聞き手の談話世界にない対象が定名詞句で表されるのか。

本発表では、例 1a タイプの名詞句文を中心に、名詞句の形態で文的内容を表す名詞句文が文的内容を表すメカニズムを I 節で、なぜ名詞句文で定名詞句が用いられるのかを II 節で考察する。

I 節では、名詞句文が局所的に限定された一時空に起きた事行を表す出来事文であることから、名詞句文の解釈には局所的な時空が予め限定されていることが不可欠であることを検証する。発話現場もまた局所的時空であり、例 1a タイプの名詞句文は発話現場に密着して出来事文として成立する。

II 節では、聞き手の談話世界にない対象を指す定名詞句 le N について考察し、例 1a の

¹ 国語学で一語文と呼ばれるものの一部である。ここでは「水!」のような N の対象の希求を意味するものは考慮に入れず、また N の存在を表すもののうちでも、N 自体で事行を表すもののみを考える。1・c は Au feu ! [à the fire] 「火事!」のように前置詞 à を伴って発せられることがある。この場合は名詞句文ではなくなるが、この形式で出来事を表すこと、定名詞が用いられることには変りがない。

ような名詞句文は、聞き手の談話世界にない対象を指す定名詞句を用いることで聞き手に前提の調節を行わせ、局所的な出来事の時空を強制的に共有させるという語用論的な機能を持つと主張する。

I. 名詞句文と時空限定

3) 名詞句文は出来事を表す(Furukawa1996)。

[...] elle [la séquence *Le facteur qui passe* !] sert à présenter un événement comme un bloc « non structuré »; le locuteur ne parle pas du facteur, mais relate l'événement constitué par le passage du facteur. »(Furukawa 1996, 62)

[*Le facteur qui passe* /「郵便屋さんが通る」]は]出来事を「構造のない」一つのまとまりとして表す機能がある。話者は郵便屋さん le facteur について何か述べているのではなく、郵便屋さんの往来で形成される出来事を述べている。

Furukawa1996 では出来事文を、文全体で一まとまりとして出来事を表し²、「テーマ性の低い主語＋一過性の事行を表す意味を持つ述語動詞」という構造を持つものと定義する。

4) Furukawa の言う「一過性の事行を表す述語動詞」は stage level 述語(Carlson1980)に相当する。従って出来事文とは stage level 述語文であると言える。stage-level 述語文 / individual-level 述語文の対立は時空限定の有無にある。

stage-level 述語文は時空限定を必要とする。stage-level 述語文は特定の一時空に文全体が表す事行が定位される。主語などの参与者もまた文の一部として一時空に限定される stage である。individual-level 述語文は時空に限定されていない存在 individual を主語とし、それに時間的・空間的に限定されていない属性を付与する。時空限定は必要ない。

図 4a

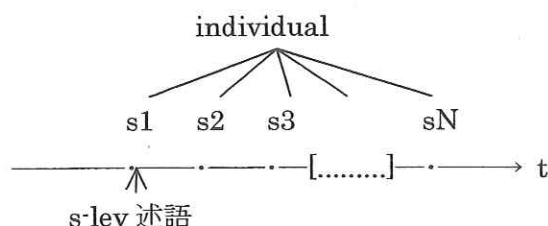
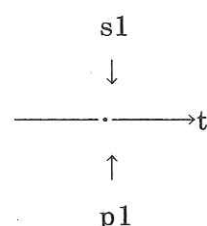


図 4b



名詞句文には習慣、属性を表す動詞(individual 述語)が生起できないことから、名詞句文が stage-level 述語文=出来事文であることが確認される。

² 名詞句文は、統語的に一つのブロックである点で、主語述語の2つの結び付きからなる通常の文 (thetic, categorical のどちらも表すことが可能) と異なる(cf. Kuroda1972)。これは出来事が一つのブロックとして捉えられることを明示的に表したものととも考えられる。

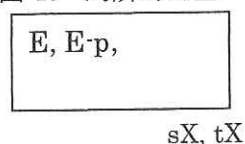
- 例4 a. *Le facteur qui est grand ! [The postman who is tall.] (金子 2003)
 b. ?Et les enfants d'être intelligent. [And the children to be intelligent.]
 c. ?Le facteur qui passe régulièrement.
 [The postman who is passing regularly.]
 d. ?Et les enfants de rire régulièrement.
 [And the children to laugh regularly.]

・ 出来事文は局所的時空を解釈の場として要求する。

(局所的時空：出来事文を限定する時空)

・ 局所的時空には空間 sX, 時間 tX, 出来事 E, 出来事の参与者 E·p が含まれる。

図 4c 局所的時空



5) 述語が定形動詞である出来事文は出来事が定位される局所的時空を文自体で設定する。

例 5 a. Un homme a été tué. [A man has been killed.]

動詞の語彙的意味が一過的な事行を表すだけでは、特定の時空に起こった出来事を表す文として成立しない。

例 5 b. La chute d'une vase (me fait toujours peur).

[The fall of a vase (always scare me).]

c. Voler (est un crime).

[To steal (is a crime).]

動詞の語彙的意味だけでは局所的な時空を限定できず、出来事文は成立しない。時制を受け得る定形述語があることで、はじめて時空限定が可能になり、出来事文として成立する³。

では形態的には名詞句であり、時制を持たない名詞句文は、どのようにして自らが表す出来事を定位するのか。どのようにして時空限定を行うのか。

6) 名詞句文内には時空設定をするものがなく、時空表現を入れると不適格な文になる。

例 6 {?Hier,/ ?Chez Paul,} le vase qui tombe !

³ 例 1 a タイプの名詞句文の述語相当動詞句は 定形動詞の形を取っているが、現在以外の時制に置くことができないことが Furukawa(1996)で観察されている。(?Le facteur qui *passait*. [The postman who *passed*.]). 時制の選択が無くなるので、時制を受けることができない不定詞などと同様に考えることができる。

[{?Yesterday,/ ?At Paul's house,} the vase which is dropping.]

従って名詞句文は文の外から時空限定されると考えられる。2つの時空限定が考えられる。

- a. 話者と聞き手が発話の時空を共有している場合…発話の時空による時空限定
- b. 話者と聞き手が発話の時空を共有していない場合…文脈による時空限定

7) b の場合、先行文脈があるだけでは名詞句文が成立するのに十分ではない。例 1b タイプの名詞句文は b の場合に当たるが直前の文脈に自立的な出来事文がないと容認されない。

例 7 Il était une fois, à la campagne, un garçon très pauvre. Il n'avait d'autre chose que son chien. Un jour, ce garçon {trouva / ?de trouver} un bout de pain et de l'avaler d'un seul coup sans penser à son chien.

[Once upon a time, in the country, there was a very poor boy. He had nothing but his dog. One day, this boy {found / ? to find} a piece of bread and to swallow it down without thinking of his dog.]

昔、田舎に、とても貧しい男の子がいました。彼には自分の犬しかありませんでした。彼は一切れのパンを見つけ、犬のことを考えもせずに一飲みにしてしまいました。

例 1b タイプの名詞句文は、直前の自立的出来事文の局所的時空を踏襲して出来事を定位する。b の場合、文脈に予め局所的時空が設定されていなければ、名詞句文の時空限定はなされず、従って名詞句文を出来事文として解釈することはできない。

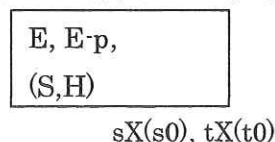
8) 出来事文の局所的時空限定が発話現場に依存してなされると考える場合、発話現場の性質を明示的にしておく必要がある。

発話現場は、聞き手の認識によって構築されるものであり、発話内容、 t_0 (今)、 s_0 (ここ)、発話当事者 (S,H) が含まれる。

- ①発話現場は常に t (発話の今) という時間軸上の 1 点で切り取られた場である。
- ②発話内容が出来事 E の場合、この場には「E、E-p(E の参与者)、 t_0 (今)、 s_0 (ここ)、発話当事者 (S,H)」を含む。E とその参与者は聞き手が発話を認識することによって発話現場の成員となる。

①と②から、発話現場もまた局所的時空の一種であると言える。

図 8 局所的時空 (発話現場)



9) a の場合において、名詞句文の表す出来事が定位される「発話現場」とは、発話時点 t_0 、話し手と聞き手が共有する発話の場 s_0 に限定された局所的時空であると再定義される。

I 節のまとめ

- ・名詞句文は出来事文として解釈されるが、自身では出来事文成立に必要な局所的時空の限定を行わない。

- ・名詞句文が出来事文として成立するためには、予め局所的時空が設定されていなければならない。

- ・名詞句文は予め限定された局所的時空の s, t を踏襲すること、即ち局所的時空に密着することで時空限定を行う。

例 1b: 文脈に設定された局所的時空 ($sX, tX, E, E-p$) に密着

例 1a: 発話現場 ($s_0, t_0, E, E-p, S, H$) に密着

II. 名詞句文の定名詞句主語と前提の調節

1 0) 名詞句文では定名詞句が好まれる。

例 10 { $Le/ ?Un$ } vase qui tombe ! [{ $The/ ?A$ } vase which is dropping !]

定名詞句は聞き手の談話世界に存在する対象を指すとされる⁴。しかし名詞句文 *Le vase qui tombe !* が聞き手の注意を喚起するために用いられる場合、定名詞句 *le vase* [the vase] の指す花瓶は聞き手の談話世界にはまだ存在しない。 ではなぜ定名詞句が用いられるのか。

1 1) 定名詞句が先行文脈なしで使われる時、通常は聞き手が当然知っている対象（聞き手の共有知識領域内にある対象）を指す。

例 11 *Le soleil brille.* [The sun shines.]

しかし名詞句文 *Le vase qui tombe !* は注意喚起・警告のために用いられ、この場合聞き手はまだ *vase* の対象を認識していない。また百科辞典的知識や話し手と共有している知識の領域にも *vase* の対象はない。つまり聞き手の談話世界にない、聞き手の知らない対象である。ところがこの対象は、 N が談話世界に存在するという前提を伝達する定名詞句 *le N* で表されている。聞き手の談話世界にない対象を指す定名詞句を以後「いきなり定名詞句」と呼ぶことにする。

1 2) あたかも聞き手の談話世界に存在するものであるかのように N を指す、いきなり

⁴ 定名詞句 *le N* [the N] の表す意味については、談話世界に対応する唯一の要素 N があるという存在前提を伝達するという存在前提説 (Kleiber 1983, 1986, 1987 東郷 2001a, b 等)、既に共有知識の中にある唯一の対象 N を指すという指示説 (Hawkins 1978, 1991 等) がある。ここでは存在前提説を取る。

定名詞句によって、聞き手は「知っているはずの花瓶」が存在する場を談話世界に設定することを余儀なくされる。いきなり定名詞句は、「談話世界に存在していなかったものを、存在していたものとして捉えなおせ」という指令であり、存在前提を事後承諾的に聞き手に押しつけるものである。

図 12 いきなり定名詞句 leN: 「DMH1 を DMH2 で置換えよ。」



DMH: 聞き手の談話世界

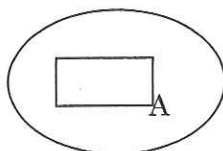
つまり聞き手は、いきなり定名詞句の出現によって、「前提の調節」accommodation for presupposition(Lewis1979)を行うわけである。

前提の調節 rule of accommodation for presupposition (Lewis1979)

If at the time t something is said that requires presupposition P to be acceptable, and if P is not presupposed just before t , then – *ceteris paribus* and within certain limits – presupposition P comes into existence at t .

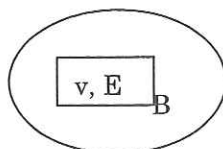
1 3) Le vase qui tombe !の発話以前には、聞き手は定名詞句 le vase の対象の存在しない発話現場を認識しており、これを話し手と共有しているものとしていた。この時点では、聞き手は下図での A のような発話現場のイメージを共有知識領域に持っていたということになる。

図 13 聞き手の共有知識領域 (Le vase qui tombe ! 以前)



1 4) 話し手もまた、自身の共有知識領域に発話現場のイメージ(B)を持っている。この中には対象 vase(v)とそれを参与者とする出来事 E が存在する。

図 14 話し手の共有知識領域



1 5) 先行文脈のない名詞句文は常に発話現場を解釈の場として要求する (cf.I 節)。い

きなり定名詞句は存在前提を押しつける。名詞句文 *Le vase qui tombe !* は「表している出来事 E を発話現場に起こったものとして解釈せよ」と「vase が存在しない場を vase が存在する場で置き換えよ」の 2 つを聞き手に要請する。この指令によって聞き手は A を B で置き換える。

16) このようにして聞き手は「花瓶が落ちるという出来事が起きている時空」という発話現場のイメージを強制的に共有させられる。*Le vase qui tombe !* のような現場に密着した名詞句文が、注意喚起・警告、あるいは思いがけない出来事を表すという意味効果は、話し手の発話現場のイメージを聞き手に強制的に共有させるという機能から来るものである。

17) *Le vase est tombé. [The vase dropped.]* のような定形動詞述語を持つ自立的な出来事文であれば、自身で局所的時空を設定できるため、発話現場に密着せずとも出来事文として成立する。このため、たとえ主語にいきなり定名詞句が置かれたとしても、自身が限定する局所的時空「いつか・どこか」が定名詞句で表された「花瓶」を含むものとして認識されるだけである。

それに対し名詞句文 *Le vase qui tombe !* は発話現場でしか出来事文として成立することができない。常に発話現場でのみ解釈可能であることを逆に活用することで、聞き手の発話現場のイメージに働きかけ、瞬時に出来事への対応をせまることができる。

18) 不定名詞句と名詞句文中の定名詞句の違いに注意しておきたい。不定名詞句 *un N [a N]* は N の存在前提を伝達するものではない。*un N* は新たな指示対象を聞き手の談話世界に導入し、聞き手の談話世界内の要素を増やすだけである。一方我々が見た名詞句文の定名詞句主語は、聞き手の談話世界の一部を新たなもので置き換える。名詞句文の定名詞主語は、前提の調節により談話世界の「書き換え」「更新」をさせるものであり、不定名詞句 *un N* のように、新たな指示対象の導入による「書き足し」を行うものではない。

19) これらの考察から、名詞句文にはその表す出来事を定位する局所的時空が予め設定されていることが必要であり、先行文脈のない名詞句文中の定名詞句の使用は、局所的な出来事の時空を共有することを強いるという談話的機能を持つものであると考える。

時空限定を発話現場に依存する名詞句文は、主語が聞き手の談話世界に無いものを指す定名詞句であること、非自立的な文であることから、話し手が持っている発話現場のイメージを聞き手に強制的に共有させるものであると主張する。

まとめ

- i) 名詞句文は局所的な時空を自ら限定できない非自立的な出来事文であり、先行文脈で限定された局所的時空、または発話現場に密着することで出来事文として成立する。
- ii) 先行文脈のない名詞句文は発話現場に密着する。
- iii) 聞き手の談話世界にない対象を指す定名詞句 *le N* は、聞き手に前提の調節を行わせ、聞き手の共有知識領域に *N* の存在前提を押しつける。
- iv) 先行文脈のない名詞句文の定名詞句主語 *le N* は、聞き手の共有知識領域の発話現場のイメージ内に存在前提を事後承諾的に獲得する。
- v) ii、iv により、*N* を参与者とする出来事の局所的時空が聞き手の発話現場のイメージ内に限定される。
- vi) 先行文脈のない名詞句文は、表す出来事の局所的時空の共有を聞き手に強制し、瞬時に出来事に対応させる語用論的機能を持つ。

参考文献

- CARLSON, G. N., 1980, *Reference to Kinds in English*, Garland Publishing.
- FURUKAWA, N., 1996, *Grammaire de la prédication seconde*, Duculot.
- HAWKINS, J. A., 1978, *Definiteness and indefiniteness: a study in reference and grammaticality prediction*, London, Croom Helm.
- HAWKINS, J. A., 1991, "On (in)definite articles", *Journal of Linguistics* 27, 405-442.
- KLEIBER, G., 1983, "Article défini, théorie de la localisation, et présupposition existentielle", *Langue française* 57, 87-105.
- KLEIBER, G., 1986, "Pour une explication du paradoxe de la reprise immédiate – UN Ni → LE Ni / UN Ni → CE Ni", *Langue française* 72, 54-79.
- KLEIBER, G., 1987, "L'énigme du Vintimille ou les déterminants « à quai »", *Langue française* 75, 107-121.
- KURODA, S-Y., 1972, "The categorical and thetic judgement. Evidence from Japanese syntax.", *Foundations of Language* 9, 153-185.
- 金子真 2003 「擬似関係節と喚体句」『フランス語学研究』37, 48-53
- 東郷雄二 2001a, 「定名詞句の指示と対象同定のメカニズム」、『フランス語学研究』35, 1-14
- 東郷雄二 2001b, 「定名詞句の『現場指示的用法』について」、『京都大学総合人間学部紀要』第8巻, 1-17

反対意見表明に於ける

コミュニケーション・ストラテジー

小林 純子

関西外国語大学

1. はじめに

日本が経済面や科学技術面で脚光を浴びるにつれて、国際会議やビジネス会議で殆ど発言しない日本人への批判が顕著になってきた。日本人は自分の意見を持っているのか疑問視している欧米人が多いと述べられている（例えば、Williamus, 2000）。日本語も攻撃の対象にされ、「日本語は論理的な結合に於いてかなり杜撰である」（Gudykunst & Kim, 1984）、「支離滅裂な日本語の論理」（対日貿易戦略基礎理論編集委員会、1987）等と言われてきたが、それに反論するどころか、一部の日本の知識人の間ですら、日本語が非論理的だと考える人がいる。その原因は外国語に直訳できない日本語表現（板坂、1971）や不自然な翻訳日本語（外山、1992）にある、或いは外国語を基準にして日本語を把握しようとする姿勢にある（安藤、1986；板坂、1971）のだが、日本語が非論理的だと考える日本人がそれを心得ているかどうかには疑問の余地がある。

この論文では、日本の大学2年生94名を対象に行なったアンケート調査に基づいて、英語圏の先生に反対意見を述べる際に効果的でなかった日本人学生のコミュニケーション・ストラテジーを分析し、その原因を究明したい。そして、上記の欧米人の間に根強く残る日本人への悪評を払拭するために、今後英語教育をどのように推進していくべきかを検討したい。

2. 先行研究とその問題点

1980年代から、第二言語習得語用論（L2 pragmatics）に関心が集まり、面子脅かし発話行為（face-threatening speech acts）に関しても、反対意見、拒否、不平、要求、謝罪等、種々の研究が行われてきた。反対意見については、Beebe & Takahashi (1989) がアメリカの大学に在籍中の日本語と英語を母国語とする学生15人ずつを対象に、指示された特定の状況でどのように反対意見を述べるかアンケート調査を実施して、「アメリカ人は日本人よりもいつも単刀直入に明確に述べるとは限らない」等

と結果を纏めている。しかし、この研究結果は種々の点で読者に疑問を抱かせる。まず、研究対象が15人と極めて少ない上に、アメリカの大学に在籍中の日本人学生となれば、平均的な日本人学生とは大きく異なるコミュニケーション・ストラテジーを用いていると予想されるので、日本人の代表に採り上げるのには無理がある。更に、指示された状況が、「あなたが企業の管理職で、秘書の仕事に対してなされた助手の提案への反対意見」というように、社会人を経験していない学生には身近な論題ではない。それ故に、研究結果の英語教育への応用が難しい。

3. アンケート調査の実施とその結果

3.1. アンケート調査方法

平均的な日本人学生が英語圏の先生と実際にコミュニケーションを図る際に生じた問題点を浮彫りにするために、日本の大学2年生94名を対象にアンケート調査を実施した。アンケートは自由記述式で、コミュニケーションが不調に終わった経験がある人は、本当に伝えたかったこと、意図していたことも詳述するように口頭で指示した。

アンケートの内容:

「あなた、或いはあなたの級友が英語圏の先生に反対意見を表明する際に、コミュニケーションがうまくいかなかった経験がありますか。もしあれば、その具体例を述べてください。」

3.2. アンケート調査結果

言語運用能力は、「個々の発話を規制する協調の原則と、談話の流れの基調を定める丁寧さの原則に分けられる」(小泉、1990)。協調の原則とは、Grice (1975) によると、「量・質・関係・様態の4つの格率から成り、根拠と関連のある必要な情報を明快に述べよ」ということである。丁寧さの原則については、概念は普遍的だが、丁寧表現の使用法には文化による相違が見られる (Leech, 1983; Levinson, 1983)。アンケート対象の94名の学生は各人の興味に応じて多種多様の例を採り上げていたが、上記の丁寧表現の使用法という観点からデーターを綿密に検討して、反対意見表明に用いられたコミュニケーション・ストラテジーを8つの型に分類した。以下に、その型を典型例を用いて詳述する。

(1) ばかりの使用

①先生A「[英語の]文の最初に、'But' は使いません。」

学生B:「そうとは知りませんでした。("I didn't know that.") 以前に教科書で使われているのを見たことがあるものですから。」

②先生C:「この文脈では、'be willing to' は使いません。」

学生D:「そうとは知りませんでした。("I didn't know that.") 辞書に載っているのを見たことがあるものですから。」

(2) 質問の不適切さの示唆

③音楽家の名前を当てる問題を先生が出されたが、誰も当てられなかったとき

先生E:「本当に彼のことを知らないのですか?」

学生F:「多分彼は先生の世代の人達の間で有名なんでしょう。("Maybe he is popular among your generation.")」

(3) 逆の可能性の示唆

④先生G:「日本人は長い間英語を学習しているのに、英語が話せない。文法だけを勉強してきたからね。」

学生H:「そうかもしれませんね。("It may be true.")」

⑤先生I:「日本のテレビ番組は見ない。子供っぽいからね。」

学生J:「そうかもしれませんね。("It may be true.")」

(4) 反対意見の示唆

⑥先生K:「日本は食物とファッションに於いて、変わりつつある。一種のアメリカ化だね。」

学生L:「そうは思わない人もいます。("Some people don't think so.")」

先生K:「誰のことですか。」

⑦先生M:「日本人はブランド品に多くのお金を掛ける。」

学生N:「無関心な人もいます。("Some people are indifferent to them.")」

先生M:「誰のことですか。」

(5) 見解の相違の示唆

⑧先生O:「日本人は他人の意見に賛成しようとするので、本当のところ何を考えているのか私には分からない。」

学生P:「先生はそう思われるかもしれませんね。("You may think so.")」

⑨先生Q:「狩りが趣味です。」

学生R:「動物が可哀想だと思います。」

先生Q:「何故ですか。日本人だって、魚釣りをするでしょう。」

学生R:「先生はそう感じられるかもしれません。("You may feel that way.")」

(6) 点的論理の使用

⑩先生S:「カナダは大変安全な国で、犯罪は滅多に起こりません。カナダは日本とは異なります。」

学生T:「日本も安全な国ですよ。("Japan is a safe country, too.")」

先生S:「私はそうは思いません。最近テレビで多くの犯罪が報じられています。」

(7) 推測を期待した応答

⑪先生U:「私はあの音楽家が大好きです。あなたも好きですか。」

学生V:「あの音楽家はとても有名で、人気がありますね。("That musician is very famous and popular.")」

先生U:「私はあなたの個人的な意見を聞いているのですよ。」

⑫自分の好きな音楽を流した後

先生W:「この音楽はとてもいいでしょう。」

学生X:「多分。(Maybe.)」

先生W:「気に入っているのですか、いないのですか?」

(8) 対立した意見の調整

⑬先生Y:「アメリカは危険な国ではありません。何故ならば、アメリカはいい安全保障制度が整っているからです。私の意見に賛成ですか。」

学生Z:「銃を多くの人が所持しているので、安全ではないと思います。」

先生Y:「銃は非常に重要だと私は思います。あなたは銃が危険だと言いましたが、何故ですか。私には分かりません。」

学生Z:「ある状況では、銃は重要です。("In some situations, guns are important.")」

4. おわりに

上記の調査結果から分かるように、日本人学生は自分の意見をもっていないのでは

なく、日本文化で高く評価されている丁寧表現を多用したために、英語圏の先生に反対意見表明と解釈されず、“自分の意見をもっていないという誤解を招いてきた”のである。修辞学者の香西（1995）は、「意見とは、本質的に先行する意見に対する『異見』として生まれ、たとえそれが具体的な明確な形では現れなくても、対立する意見に対する『反論』という性質をもっている。意見を述べるとは、反論することだ。」と指摘している。英語教育で、学生に意見を述べることの本質的な意義を捉え直させ、英語圏の先生にとって、授業中の議論の場は情報交換が主流を占めるので、丁寧さの原則よりも協調の原則が優先されることを銘記させる必要がある。

言語伝達が効果的に行われるのは、「聞き手が表現されない隠された意味を汲み取ってくれる」（小泉、2001）場合であるから、それが期待できない英語圏の先生には、隠された意味まで言葉で明確に表現し、英語圏の先生の期待に添ったコミュニケーション・ストラテジーを用いることが大切であることを教示しておく必要がある。その際、一部の日本の知識人がもっている、日本語が非論理的であるというような誤った考えを学生に植え付けず、“ただ話し手と聞き手の役割や期待が異なっているだけ”だということを強調しておかねばならない。

人間は一朝一夕に変わるものではないから、長期的展望で臨むことが大切である。英語教育での積み重ねが、国際社会での日本人の悪評を払拭する大きな力になる得ると信じる。

参考文献

- 安藤貞雄. 1986. 『英語の論理・日本語の論理—対照言語学的研究—』東京: 大修館.
- Beebe, L.M., & Takahashi, T. 1989. "Sociolinguistic variation in face-threatening speech acts: Chastisement and disagreement." In M.R. Eisenstein (ed.) *The dynamic interlanguage: Empirical studies in second language variation*, 199-218. New York: Plenum Press.
- Brown, P., & Levinson, S.C. 1987. *Politeness—some universals in language usage* (rev. ed.). Cambridge: Cambridge University Press.
- Grice, H.P. 1975. "Logic and conversation." In P. Cole, & J. Morgan (eds.) *Syntax and semantics 3: Speech acts*, 41-58. New York: Academic Press.
- Gudykunst, W.B., & Kim, Y.Y. 1984. *Communicating with strangers*. New York: Random House.
- Hall, E.T. 1976. *Beyond culture*. New York: Anchor.
- Hall, E.T., & Hall, M.R. 1987. *Hidden differences*. New York: Anchor.
- 板坂元. 1971. 『日本人の論理構造』東京: 講談社.
- 河合隼雄. 1998. 『日本人の心のゆくえ』東京: 岩波書店.
- 岸田秀. 2002. 『一神教 vs 多神教』東京: 新書館.
- 小泉保. 1990. 『言外の言語学—日本語語用論—』東京: 三省堂.
- 小泉保編. 2001. 『入門 語用論研究—理論と応用—』東京: 研究社.
- 香西秀信. 1995. 『反論の技術—その意義と訓練方法—』東京: 明治図書.
- Leech, G. 1983. *Principles of pragmatics*. London: Longman.
- Levinson, S.C. 1983. *Pragmatics*. Cambridge: Cambridge University Press.
- 中山治. 1982. 『「ばかし」の日本文化』東京: あるふあ出版.
- 中山治. 1989. 『「ばかし」の心理』東京: 創元社.
- Stewart, E.C., & Bennett, M.J. 1991. *American cultural patterns: A cross-cultural perspective* (rev. ed.). Yarmouth: Intercultural Press.
- 鈴木大拙. 1977. 『東洋的な見方』東京: 春秋社.
- Sweetser, E.E. 1990. *From etymology to pragmatics: Metaphorical and cultural aspects of semantic structure*. Cambridge: Cambridge University Press. (澤田治美訳『認知意味論の展開: 語源学から語用論まで』東京: 研究社. 2000.)
- The committee coping with U.S./Japanese trade war strategies. 1987. *An official theory of the Japanese* (対日貿易戦略基礎理論編集委員会編. テレコムパワー研究所訳. 『公式日本人論』東京: 弘文堂. 1987.)
- 外山滋比古. 1973. 『日本語の論理』東京: 中央公論社.
- 外山滋比古. 1983. 『日本語の修辞学』東京: みすず.
- 外山滋比古. 1992. 『英語の発想・日本語の発想』東京: NHK.
- Williamus, B.T. 2000. *Communication gap*. (加藤節雄訳『コミュニケーション・ギャップ: 国際人への壁をのりこえるヒント』) 東京: 青春出版社.

シンポジウム

[9号館 1階 912教室(15:45~18:10)]

ジェンダーと語用論

—記号論・エス/メソドロジー・批判的談話分析からの提言—

司会 林 礼子(甲南女子大学)

- 1. 近代フランスにおける「女らしさ」の表象と規範……………182**

講師 小倉 孝誠(慶応義塾大学)

- 2. ジェンダーをつくることば…………… 186**

—言語イデオロギーとしての「女ことば」—

講師 中村 桃子(関東学院大学)

- 3. 成員カテゴリー化装置としてのジェンダー…………… 194**

講師 山崎 敬一(埼玉大学)

山崎 晶子(公立ほこだて未来大学)

ディスカッサント 佐竹 久仁子(武庫川女子大学(非))

近代フランスにおける〈女らしさ〉の表象と規範

小倉 孝誠
慶應義塾大学

近代フランス、とりわけ 19 世紀から 20 世紀初頭にかけて、女性の身体がどのように語られ、表象されてきたか。女らしさ、「女性性 *féminité*」はとりわけ身体レベルで問題とされた。しかも、女の身体を論じ、語ったのは多くの場合、男たちであった。男にとって女の身体は欲望の対象であると同時に怖れの対象であり、ときには謎にみちたものだった。女の身体をめぐる男が紡いだ言説には、さまざまな幻想やイデオロギーが織り込まれているだろう。そうした幻想やイデオロギーを単なる偏見として片づけるのではなく、社会的テキストとして読み解いてみる。

そのために、3つの異なる言説を取りあげる

I 医学

19 世紀に医学と医者が発言力が増し、女性の身体と情動に関する言説の多くは医者によって流布させられるようになった。『医学事典』(1812-1822)は女性をどのように規定しているか：

- ・生殖機能への還元
- ・生理学的な男女の差別化
- ・女性と子供の類似性
- ・理性が男の属性で、感性が女の属性

女性と病い——病いは女の宿命として捉えられていた。「女らしさ」の代償として刻印された二つの病い： 萎黄病とヒステリー。文学への波及（モーパッサン）

II 文学

近代小説は、女性たちを「見られる存在」として提示するためにさまざまな装置を配列し、女性そのものをスペクタクル化しようとした。窓、バルコニー、舞踏会、夜会、劇場、オペラ座など。そこでは、何かを見つめ、夢想到る女に男たちの視線が向けられる。バルザック(1799-1850)、フロベール(1821-1880)、ゾラ(1840-1902)、プルースト(1871-1922)などの作品。

- ・見つめられる身体としての女： ゾラ『ナナ』(1880)——女優=娼婦の身体
- ・見つめられる女から見つめる女へ。そのスキャンダラス性： フロベール『ボヴァリー夫人』(1856)

Ⅲ 礼儀作法書

礼儀作法書では、日常生活における個人の振る舞いや動作のみならず、社交生活や対人関係における身ごなしなどが問題とされる。身体を規範化し、各人がみずからの身体を自己規制するよう促す言説の体系。フランスでは19世紀末から礼儀作法書が増えていく。それは多くの場合、女性の著者が女性読者のために刊行した書物であり、「女らしさ」のイメージを形成していく。女性の身体をめぐって医学が科学的な表象を、小説が文学的な表象を提出していたのに対し、作法書は身体を教化する規則を提示する。スタッフ男爵夫人『社交の慣例——現代社会における礼儀作法の規範』(1889)、トラマール伯爵夫人『社交の慣習、人生のあらゆる状況における現代礼儀作法への案内』(1900)の二作が典型。そこでは何が述べられているか。

・礼儀作法を心得るのは、愛され、尊敬されるため（他方、男にとっては社会的上昇の手段）

・歩き方、握手の仕方、身ぶり、動作などについての細かな規定。

・顔と表情

・若い女性の身体には、とりわけ詳細で煩瑣な規範が課された。

礼儀作法とは身体を記号化し、その記号性を洗練させようとする試みである。

引用文

①『医学事典』(1812-1822)、「女性」の項目

女性とは何か？ それはわれわれ人類の重要な起源である。胚と卵の受託者であり、その根元的な母胎である。あらゆる女性はおっぱい繁殖のために創られた。その生殖器は女性の身体構造全体の根源であり、基盤にほかならない。女性にあっては、すべてがこの組織の中枢から発し、すべてがそこに帰着する。女性の生の原理は子宮にあり、人体組織のすべてに影響をおよぼす。

(・・・)

男性は能動的で、女性は受動的である。男性は体質的に暖かく、乾いていたり激しかったりするが、女性は湿っていて、より冷たい。前者は支配し、勝利を収めるのに対し、後者は従属し、嘆願する。

(・・・)

女性は体格の面で、ほとんど常に子供である。子供と同じように、女性の器官はさまざまな衝動にたいして簡単に屈してしまう。女性は感受性が強く、まさしくそれゆえに同一の感覚を長いあいだ持続させることができない。

②レイエ=ヴィレルメー『神経病概論』(1832)、「ヒステリー」の定義

子宮に中枢のある神経症。神経組織が損傷したり、子宮の生体機能が原因で発生する。この神経症は女性に特有の病いである。

③モーパッサン「ある女」(『ジル・ブラス』紙、1882年8月16日)

ヒステリー患者、これが現在しきりと人々の口にのぼる言葉だ。あなたは恋をしているですって？ するとあなたはヒステリー患者だ。同胞のひとたちが感じる情熱に無関心ですって？ するとあなたはヒステリー患者、貞淑なヒステリー患者だ。夫を裏切っているですって？ するとあなたはヒステリー患者、官能的なヒステリー患者だ。お店で絹の布切れを盗むですって？ ヒステリー患者だ。何かにつけて嘘をつくですって？ ヒステリー患者だ！ (中略) あなたはこうであり、ああであり、要するに、世界の初めからあらゆる女性がそうであったような人間にすぎないですって？ ヒステリー患者、ヒステリー患者だ！ ということになる。かのシャルコー博士、ヒステリーの偉大な司祭にして、病室でのヒステリー患者の養育者であるかのシャルコー博士が、その模範的な施設サルペトリエール病院で、多額の費用をかけて数多くの神経症の女たちを養うようになって以来、われわれは皆ヒステリー患者なのである。

④エミール・ゾラ『ナナ』(1880)

戦慄が観客席をゆすぶった。ナナは裸だったのだ。自分の肉体の全能を確信し、不敵な落ち着きをたたえて、ナナは裸だったのだ。身を包むものとしては、一枚の薄絹ばかり。丸みのある肩、槍のように堅くぴんととがったばら色の突起のある豊かな乳房、肉感的にゆれ動く大きな腰、あぶらののった金褐色の太腿など、ナナの全身は、水沫のように白い薄物の下から、すけて見えたり、あらわに現れたりしていた。身をおおうものとしてはただ髪の毛しか持たぬ、波間から生まれでるヴィーナスであった(中略)。突如、この無邪気な娘のなかに女が立ち上がって、女性の無鉄砲さをさらけ出し、欲情の未知の世界をあばいて男性を悩殺したのだった。ナナは絶えず微笑を浮かべていたが、それは男殺しの鋭い微笑であった。

⑤ギュスターヴ・フロベール『ボヴァリー夫人』(1856)

シャルルは彼女の爪の白さに驚いた。きらきら光って先が細く、ディエップの象牙細工よりもきれいに磨きがかかって、先尖りに切ってあった。しかし手は美しくなかった。白さが足りないようだし、関節がすこし骨張っていた。それに長すぎて、輪郭に柔らかみがなかった。彼女の美しいところは眼であった。茶色のくせに睫毛のせいで黒く見えた。あどけなく大胆に、ぐっと見すえるような眼つきであった。

⑥同上

男がこれほど美しく見えたことはかつてなかった。得もいえない純真さが彼の態度から感ぜられる。彼は反り返った細長い睫毛を伏せていた。肌のなめらかな彼の頬は彼女の肉体を獲ようとする欲望のために赤らんだ——と彼女は思った。そしてエンマはその頬へ唇を持ってゆかずにいられない欲望を感じた。

⑦スタッフ男爵夫人『社交の慣例』(1889)

受けた印象がどのようなものであれ、それを抑えるようではなければならない。苦しみ、喜びなどは、なにも極端に誇張した身振りなどしなくても、十分に表現できるものである。そのような慎みの念をもたらすのは最初の教育であるから、母親たるもの、それを子供たちにしっかり教え込むようにすべきであろう。

⑧トラマール伯爵夫人『社交の慣習』(1900)

ほほえみは、当然のことながら優しくあるべきだし、顔は、ひとが感じる好意と寛大さにあふれた感情だけを示すべきであろう。時が顔のうえに早急にその痕跡を残すのを望まないのであれば、好意と寛大さにあふれた表情こそ、容貌に表れることがゆるされた唯一の表情である。

ジェンダーをつくることば
——言語イデオロギーとしての「女ことば」——

中村桃子（関東学院大学）
momo@kanto-gakuin.ac.jp

日本語の「女ことば」に関する研究は大きく二つに区別することができる。ひとつは、「女ことば」を、女が使ってきたから自然に成立した非政治的概念として研究するアプローチである。本稿では、これを「本質主義的アプローチ」と呼ぶ。もうひとつは、「女ことば」を、女が実際に使ってきた言葉づかいではなく、歴史的に作り上げられてきたフィクション・文化的構築物として研究するアプローチである。本稿では、これを「構築主義的アプローチ」と呼ぶ。以下では、両者のアプローチを比較検討した後、後者のうち、明治・大正・戦中期についての研究を概観することで、「女ことば」という概念の形成が「国民としての女というジェンダー」をことばの側面から作り上げる政治的働きを果したことを示したい。

1 「女ことば」研究の本質主義的アプローチとその問題点

本質主義的アプローチは、「女ことば」は女が用いている言葉づかいであり、女が実際に男と異なる言葉づかいをしてきたから自然に成立したカテゴリーだと考える、つまり、女の言語実践と「女ことば」概念を直接結びつける。このアプローチは、さらに次のような三つの主張を導き出す。

第一に、このアプローチでは、過去から現在までの女の言語実践が継続して、進化論的に「女ことば」に結実したとみなされるため、女ことばの「起源」が取り上げられる。その場合に、しばしば引き合いに出されるのが室町時代に宮中の女房が使った女房詞と江戸時代に遊女が使った遊女言葉である（Ide & Terada 1998, Ide 2003）。一般の女たちが女房詞や遊女言葉を使うようになったことが「女ことば」の起源だとみなされる。

第二に、このアプローチでは、女が実際に男と異なる言葉づかいをしてきたことが前提となる。つまり、言語的性差は実際の言語実践の中に観察されると考えられている。よって、女でも（男でも）互いに異なる言葉づかいをすることや、私たちの言語実践がジェンダー以外にも様々な要因によって異なるという可能性は考慮されない。そのため、言語的性差の原因は、女の言語実践が女の「特質・生理的感性」に基づいた共通性を持っているからだ、という本質主義に結びつく（堀井 1993）。

第三に、よって、「女ことば」は、女の言語実践から自然に発生した非政治的概念である。

第四に、このアプローチでは、過去の男女の言葉づかいが異なっていたことが前提となるので、現在言葉の性差が少なくなっているのは女の地位が向上したからだと考えられる。

しかし、これらの主張には問題点が多い。第一の「女ことば」の起源に関する主張の論点は、女房詞や遊女言葉の一般への普及である。たとえば、女房詞の普及を示す資料として挙げられてきたのは、女訓書と呼ばれる江戸時代の作法書が、女が使うべき語として女房詞を多数列挙しているという事実である。国田(1964:21)は、『女重宝記』の「大和詞」…

『諸礼叢』所収の「女言葉」…をもっとみると、江戸にはいって、元禄から享保にかけ、『女中言葉』が盛に書写され、恐らく寺子屋教育のテキストに盛に用いられたと思われる。女房詞は、かようにして、時代が下るに従って、御所方から將軍家大奥へ、さらに、武家屋敷、又庶民の女たちの間にまで伝わり、広く一般化の過程を辿るのである」と述べている。さらに、一般の女たちが女房詞を使い始めたのは、女房詞に「優雅な言葉」という価値が与えられたからだと考えられている。杉本（1998:45）は、「女房ことばから女中詞へと展開する過程において、女のことばはいわゆる上層階級の女性の使うべき優雅な詞という価値とニュアンスを背負いつつ使用され、それにつれて<女中詞>という枠を離れて、一般の女

性語の中に融合していった」と述べている。ここでは、女訓書を通して優雅な女房詞を学んだ一般の女たちが進んで使い始めたために、女房詞が一般に普及したと推測されている。

しかし、女訓書が女房詞を列挙したからといって、一般の女たちが実際に女房詞を使うようになったと言えるだろうか。式亭三馬の『浮世風呂』には、女でも女房詞の使用を嫌悪した町人や下女が登場するし、安楽庵策伝の編んだ笑話集『醒睡笑』（寛永五年1628）では、織田信長から下男まで、男が女房詞を使っている。たとえば『浮世風呂』（1809-12:160-1）に登場する下女の「お丸どん」は女房詞を「貧乏世帯を持つちやア入らねへ詞だ。せめて、湯へでも来た時は持前の詞をつかはねへじやア、気が竭らアナ」と言い、「おかべどん」は「しみ真実否だ」と奉公先で女房詞を使わされる苦痛を嘆いている。女房詞は、女であっても下女にとっては使うことも苦痛な言葉だったのである。

女訓書という資料はそのまま当時の言語実践を表わしているのではなく、むしろ、江戸時代に女の言語実践に関する規範が広範囲に述べられたことを示している。一般の女たちが女房詞を使うようになったとしても、それは、女は誰でも優雅な女房詞を使いたいと考えたからではなく、女訓書によって女房詞が「女が使うべき言葉」という規範になったからではないだろうか（中村 2003）。女の言語実践と「女ことば」を直接結びつける視点では、このように女の言語実践に影響を与える規範的価値を捉えることができない。

第二の、「男女の言語実践は異なる」という主張も、近年急速に発展している談話分析によって否定されている。女の（そして男の）言語実践は、年齢（オカモト&サトウ 1992）、家族関係・上下関係・世代（小林 1993）、学歴・職場の役割（高崎 1993）によって異なるし、同一人物が場面のあらたまり度・相手との上下・親疎関係によって言葉を使い分けていることが指摘されている（現代日本語研究会 1997）。女の言語実践がこれほど変化するのならば、「言語的性差」や「女の特質に基く言葉づかい」という表現自体が無意味になる。

よって、第三の、「女ことば」は女の言語実践から自然に発生したとする主張も否定される。多様な言語実践から一つの言語カテゴリーが自然に形成されることなど不可能である。「女ことば」は、女の言語実践とは別の次元で形成されたと考えなければ説明がつかない。

さらに、言語実践の多様性は、第四の言語的性差の減少を女の地位向上の証拠と見る主張も否定する。いつの時代にも、男（女）のように話す女（男）が存在したことは言葉の性差がなくなったという批判が何百年も続いていることから明らかである。これらの問題点は、女の言語実践を均質なものであると想定して、均質な言語実践が自然に一つの「女ことば」に結実したという考え方の限界を示している。

2 「女ことば」研究の構築主義的アプローチ

一方、構築主義的アプローチは、「女ことば」を、女たちが実際に用いてきた言葉づかいではなく、歴史的に作り上げられてきたフィクション、あるいは、文化的構築物とみなす。このアプローチは、まず、女の言語実践と「女ことば」概念を区別する。「女ことば」を、政治的な価値を伴った抽象的な規範、つまり、言語イデオロギーと捉えるのである。言語イデオロギーとは、「社会・言語関係に関する、倫理・政治的価値を伴った文化的信念の体系」（Irvine 1990:255）を指す。「政治的価値」を伴った言語レベルには、言語要素、言語変種、個別言語、言語（ことばというものの全体）など、様々な抽象度が区別されるが、その一つが、「女ことば」「国語」「標準語」「敬語」などの言語カテゴリーである。「言語イデオロギー」という用語には、単に抽象的規範という意味だけではなく、特定の時代・集団の言語実践を支配する政治的働きを持つという意味が込められている。たとえば、「標準語」という言語イデオロギーには、この言葉づかい以外の話し手に対する差別を正当化する働きがある。近年、「国語」（イ 1996 安田 1997 長 1998）「標準語」（Milroy & Milroy 1985）「敬語」（山下 2001）が政治的価値を伴って構築されたものであることが示されている。

構築主義的アプローチの主張を従来のアプローチと対照させると次のようになる。第一に、このアプローチでは、「女ことば」を女房詞や遊女言葉を起源として、女の言語実践か

ら直接形成されたものとは考えない。むしろ、女房詞を規範として列挙した女訓書のような、女の言葉づかいに「ついて語る」ディスコースに注目する。女の言葉づかいについて語ってきたディスコースには、作法本、教科書、辞書、文法書、識者の論評がある。もうひとつ注目するのは、小説、映画、ドラマ、漫画などのフィクションの登場人物が用いる言葉づかいである（佐竹 2004）。このアプローチでは、実際に女たちが使っている言葉づかいではなく、女の言葉づかいに「ついて語る」ディスコースやフィクションの言葉づかいが、「女ことば」イデオロギーの構築に大きな役割を果たしてきたと考えるのである。

第二に、このアプローチでは、過去から現在まで女も（男も）様々な要因を考慮して常に多様な言葉づかいをしてきたと考える。女も常に「女である」ことを示すためだけに言語実践を行っているわけでもないし、「女だから」特定の言語実践を行うわけでもない。よって、様々な異なりを見せる言語実践の中で言語的性差だけを直接見出すことは出来ない（寿岳 1979:45）。むしろ私たちは、「女ことば」という概念があるから、多様な言語実践の中に言語的性差があるかのように感じているのではないだろうか。

さらに、構築主義的アプローチは、「女ことば」イデオロギーと女の言語実践を区別した上で、関係付けることにより、女の言語実践の多様性を「女ことば」の規範に対する話し手の多様な対応として捉える。つまり、「女ことば」を「女の特質・生理」から開放し、男女ともが言語実践において利用できる言語資源として捉え直すのである。同時に、「女ことば」は、「何が女らしい言葉づかいか」という規範を示すことによって言語実践を制限する。「女ことば」の資源をどのように利用し、「女ことば」の制限にどのように従う（あるいは、従わない）かによって、言語実践が多様に変化すると考えるのである（中村 2002）。

よって、第三に、「女ことば」は、女の言語実践から自然に形成されたものではない。では、「女ことば」イデオロギーはどのように作られたのだろうか。以下では、作法書、文法書、識者の論評をもとに、その創生の過程の一端を明らかにしたい。（紙面の都合で十分な資料を挙げられなかったので、詳しくは参考文献を参照されたい。）

3 「女の話し方」と「男の国語」——明治期の性別化された言語カテゴリー

（1）明治期女訓書——「近代版女の話し方」

江戸期に読み書きの教科書として膨大な数普及した女訓書は、儒教の四行のひとつである婦言に基づいて繰り返し多言を戒めている。明治・大正期の女訓書の多くも、話し方については江戸期とほとんど同様の規範を述べている。たとえば、女大学系の女訓書では、江戸期と全く同じ教訓が繰り返されている。『女訓』（石川 1977[1874]:97）は「女は言語多きものなれば、慎みていらざることは云うべからず」。『近世女大学』（石川 1977[1874]:111）は「女子は、挨拶・言葉遣い・立居振舞など、総て温和にして愛敬あるべし」。「言葉を慎みて、多くすべからず」は、『文明論女大学』（石川 1977[1876]:137）、『改正女大学』（石川 1973[1880]:343）、『新撰増補女大学』（石川 1973[1880]:331）で繰り返されている。『新撰女大学』（石川 1973[1882]:356-7）には、「婦人の辞遣いは、おとなしくしとやかに、耳立たぬを善しとす。…多言の婦人は七去の中に入りたれば、本心に畏れて無用の口は開くべからず。」とある。福沢諭吉『女大学評論・新女大学』（石川 1977[1899]:228）にも『「言語を慎みて多くす可からず」とは、寡黙を守れとの意味ならん。…愚者の多言、固より厭う可し。況して婦人は静かにして奥ゆかしきこそ、頼母しけれ。』とある。女の話し方の規範が長期間語られたことで、「女の話し方」が社会的に意味のあるカテゴリーになったと言える。

しかし、明治期女訓書の教訓は二つの点で江戸期とは異なっている。一つは、江戸期の教訓が「家」の嫁・妻の規範的話し方だったのに比較して、明治期は天皇の臣民としての「女性国民」の規範的話し方に変化した点である。『文明論女大学』（石川 1977[1876]:135）には「我が日本帝国の婦人女子は、男子と同じく日本帝国の人民の権利を有するものにして、日本帝国に報ずる義務を存するものなり。婦人女子を以て、みづから軽んじ、国民の務めを外にすべからざるなり。」とある。二つ目は、日清戦争後、国家への貢献が女にも求めら

れるに従い、単に「女は話すな」という規範を示すのではなく、女の沈黙に対する批判が生まれた点である。福沢は「唯一概に寡黙を守れとのみ教うるときは、自ずから亦弊害なきに非ず。婦人の既に年頃に達したる者が、」挨拶や病気の容体さえろくに伝えられない、と嘆いている(石川 1977[1899]:228)。江戸と明治の女訓書の大きな違いは、江戸期にはひたすら妻・嫁として家に従うことを求めたのに対して、明治期には国家的視点から次代の国民を教育する良妻賢母を求めるように変化した点にある(小山 1991:33-34)。本稿ではこの違いを表わすために、明治の女訓書によって作られたカテゴリーを「近代版女の話し方」と呼ぶ(中村 2004)。明治の女訓書は、江戸期の理想である寡黙に「家」に従う嫁を、天皇の臣民として国家に貢献する女性国民へ転換した。「近代版女の話し方」カテゴリーの創生は、「女というジェンダー」が「家の嫁」から「女性国民」へ変換される過程をことばの側面から促したと言える。

(2) 明治期言文一致論争——「男の国語」の創生

一方、明治期には「国語」という概念が、「国家」「国民」と並んで作り上げられたことが指摘されている(イ 1996、安田 1997、長 1998)。「国語」の創生に大きな役割を果たしたのが、言文一致運動と「標準語」の制定である。「国語」の創生は、単に知識の受容と普及という実用の目的だけでなく、国家・国勢・国運に関わる急務と捉えられていた。しかし、長期にわたる言文一致論争においても、男女の言葉づかいの違いに関する発言がほとんど見られない。もし、ひとつの「国語」を共有することが国家・国民の形成にそれほど重要であるのならば、なぜことばの性差が問題にならなかったのだろうか。このことは、社会階層や地域による言葉づかいの違いが大いに議論されている点を見ても矛盾している。

その理由は、「国語」が当初から「男の国語」として想定されていたからである。最初に標準語の基準が男の言語であることを明言したのは、岡野(1964[1902]:510)の「斯く差違ある言語中の、言文一致の採るべき標準語は孰れなりやと言へば、比東京の各社会一般に通用する言語、即ち中流社会の男子の言語を採るのである」である。「教育ある東京人」の言葉づかいを「標準語」とすることは、すでに上田(1964[1895]:506)が主張している。岡野の主張の独自性は、「中流社会の男子の言語」と「男子」を明確にしている点である。なぜ「男子」の言語なのか。岡野はその理由を全く述べていないが、この主張の直前に、「同じ東京語の中でも階級、職業、年齢、男女等によって言語の相違あることは著しい」と言葉の位相に言及している。言葉の性差に自覚的であった岡野だからこそ、他の研究者にとってはあまりにも自明な「男子」を言語化したのではないだろうか。

女には女訓書に従った言葉づかいを求め、他方で、「男の国語」の創生を希求する。この傾向を端的に表現しているのが大槻(1905)である。ここでも女学校での講話にもかかわらず、ことばの性差は全く言及されていない。女の言葉については、「婦人の言葉は其人の品格にかゝるから女の言葉遣ひは慎まねばなりませぬ」と、女訓書の言説を繰り返している。ところが、「標準語」制定については、「そこで日本の話言葉を一つにしようといふには目安言葉(標準語)を定めねばならぬ目安言葉とするには田舎の言葉は採られぬ都の言葉でなければなるまい都といへば東京か西京かであるが西京言葉は女にはよいけれども男には弱く聞こえていけない」と、言文一致運動が、実は「男の言葉を一つにする」運動であったことを露呈している。言文一致論争に性差についての言及がないのは、言文一致が、(中流の)男の「言」と「文」を一致させ「(中流の)男の国語」を作る運動であったからである。「国語」にはジェンダーがあった。

「女の話し方」と「男の国語」は、全く異なる領域で取り上げられることにより性別化されていた。「女の話し方」は、もっぱら礼儀作法の言説で語られることで、支配の対象としてカテゴリー化されている。一方、「男の国語」は、学問・政治・文学的言説で語られることで、国策や国力と不可分の国家的重要課題としてカテゴリー化されている。

なぜ時代は、「女の話し方」と「男の国語」という性別化された言語カテゴリーを作り出し

たのだろうか。近代国家建設に乗り出した明治政府は、人々を国家の労働力・兵力となる「国民」として統合する必要に直面した。女にも国民として国家に貢献する能力が期待されるようになったのである。しかし、女が自立して国家による統御を否定する危険を回避するためには、女子国民の役割を男子国民の扶助と次代の国民の育成という妻・母役割に制限しなければならない(若桑 2001)。ここに、「国民化」の過程は性別化の過程となった。「国民化」は、「国家の第一の担い手としての男」と、その男と決して競合しない「第二の担い手としての女」を分化する過程であった(金井 1997:312)。近代国家の建設は、「性別化された国民化」によって達成されたのであり、「女の話し方」と「男の国語」という二つの概念はことばの側面から「国民の性別化」を促進したのである。

4 戦中期における「女ことば」の創生

(1) 「国語」の例外としての「女ことば」——口語文法書

ところが、戦中期にはいると「女の話し方」と「男の国語」という性別化が解消され、女の言葉づかいが「女ことば」として「国語」の内側に位置付けられる。明治期の口語文典や国語読本は、書生言葉を始めとする男と結びついた言語要素を積極的に採用する一方で、女学生言葉など女と結びついた言語要素を排除した(Nakamura forthcoming)。しかし、戦中期の口語文法書は、男の言語を標準口語の基準としながら例外として積極的に女の言語に言及し、性差を強調するという二つの変化を示している。

松下(1924:625)は、終助詞の「わ」について、「『は』は一般の語は他人に対してその当然なることを指示するのであるが婦人語では『は』を重く発音してその事を他人の感情に訴へる意になる。」と述べ、三尾(1995[1942]:403)は『話言葉の文法』に「女言葉」という章を設定した理由について「これまで述べてきたなかにも、女言葉についてすこしは触れてきましたが、男のつかふ言葉を標準とした一般的な言葉について述べてきましたので、女言葉にはあてはまらない部分もいくらかあったから、と述べている。ここで「一般の語」「一般的な言葉」と呼ばれているのは男の言語である。これらの文法書は、口語文法の基準をあくまで男の言語とした上で、女の言語には例外として言及しているのである。

性差に最も詳しく言及しているのは、藤原(1944:18,40,110)である。「君・僕・俺」は「男子の用語」、「男子が『熱いわねえ』などとは言わない。『わ』といふ文末如詞は、…女子の使うものだからである。」発問の「か」も、「男子は『君、今日は水曜日か。』女子は『今日は水曜日?』」と例を挙げ、「女子は『か』を添えないで言ふ。」と説明。岩井(1944:17,150-1)も、『ぼく』は大体知識階級の男子の特殊語、終助詞「わ」は「婦人専用の助詞」、「わい」は「男子の用語」、「ぞ」「ぜ」は「多く青年男子が用いる」と性差を強調している。

性差を強調するために多数採用されたのが、明治期「女学生言葉」として批判された「テヨ・ダワ・ノヨ・コト」などの文末詞である。永田(1935:94-5)は「テヨ、ワ、コト」、保科(1936:224)は「ワヨ、ノヨ、ワ」、佐久間(1940:78)は「コト」、三尾(1942:405)は「テヨ」、石黒(1943:235)は「コト、ノヨ」を批判することなく標準口語として挙げている。

なぜ「女学生言葉」は戦中期に標準口語になったのだろうか。口語文法書が採用しているのは、女の中でも「教育ある東京人の話すことば」という「標準語」の定義を満たす女子学生の言葉づかいである。しかも、女子学生が使う男ことばは採用していない。保科(1936:225)は、「近來学生の用いる人代名詞『君』や『僕』を、女学生の間でも用いるものがあるようですが、これは一種の変態でありまして、わが国においては、男子と女子との間に、その用法が嚴重に區別されているのが常例であります。」と述べ、木枝(1943:85)は、「僕」は「絶対に女子のつかふべき言葉ではありません。若し若い女子が『僕』とか『君』とかつかったとしたら、…さういふ女子は日本の女子ではないと言はなければなりません。」とまで述べている。つまり文法書は、女の中から「教育ある東京人」である女学生を選び、女学生言葉の中でも、性別を強化する言語要素は採用し、性別を越境する言語要素は批判しているのである。これは、文法書における女学生言葉の採用の目的が、標準語に

おける性別の構築であったことを示している。

(2) 天皇制国家の伝統としての「女ことば」

さらにこの時期、「女ことば」の起源は女房詞と敬語にあるという主張が発生する。女房詞と女ことばを初めて結び付けて考察したのが菊澤(1929)である(鷲 2000:20)。菊澤(1929:67)は、女房詞の特徴として「丁寧な言葉遣をすること」、「上品な言葉を用いること」、「婉曲な言葉」、「ごこない漢語を避ける」の四つを挙げている。そして菊澤以降、「女ことば」の起源を女房詞とし、女房詞の特徴を、すなわち「女ことば」の特徴とみなす傾向が繰り返されて行く。保科(1936:228-9)も、「一般婦人の言葉は男子に比較すると、一般にやさしいのが特徴でありますから、敬語の意味でなくとも、なるべく上品・丁寧な言葉を用いようと心掛けます。その関係から、何事も直接にあからさまに言いあらわさない習慣が生じ、それが上品で奥ゆかしい感じを与えるのであります。…明治時代までは、婦人の間には生硬なむずかしい漢語が用いられませんでした」と菊澤の主張を繰り返している。一方、「女ことば」と敬語の起源の同一性を主張したのが、金田一(1942:296)である。「婦人語の特徴は、敬語の多いことであり、敬語の発達は、婦人語の発生と切っても切れない縁があるのである。故に敬語の起源を考へることは、婦人語の起源を考へることである。」

なぜ戦時中に、女房詞と敬語が「女ことば」の起源として言及されたのだろうか。この間に答えるために、女房詞や敬語がどのようなものとして語られていたのか見てみよう。まず、女房詞については、宮中から発生したという理由から、天皇制国家の伝統とする主張が多く見られる。長尾(1943:30)は、「〔女房詞が〕禁裏、仙洞に発して、將軍家大奥を経て、今日の我々の日常にも生活してゐることは、長き尊き国語の伝統…皇国の美と高貴に見える伝統である。」と述べている。次に、敬語については、世界に誇るべき日本語の優位の象徴としての位置付けが見られる。廣幸(1941:448)は、「特に我が国語が…敬語法に富んでいることは実に諸外国語に対する我が国語の一大特色である。」と主張している。「天皇制国家の伝統を継承した女房詞」や「国語の優位の象徴である敬語」が女ことばの起源として持ち出されたのは「女ことば」という概念を日本が古くから保ってきた伝統とするためではないだろうか。「伝統というものは常に歴史的につじつまのあう過去と連続性を築いて」(Hobsbaum1983:1)創り出される。女房詞や敬語に端を発する「女ことば」は、女たちが守りつづけてきた日本の伝統になったのである。

これに加えて、「女ことば」は日本語のみに見られる特徴であり、これが日本語の優位、ひいては、日本の優位を示しているとする主張が発生する。「この、男の話す言葉と女の話す言葉と違うと云うことは、ひとり日本の口語のみが有する長所でありまして、多分日本以外のどこの国語にも類例がないであらうでしょう。」(谷崎 1934:157)「日本の女性語も正しく、日本婦人道と關聯する世界希有の事實ではないかと思われる。」(金田一 1942:293)「〔女性語は〕日本語のもつ美しさの一つであり、他の國語の追従をゆるさない。」(石黒 1943:236)

このように「女ことば」を天皇制国家の伝統、他に類を見ない特徴として賞賛する意図は明らかである。国語の優位は国家の優位である。「大東亜共栄圏」構想を打ち出して東アジアを侵略していた日本にとって、国語の優位を謳うことは、侵略を正当化することでもある。「すべて優秀なる国民の言語が、一般に強大な感化力を有するものであるから、共栄圏の盟主たる日本の言語が、当然その資格を具備している」(保科 1942:199)のである。優位な国語を持つ優位な国家の植民地支配が正当化された。その過程で、日本語の優位を裏付けるために最大限に利用されたのが「女ことば」である。この時期「女ことば」が賞賛されたのは、日本の戦時体制を維持し侵略を正当化するためだったのではないだろうか。

これら文法書における例外化と伝統化・美化の言説群は、女の言葉づかいを性別化したまま「国語」の周縁に取り入れるという企てを達成した。女の言葉づかいが、「婦人語・女性語・女ことば」としてはじめて「国語」の中に位置付けられたのである。それはちょうど、戦中期に婦人団体の活動の中で女たちがはじめて社会活動に参加し、女性指導者が政府委

員に重用された事実と重なる（鈴木 1986,1996）。明治期においては、まず女性国民を男性国民から性別化することが重要だった。しかし、総動員体制においては、女性国民を「絶滅せずに自分たちの下に、ある場所に囲い込み、特定の任務につかせること」（若桑 1995,2000:57）が急務となる。これが文法書が女の言葉づかいを排除するどころか、積極的に採用し始めた理由である。女の言葉づかいは、絶滅せずに「国語」の下に囲い込まれ、天皇制国家の伝統の裏付けという特定の任務を与えられたのである。「女性の言葉の力はやうな時代に於て、兵隊の厳粛な簡潔な決意と責任の言葉と共に、愛と慰藉と親和の言葉として、戦うものの団結を強め協同の心を高めるのである」（長尾 1943:131）。ここでは、女の言語と兵隊の言語が車の両輪のように戦時体制を支えるものとして概念化されている。国語の例外としての「女ことば」は、ことばの側面から女の戦争役割を支えたのである。

5 まとめ

以上概観してきた「女ことば」の系譜は、明治・大正・戦中期に「女ことば」イデオロギーが「国民としての女というジェンダー」の構築に大きな役割を果たした政治的概念であることを示している。女の言葉づかいに関するイデオロギーは、明治期の国民の性別化と戦中期の女性の国民化という政治的要請をことばの側面から補強したのである。さらに、「女ことば」イデオロギーの構築には、国語学者や文法家などの言語の専門家が主要な役割を担ったことも明らかになった。

【参考文献】

- 藤原与一(1944)『日本語——共栄圏標準口語法』目黒書店
現代日本語研究会(1997)『女性のことば・職場編』ひつじ書房
廣幸亮三(1941)『標準口語法解説』京極書店
Hobsbaum, Eric (1983) *The invention of tradition*. Cambridge: Cambridge University Press.
堀井令以知(1993)「女性語の成立」『日本語学』12:100-108.
保科孝一(1936)『國語と日本精神』実業之日本社
保科孝一(1942)『大東亜共栄圏と国語政策』統正社
Ide, Risako and Tomomi Terada (1998). The historical origins of Japanese women's speech: From the secluded worlds of 'court ladies' and 'play ladies.' *International Journal of the Sociology of Language* 129: 139-56.
Ide, Sachiko (2003). Women's language as a group identity marker in Japanese. In Marlis Hellinger and Hadumod Bubmann (eds.), *Gender across languages*, 227-38. Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins Publishing Company.
Inoue, Miyako (2002) Gender, language, and modernity: Toward an effective history of Japanese women's language. *American Ethnologist* 29(2): 392-422.
Irvine, Judith T. (1990) When talk isn't cheap: Language and political economy. *American Ethnology* 16(2): 248-67.
石黒修(1944)『美しい日本語——女性新書』光風館
石川松太郎編(1973)『日本教科書体系往来編第15巻女子用』講談社
_____ (1977)『女大学集』平凡社
岩井良雄(1944)『標準語の語法』山海堂
寿岳章子(1979)『日本語と女』岩波書店
金田一京助(1942)『國語研究』八雲書林
金井景子(1997)「自画像のレッスン——『女学世界』の投稿記事を中心に」小森陽一・紅野謙介・高橋修編『メディア・表象・イデオロギー——明治三十年代の文化研究』小沢書店
木枝増一(1943)『言葉遣の作法』大阪堂書店
菊澤季生(1929)「婦人の言葉の特徴に就いて」『国語教育』14(3):66-75

- 小林美恵子(1993)「世代と女性語—若い世代のことばの『中性化』について」『日本語学』12:181-92
- 小山静子(1991)『良妻賢母という規範』勁草書房
- 国田百合子(1964)『女房詞の研究』風間書房
- イ・ヨンスク(1996)『「国語」という思想——近代日本の言語認識』岩波書店
- 松下大三郎(1924)『標準日本文法』紀元社
- Milroy, James and Lesley Milroy (1985). *Authority in language: Investigating language prescription and standardisation*, 2nd edition. London & New York: Routledge.
- 三尾砂(1995[1942])『話言葉の文法 言葉遣篇』復刻くろしお出版
- 長尾正憲(1943)『女性と言葉』佃書房
- 永田吉太郎(1935)「旧市域の音韻語法」齊藤秀一編『東京方言集』国語刊行会
- 中村桃子 (2001)『ことばとジェンダー』(勁草書房)
- (2002)「『言語とジェンダー研究』の理論」『言語』31(2):24-31
- (2003)「江戸期における女房詞の象徴的意味——規範の対象となった女の言葉づかい」『国語学会 2003 年秋季大会予稿集』135-42.
- (2004)「『女ことば』の成立と国民化——ジェンダーから見えてくる新しい日本語の姿」『日本語学』23:14-26
- (forthcoming) Construction of “Men’s National Language” in Japan (1868-1911). 『自然・人間・社会』38 関東学院大学
- 西原慶一(1941)『言葉の騷』厚生閣
- Okamoto Shigeko and Sato Shie (1992) Less feminine speech among young Japanese females. In K. Hall, M. Bucholts, and B. Moonwomon (eds.), *Locating power: Proceedings of the Second Berkeley Women and Language Conference*, 478-488. Berkeley: Berkeley Women and Language Group.
- 岡野久胤(1964[1902]:510)「標準語に就て」吉田澄夫・井之口有一編『明治以降国語問題論集』風間書房
- 長志珠絵(1998)『近代日本と国語ナショナリズム』好川弘文館
- 大槻文彦(1905)「日本方言の分布区域」『風俗画報』318:17
- 佐久間鼎(1040)『現代日本語法の研究』厚生閣
- 佐竹久仁子(2004)『女ことば／男ことば』規範の形成——明治期若年者向け雑誌から』『国語学』23:64-74
- 鈴木裕子(1986,1996)『新版フェミニズムと戦争——婦人運動家の戦争協力』マルジュ社
- 式亭三馬『日本古典文学大系 6 3 浮世風呂』岩波書店。
- 杉本つとむ (1998)『近代日本語の成立と発展』八坂書房
- 高崎みどり(1993)「女性のことばと階層」『日本語学』12:169-80
- 谷崎潤一郎(1934)『文章読本』中央文庫
- 上田万年(1964[1895])「標準語に就きて」吉田澄夫・井之口有一編『明治以降国語問題論集』風間書房
- 若桑みどり(2001)『皇后の肖像——昭憲皇太后の表象と女性の国民化』筑摩書房
- (1995,2000)『戦争がつくる女性像』筑摩書房
- 鷺留美 (2000)「女房詞の意味作用——天皇制・階層性・セクシュアリティ」『女性学年報』21:18-35.
- 山本正秀(1965)『近代文体発生の史的研究』岩波書店。
- 山下仁(2001)「敬語研究のイデオロギー批判」野呂香代子・山下仁編『「正しさ」への問い——批判的社会言語学の試み』51-83 三元社
- 安田敏朗(1997)『帝国日本の言語編成』世織書房

成員カテゴリー化装置としてのジェンダー

山崎晶子 （公立はこだて未来大学専任講師）

山崎敬一 （埼玉大学教養学部教授）

本発表では、ジェンダーをエスノメソドロジ的に性別カテゴリーとしてとらえ、性別カテゴリーが実際の場面のなかでどのように現れているかについて議論を行いたい。

エスノメソドロジーにおいて特にサックスは、自身の講義録のなかで社会の成員をどのようにカテゴリー化するか、そしてそれをどのように適用し、相手を仲間にいれたりいれなかったりするのかなという議論を繰り返している。これを成員カテゴリー化装置と定義している。この成員カテゴリー化は、例えば「男」であれば「女」とあわせて一つの性別としてのカテゴリー集合となるのである。

この成員カテゴリー化装置の特徴は、1. 成員性：すべての成員をカテゴリー化する。2. 推測性：そのカテゴリーに成員にたいして正しいとはいえなくても知識をもつ。3. 代表性をもつ。ある成員をそのカテゴリーの代表とする。ということである。

これらの特徴をすべてもつものとして、性別カテゴリー化装置がある。実際の場面においてどのようにそれが展開されているのかを考察したい。ここで、われわれは評価（assessment）に着目した。アニタ・ポメラントは継起的になされる会話のなかで第一部分で評価がなされたあと、相互行為的にどのように評価がなされるのかという分析を行った。そしてその評価に肯定的な第二部分は無標であり、その評価に否定的な第二部分は時間をおいたり、何らかの前置きをおいたり、理由の説明から始まったりする有標の状態である。

このような状態を優先応答(preferred)と非優先応答(dispreferred)とエスノメソドロジーでは定義する。われわれは、この第二部分の評価にどのように性別カテゴリーが関係するのかあるいはしないのかという現象に着目し、データの分析を行った。

まず、最初に議論する場面は、ある女性と複数の男性の友人同士でミュージアムにきているところである。一人の女性が目の前にある展示物を見ようとするが、友人たちは理由を述べてその展示物をやり過ぎそうとする。それでも女性は展示物に対して好意的な評価を述べるがその評価は受け入れられず、結果的に通り過ぎていく。

ここでの、女性の評価は、審美性という理由の下に他の男性たちと一致していない。その展示物に前で一団は展示物に対する空間を占めるが、彼女の評価に対して二次的評価が一致しないのにつれて、時間がおかれ、否定的な評価の下に次の鑑賞行為に移行する。（展示物の鑑賞と bystander の役割については、菅・山崎晶子・山崎敬一(2003)を参照のこと。また、このデータにかんしては、「アセスメントの創造」という題名で菅・山崎で発行する

予定である。)しかし、性的カテゴリーつまりジェンダーが判断の根拠となって、様々な二次的評価そしてそれに誘発してなされる三次的評価ややりすごすという結果とは関係しないことは明白である。

翻って、下の例ではどうであろう。

この例は、ある大学の学生同士で男女について議論を行ったものである。

【データ1】

F1: うん //別に不快じゃないよね
 F2: うん あはは=
 M1: 男の水着のポスターとかいったら// =女性是不快じゃないかもしれないけど、男は、あんだよ気持ち悪いな、女使え

- ・データにおけるF1・F2・M1の、FとMは女性・男性を示している。
- ・()は聞き取りにくいことばを示す。
- ・=は相手の発話との時間的接触を示す。
- ・//は相手の発話への割りこみや重なりを示す。
- ・データは、オーケストラの楽譜のように、F1とF2とM1の時間が同時並行的に記載されている。

【データ2】

A: きれいな女の人っていうのはさ= =女の子が見てもきれいだと思う//うん、それは不自然じゃないと思//うん (だよな)
 B: =うん= //うんそうそう //うん //うん

【データ3】

F4: あ、私もこれなんか、電車の中で
 F4.....
 F5: でもこれってさ、電車の中とかでも
 M4: ええ
 (F5の発話の上の傍線はF5の視線がF4の方向に向けられたことを示している)

【データ4-1】

M4..... F5..... M4..... M4.....
 F4: うん、だって警戒して乗るから やっぱり満員電車は だってそれしか電車がないんだもん
 M4.....F4... F4...
 F5: うん
 M4: 警戒って だったら埼京線乗らなきゃいいやん

データ1のなかで、「別に不快じゃないよね」というF1の発言は、M1の「女性是不快じゃないかもしれないけど」という発言によって、「女」というカテゴリーに分類されたものの発言して分析されている。またM1は、「男は、あんだよ気持ち悪いな」と自分の発言を「男」の発言として表現している。この場合のF1の発話は、評価であ

る。そして M1 の発話はそれをうけた二次的評価である。ここでは、F2 の「うん」という発話に接触してなされているが、F 1 の発話からは「うん」という同意の間だけ時間をおいてなされている。さらに、上記にあるようにその根拠として「男」というカテゴリーをあげている。ここで、対峙する性的カテゴリー化装置とジェンダーを M1 は使用し始めている。「男は、あんだよ気持ち悪いなー」という発話はまた成員カテゴリーにおける代表性をつかった推論である。

次にデータ 3 を見てみよう。F5 は電車の中での体験を語っているが、M4 の「ええ」という発話にもかかわらず、F4 を見続けている。つまり、体験の共有や推論の共有を性別カテゴリー化したうえで起こっていて、さらにその性別カテゴリーを共有した F5 は M4 の発話をやり過ごしている。F4 はそれにふれずに、体験が共有できるという発見をしめす「あ」という Oh Preface で示している。

ここで、F4 は「うん、だって警戒して乗るから」というときに、「うん」までは、M1 をみて発話を行っている。しかし、その後「乗るから」というところで、F5 をみに行っている。そこで、M4 は「警戒って、だったら埼京線乗らなきゃいいやん」と発話し、ひとつの評価を行うなかで、「警戒って」のあとで、M4 に視線を向けながら「やっぱり満員電車は」という理由を述べて反論を述べている。そして「乗らなきゃいいやん」とのあとで、「だってそれしか電車がないんだもん」という反論つまり否定的評価を再度行っている。

ここで、繰り返して行われる反論つまり二次的評価は、成員カテゴリーではなく事実を下にしてなされている。特に、ここでは、性別カテゴリーが問題にならないようには見えるが、3 人の視線のあり方が潜在的な性別カテゴリー化を作っている。

続く、データ 4-2 では性別カテゴリーは評価の基本的な根拠となっている。M4 は「あ そうか あ そりゃそっか埼京線ね」とまた Oh preface としてのあをともなった発話を行い、新しい発見であり納得したことを示している。そしてその理由として「やはり込みますからね」と発話するその間、M4 は F5 に視線をやっている。ところが「でも実際に本当のチカンっていうのはあまりいませんよ」という時に、M4 は F5 をみてその次に F4 をみている。この二人の体験に対する評価である「チカンっていうのはあまりいませんよ」という発話の最中、二人は同時に M4 をみて F4 の前置きとしての「うーん」といって F5 をみたときに、F4 をみていた F5 が「いるよ」と M4 をみながら否定的な評価をし、その間 F4 をみていた F5 が M4 をみて「いるよ」という発話を行い同時に否定的な評価を行っている。

続くデータ 4-3 では、M4 は F5 をみながら「そりゃ美人だから」とお世辞をとりまぜた反論を行うが、F5 によってちが（う）（笑）とさらに否定的な評価をされ、そこ

【データ4-2】

M4..... M4..... 下...F5...M4...
 F4: うーん いるよ
 M4.....F4.....M4.....
 F5: いるよ
 F5.....F4.....F5.....F4.....F5...
 M4: あ、そうか あ そりゃそっか埼京線ね やはり混みますからね でも実際に本当のチカンっていうのはありませんよ

【データ4-3】

F5.....
 F4: (笑)
 F4... M4
 F5: ちが(う)(笑)
 F5.....
 M4: そりゃ美人だから あ やっぱそういうからいけない そういうからいけないだな セクシュアル(ハラスメント) だな

【データ4-4】

M4.....
 F4: でも美人だと言われたらやっぱりうれしいからあまりセクハラだと私は感じない//
 M4...F4..... M4.....
 F5: (笑)
 F5
 M4: え//、え、でもやっぱりそうするとあの、くらべられる人がどうたらこうたらっていう

【データ4-5】

F4: そうですね でも美しい人は美しいだし
 M4..... F4.....
 F5: あ
 F5..... F4..... F4.....
 M4: めんどくさいおばちゃんがいるから そうですよ

で顔を見合わせていた F5 にも (笑) で否定される。M4 の発話は体験や事実として否定的評価をなされてきたものを「そりゃ美人だから」という形で潜在的に視線や意見の共有でなされてきた性別カテゴリー化を強く押し進めたことになる。つまりここにおいて F4 と F5 の協調的な笑いは、発話を伴わない最終的な評価となり、続く「セクシュアルハラスメント」へのトピックチェンジを促すものである。

ここで、分析した例はそれまで友人同士ではなかった学生同士のものである。しかし、

ミュージアムでの友人同士の集団において評価を行うとき、感覚つまり審美性に基づいて評価が行われた。しかし、この場合は、女性は二次的評価に同調するのにより躊躇し男性の友人の二次的な否定的評価がすべてでそろったあと、やっと次の展示物に志向を向けた。

後者の学生同士のデータでは、顔見知りではなかったにもかかわらず、「チカン」という話題が喚起する性別カテゴリー化が「美人だから」という発話でより表面化し、性別カテゴリーからすると共有される体験のトピックからより抽象的なトピックへすばやい転換が図られたといえよう。

本発表では評価の判断基準となる性別カテゴリーの問題にたいして議論を行った。さるなる課題として、そこにいあわせる問題となる連れ(bystander や companion あるいは討論者)にかんしても考察を加えたいと考えている。

Pomerantz, A (1984) "Agreeing and Disagreeing with Assessments :Some Features of Preferred and/Dispreferred Turn Shapes" ., in Atkinson, J.M. and Heritage, J. (ed)

Sacks, H., Schegloff., E. and G. Jefferson(1995) "Lectures on Conversation"

菅靖子・山崎晶子・山崎敬一(2003)「インタラクティブな展示装置を中心とする鑑賞者の相互行為」、『デザイン学研究』Vol. 49, No. 5

山崎敬一(2004) 『社会理論としてのエスノメソドロジー』

Victoria and Albert Museum での調査を行い、トランスクリプトを作成し、共同でデータに対する議論を行って下さった共同研究者の津田塾大学学芸学部の菅靖子助教授に深く感謝をした。

予稿集用ハンドアウト執筆要項
(研究発表・ワークショップ・シンポジウム)

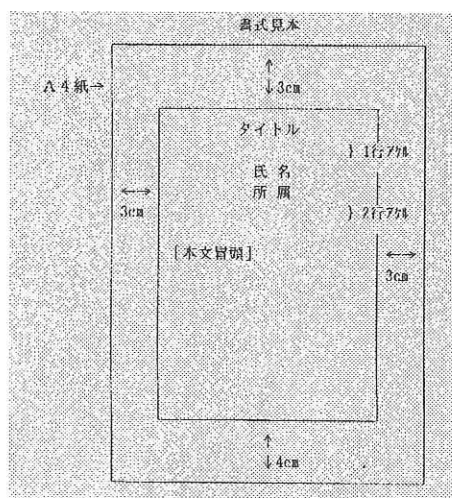
1. 原稿枚数：A4 横書き、①研究発表・シンポジウム 8枚以内（参考文献を含む）
②ワークショップ 4枚以内（参考文献を含む）。
2. 書式：余白は上 30mm、下 40mm、左・右 30mm とする。原稿の 1 ページ目は、タイトル、氏名、所属を記し、それに本文を続ける。1 行字数、行数、段組などは自由。
3. 締め切り：毎年 10 月 31 日必着。遅れますと掲載されないこともありますので、締め切り日を厳守して下さいようお願いいたします。
4. 送付先：〒594-1198 大阪府和泉市まなび野 1-1 桃山学院大学 林宅男 研究室内 TEL 0725-54-3131（封筒の表に「研究発表（ワークショップ・シンポジウム）ハンドアウト在中」と朱書きのこと）
5. その他：原稿はそのまま写真印刷するので、鮮明に仕上がるように文字の大きさ、濃さには注意する。ページ番号は裏面に鉛筆で記す。ヘッダー、フッターはつけない。
6. 当日の発表の際、パワーポイント、OHP、ビデオなど機器を必要とする発表者は、あらかじめ事務局まで連絡すること。
7. 参考文献書式（例）：

Grice, H.P. 1989. *Studies in the Way of Words*. Cambridge, Mass.: Harvard University Press.

Hopper, P.J. 1979. "Aspect and Foregrounding in Discourse." In T. Givón ed. *Syntax and Semantics 12: Discourse and Syntax*, 213-241. New York: Academic Press.

小泉 保. 1990. 『言外の言語学—日本語語用論—』東京：三省堂.

野崎 昭弘. 1995. 「言葉と言葉の間」『月刊言語』(2月号) 62-69. 東京：大修館.



研究発表応募規定

1. 発表者は会員であること。応募者が会員でない場合、応募と同時に入会の手続きをすること。
2. 内容は当該大会時点で未発表のものに限る。他学会に応募中の発表内容を本学会に二重に申し込むことはできない。また、同じ年度に締め切りの『語用論研究』と同じ内容を二重に申し込むことはできない。
3. 発表要旨は、A4 の用紙を用いて、余白を十分とり 1 行目にタイトルを明記し、25 文字×30 行で 3 枚以内にまとめて 4 部（コピーで可）を提出する。ただし、参考文献表は枚数に含めない。名前は別紙に書くこと。
4. 選考及び研究発表の割り振りは運営委員会が行い、結果は応募 1 ヶ月以内に応募者に通知する。
5. 別紙（A4）に、タイトル、名前、所属・職名、住所、電話番号、ファックス番号、e-mail アドレスを明記したものを添付する。名前には必ずふりがなをつける。
6. 発表時間は一人 25 分以内（別に質疑応答 10 分）とする。
7. 応募締め切りは毎年 8 月 31 日とする。
8. 宛先（問い合わせ）

〒594-1198 大阪府和泉市まなび野 1-1 桃山学院大学 林宅男 研究室内
TEL 0725-54-3131（封筒の表に「研究発表応募」と朱書きすること。）

ワークショップ発表応募規定

1. 発表者は会員であること。応募者が会員でない場合、応募と同時に入会の手続きをすること。
2. 内容は当該大会時点で未発表のものに限る。他学会に応募中の発表内容を本学会に二重に申し込むことはできない。また、同じ年度に締め切りの『語用論研究』と同じ内容を二重に申し込むことはできない。
3. 発表要旨は、A4 の用紙を用いて、余白を十分とり 1 行目にタイトルを明記し、25 文字×30 行で 1 枚以内にまとめて 3 部（コピーで可）を提出する。ただし、参考文献表は枚数に含めない。名前は別紙に書くこと。
4. 選考及び研究発表の割り振りは運営委員会が行い、結果は応募 1 ヶ月以内に応募者に通知する。
5. 別紙（A4）に、タイトル、名前、所属・職名、住所、電話番号、ファックス番号、e-mail アドレスを明記したものを添付する。名前には必ずふりがなをつける。
6. 発表時間は一人 15 分以内（別に質疑応答 10 分）とする。
7. 応募締め切りは毎年 9 月 30 日とする。
8. 宛先（問い合わせ）

〒594-1198 大阪府和泉市まなび野 1-1 桃山学院大学 林宅男 研究室内

TEL 0725-54-3131 (代表) (封筒の表に「ワークショップ発表応募」と朱書きすること。)

9. グループでの応募も可能。その際は、一人一人の発表要旨、タイトルと、グループ全体のテーマを明確にすること。グループの代表者とともに、一人一人の名前、所属などの用紙もつけること。

2003 年 12 月 6 日改訂

『語用論研究』投稿規定

1. 投稿は会員に限るものとする（会員でない場合は、応募と同時に入会手続きをとること）。
2. 投稿論文は未公開の論文であること。ただし、すでに口頭で発表したものなどに相応の修正・加筆を加えたものは、審査の対象になる。同じ年度の日本語用論学会大会で発表が予定されているものは、発表前の投稿を認めない。また、応募の際は、本人と分かる書き方はできるだけ避ける。
3. 使用言語は原則として日本語または英語とする。
4. 投稿締め切りは、毎年8月31日、採否決定を10月末日、刊行を12月とする。
5. 枚数、書式など。
 - a. 原稿枚数：A4、横書き、15枚以内（注、参考文献を含む）。
 - b. 書式：1ページ、日本語の場合は32行×38文字とする。英語の場合は1ページ、1行70ストローク、1ページ32行とし、フォントの大きさを小さくして大量のストローク数になることは避ける。注や、参考文献の活字を小さくしない。ただし、図表の挿入は可能。
 - c. 原稿の1ページ目はタイトルのあと1行アケで氏名、そのあと2行アケで本文を続ける。ただし、採否決定前の投稿論文そのものには氏名を書かない。
 - d. 例文と本文の間は1行アケル。
 - e. 各節の前は1行アケル。
 - f. 注は、1, 2, 3のように、括弧を用いない数字だけとする。
 - g. 見出しのサブセクション番号は、1.1.のように、数字の後にピリオドを置く。
 - h. セクションの「はじめに」または「序論」は、1.ではじめる。
6. 注は参考文献の前にまとめて付ける。
7. 参考文献（参考文献、引用文献という言い方はしない）の書式は以下の例にならうこと。

Grice, H.P. 1989. *Studies in the Way of Words*. Cambridge, Mass.: Harvard University Press.

Hopper, P.J. 1979. "Aspect and Foregrounding in Discourse." In T. Givón ed. *Syntax and Semantics 12: Discourse and Syntax*, 213-241. New York: Academic Press.

小泉 保. 1990. 『言外の言語学—日本語語用論—』東京：三省堂.

野崎 昭弘. 1995. 「言葉と言葉の間」『月刊言語』(2月号) 62-69. 東京：大修館.
8. 提出部数：原稿は6部提出する（コピーで可）。
9. 氏名（ふりがな）、郵便番号、住所、所属、職名、連絡先電話番号、FAX 番号、e-mail アドレスを別紙に記入する。
10. 送付先：〒573-1001 大阪府枚方市中宮東之町 16-1 関西外国語大学 澤田治美研究室内
TEL 072-805-2801（代表）（「投稿論文在中」と封筒の表に朱書きのこと）
11. 掲載決定後に、最終原稿の入ったフロッピーディスクと完成原稿を提出する。フロッピーディスクは返却しない（送付先等詳細は、掲載決定者に別途通知する）。

2003年12月6日改訂。

2004年10月3日改訂。

日本語用論学会規約

第1章 総則

- 第1条 本会は「日本語用論学会」(The Pragmatics Society of Japan)と称する。
- 第2条 本会は語用論ならびに関連諸分野の研究に寄与することを目的とする。
- 第3条 本会は次の事業を行う。
1. 大会その他の研究集会。
 2. 機関誌の発行。
 3. その他必要な事業。
- 第4条 本会は諸事業を推進するため運営委員会および事務局を置く。
- 第5条 運営委員会の承認を経て、支部を各地区に置くことができる。

第2章 会員

- 第6条 本会の会員は一般会員、学生会員、団体会員の3種類とする。
- 第7条 会員は、本会の趣旨に賛同し所定の手続きを経て本会に登録された個人及び団体とする。
- 第8条 会員は諸種の会合及び事業の通知を受け、事業に参加することができる。また、所定の手続きを経て、研究集会で研究発表し、機関誌に投稿することができる。

第3章

- 第9条 本会に次の役員を置く。任期は2年とし、再選を妨げない。
- 会長 1名
- 副会長 1名
- 事務局長 1名
- 運営委員 若干名
- 会計監査委員 1名
- また、顧問を置くことがある。
- 第10条 運営委員会は、会長、副会長、事務局長および運営委員から構成される。
- 第11条 会長、副会長、および事務局長は運営委員会で選出され、運営委員は会員より選出される。
- 第12条 運営委員会は次の任務を遂行する。
1. 機関誌および会報誌等の編集・刊行にかかわる事項の決定。
 2. 大会および研究集会等にかかわる事項の決定。
 3. 予算案および収支決算案の作成。
 4. その他運営委員会が必要と認めた事項。

第13条 運営委員会の中に次の委員会を置く。委員は運営委員会の議を経て会長が委嘱し、兼任することができる。各委員会は会務を遂行するために、運営委員会の承認を得て有給の事務助手を置くことができる。

1. 編集委員会
2. 大会運営委員会
3. 事業委員会
4. 広報委員会

第14条 各委員会の業務を調整するために代表連絡会議を開く。代表連絡会議は、会長、副会長、事務局長、編集委員長、大会運営委員長、事業委員長、広報委員長から構成される。

第15条 本会の会則は、会員総会で承認を得るものとする。

第16条 会員の中から会計監査委員を1名選出する。任期は2年とし、1期に限る。

第4章 会議

第17条 定例会員総会は、年1回会長がこれを招集する。また、必要な場合、臨時会員総会を招集することができる。

第18条 定例運営委員会は、必要に応じて、年1回以上招集される。

第5章 会計

第19条 本会の運営経費は、会費、寄付金等を以てこれに当てる。

第20条 事務局は、予算案および収支決算書を作成し、運営委員会の議を経て、会員総会で承認を得るものとする。ただし、収支決算書は会計監査委員の監査を受けなければならない。）

第21条 本会の会計年度は、毎年4月1日に始まり、翌年3月31日に終わる。

第6章 事務局

第22条 事務局を事務局長もしくは運営委員長に所属する大学に置く。

第7章 事務局および委員会に関する細則

1. 事務局は、事務局長、事務局長補佐、会計、会計補佐から構成され、対外折衝、運営委員会・総会の企画・運営、会員名簿の管理、会費の徴収、会計、機関誌・大会予稿集等の販売、会員への連絡など、学会の運営にかかわる諸々の業務を担当する。事務局は、業務を遂行するために、運営委員会の承認を得て有給の事務助手を置くことができる。
2. 編集委員会は、委員長、副委員長、委員から構成され、機関誌『語用論研究』の編集と刊行に関わる業務を担当する。
3. 大会運営委員会は、委員長、副委員長、委員から構成され、大会企画と大会実行の二つ

の業務を担当する。大会企画担当の委員は、ワークショップ、研究発表、シンポジウム、講演等、大会全般を企画・提案し、大会予稿集 Program and Abstracts を編集・刊行する。大会実行担当の委員は、会長から委嘱された大会開催校委員と協力して、大会の実行にあたる。

4. 事業委員会は、委員長、副委員長、委員から構成され、講演会、セミナー等の企画、運営、実行にあたる。
5. 広報委員会は、委員長、副委員長、委員から構成され、会報誌・Newsletter、ホームページ等の編集と発行に関わる業務を担当する。

平成 10 年 12 月 5 日（制定）

平成 15 年 12 月 6 日（改正）

日本語用論学会第7回（2004年度）大会
予稿集

2004年12月11日発行

編集発行 日本語用論学会

代表者 小泉保

〒594-1198 大阪府和泉市まなび野 1-1

桃山学院大学・林宅男研究室内

日本語用論学会事務局

TEL 0725-54-3131（代表）

FAX 0725-54-3202

印刷所 （株）田中プリント

〒600-8047 京都府京都市下京区松原通麴屋町東入

TEL 075-343-0006